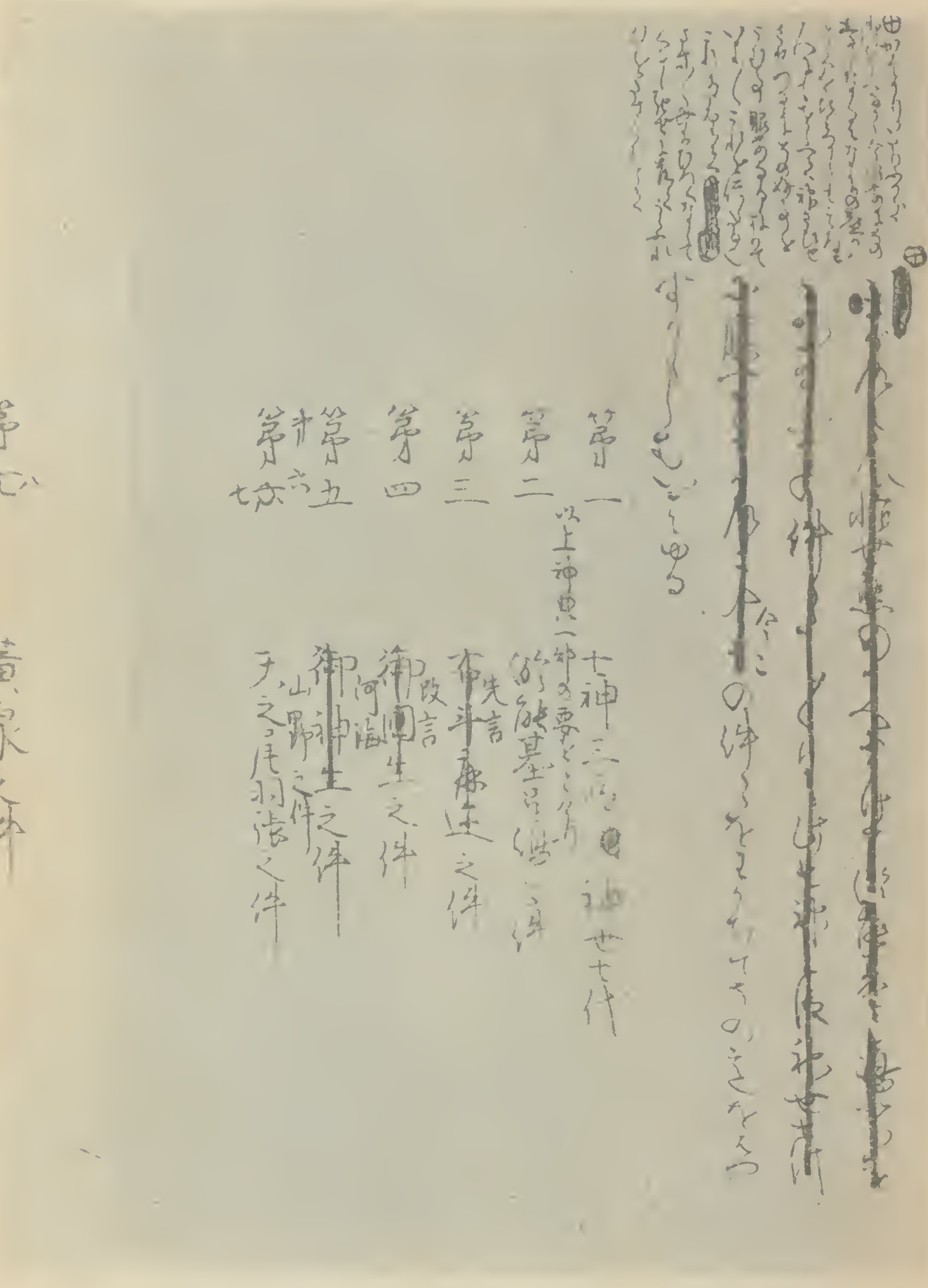
國民精神文化文獻七

富士谷御杖集

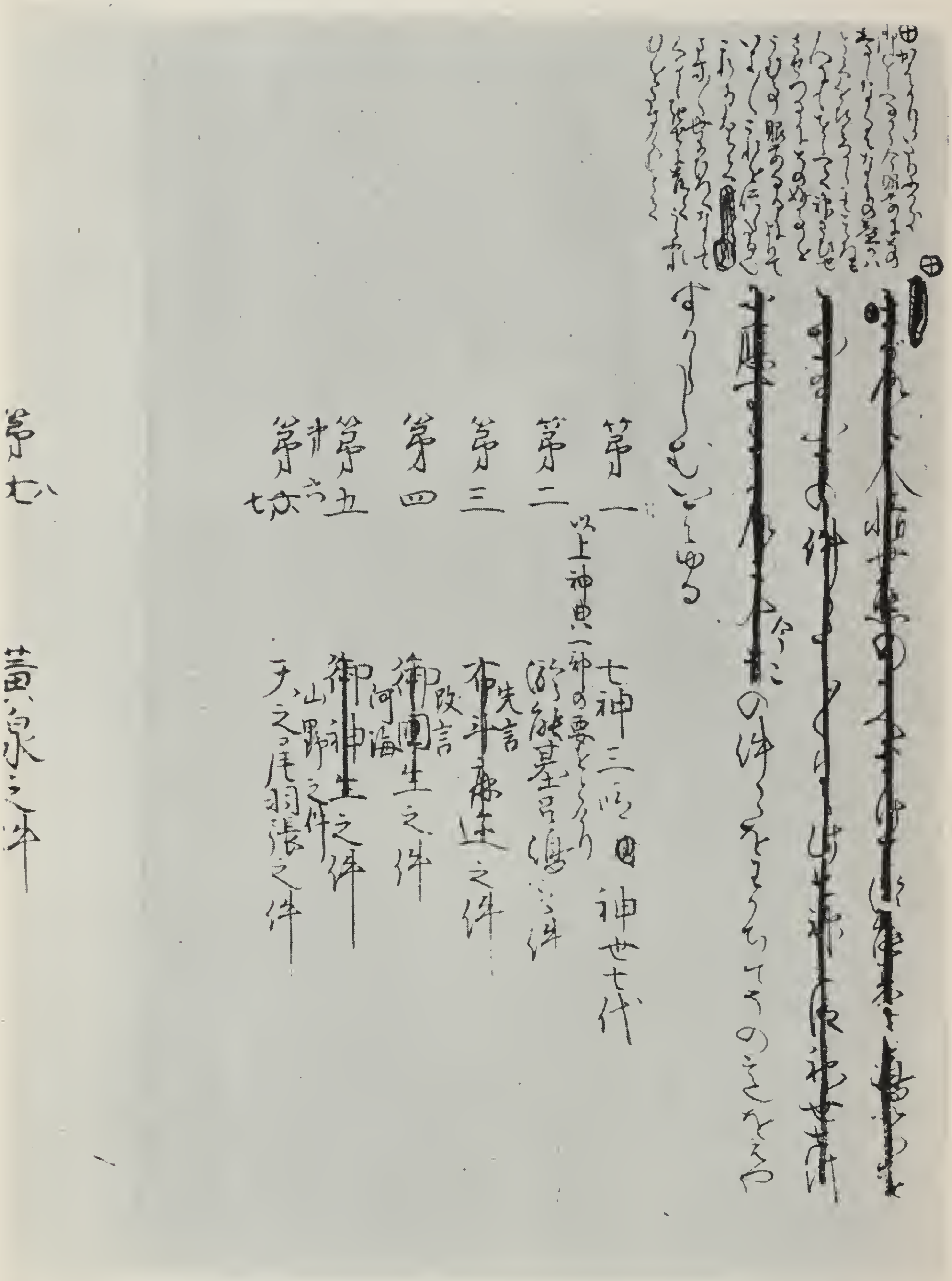
第一巻

國民精神文化研究所

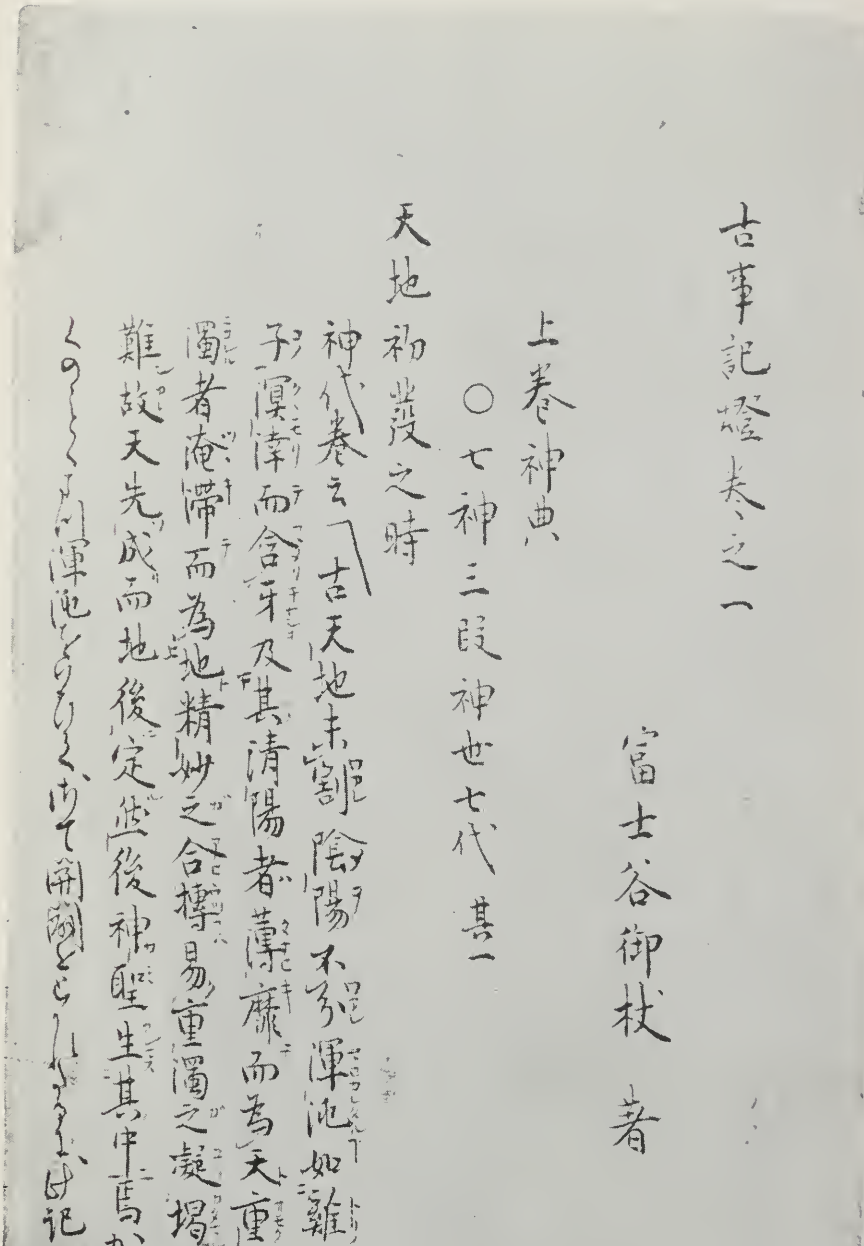


古事記燈大旨（改稿本）

（京都帝國大學文學國文研究室所藏）

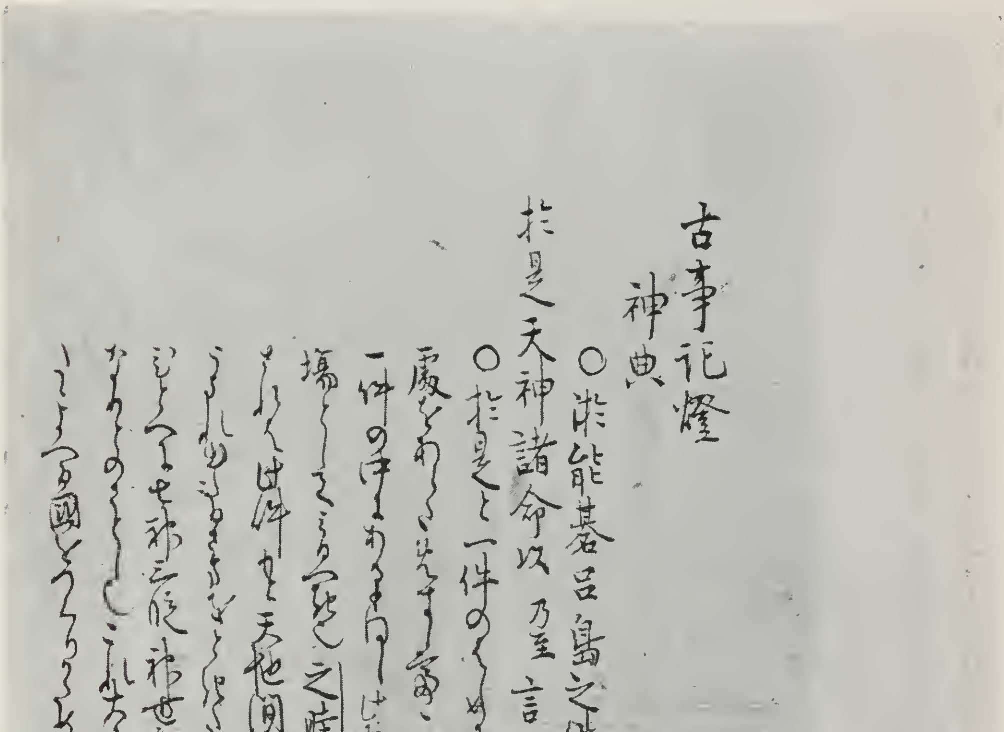


古事記燈大旨（改稿本）
（京都帝國大學國文學研究室所藏）


古事記燈巻之一
富士谷御杖 著
上巻神典
○七神三段神世七代 其一
天地初發之時
神代巻云「古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含牙及其清陽者薄靡而為天重濁者淹滯而為地精妙之合摶易重濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生其中焉かくのことく渾沌なりしか、やかて開闢とせられたるは此記

古事記燈神典

（加賀豊三郎氏所藏）


古事記燈
神典
○淤能碁呂島之件　第一
中臣御杖 著
於是天神諸命以　乃至　言依賜也

古事記燈神典
（上田萬年氏所藏）

富士谷御杖集は、本所より刊行しつゝある國民精神文化に關する文獻資料の中思想家著作集の一として編纂するものである。先賢に就いて其の彰すべき遺業は多いのであるが、國語學の荊棘を披ける富士谷成章の子としてその學を繼承すると共に、その學より出でて一家獨特の學的體系を樹てた富士谷御杖は、國學者としても極めて特異なる存在であつて、其の遺業の、學的體系・思索方法に於いて注目すべきものなる事は、近來漸く認識せらるるに至つた。それにも拘らず其の著述であつて公にせられたものは一部に過ぎず、主著と云ふべき古事記燈にしてなほ大旨の刊行を見たに止まる。茲に本所は、富士谷御杖の著述並びに研究資料を博く捜査蒐集すると共に、蒐集せる著述によつて適宜卷を編んで印行することとした。

本集第一卷には所藏者各位の好意によつて古事記燈の類を收めることが出來た。又研究資料の調査蒐集に就いては文學博士松井簡治氏、小西大東氏、其の他の方より種々敎示を得た。茲に記して深謝する次第である。

富士谷御杖集第一卷の校訂並びに解題は、本所研究部國文學科助手志田延義が專ら之を擔當した。

昭和十一年二月

國民精神文化研究所

富士谷御杖集 第一巻 目次

卷頭圖版

富士谷御杖小傳

志田延義

凡例にも述べたやうに、今までに知り得た富士谷御杖の著述のうち整理を了へたものから本集に收めるのであるから、小傳以下の記述も全部整理した上で述ぶべきであるが、一般の讀者のためには最初に大略を記す必要があらうと思はれ、又大方の敎示、協力を俟つて本集の大成を期する上には、先づ一通りの結果を揭げて之を補ひゆく餘裕を存し置くべきであらうと思ふ。

御杖の時代　富士谷御杖は、京都に在つて父成章の學を承述すると共に、その和歌の學より出でて自らの學的體系を樹立した人であつて、國學者中、特色ある形而上學的體系を有する點に於いて、其の比類を見ないと云ふべきである。

御杖の父成章は本居宣長より八年の年少であるが、安永八年（二四三九）、世に謂ふ厄年の四十二歲で歿してゐる。宣長の畢世の大著『古事記傳』の完成した寛政十年（二四五八）は、宣長六十九歲、御杖三十一歲に當る。御杖の歿したのは文政六年（二四八三）であつて、石塚龍麿等と歿年を同じくしてゐる。又交渉のあつた香川景樹とは齡を同じくしてゐる。是等によつて御杖の時代を考へることが出來ると思ふが、十六歲の時（天明三年）には與謝蕪村が京都に歿して居り、二十三歲の時（寛政二年）には異學の禁が布かれ、四十三歲の時（文化七年）には『大日本史』紀傳が淨寫して朝廷に獻ぜられた。又其の活動の時期は心學運動の進展と略並行してゐるのであつて、例へば上河淇水

が文化十四年に歿してゐる如き所にも其の相當ることが窺はれるであらう。

富士谷氏と成章　御杖の父成章は、東福門院の御殿醫と云ふ皆川春洞(成慶)の二男であつて、十九歳にして富士谷氏の養子となつた。『鴻儒皆川淇園』によれば、成章の同胞併せて九人、長女は儒者合田如玉(名は濫)に嫁し、長子は淇園(愿)、次女は院承仕濱岡光堅に嫁し、次男は卽ち成章、三女は夭し、四女は八木某に嫁し、五女は大舍人駿河守齋藤政信に嫁し、三男は成均(字は叔則、號は剛中)、四男は堯泰、出でて寺尾氏を繼いだ。

富士谷氏は、筑後柳川藩立花侯に仕へたのであつて、山内岩雄氏の「富士谷成章」(『國學院雜誌』第四卷第一)所載、富士谷家の略系を揭げるならば、

○種興（一名紹務）一世
大納言秀長卿に仕へ、沒落の後、浪人となり、姓小河といふ。
――○高知（一名紹味）二世
筑後柳川侯に仕へ、御用人となり、食祿二百石を賜はり、侯の命に依り富士谷の姓となる。

○高言　三世――○保明　四世――○安治　五世

○尹數　六世――千重子
○成章　七世
皆川春洞の二子にして尹數の養子となり富士谷家を相續す。
――○成元（一名御杖）八世

とある。種興、高知に就いて一名とある紹務、紹味は成章、御杖の法名に照して法名であるやうに思はれ、尹數は墓銘によれば尹壽であると考へられる。御杖が其の『北邊隨筆』（文化十三年序『百家說林』正編上卷所收）中の「柚の漬樣」に於いて、

御杖が八世の祖紹務。坐右劄記のうちに。片桐石見殿柚の漬やう。（中略）とあり。もとは世々。足利將軍につかへたりしが。此紹務は。大和大納言秀長卿に仕へたりし。秀長卿御沒落のゝち。浪士となりて京にすみける程。ゆゑありて。その男紹味より。筑後柳川につかへぬ。されば此事。紹務やまとに仕官のうち。石見殿に親炙して聞きたりし事なるべし。

と述べてゐる。平井武夫氏の「富士谷御杖大人の生活（上）」（『國學院雜誌』第二十五卷第四號）によれば、

種興　小河彦二郎　後紹務
　　母　馬場殿
　　寛永八年十月廿一日病死仕候

高知　小河彦一郎、六兵衛、後紹味
　　母山田殿　延寶三年二月十四日病死仕候七十二歲
　　奉仕松蔭宮好雪樣兩殿樣蒙御懇命高二百石
　　拜領仕候其後可改富士谷被仰付候

とあり、富士谷の氏は其の屋號「ふじや」によつて改めたものである。

成章が富士谷家に入つたのには、柳川藩邸と皆川の家宅と相近かつたことも因縁をなしてゐるのではないかと思

ふ。『近世三十六家集略傳』に「正親町北邊」と云ふ富士谷成章の宅は筑後柳川藩邸（現在京都市上京區役所の所在、中立賣通西洞院西入）（『上京區勢要覽』による。）の構内にあつたと云ふべく、皆川淇園の宅と近かつた。（山本行範氏の傳聞せられる所では淇園の宅と向ひあつて富士谷の宅があつたと云ふことで、御杖の晩年の生活に於いてはどうあつたか知れないが、）御杖も「中立賣西洞院角」の藩邸に留守居した（『國學院雜誌』第二十五卷第六號所載「富士谷御杖大人の生活（下）」に引かれる御杖の書簡の記事による。）のであり、御杖の編んだ『北邊成章家集』卷下の「浪速の道の記」（安永六年正月）には「ひんかし町にまかり申なとして父の家兄淇園あり」とあつて、前説の位置を想はしめるのである。なほ筑後國柳川に關する記事は、成章の墓誌銘、『北邊成章家集』を始め、成章、御杖等の記せるものに散見する。成章に就いてはよく其の輪廓を盡せるものとして先づ墓誌銘を擧ぐべきである。（句點編者）

富士谷北邊先生之墓

成章。字仲達。初號層城。後又用其宅（地）舊名。改號北邊。實愿弟也。三歲能書。七歲能詩。九歲夏會韓人來聘。詣館筆談。機警超拔。諸韓吐舌。及長學涉經史。見愿攻經有所發。而意以爲。是千古之道。顯於今矣。然彼雖學作異國之故耳。苟非通吾民。故惡能傳紹之。以化我俗哉。因兼爲吾詁。自國史已下。諸令式等書。及諸吾古名人家乘遺集。靡弗遍搜。探靡弗究。又苦攻和歌。自幼及死。所爲幾十萬首。諸體該備。運思無窮。□□（受業）者遍於四方。嘗爲釋詁。而以口授其徒。有揷頭脚結抄。已行于世。其欲撰著未脫稿者。無慮數百種。平生爲人。風流溫藉。加以其天資聰悟。學諸技藝。一聞即通。而其未成。則不肯出。出必超越於人。諸學天文曆筭。及雜技吹彈。皆莫不然。人始與會者。見其形軀眇小。輕侮之。

既見其通敏。必大傾駭。既皆以爲大人也。時又出新意創器。其器必爲人傳播。余嘗與濤君錦諸人。集於成章家。出百題賦五律。自午迄子。余先就。君錦次就。成章獨後。及出之。各皆有和歌以副。年十九。會通家富士谷尹壽死無子。其母乞成章以爲嗣。與其女配。生男成壽。次二女次二男尙幼。側室所生。三女次二男尙幼。家大人已老。以成章家多所娛耳目。寄養其家。成章侍養極孝。凡其所欲飮食。日必適其意。其家世爲筑後柳川侯。幹辨賓局事務。以衣食焉。柳川侯。每入京輙過其家。而其所坐有常位。成章寢未嘗以趾向其位及家大人所居之室。其敬愼多此類。成章嘗病。不可剃其髭。心慮其憂已病。每至其前必掩其髭。已喪家大人。哀痛過卽。而又力疾送葬。曰殘(致)不可救。安永八年己亥十月二日卒。年四十有二。浮屠謚曰。紹琬。葬之洛北蓮臺寺先塋之側。銘曰。

材學超倫　可爲邦弥　天不假年　俄奪斯人

安永九年庚子春二月。皆川愿撰。皆川成均謹書。孝子成壽謹建。

銘中已に風化して判讀し得ざる三四の文字も右の如く定めて誤はないであらう。『淇園文集』に照すに多少の出入がある。成壽は御杖の初めの名である。なほ右に云ふ詩に和歌を副へた百詠は『三先生一夜百詠』に收められ、八月廿五日の事と見えるが、跋には寶曆戊寅(八年)の事とせるに拘らず當時の年齢として識した所によれば寶曆十三年に相當する。墓所は右に云ふ如く上品蓮臺寺(千本頭十二坊町)であるが、柳川藩立花侯の菩提寺たる紫野の大德寺塔頭碧玉庵(現在は大慈禪院が之を合してゐる。)の過去帳控には法名を「登仙院淨譽寂光紹琬居士」と記してある。

(なほ富士谷氏の墓の內、「立所先生小河君之墓」に並んで「小河君省字妻有馬氏之墓」(元祿三年卒)があつて、その男成章が建てたと

ある同名は偶合であらうか。）

成章と御杖　成章の手爾波を中心とする國語學的研究は、其の歌學と相俟つて、中世歌學の傳統を承け、之を轉じて新領域の開拓に進んだものである事は、既に說かれてゐる所であるが、手爾波研究に從ふに至つた事には、漢語學との關係も推測せられ、少くして經史百家の書を共に學んだ兄淇園の助字・虛字研究と相應ずる意味も見出されるやうに思ふ。たゞその先後に就いて未だ徵すべき資料を知らないが『鴻儒皆川淇園』所載の淇園年譜には、寶曆十年（園二十七、成章二十三）に『史記助字法』二冊が成つた事が見え、其の他助字法・虛字解の類は十部あまりに及んでゐる。『北邊成章家集』卷下所收「有栖川故一品宮御一周の後御墓の前にさしおく」文には伺候を許されてより「年をかそふれはなかのおよひふたゝひふしおくるほとにやあらん」と述べてゐる。此の家集では文題に明和五年と注してあるが有栖川職仁親王の薨ぜられたのは明和六年のやうである。

御杖が父の學を何處まで繼承したかと云ふことに就いては、既に佐佐木信綱先生、久松潜一先生の御說があるが、本集の解題に於いても自然言及する所があるであらう。たゞ御杖は明和五年（二四二八）父成章の三十一歳の時に生れて、早く十二歲で父を喪つたから、刊本『百人一首燈』の「おほむね」（文化元年四月、成元）に於いて、

わか父成章はいとはやくうしなひて、なにの心ばえも口づからは聞かざりしに、をぢなりし成均、たゞおほやうに聞おかれたりしは、哥に道あり、題詠はたゞその階梯也といはれつるよしをかたられしかば、それよりげにと思ひなりて、ふる哥どもをもふかくみいれ、みづからもよみ試みて、この道はたどりあたれりし也、

と云ひ、又『古事記燈大旨』（成元）の『言靈辨』の章に於いて、

稚かりし時より、父が志にしたがひて歌よみならひしに、成元十二歳なりし時父をうしなひつれば、たゞ父がつくりのこせりし脚結抄をば師として、歌をのみよみわたりしに、ふと思へらく、此詠哥、たゞもてあそびぐさならば、なにわざにもあれ我も人も益あらむわざをせん、もし益あるべきわざならば、いよ〳〵志を固くせんとおもひて、さま〴〵に心を用ひ來つるに、

として、言靈の道に想ひ到つた道筋を述べてゐる。成章の『あゆひ抄』・『かざし抄』に於ける語學說の繼承はもとより、脫稿するまでに至らなかつた『裝抄（よそひ）』の補整等を見るのであつて、父の語學說を承けると共に之に關聯する歌學說を發展せしめたのではあるが、御杖の學の重點は、全面的な形而上學的體系の樹立に在つて、之を言靈及び神道との關係に於いて組織しようとしてゐると云ふべきである。而して佐佐木信綱先生は『增訂日本歌學史』に於いて、御杖の學的體系には伯父淇園の學說・學風に負ふ所が多かつたであらうとして、「御杖が廿三四歳にして、倒語の說を發明して淇園に語り、淇園そを評せしよしは、彼自ら神明憑談に記せ」る事を紹介せられ、「言靈の說の如きは、實に淇園が聲音の理を易理に求めし說に基づけるものなること明らかなり。」と述べられた。（『富士谷御杖大人歌文』上には五十嵐篤好が略傳を記して此の事に言及してゐるが、後に擧げる。）

『北邊成章家集』は御杖が之を編んでゐるが、皆川愿撰「北邊倭文遺稿序」は天明七年、御杖が未だ成壽と云つた折のものであつて、弘化三年刊のものはこれと共に文政元年（既に御杖と云つてゐる。）の御杖の序があり、歌文珍書

保存會本とは內容を異にするが、山內岩雄氏の「富士谷成章」（『國學院雜誌』第四卷第參）に揭げられた賀茂季鷹の序文の添へられてゐる本も存するのであらう。歌文珍書保存會本は富士谷御杖の眞蹟によつたものとあつて、是等の序をも缺き、文詞之部を卷下としてゐる。

御杖は通稱千右衞門と見えるが、これは父以後代々通つてゐるやうである。その初めの名成壽は父と祖父との名を併せた名なのであらう。然るに之を成元と改めたのは、立花侯の第八代の主鑑壽公の名を憚つた爲と云はれ、「富士谷御杖大人の生活(上)」によれば、七代鑑通公の嗣子鑑一公子の卒去によつて公子の弟の鑑壽公子が世子となつたのは寛政五年十一月廿九日の事である。『歌道非唯抄』に併せ綴られた一葉の文に

寛政癸丑四月

きたのへのふたよのぬし成のふ

とあるのは（癸丑は五年を指す。）、成壽をさう謂つたのであらう。寛政六年甲寅皐月とある『咜南辨乃異則』には成元とあり、『和歌いれひも』の序に

寛政六年十二月ふちはらの成はるいれひものはしめにみつからしるす

と云ふのは御杖と思はれる。（『富士谷御杖大人歌文』上所收の略傳に於いても、寫本には「成元」としてゐる。尤も「父成章」等とも見えるから、十分の資料とはなし難いであらう。）　父成章は『日本文學大辭典』に「しげあや」とあるが、歌文珍書保存會本『北邊成章家集』卷下所收「森信就か母の七十賀の歌の序」には自ら「なりあきら」と訓んでゐる事は橋本

進吉先生の指摘せられた所であり、御杖の門人・門流に於いても然訓んでゐる例があつて、右の成壽・成元の「成」も之に倣へば「なり」であらう。

「文化八年辛未臘月廿九日稿成」とある『古事記燈神典第一』（京都帝國大學國文學研究室所藏）には「播神舍藤原御杖」と署名してゐるが、文化八年御杖と名を改めたのは、『古事記燈』を畢生の作業として沒頭した所から來たものと思ふ。其の典據と覺しきものは「古事記燈」中にいくつも散見するが、其の內の何れにと云ふよりも夫等によつたものとしていゝのではなからうか。たゞ富士谷成與によれば「當時栗田宮御歌ニ因テ賜フ」と云ふ。（「富士谷御杖大人の生活（上）」）

御杖の母千重子は、成章卒してより四年目、天明三年（二四四三）になくなつた。成章の墓に隣して「北邊先生之妻富士谷氏之墓」があり、墓誌銘には、

孺人諱姚子姓藤原富士谷氏父曰尹壽尹壽卒後祖母乞皆川成慶次男章爲嗣以與之配生四男二女天明癸夘秋九月廿二日疾而卒葬于城北蓮臺寺先塋之側浮屠謚曰靖慧

天明三年癸夘冬十一月孝子成壽建

とある。

成章及び千重子の墓誌銘に擧げた御杖の同胞數は相一致しないばかりでなく、「富士谷御杖大人の生活（下）」に掲げられた左の文政六年の系圖とも一致しないが、平井武夫氏も成章墓誌銘に就いて「系圖中の夭折した者の數を算

へなかつたからであらう。」としてゐる。

成°章°
- 女子　早世
- 女子　適浪華神田氏
- 成°元°
  - 女子　配成功
  - 男子　夭折
  - 女子　夭折
  - 女子
  - 男子千之助
- 女子　適加州醫官曲直瀨氏
- 男子千八　早世
- 女子　早世
- 女子　適肥後侯臣古山氏
- 成基　民三郎　官仕
- 成孚
- 男子
- 女子
- 成°功°

御杖と其の周圍　御杖が早く父に別れて、伯父皆川愿に導かれる所が多かつたやうに見える事は、既に言及した所であり、叔父成均も尚御杖の爲に力となつた事も右に觸れた所である。弟成孚が御杖の指導を受けると共に、兄の仕事を助けた事は、右に引いた『哆南辨乃異則』・『和歌いれひも』等に見えてゐる。弟成基は寬政九年洪園の『老子繹解』を校し、其の序文に於いて「蓋余自レ幼常侍ニ先生ニ屢ミ聞ニ其論スルヲレ之」と云つてゐる。又『詞葉新雅』（寬政四年刊、成壽論定）には弟成胤の「おほむね」が添へられてゐる。前に引いた紫野大慈禪院の過去帳には、碧玉に屬するものとして、御杖の法名は「逢仙院行譽練光紹因居士」とあるが、蓮臺寺にある一家の墓には「富士谷御杖

先生墓」(「文政六癸未十二月十六日」とある。)と共に「紹因嫡子謙光智俊之墓」(文化元年)・「紹因次女夏雲童女之墓」(文化二年)・「紹因次男圓珠童子之墓」(文化三年)と夭折せる三子の墓が見られる。嫡子・次女とあるは系圖に於いて夫々夭折とあるに相當するのであらうか。

「富士谷御杖大人の生活(下)」によれば、「柳河藩より受くる富士谷家の俸祿は、紹味以來二百石で繼續された。併し立花家第四代鑑任公(元祿九年襲封享保六年卒去)の頃から、百石百俵の定となつて實收はいたく減じたのである。柳河藩の一俵は三斗四升入といふ定である、而して上り米をそのうちよりさし引く事も起つたから、百俵すら其のまゝ收むる事は出事なかつたと思はれる。」「二百俵は一年六十八石、假に實收は六十石としても、」御杖はなほ相當の收入を受けてゐた。成元時代には藩侯鑑壽公の三人の姫君の和歌を添削し、用人幸丸勘助が之を中介し、『百人一首燈』の上木には補助があつて姫君達に同書を進上してゐる。なほ收入としては「諸門弟よりの納金」等があるが、五十嵐篤好が入門の手續を尋ねた返事(文政五年六月廿四日)には、

入門貳百疋、扇子料百疋。
右の通定式に御座候へども、これにかゝはらず身分次第に御座候。

とある由である。

『脚結變例』の表紙裏には「家集次第　三十六人　同補」として塾門人の家集を出す計畫らしく費用概算を記すと共に、「入門式　名簿 出題　年預名簿 春秋夏冬」及び二十八人の門人名を擧げてゐる。

彥富　義胤　政要　景福　匡平　濤耕　賴謙　一之　祇世　彥質
正春　惟俊　幸宣　世恭　知高　益端　正伯　章恭　友雄　常廉
玄陶　延貞　亮長　公亮　本草　有香　肅岩　爲重

併しながら右の内には『かさし抄』・『あゆひ抄』の整理に從つた吉川彥富・井上義胤以下成章よりの門人と云ふべき人も段々見えるのである。御杖の歌は見るべきものがあるが、家でも歌會を催し、『古事記燈神典』（上田萬年先生所藏）の筆を進めた文化十四年暮には、

ことしは五条坊門の審神舍にやとりてこのわたりの人々志あつくひるよるわかす物せらるゝまゝに家にもかへらて年暮にけれは

等、五條坊門に家を借りて歌の弟子を指導した事が『富士谷御杖大人家集』二に見える。

御杖の學統を承けた人としては、榎並隆璉・並河基廣・福田美楯を先づ擧ぐべきである。隆璉に關しては『富士谷御杖大人家集』等に交渉の樣子が見え、『神樂催馬樂燈』にはその說をわが友として援用してゐる。福田美楯は『名人忌辰錄』等には御杖と父子の關係にあるやうに記してゐるが、誤であつて、『裝抄』に「門人福田美楯筆受」とあり、美楯の門人赤松祐以を承けられた小西大東氏は、御杖の營室を上中下に分ち、隆璉、基廣、美楯が夫々に之を繼いだのであつて、美楯の家は塗師屋であつたと云はれた。御杖との交渉・入門は比較的遲く生じたやうであるが、御杖晩年の不遇に庇護者として力を致した人に、越中の五十嵐篤好がある。

「富士谷御杖大人の生活」によれば、御杖は先の系圖に見える成功を養嗣子千太郎として之に長女を配してゐるが、御杖の妻の方は「富士野彦三郎女。實ハ下村孫三郎女。彦三郎爲養女成元ニ嫁ス。文政三年辰及離緣。」とある。五十三まで連れ添つた妻を離緣したのには深い仔細があらうと想像せられるのであるが、舊柳河藩の用人日記、文政五年十一月千太郎召出の達文に「父千右衞門行跡不宜候に付、父子共去冬御暇被下置候處。」とある如く、翌文政四年冬無祿の身と成り、御杖は藩邸をひきはらつて蟄居し、千太郎夫妻は洛北紫竹村に別居しなければならなくなつた。第九代成功が御杖の實弟とすれば其の妻とは叔火姪となるが、系圖によれば實弟ではなくて濃州牧田住五井彌三郎行充の二男と云ふ。右の達文には續いて「立齋樣已來蒙（闕字）御懇命格別之家筋に付被召返、三十人扶持被下置、可爲御小姓之旨被仰出候。　富士谷千太郎」とあり、分限帳によればこの時の三十人扶持は米百俵の由であつて、千太郎は前の家祿の半を以て其の家再興を許された。（前掲の系圖に成功が成章の子として記してゐるのは、表向御杖を世代より省く形をとつたものであらうか。）成功夫妻は柳川に移り、更に元の如き留守居として歸京し、其の後成功は家を御杖の末子元廣（千之助）に讓り、成功死後成功の實子成興が元廣の養子と成つた。此の頃の俸祿百俵は格式をあげて百石の名義に改められた。『土佐日記燈』の跋には「明治廿一年きさらき中旬　北邊御杖男　於呂々々學富士谷元廣」とあり、成興に就いては「富士谷御杖大人の生活（下）」に「當年（大正八年であらう。）八十二歲と聞いて居る。」とある。富士谷家は成興の代より東京に移つた。獨逸學協會學校に教鞭を執つた（國學院の講師となつた事もあつて英語に達者であつた。）理學士富士谷孝雄は成興の子であらうが、松井簡治博士によれば、父に先立つて卒し、

子なく妻も去り、遂に絶家となつた。

平井氏は、文政六年篤好に宛てた手紙に「小子幷妻子三人渇命致し候間、」とあるのを初め妻子の事に言ひ及んである所から、既に後妻があつたと見るべく、これが「行跡不宜」に相當する意味を幾分なりとも含んで居るものではあるまいかと推測して居られ、又咎をうけた直前の文政四年九月十月には越中密山に客遊して居り金澤をも訪ねて歸つてゐるので（文政六年篤好への書狀には「門人二十人斗も有之候は、」と見える。）、「越中旅行は大人の謫譴に全く連絡關係がないと棄てさるに忍びない。」とも云つて居られる。（「富士谷御杖大人の生活（上）」）なほ此の遊歷の際には未だ篤好と面接するに至らなかつた。篤好の記した略傳には、

千歲余り湮沒せし大御國ふりをふたゝひおこし給へるいさをは高天原に神留ます天つ神たちもしろしめさんものをいかなる神の惡事（マカコト）にかありけん文政四とせといふとしの冬筑紫の君の御心にあへ（ハカ）すとてしそけられましを

と云つてゐて、これだけでは『古事記燈』等の業績と御暇とを關係づけてゐるとは云へないであらうが、私には寧ろ『古事記燈』及びこれが關係書の內容が藩侯の忌む所となる可能性があるやうに思はれる。

米價も次第に騰り氣味の時分に無祿の身となつた御杖の生活は、隨分節儉してもなほ逼迫を告げた上に、翌文政五年六月以前からであらう病に臥し、九月には「今以半身痲痺言語不通困り入り候、」と云ひ、醫者門人の勸めで木や町西石垣下ルに出養生し、六年に成つて一時小康を得たのであらうが復不隨再發しその上頭瘡まで發した。篤好への書信には痛ましい言葉で經濟的援助を求めてゐる。それから一度快方に赴くと見えて此の文政六年（二四八三）

十二月十六日遂に易簀した。年五十六。

五十嵐篤好は文政七年二月に序を識して『富士谷御杖大人歌文』三卷を編み、略傳を添へてゐる。平井氏の擧げられる所によれば、「天保十年の臥牛齋詠草を見るに、

霜月二十一日夜富士谷大人を夢に見たり、

富士の根を名におはしたる我大人を仰ぎて見ればいや尊しも

敷島の道をたやすくわけぬべき君がつかしゝ御杖たはりね

と」詠んだ篤好は「苟も師翁の志に逆ふ者は何人と雖も假借する所はなかつた。同門福田美楯などを屢攻撃したのは、己が說を御杖大人の說の如く裝ひたる態度に慊なかつたからで、又安政二年十月亡師子息の名を以て、追年懷舊の題詠をあまねく募つたのを聞き、大に慨を發し、直に書を富士谷家へ送りて題詠の亡師の志にあらざる事をのべ、かつ當時の學界を痛論して、迷はず父大人の學を紹ぐべきを勸めた。」此の書は「富士谷大人三十三回忌に今のあるじに奉りし文」であらう。

御杖の人と學　篤好の略傳には、御杖の倒語の發明に續けて、

手もなみ〳〵ならすおかしく書給ひまた琴は世に勝れてめてたく俊蔭の娘はつかしくかきひき結ひきその比歌法師等玉川といふうたひもの〻琴の手をつけなやみてもてあつかひくるしみたるを大人ふとおもひよりて三十日あまり夜るも枕へに琴をおき夜なか曉といはすかきひきてつひにかの玉川の手をひき出給ひければ(中略)又

箏は世に音絶はてゝきこえさりけるを五条坂に簗といふ老女（オウナ）あり若かりしとき箏ひけりときゝ給ひそかもとに日毎にかよひ給へり（中略）七十余（ナヽソヂ）りなるおうなのおろ〱覺なりとて手もわなゝきてかきひくをまねひとり給ひそれにたよりて考給ひつひに箏の手の法りを定め譜を作り給へり何事にもあれ思ひよりたる事は至り極すてはやみ給はさりける性なりけれはあまりにくきまで物考へ出給へりけりとそ法花經はくすしき文也と人のいへりけるにより六とせはかり此經にかゝつらひ居たる事もありきと物語り給ひしとそ

と記してゐる。（天明元年刊『歌系圖』には既に長歌に「玉川」が見えるが、右の逸話は如何であらうか。なほ『近世三十六家略傳』には雲井の曲としてゐるがこれは明かに誤であると思ふ。）父成章も吹彈に長けてゐたやうであるが、其の趣味と云ひ、多面的で而も徹底しなければ止めない鋭才は、全くの父譲りであつたらしい。成興の談として傳へられる所では、萬事生活振が積極的であつたと云ふ。『増訂日本歌學史』によれば、「安永九年（父を喪つた翌年）十三歳にして廣橋兼胤（翌天明元年薨）に「詠草の點竄をこひし事、八槐記にあり。」とあるが、もとより影響を受けるまでに至らなかつた。早く父を喪ひ、詠歌の「益あるべきわざ」なりやを疑ひ、父の歌學に基き、『萬葉集』を手掛りとして自らの言靈の道、倒語の說を提出した。而して十七八歳頃より抱懷せる神典に對する疑問を之によつて解決せんとし、進んで神典解釋に沒頭し、獨特の學的體系を樹立した事は既に言及した。略傳にも

されは言靈の活（ハタラキ）はあゆひにある事を極め給ひさて湛園ぬしに大御國言葉はかゝるものなりけりと語り給ひしかは詞にさはかりの深長なるをしへあるからは行にも必大益のをしへあるへし見開らきて我國の光りかゝやか

せよと洪園ぬしのいはれしかはげにとおもひ給ひてそれより朝よひ古事記日本紀をくりかへし給ひつひに　神典は皆なから倒語なる事を見開らき千とせ糸かくれたりし大御國ふりをおこし給へりと此の間の消息を記してゐる。

歌は抑止する事の出來ない欝情を慰めるものであつて、脚結（今日云ふ助詞・助動詞・接尾語等にあたる。）を通路として見られる其の表現には從つて表面の意味を外にしてかゝる内的な訴へ―靈が動いてゐると云ふ見解に出發して歌道を説き、神典の燈に及んでは比類のない神道解釋を試みて之を全面的な敎として受け取つた。かやうにして表現の奥にある世を概する心の解釋としての系列と『古事記燈』を主とする處世の敎としての系列とに、その諸種の燈を成さうと試みてゐる。是等の著述の内容に亘る事は夫々收めるに當つて解説したいと思ふ。

御杖は父を喪つてから專ら家學の相承と詠歌とに專心してゐたやうであるが、十七八歳頃の懷疑の時代を經て自ら開拓した學的生活の第一期を、所謂「倒語の説を發明」した頃から『百人一首燈』を刊行し（文化元年）『眞言辨』を著した頃にとつていゝであらう。此の寛政享和期は、父の歌學説の整理と倒語の説に基く歌學の再組織をなしてゐると云ふべきである。第二期を『古事記燈』の解釋及び推敲に沒頭し最も充實した文化期にとるべきであらう。なほ文化十四年には『土佐日記燈』が成つてゐる。第三期は歿年に至る文政期にとるべく、妻の離縁を契機として貧苦と病苦とに沈淪しながら、『萬葉集燈』の刊行に力を盡して萬葉を以て開眼したのに適はしい首尾を成したと思はれる。（なほ右に引用せられた『神明憑談』は文政五年に成つた由である。）而して御杖は屢繰り返してゐるやう

に、御國ぶりを儒佛に對立するものとして觀ないで、夫々の土俗の相異に卽した夫々の風俗に切なる敎であるとしたに止まらず、もつと人間性に徹した敎たる事を發見したと考へた。かやうな所には父成章の國語學・歌學を經として、之に儒漢學に於ける漢園の學、中世以降の吉田神道說、荷田春滿以下の國學者神道說、心學說、佛敎に於ける法華經、蓮如の『御文章』等による淨土眞宗の敎說、新知識としての蘭學を通じて得たと思はれる自然科學的知識等を緯として、その『古事記燈』解釋等に於ける學的體系を組織してゐると考へる。しかも是等の經緯を以てして、當代に於ける合理主義的な空氣にも觸れつゝ、特色ある解釋學、自らの形而上學的體系を樹立した所に、國學者中に於ける注目すべき地位を見るのである。

富士谷御杖集第一卷解題

古事記燈　古事記燈（ともしび）は富士谷御杖の主著の一であつて、御杖の神道說を中心とする思想・學說を見るべきものであるが、四十歲以前から稿を起したやうで、或は稿を改め或は稿を續けて五十歲に及んでゐるから、御杖の第二期として考へた文化期は古事記燈を以て始終し、其の中心的な作業であつたと云ふべきである。「富士谷御杖著」とせる『古事記燈神典』（加賀豐三郞氏所藏）の「天地初發之時」の條に、古事記に思ひを潛めるに至つた初めを自ら

予十七八歲の比にか有けむ、神典をみそめしに、この渾發のうたかひ、いかに思へとも思ひえさりしかは、古來神學者流の注ともをみるに、此疑を生せし人もなきに、弥うたかひ重なりたりし、このゝち、本居宣長かあらはせる古事記傳をみて、さはかりの博覽なれは、これにてこそ疑綱はとかめとおもひつるに、猶おなしきさまなるのみならす、今ひとときは、詞の表に縛せらるゝ事つよくて、おほかた神典中、心えかたき事ともは、神の御うへは、人智をもてははかるへからすといふをいたりとせり、されは今はせむすへなさに、しはらくさしおきて、歌にのみ心を入れたりしに、

と語つてゐる。『古事記傳』の初帙の刊行は寛政二年、成壽二十三歲であつて、前に述べたやうに、歌に就いて倒語の說を發明したのは、二十三四歲とあるから、右云ふ所に合せて其の直後であるとしていゝであらう。古事記燈の作業は此の倒語の說が古事記へ適用せられる所に始まるのである。

本集の最初に收めた『古事記燈大旨』(上下二册)は文化五年戊辰初秋(二四六八)に上梓せられたもの(大正十四年岡三郎氏によつて活字に移されてゐる。)であるが(「富士谷御杖大人の生活」によれば賣價六匁であつた。)、其の原稿は改稿・脫稿共に前年の文化四年である。これが大旨であるから、以て神典一部の肝要とする「七神三段神世七代」に就いては何程かの草稿が已に成つてゐる筈であると思はれ、大旨の中には「別に大量と名づけて、言靈のことあげつらへるもの」が既に存する口振をなし、七神三段を說いたと云ふ注も見える。之に依つて、本集の第四に收めた『平安富士谷成元謹述』とある『古事記燈』「次生淡島」云々までの部分(帝國圖書館所藏)は、表紙にある如く文化二年の稿として見る可能性が生ずる。此の表紙は詠藻の表紙とするのに「文化二年乙丑詠藻」とあつたものを「詠藻」の二字を墨消して利用したものだからである。內容も長きに亘り頭注多く、総に覺書を記せるあたり、最も早い頃の稿としていゝであらう。次に「天兒屋命庶裔成元述」とある『古事記燈大御實之件』(帝國圖書館所藏、「國神生の段」と合册)は其の件を「第三十七　大御實之件」と標記してゐる。然るに『古事記燈大旨』(京都帝國大學國文學研究室所藏、「文化四年丁卯五月」とあり。)に於いては改稿本以後此の件を「第三十六」と改めてゐる。大旨刊行後三年目に御杖と成つたのであるし、刊行後「第三十七」に改めたとは考へ難い。從つてこれも文化四年以前の稿本と推測して差支ないであらう。是等の諸稿より「文化十四年丁丑十一月廿八日始援筆于五條坊門寓神舍」とある『古事記燈神典』一(上田萬年先生所藏)に至るまで、古事記燈の內篇及び外篇(△)とも云ふべきものは次の如くであつて、一〇を除く外は何れも自筆稿本である。

題目	署名・年次	所藏者	册數	本集所收順序
一、古事記燈（古事記）（次生淡島云々まで）	平安富士谷成元謹述（文化二年乙丑）	帝國圖書館第	三册	4
二、古事記燈第三十七大御寶之件（古事記燈　之卷）	天兒屋命庶裔成元述	帝國圖書館第四册後半		7
三、古事記燈卷一、七神三段神世七代（第二）（上卷神典第二）	天兒屋命庶裔成元述	帝國圖書館第二册前半		2
△四、大量（古事記燈大旨による）（「大量之件」ならば△を除くべし）				
五、古事記燈大旨（原稿を改稿せるもの）	文化四年丁卯五月天兒屋命庶裔成元識	京都帝大國文學研究室	一册	
六、同（略脱稿せるもの）	天兒屋命庶裔成元識文化四年丁卯仲冬	帝國圖書館第	一册	
七、同（文化五年戊辰初秋刊序跋あり）	平安藤原成元述文化四年丁卯仲冬	上下	二册	1
△八、神典言靈	天兒屋命庶裔成元識文化五年戊辰五月	澤瀉久孝	二册	
△九、古事記首、七神三段	中臣庶裔成元識	倉野憲司	一册	8
一〇、古事記神典燈（古事記燈卷之一、上卷神典第一）	（御杖男筆か、右に近き頃成るか）	帝國圖書館第三册合綴		5
一一、古事記燈神典（天地初發）第一（古事記燈第一、神典一）	審神舍藤原御杖述　文化八年辛未臈月廿九日稿成	京都帝大國文學研究室	一册	9
一二、古事記燈卷之一（上卷神典第一）	洛陽富士谷御杖述	帝國圖書館第二册後半		3
一三、古事記燈卷之一（上卷神典、七神三段神世七代）	富士谷御杖著（右に近き頃成るか）	加賀豐三郎	一册	10
△一四、神典擧要	中臣御杖著	本所	一册	

一五、（古事記燈）國神生の段　（右よりも早きか）　帝國圖書館第四冊前半　6

一六、古事記燈神典（淤能碁呂島、先言、改言）　中臣御杖著 文化十四年丁丑十一月廿八日始援筆云　上田　萬年　一冊　11

本集には下段に示したやうに十一部を收めた。八及び十四は第二集に收める豫定である。なほ右の外に數へることになるのであらうか、五十嵐篤好の御杖略傳には、著述を列擧せる所に

一古事記燈畧　寫本　一卷

是は古事記ともし火といふもの著し給はんの志なれともすみやかになりかたけれはまつ此畧を著せよとあるやむ事なき御方のの給へるまゝに書給へるなりはつかに神代七世といふ所まで書給ひたるを仕をしそけられ病にふし給へは末はつひに書給はすなりぬくちをしともくちをし

と記し、（これは右の九の如きものであらう。なほ九は『弘文莊待賈古書目』第五號に圖版がある。）又

一天地初發等之圖　寫折本　一枚　文政五年板行

を擧げてゐる。

以上によつて知られる如く、御杖の古事記燈の作業は、大旨を出せる後も神典最初の部分、御杖の所謂「七神三段神世七代」の考を練ることに努めてゐる樣子で、文化八年「天地初發」の部分を完成した（一一）けれども、文化十四年十一月に始めたとある稿本「神道大意・淤能碁呂島第一・第二先言之件・第三改言之件」（一六）の先へは多く進み得なかつたものと推測し得るであらう。御杖の所論から云へば、神典の燈を成就すれば足ると共に、「七神三段神

世七代」は更に其の肝要を盡したものである。從つて神典の燈は遂に完成に至らなかつたとは云へ、御杖の所說は繰り返し繰り返し推敲を續けた右の諸稿本によつて十分に窺ふことが出來る筈である。推敲は右の諸稿本間に見られるのみならず、夫々の稿本にあつても加筆改稿の姿が時に上貼・剪除・加注等に及んでゐるのである。

御杖の所說に就いて此處に說くべきであるが、旣に豫定の紙數を越え出版の期日も差し迫つてゐるので次に讓りたいと思ふ。たゞ前に述べた淨土眞宗の蓮如『御文章』等より學んだと思はれる思考形式及び敍述方法は、私の觀る所では隨所に指摘し得るやうに考へるが、その傍證としては、早く親鸞の『三帖和讃』に就いて『三和讃ともしひ』（佐佐木信綱先生所藏）に著手してゐる事を 第一として、『富士谷御杖大人家集』に於ける東本願寺法主との交涉等を擧げ得るのである。又屢言及してゐるやうに、『古事記』の「正しき」事を知つたのは本居宣長の『古事記傳』の恩であり、『古事記』等の語釋に於いては大半宣長の解に依つてゐるやうに見えるが、その半面には宣長の解釋態度を「詞の表」に繫縛せられるものとして、之に對立せざるを得ない事をも言明してゐるのである。かく自說を『古事記傳』に對する反對者として意識した事はもとより當然であるが、其の意識は、少くとも初期に於いては、著述の上で表明してゐる以上に强烈であつた事は、成元時代に香川景樹への返書（小西大東氏所藏）に於いて、

くれ〳〵古事記傳之罪天地鬼神もさそ罪したまはむとかしこさいはむかたなく候

臘十九　　　　　　　　成元

景樹ぬし
御かへり

と云ふところにも窺はれるであらう。御杖の所説は之を原典の注釋として見る限り、御鏡を一應「月讀命の御かた」どするが如き從ひ難い牽强附會の部分が少くないと思はれるのであつて、所説の體系としても大江東平の『詠歌緊要考』(天保十一年自序)に之を痛擊してゐると見られる言の如く比喩的な受け取り方には問題もあるが、而も其の有せる一の形而上學的體系とも云ふべき體系は、發生論的な見解、例へば母なる概念等を始め容易に比類を見ない透徹せる解釋・表現を所有してゐると云へるであらう。

さて右の諸稿本の內、五(美濃紙判)は大旨の原稿を殆ど完膚なきまでに加筆增減したものであつて(表紙裏右下隅に細字で「神道うせたるよの事」「泰伯(以下二字程難讀)」と記す。)(私に改稿本と云ふ。)(『國語國文の研究』第四十六號及び本集卷頭寫眞參照。)、石井庄司氏が「富士谷御杖の古事記研究—稿本古事記燈神典第一に就いて—」(『國語國文の研究』第四十六號)の中に、一一(美濃紙判、同誌第四十六號寫眞參照。)、一五と共に詳しく紹介せられた所である。改稿後の構文は、既に六(私に脫稿本と云ふ。)(之を第一册とする帝國圖書館所藏稿本四册は其の存在を三宅清氏より敎へられた。)に可なり近づいてゐて、大旨の稿は之を改稿本・脫稿本・刊本の形に並べることが出來る。改・脫稿本共に上下の區分なく、「言靈辨」の末、刊本の「予かく神典の敎旨を言靈もてとく事」以下(本集三一頁)を未だ存せずして改稿本には「かの憶良か長哥に目前尓見在知在とあれは其比は言靈の道世に明らかなりしなるへし」として之を消したる部分、刊本と相異なる「神人辨」の初頭の部分等は兩者相近い。然るに最後の「神典一部心法」に至ると三者の推敲改變は著しいものがある。遺憾ながら今一々之を對照すべき餘白がないので、「神典一部心法」中改變の著しい部分以下のみを揭げる。

改稿本（京大本）

さるは凡庸の知見この二神夫婦のことく持あふをいたりと弁へすしてよしなきすちにくるしむことをあはれみ給ひて神武帝御みつから天下の實事に掛てさとり給ひしことを御をしへにのこし給ひしものなるか故に此二神をしも七神三段神世七代の極にたてさせ給へるにてもあれはもとこの二神の相たくひ給ふといふは天地神祗（祇）のよくもちあひ給ひて長く久しきをいふにて人みなこゝをたにいたりとさとれは直に七神三段の發天地決定せらるへし返々神世七代より以上と以下はことすちなる事を信解す

脱稿本（帝國圖書館本）

おほかた凡庸の智は人欲をおさふる所より忠孝等の美事は生すとすされともまへにもいひしかことくよろつ母となるものは地なれはそれ大なるあやまりなりたゝ人たにゆるせはわか身も脩するにをよはすその人のゆるす神氣はかならすその欲を田とするもの也伊邪那美命といふはわか自在にしたかふかれか神氣をいふにて天下にすれは天下の人民に伊邪那美神あり一國一家一人に對しても猶これに同しく此神わか伊邪那岐神と夫婦の間のことくなるこれをは彼我の間□（の）いたりとする事わか御教の奥區

刊本（本集四八頁以下）

おほかた凡庸の智は、人欲をおさふる所より忠孝等の美事は生ずとす、されども前にもいひしがごとく、よろづ母となるものは地なれば、それ大なるあやまりにて、互にその神道を 神道とは身外に出しがたき所欲をいふなり 幽にしてたすくれば、勉強にまされる人道、おのづから立べき也、伊邪那美命といふは、われに和順なる彼が神氣をいふにて、天下にすれば、天下の人民に伊邪那美神あり、一國一家一人に對しても、猶これに同じく、此神、わが伊邪那岐神と夫婦の間のごとくなる、これをば彼我の間のいたりとする事、わ

へしとの御教なる也

その大意いかにといふに人の心身その親は天地にしてその天地の性を□（うけ）□たる心身なれは心は精妙に身は重濁なるか本然の性なるなりさてかの忠孝等の美事心と身いつれを母とするそといふに地の萬物を生する性をうけたるか故に身の方か母とはなる也されは身に美事を生せしめむとにはもはらその欲を肥やすへき事屎尿をもて土を粘せは五穀よくみのるかことし此故にわか身を脩するはかへりて田地をやせさするわさなるか故にいかにもして我身の欲をこやすへけれとみつから肥やせは人ゆるさゝ

なる也この故に伊邪那美神をしも伊邪那岐神の妹と稱して神世七代のをはりにするゑたまひしもの也

が御教の奥區なる也、この故に伊邪那美神をしも、伊邪那岐神の妹と稱して、神世七代のをはりにするゑたまひしもの也、

るか故に人の欲心をこやしわか身の
欲は人にこやさするをいたりとはす
る也されとも人の欲を達する事麁暴
なれは功なくして害あるか故によく
天地の活所をみてまつ初段をかけて
後中段をほとこすへしとはをしへ給
へる也されは初中段は兩手のことも
片手にてはおさへ片手にては達すへ
しとの心也此故にたゝ我身はその重
濁なる性のまゝになし置てまつ陰に
なしさらにその性に戻るへしとには
あらすかれより下段たに生すれはわ
か非もなにかは非ならんたゝわれを
非とするかれか地祇をたになこむれ
は倫身にをよはさる事ならすやこゝ

をもてみれは脩身は甚迂遠なるわさなる也

初段發天地の下にいひしかことくわか御國は天地ふたつなからいかす事をむねとするか故に惡をはかへりて厚くし天地をふたつなからいかすにいたらされは天地の間にをり天地を親とせる人の心身いかてか全き事をうへき　されは淤能碁呂嶋以下禊祓之件まては此人欲を達すへき道初中段より外なき事を說給ひ御頸珠以下終にいたるまてはその初中段につけて心えあやまるへき事必あるを委しくとき示し給へるもの也

されと淤能碁呂嶋以下の件々は畢竟

さてかの淤能碁呂島之件に脩理固成の任この二神にしもあるを思ふにこの二神の相たくふへき事は天地をひらくはしめよりこもりたるかゆゑなりされは七神三段神世七代をはかく次第して書ならへたまへれとも七神三段の始にやがて神世七代の終あり神世七代の終にやがて七神三段の始ある心にて所詮は環のことききかたちにみるへき也その環のことききはなにそ昇降の氣の循環する事始はやかて終をもち終はやかて始をもてるに應したる也此故に七神三段神世七代は

さてかの淤能碁呂島之件に、脩理固成の任、この二神にしもあるをおもふに、この二神の相たぐふべき事は、天地をひらくはじめよりこもりたるが故也、されば七神三段神世七代をば、かく次第して書ならべたまへれども、七神三段の始に、やがて神世七代の終あり、神世七代の終に、やがて七神三段の始あるこゝろにて、所詮は環のごときかたちにみるべき也、その環のごときは何ぞ、昇降の氣の循環する事、始はやがて終をもち、終はやがて始をもてるに應した

初中段の釋なりといへはたゝ設て書たまへるものゝことくに聞ゆれと淤能基呂島之件より禊祓之件まてと御頸珠之件よりをはりまてとはまたふたつになりて祓禊以上は初中段のおこる所以をとき御頸珠以下は初中段たちて後の徹をひらき給ひし也と心うへし此故に七神三段神世七代と禊祓以上と御頸珠以下と三つにたてゝみるへき事神典一部を見るへき大意なる也

これもと　神武帝の實事にさま〳〵懲りさせ給ひ實事にをしへられ給ひて其活所をえてたてさせ給へる御教なるへしされとその活所卽天地の活

わか御をしへの大綱にて淤能基呂島已下とはことなるものなる事これらの義をあきらめて後信すへきなり淤能基呂嶋已下を初中段の釋なりとはいへともおしなへての釋といへはたゝその理をとけるものをいふ事なれとこれは　神武帝天下の實事に御心をくるしめ給ひ實事にみちひかれて此活所をえたまへるなれは全くその實事のみちひき奉りしかたちをは淤能基呂島以下にときたまひしものなるへしされは此一部七神三段神世七代は大綱とし淤能基呂島之件より禊祓之件まてをは一段落と見御頸珠之件より終までをまた一段落にみるへ

るもの也、この故に七神三段神世七代は、わが御教の大綱にて、淤能基呂島以下とはこと筋なる物なる事、これらの義をあきらめてのち信ずべき也、淤能基呂嶋已下をば以上の釋なりとはいへども、おしなへての釋といへば、たゞその理をとける物をいふ事なれど、これは、　神武帝、天下の實事に御心をくるしめたまひ、實事にみちびかれて、此活所をえたまへるなれば、全くその實事の導きたてまつりしかたちをば、淤能基呂島以下にときたまひしものなるべし、さればこの一部、七神三段神世七代は、この御教成就のかたちをとき、

所にして天地人に貫通せりかく活所をもてをしふるか故に古今貴賤の別なくたゝ人は初中段より外の道なしと定めたまへる也昔は質朴に今は□（華美）□也といふはたゝ事物のうへ斗にてさらに内の神にたかふ事はなき事也されは貴賤もみな外貌のうへの別なるそかし此故にまなふにもふるまふにも簡約にして數人に數代に通すへき御をしへなり

きなりそのゆゑは淤能碁呂島以下は釋なりといふうちに禊祓之件以上は初中段をは人のふるまひのいたりとせて叶はさる所以をとき示し給へるものなり御頸珠之件以下はその初中段たちてのちかならすあるへき弊をひらきたまひしものなれは也くはしくいはゝ禊祓之件以上は初中段のおこる所以なれは七神三段神世七代はこの禊祓の件と御頸珠之件との中間にあるへき心なりされと七神三段神世七代はわか御をしへの肝要たるか故にまつかくはしめにはすゑたまへるなりと心うへしかくのことく一部をみつにたてゝみるへきからうちに猶

淤能碁呂嶋之件は、その教旨を實事にかけてさとし給ひしものにて、先言之件以下は、この教旨にたがふ實事の弊をときしめし給へるなり、まなぶ者のためには、かく爲損（シソンジ）をしめしたまふ事、教旨をのみかへす〳〵とかれむよりも、益多き事おもふべし、まづ此一部をみむには、七神三段神世七代を大綱とし、淤能碁呂島の一件は、總釋と見、先言之件以下、神避之件以上を、一段落と見、尾羽張之件已下、禊祓之件以上をば、また一段落とみ、三貴子之件以下、八雲之件已上をば、又一段と見、稻田御子生之件以下、尾翼鱸之件以上を

一部すらたゝ五十葉なるにそれも猶淤能基呂嶋以下は注にしてその大要はたゝ此七神三段神世七代二百一字なり猶そのうち初中段百七字の言靈によろつ人事の本源ををしへ給へるなれはいかはかり不根氣の人とても學ひえさる事あらんや

委しくいはゝ御頸珠之件より八雲之件まて素菟之件より尾翼鱸之件まてをふたつにしてこれを□(初)段の御産巣日の二神の弊とみ天八衢之件以下を中段二神の弊とみるへしこれ此神典をみる要略なるなり

この一部すらたゝわつかなるにそれも猶淤能基呂嶋以下は釋のことくにして大要はたゝ此七段三段神世七代二百一字なりなほそのうち初中段百七字よろつ人事の本源をゝしへ給へるなれはいかはかり下根の人なりとも學ひえさらんや

ば、又一段とみ、天之八衢之件以下、をはりまでをばまた一段落とみるべし、くはしくいはゞ、なほこれが中にも、小段落はある事なれど、今はその大段をいふなり、件々の大意、ならびに件々相うくる心、などは、本文にしるせるをみて心得べし、これ此神典をみるべき要略なる也、

この一部すらたゞわづかなるに、それもなほ淤能基呂嶋以下は釋のごとくにして、大要はたゞ此七段三段神世七代二百一字なり、猶そのうち、初中段百七字、よろづ人事の本源を教たまへるなれば、いかばかり下根の人なりとも、學びえざらんや、

今我御教の徳をいはゝまつわれも身をこらすに及はす人も欲を達するにつけて彼我の仁義力を用ひすして生ししかも長く久しきこれ也

今わか御教の徳をいはゝ我も人も身を脩するに及はす所欲は公私大小となく達せすといふ事なくしかも孝悌忠信等の美事つとめすをしへすしておのつから生するこれなり諸教のことく勉めてなし恥させてつゝしまするはたとへは猫を飼ふに紐もてつなきたるか如し初中段をふるまひ下段生してその極伊邪那岐伊邪那美二神夫婦となるにいたりてはたとひ敵の陣中にあるをのこたりともわか方人たる事掌にあるかことくなりぬへきなりこれ放ち飼にしたる猫のことくなれは毛々那賀之件なる哥にへ毛(モ)々(ゝ)那賀(ナガ)尒(ニ)伊(イ)波(ハ)那(ナ)佐(サ)牟(ン)遠(ヲ)またへ毛(モ)々(ゝ)那(ナ)

今わが御をしへの徳をいはゞ、我も人も勉彊用ふるにをよばず、所欲は公私大小となく達せずといふ事なく、しかも孝悌忠信等の美事、つとめずをしへずしておのづから生ずるこれなり、諸教のごとく、勉めてなし、恥させて愼ますする時は、たとへば猫を飼ふに、紐もて繋たるがごとし、初中段をふるまひ、下段生じて、その極伊邪那岐伊邪那美二神夫婦となるにいたりては、たとひ敵の陣中にあるをのこたりとも、わが方人たる事、掌にあるが如くなりぬべきなり、これ放飼にしたる猫のごとくなれば、毛々那賀之件なる哥にへ毛(モ)毛(ゝ)那賀(ナガ)尒(ニ)

しかるに理學をたしむ人はこれを權謀術數のことく思ふへけれと天地の活所たゝかくのことくなるをや此天地の活所よりみれはつとめて外様に仁義をかさるこそかへりて術數のことくみゆるそかしもと此欲を毋とす

賀迩伊遠斯那世なとあるこれ安寝のかたちを云なりたとひめのまへはいかにもあれつまりの所うたかひなくかゝりとあらかしめしる智を思金神と名つけて石屋戸之件にはしめてみえまた大穴牟遲神の所にも此神の思ひ弁をのみときたまひしは勉彊のたしかならぬか故なり

しかるに理をむねとしかへりて實事にくらき人はこれを權謀術數のことくおもふへけれと天地の活所かくのことくなれはさるは天神なほ權謀術數をふるまひ給ふとそいふへきそれひとへに實事にくはしからぬか故也

伊波那佐牟遠、また毛々那賀迩伊遠斯那世などある、これ安寝のかたちをいふなり、たとひめのまへはいかにもあれ、つまりの所うたがひなくかゝりと、あらかじめ知る智をば、思金神と名づけて、石屋戸之件にはじめてみえ、また大穴牟遅神の所にも此神の思ひ弁をのみときたまひしは、勉彊のたしかならぬが故也、

しかるに理をむねとし、かへりて實事にくらき人は、これを權謀術數のごとくおもふべけれど、天地の活所、かくのごとくなれば、さるは、天神なほ權謀術數をふるまひたまふとぞいふべき、それひとへに實事にくは

るか故に世の惡といふものをいみにくむ事なくなりよろつかれかあやまちをしわかために辛勞なる事をまつ心となりぬへけれはすへて世にすたるものなくなりぬへき也漢土の天子久しからさるはひとへに善をとり惡を制するか故也

天地の性精妙重濁にありなからふたつともにたちたるをいかてか善をの

此天地の活所よりみる時は心にも思はぬ仁義を外体にかさるこそかへりて術數のことくにはみゆれこの初段のたつ所はかの黄泉之件にいはゆるへ落苦瀬而患惚時云々これにてすへてなに事にもあれ思はさる事いて來てせんすへもなくうちわひらるゝ時を時とする事なれはよろつの患をはかへりてまちよろこふ心となりぬへくこれにつけては彼の所欲すこしもまが（曲）るへからさるか故に世にすたるものなくなりぬへし

天地もと精妙重濁の性なるにふたつなからならひおこなはれたりしかる

しからぬが故也、此天地の活所よりみる時は、心にも思はぬ仁義を外体にかざるこそ、かへりて術數のごとくにはみゆれ、此初段のたつ所、ひとへに人を欺くがごとくなれど、欺くが如しと雖て、たゞ人道をのみ先とせばそのかゞまれる神道より、かならず敗をとらしめらるべき也、されば幽顯をたてゝ、神人の道をひらき、神を先とし人を後とせば、神道は幽路に行はれ、人道は顯路におこなはれぬべきが故に、世にすたる物なく成ぬべし、

天地もと、精妙重濁の二性なるに、ふたつながらならびおこなはれたり、

みとりてその末全かるへきすへて儒敎のいふ所はたゝめのまへたに正しけれは行末もめてたかるへき理によりてなれと重濁の道をあたへさるにいかてか天地と長久をひとしくする事をえん

を善に片より惡をいみていかてか天地と長久をひとしくすへき發天地の御をしへその貴き事これにてしるへき事なり天地の二性に私すれはかならす長久ならさるしるしは漢土のよゝの王者これなり

易經にたてたる乾坤は地をも正しき方のものにみたる也されは天地も正しき一方のうちなる天地なる也地は萬代うこかさるをいかてか正しきものにみんよに邪なるたくひはなにをおやとするにやよく〳〵考ふへき事也さる正中の天地をのりとしていかてか長久に合すへき

宣長はから國の敎來りて後わか御國人のこゝろあしくなれるやうに思はれたれとも渾沌を人の質として發天地ををしへ給へるをみれはもとより渾沌は人のつねなるものなりさる質

しかるを善に片より惡をいみて、いかでか天地と長久をひとしうすべき、發天地の御をしへ、そのたふとき事、これにてしるべき事なり、天地の二性にわたくしすれば、かならず長久ならざるしるしは、漢土のよゝの王者これ也、よにふたつある物、天地を親とせぬはなきに、理欲のみいかでかことものならん、これを弁へざるは、いと稚き事ならずや、宣長もから國のをしへ來りて後、わが御國人の心あしくなれるやうに思はれたれども、渾沌を人の質として、發天地ををしへ給へるをみれば、もとより渾沌は人のつねなるもの也、さる質

後世神社をはいにしへの書藉とみる事うしなはれてたゝ崇敬をことゝす

ある所へから國ふりの文をかけたるなれはいよ／＼後世わか御國ふりに遠さかりゆきしものなり甚しくしてはから國の事をそしれははらたつる人さへ世に多く成にたり晝つくれは夜來り夜つくれは晝來り暑盡れは寒來り寒つくれは暑來らすやめのまへの固きをねかふは行末の危きをうむわさそかしされはから國まねひはいとも／＼うしろやすからぬ事なりとそおほゆるやわか

神君ひとり後のよのてふりを出させたまへれは萬世の御末もおもひやられ奉ら□(るカ)かし後世神社をは書藉とみる事うしなはれてたゝ崇敬をことゝ

ある所へ、から國ぶりの文をかけたるなれば、いよ／＼後世わが御國ぶりに遠ざかりゆきしものなり、甚しくしては、から國のことをそしればはらたつる人さへ世に多くなりにたり、晝つくれば夜來り、夜つくれば晝來り、暑盡れば寒來り、寒盡れば暑來らずや、めのまへの固きをねがふは、行末のあやふきをうむわざぞかし、されば渾沌を惡むは、いとも／＼うしろやすからぬこと也かし、

ることになりたるもその源はから人のおのか先祖の神主をまつるに混したるもの也これのみならす官職なともこと〳〵く漢土をまねふ事になりたる事久し上古の官職をはこの神典によりてみるに此神典中の神々をその一黨の祖と定めいつかせ給ふはその神の神さひを職とせさせたまひしもの也とおほしき也その故は小さき家のうちなとこそあれ天下の人の重濁の性を達せんに　天子一人の御身にてはあたはさるか故にその神々を職とせさせて御みつからの御神さひにかはらせたまひしものな□(る)へし此故に百官こと〳〵く　天子御一身の

する事になりぬるもその源はから國人のおのか先祖の神主をまつるに混したるものなりこれのみならす今わか御國のいにしへふりと思へるは多くはから國ふりをいにしへまねはれたる事ともなり官職なとも漢土をまねはれたる事久し上古の官職をはこの神典によりて思ふに所々にみえたるか如くその一黨のものに祖として神をいつかせたまひしは卽官職なりいかにといふにその神さひをはその職とせよと任したまひしを言靈としたるもの也小さき家のうちなとこそあれ天下の人の重濁の性を達せむに天子一人の御身にてはあたふまし

神氣なるかことし官職のうへも上古は猶神典をむねとしてたてたまひし事みる□(へ)しこれなにをもてかくいふそといふにもとかたちもなき神をは祖とたつる事あるましき事なるをもて此こゝろをしれるなり
わか大　御國こと國にたかふ事むかしより人たゝふれともたゝ天地の神祇(祇)のまもらせたまふとのみいひていかなる故とものへたる人なかりき天地の頭上脚下にある事はわか　御國にかきらぬ事なるにひとり他域にまさりて　神祇(祇)の御心を合せおはし□(ま)すはかく神の道に乘ることを主とする御てふりによりて也

きか故に神々を職とせさせて御みつからの御神さひにかはらせたまひしもの也此故に百官こと〳〵く　天子の分身なるかこときこれかみつよの官職のかたちなりから國のことく顯露の事のみをたのむすらみつからはひろく事をとる事あたはすまして初中段をむねとし人の葦牙の萠騰るをみむ事かくのことくならてはいかてかうへからん國家とても猶この心をえて事にをるへき事ならすやかの祖神といふも後世神學者流はたゝその黨の元祖たる人のこと也と心えためれともとかたちもなき神なるを祖とせむやは伊勢の　太神宮をも祖廟

といふに泥しはてたれともしこれ天子の祖廟ならはむかしより今に至りてもいやしきものにまて拜禮をゆるされんやはこれうつしき青人草をおしなへてたすけさせたまはむ爲の書籍なる事うたかひなき事ならすやわか大御國はしもこと國にまされる事むかしより人たゝふれともいかなるゆゑありて天神地祗(祇)のことに此國をしも守らせたまふといふよしは弁したる人なし頭上に天あり脚下に地ある事はわか御國にかきらぬ事なるをやたゝこと國に同しからぬことは天地の精妙重濁の二性をはふたつなから全うするこれ也かく天地をひら

今四海泰平をたのしむ時にあたり千とせをこえてかくれたりし此御教本居の翁はしめて此記の正しきをよにかゝやかされしたかひて成元此言靈をときてふたゝひわか　大御國の御てふり明らかになり哥の道さへ後世

く人の神氣天地の神祇（祇）に感通するか故にこと國にはまされるなりまへにもいひしかことく天地の造化は人によりて變化するものなる事これにて信すへくかつわか御をしへのたくひなき事をも思ふへしもし人發天地をむねとせすは上帝とたゝへていかはかり天を敬すとも長久をひとしくはし給ふましきそかし

今四海泰平をたのしむ時にあたり千とせをこえてかくれたりしわか御教本居の翁はしめて端をひらかれ成元したかひてこの言靈をのへてわか御國の御てふり明らかになり哥の道さへ後世の狭霧はれたる事さらに〳〵

今四海泰平をたのしむ時にあたり、千とせをこえてかくれたりしわが御教、本居の翁はじめて端をひらかれ、成元したがひてこの言靈をのべて、わが御國の御てぶり明らかになり謳哥ともに、後世の狭霧を拂へる事、

の狭霧のかをれるをはらひし事もひ
とへに
神君の御神さひの御ひかりなるそか
しされは民みなこの大　御國ふりに
したかひて神道に乘らはおのつから
　おほやけの御つかさ〳〵に御いと
まもいてきなんそれをたに
神君の御うつくしみにむくひ奉らん
とたれも〳〵おもふへき事ならすや
この御をしへ　天地人の活所貫通せ
るをさとりて初中段をつねとする人
よに多くなりなは宣長かいさをも成

これ成元等かゝさをにはあらすひと
へに
神君御神さひの御ひかりなるそかし
されは民みな此御てふりに歸して神
道にのみ乘らはかれもわれもともに
さちのみありて國にあらそひあるま
しけれはおのつから　おほやけの御
つかさ〳〵御いとまもいて來なんそ
れをたに　神君の御うつくしみにむ
くひ奉らんとたれも〳〵思ふへきこ
とならすや
しかるをよしなき是非家の論にした
かひ八十禍津日神大禍津日神を生せ
む事いとも〳〵かしこき事なり成元

さらに〳〵、これ成元等がいさをに
はあらず、ひとへに泰平の餘化、かの
大御神さびの御ひかりなるぞかし、
されば民みな此御てぶりに歸して、
神道にのみ乘らば、かれもわれもと
もにさちのみありて、國にあらそひ
あるまじければおのづから　おほや
けの御つかさ〳〵、御いとまもいで
來なん、それをだに
とほしろき御うつくしみにむくひ奉
らんと、たれも〳〵思ふべきことな
らずや、

元か微忠もあらはれぬへしとたゝその時をまつになん　さきにもいふかことく御勁珠以下のことき心えたかひなくはたゝ禊祓以上にて事たりぬへく禊祓以上の道理明らかならはたゝ七神三段神世七代にて事たりぬへき事なれはいかにいとやすかるへき事ならすや（は）しめ渾天地の脩身をくいさせたまひてこの發天地に決定しは實に人情世態の極といふへし成元此年うち此神典を人にかたるに實事に心切なる人はさとるもふるまふも頓なり儒佛のたくひの書をよみさらても理をたのむ性なる人はさとるもふるまふも鈍き事ひとへにその智の

年ころ此神典を人にかたるに實事に心切なる人はさとるもふるまふも頓なり儒佛のたくひの書をよみ心に理をやしなひて我を始とする人はいと鈍き事ひとへにみつからその智の活所をおほふとおほはさるの別あれは也

活所をおほふとおほはさるとの別あれは也
むかしは世に此御てふりもしれる人多かりけれはこれさらにあやしき事とも人おもはさりけらし千歳の餘ほろひたりし此御教しかも凡智の上を今一段見こしたる所なれは世人の頓にうけひきかたきもさる事なりこれ死活のたかひめにて大量之件に天若日子と阿遲志貴高日子神とをみあやまれる事をときたまひその喪屋をきり給ひし劍を大量とも名つけたまひしはこゝの決斷いと大なる事なれは也
かはかりいたりふかき　御をしへな

むかしこの御てふりをしれる人よに多かりけれはかの思金神もいとゝくあらはれけらし今よにうしなはれて千歳をこえたれは彼を始とする御てふり世人頓にうけひかさるもさる事なり死活の決斷は人として大事なるへきか故に大量之件に死せる天若日子と活たる阿遲志貴高日子根神とを見あやまりたりしをいかりてその喪屋をきりたふし給ひしことをときたまへりたゝうはへよりみれは死せるも活たるもかはらすみゆるものなれと天地の活所にそむくとかなふとの

から今眼前にそのしるしなくはなにの益かはとて近比みつからもこゝろみ人にもをしへて神さひせさせつるにその妙事をうむ事眼前なるによりていよ〱これを信したる也これによりてます〱世にひろくなしてくるしきせに落てうらふれむをたすけむとて今この件々をわかちてその意をえやすからしむいはゆる

けちめなれはその劍を大量としも名つけたまひしことわりなる哉かはかりいたり深き御をしへなからめのまへにそのしるしなくはなにかはとて近比みつからもほと〱にこゝろみ人のするをも見聞つるにその妙事うまるゝ事けに鵜葺草もふきあへねは小大にわたしいかてよにひろくせむの心っちすゝみぬ

されは渾沌をひらかむ人の一部のみやすからんがために件々をわかてり、いはゆる

（右の中段より續く）しかるにこゝに一弊ありてこの御敎のむねのまとはるへき事ありそれを何そといふに世に神社をうやまひ信しその信力によりて人力の及はさる奇特をうる事多くまた神社をないかしろにして神罸をうくる者も世に少からすそこにおいてその神の德もかしこき事なれは人こそりて信をむねとすけに神力は人力の能はさる所ある事いふもさらなれは神を信しうやまふ事は殊勝のわさなりしかれともこゝに疑ふへき事ありその故はさはかり御うつくしみふかき神にてましまさはこと更に祈りこと更に信する人にあらすとも大かた人の憂患はたすけたまふへくまた不敬を罸しもし給ふへきにその神社にかゝつらふものならてはたすけも罸しもし給

はぬ事うたかはしき事也かつ世に祈禱をこと〻するものそのいのり事しるしある時はおのかいのりのいさをかほなれとももししるしなき時はそのいのりぬしの信浅きか故也といふ事祈禱家のつね也けに信深き人は思はぬしるしをもうるものなれはさるへき理なるへしされと此事をよく〳〵思ふに不信なりともたすけたまはむこそ神の御うつくしみとはいふへきにしかあらぬは畢竟わか信力のしるしなる也もと奇特はわか信力にある事ならはいかてかこと更に神をいのるへきされはまへの不審もこれに落あひて概するに神力は人の信力によりてあらはる〻事明らか也その信力といふはなにそた〻人の我力を捨て唯かなたの力をひたふるにたのむ力にあらすやかく概してみれはよろつの奇特妙事はた〻わか力をすてたる所にあらはる〻事疑なしこれ善解除悪解除の奇特にてたすけも罸も皆かなたを始とするみつからの心よりなす事なるなりされとかくいへは神をないかしろにするかことくに聞ゆれとしからすまへにいひしかことく天地の神祇はすなはちつらぬきて天下の人の心身にやとり給へれは世にあらゆる神たちは悉く人の身内にかよひておはしますなりされはいかなる神力もみつからあらはさる事疑なきものなれとも人力にてこれを覆ひてのみあるか故に奇特の事はえられさる也みつから神力をあらはすはとりも直さす天神地祇の御ちからなれは今いふ所更に〳〵神を蔑にしていふにはあらすた〻神は天地人に貫通し給ふ所以をいふなりされは祈禱者丹精をこらしていのれとも不信の人の祈にはしるしなきこそ理なれその人おのか力を捨すしてをるよりその神力おほはれたるか故也たとひいのらすとも神力のからるへき事た〻おのか力をすつるにある事そかしこのおのか力といふはなにそまへよりかへす〳〵いふ所の道速振心の事

にて神道に乘るといふは即彼か始を始とするわさなる也我より善惡是非をたてゝはすへて妙事をみる事あたはさる事ひとへにわか身內の神の力いたつらになれはなり今の世おのかなけきを神にいのりてしるしをうる事ともを見るにそのしるしのあらはるゝ所は多くは人をかりてしるしを給ひて社の內よりは出來らぬ也これもとより無形の神におはしませは人にかゝり給ふにあらされはその御力のほとこすへき道なけれは也かくの如くその奇特妙事の祈りてあらはるゝにも皆かなたより出來たるものなれは彼より生する事をのみ目當とすへしとて下段を上下に跨らせたまへるなり彼か身はいはゝ諸神社の扉のことくその奥諸神社に通したれは人の地祇をなごむる事は神社にいのるよりも神へ通する近路なりとしるへしたとひいつれの神にもあれかくのことくにして御心にたかふへきかはこの理をよく明らめてひたふるに初中段をふるまひ神力をあらはすへき也かくいふ時はもろ〳〵の神社は無用のものなるかことくなれとさにはあらす前にいひしかことく書籍のかはりに設たまへるが本意にて後世所思をいのるは本意にあらさるよしをさとす也もと天地人をつらぬきたる神をはいつかれたるものなるか故に祈りてしるしも罰もある事さもあるへき事也此故にいのるをいのるへからすといふにはあらねといのりてしるしあるたくひの事はたゝ一巳（已）の小事なるをやされは初中段よりみれは神社に所思をいのるはしるしなきにはあらねと迂遠なる也迂遠なるといふ故はその神の神さひをはやかてわか神さひとするにはまさるましけれはなり又正直をいふも禊祓之件なる大禍（マガ）津日神大直毘神の曲直、かれか神をまけ直ぶる事なるをおのか心の曲直と心えたるあやまりにてこれも脩身家の弊のうつれるなるへし又神は潔齋を好み給ふやうに思へるも

誤也むさき方か母となる事をこそ神典一部にをしへ給へれいかてか清淨をのみこのみ給ふへき凡清淨と不清淨とは天地の性なれはあるひは清淨あるひは不清淨と片方になるをそ神祇はきらひ給ふなるされはよく清淨不清淨の二途を混せさるこれを發天地とはいふにてものいみするは不清淨を混せしとするにて却て不清淨をいやしまぬかためそかしこれらの後世ふりをさとりひらきて此神典の御をしへをはくはしく心うへき也されは一部のみやすからんかために件々をわかてりいはゆる

第一　七神三段神世七代

以上神典一部の要をとけり

第二　淤能基呂嶋之件

第三　先言之件

第四　改言之件

第五　河海之件

第六　山野之件

第七　天之尾羽張之件

第八　黄泉之件

第九　千引石之件

七神三段神世七代

右神典一部の肝要なり

第一　淤能基呂島之件

第二　先言之件

第三　改言之件

第四　河海之件

第五　山野之件

第六　尾羽張之件

第七　黄泉之件

第八　千引石之件

七神三段神世七代

右神典一部の肝要なり

第一　淤能基呂島之件

第二　先言之件

第三　改言之件

第四　河海之件

第五　山野之件

第六　神避之件

第七　尾羽張之件

第八　黄泉之件

第十　禊祓之件
　以上九件初中段のおこる所以をとけり
第十一　御頸珠之件
第十二　宇氣比之件
第十三　勝左備之件
第十四　天石屋戸之件
第十五　千位置戸之件
第十六　食物乞之件
第十七　八俣遠呂智之件
第十八　八雲之件
第十九　稻田御子生之件
第二十　素菟之件
第二十一　赤猪之件
第二十二　氷目矢之件
第二十三　五百引石之件

第九　禊祓之件
　右九件初中段のおこる所以をとけり
第十　御頸珠之件
第十一　宇氣比之件
第十二　勝佐備之件
第十三　石屋戸之件
第十四　千位置戸之件
第十五　食物乞之件
第十六　八俣遠呂智之件
第十七　八雲之件
第十八　稻田御子生之件
第十九　素菟之件
第二十　赤猪之件
第廿一　氷目矢之件
第廿二　五百引石之件

第九　千引石之件
第十　禊祓之件
第十一　三貴子之件
第十二　宇氣比之件
第十三　勝左備之件
第十四　石屋戸之件
第十五　千位置戸之件
第十六　食物乞之件
第十七　八俣遠呂智之件
第十八　八雲之件
第十九　稻田御子生之件
第二十　素菟之件
第廿一　赤猪之件
第廿二　氷目矢之件
第廿三　五百引石之件

第二十四　母々那賀之件	第廿三　毛々那賀之件	第廿四　毛々那賀之件
第二十五　胸形御子生之件	第廿四　胸形御子生之件	第廿五　胸形御子生之件
第二十六　天之蘿摩船之件	第廿五　蘿摩船之件	第廿六　蘿摩船之件
第二十七　大年神御子生之件	第廿六　大年神御子生之件	第廿七　大年神御子生之件
第二十八　羽山戸神御子生之件	第廿七　羽山戸神御子生之件	第廿八　羽山戸神御子生之件
第二十九　言趣之件	第廿八　言趣之件	第廿九　言趣之件
第　三　十　雉之頓使之件	第廿九　雉之頓使之件	第三十　雉之頓使之件
第三十一　大量之件	第三十　大量之件	第卅一　大量之件
第三十二　青柴垣之件	第卅一　青柴垣之件	第卅二　青柴垣之件
第三十三　力競之件	第卅二　力競之件	第卅三　力競之件
第三十四　尾翼鱸之件	第卅三　尾翼鱸之件	第卅四　尾翼鱸之件
第三十五　天之八衢之件	第卅四　天之八衢之件	第卅五　天之八衢之件
第三十六　大御寶之件	第卅五　大御寶之件	第卅六　大御寶之件
第三十七　比良夫貝之件	第卅六　比良夫貝之件	第卅七　比良夫貝之件
第三十八　紐小刀之件	第卅七　紐小刀之件	第卅八　紐小刀之件

第三十九　木花之件
第四十　無戸室之件
第四十一　幸易之件
第四十二　无間勝間之件
第四十三　美智皮之件
第四十四　佐比持之件
第四十五　本身之件
第四十六　鵜葺草葺不合命御子生之件

以上三十六件初中段たちての後の徹をひらきたまへる也その中に尾翼鱸之件まで廿四件は初段

右四十五件　の徹をとき天之八衢之件以下十二件は中段の徹をときたまへる也

第卌八　木花之件
第卌九　無戸室之件
第四十　幸易之件
第四十一　无間勝間之件
第四十二　美智皮之件
第四十三　佐比持之件
第四十四　本身之件
第四十五　鵜葺草葺不合命御子生之件

右三十六件初中段たちて後の弊をひらきたまへるなりその中に尾翼鱸之件まで廿四件は初段の弊をとき天之八衢之件以下十二件は中段の徹をときたまへる也

これ一部の段落なりこの件々相うく

第卌九　木花之件
第四十　無戸室之件
第四十一　幸易之件
第四十二　无間勝間之件
第四十三　美智皮之件
第四十四　佐比持之件
第四十五　本身之件
第四十六　鵜葺草葺不合命御子生之件

右四十六件

これ一部の段落なりこの件々の大意ならひに件々相うくる所のこゝろは別に一卷とせるをもみ又一部を注せるをもみわたしてこと〴〵く初中段の言靈をたすけた□（ま）ひしものなる事をしるへし（以下五十行抹消）

文化四年丁卯五月

天兒屋命庶裔　成元識

る所のこゝろは別に一卷としてとけるをみて淤能碁呂島以下は初中段の言靈をたすけたまへるものなることをしるへし

文化四年丁卯仲冬

神典一部、舒れば四十六件、卷けば七神三段神世七代にして、その要、幽顯二路をたてゝ、理欲をひらき、幽を先とし顯を後とするにあり、理欲（はすなはち、人と神とのもちわけてつかさどる所也）神道をさきとする事、人道重きが故のわざなれば、人道を後とするをあやしむべからず、此神典を史よりさきに置給ふ事、人道は神道よりたつ所以なる也

文化四年丁卯仲冬

凡例

一、富士谷御杖集は、蒐集筆寫等の都合によつて必ずしも系統的に收めると云ふわけにはゆかないので、適宜編輯して刊行する。第一卷には專ら主著の一たる『古事記燈』の類を收めた。

二、活字に移すにあたつては、異體の假名の外は句讀・濁點等に至るまで叨りに私意を加へない方針をとつたが、「ヒ」の如きは「こと」の如くに分ち、「玉ふ」・「給ふ」は後者に統一し、筆法の活字體と異なるものは必ずしも原本に從はないこととした。例へば「数」「拎」「闵」「梚」「蒂」「䰠」「恙」「斫」を夫々「數」「於」「幽」「桃」「葦」「魁」「美」「所」とせる如きである。

三、たゞ衍字脫字等に就き、印刷用原稿に於いて生じたる恐れあるものも、校正に際して再び原本と照合することを得なかつたものは、印刷用原稿に記す所によつて注した。

四、稿本に筆加・筆削が多いが、すべて最後の形を成稿として他を採らなかつた。

五、編者の注は〔 〕を以て圍んで區別した。

六、朱書は特別に區別すべきものと認めざる限り斷らないこととした。

七、頭注の多い草稿本は、適宜體裁を考慮して頭注の在り場所を變更せざるやうに努めた。

八、本文中にある空白は大抵原本に既に存するものである。

古事記燈 大旨

わが大八しま國はしも、天傳ふ日の經ぬきの御中なれは、夏皮きぬをき、冬あかはたなるところなり、高照す吾　日の御子、　天つ日繼、創め給ひしよりこのかた、いやつき／＼にたゝせ給ひ、その　御末のみ榮え給ひて、久堅の日月と長く、天地と共に久しくして、をさを重ぬる夷はあれと、昔よりこと國に暦をうけす、人のさか、武く、いつしく、さとく、かう／＼しく、よね豆のうまき、大刀ほこのとき、馬のはやき、紙の堅き、漆のつよき、種／＼さへたくひなき、名よもに精しき可美　御國なるを、敎しもこと國のをしへ弘これる、年比あやしくおもひわたりしに、文化のはしめ、富士谷成元ぬしかたられしは、上つ世の哥とも、言靈を見し事、あまた年を經て、をさ／＼大和てふりにおもひいたり、それよりもはら神書に心入れしに、伊勢人宣長か古事記の傳を見て、始てこの記の尊さをしりぬ、されと詞の表こそ、のこすかたなくとかれつれ、神代のくすしき種／＼を、あやしまれさりしは、なか／＼青山を泣からすわさなり、おのれ近比、言魂もて見るに、上つ卷のくすしきも、たゝ目の前なる言わさのおやなれは、大かた上つ卷一まきは、神事をむねとときき給ひし、吾　大御國の御敎ふみとはしるしと、かたられき、そのゝち、上つ卷とかれしを聞しに、けに七神三きた、神の世七代の御敎をはしめ、件／＼いと言少なる物から、人のさか世のさま、くまもおちす言靈としつめ給ひ、たゝ一卷に御敎のむねをつくし給へるに、我年比のなけきもやみぬ、

さはかりの遠つ世に、萬世の後をさへかねて、青人草のうらふれんを助け玉はんとて、傳へさせ給ひし御教の、かく再ひ世にあらはれしは、今天か下やすく平らけき御世の、御恵のあまりそかし、この神書ことわるとて、ともし火、言靈なといふ、しるへかへのまをけあれと、まつ開人、肘ちかならんか爲に、此大旨をしものへられて、こその冬二卷とは成ぬ、その五條のやう、神書見るたつきを得つとて、東に西にまちとりて寫しあふに、都のうちたにあるを、とほき國〳〵につたへむに、寫文の數少きをうれひ、此御をしへの弘くなりなん事をかつねかひて、櫻木に物せんとわりなくこひしかは、後々燈言たまなと世にあらはしなは、なか〳〵成へしといなまれしかと、しふ〳〵にうへなはれぬるに、これをきさむへき工ら、これを行ふへきあき人、はかるまに〳〵身のたなをわすれ、　公に物するまて、聊のわさはひなく成ぬるも、この御教の世に弘まれらん時にこそと、喜のあまり言擧せぬ國のならひをもおもひあへぬにてそ有ける、おほよそ、神書の言靈、千年あまり世に埋れたりしかは、此大旨を見む人、今更におもひもまとはるへけれと、まつこの言靈の條をしも見しらは、本末の四条は、竹をさくかことく成へし、されとすへて我人心のさかとして、あるは世に傳はれる神ふみまねひをきゝ、本居の翁かときことをうけ、あるは内外の二の敎に、うちかたむけるきはゝ、心のをよはぬまに〳〵、うたかひもあはめもしてむ、とまれかくまれ、此文を繙むは

しめに、五百津乃眞賢木を根こしにこして、その肉の空國となしなは、五條の理、たゝとけにとけて、此御をしへ見いてられしいさをの、なみならぬをさへ、おもひしらんかも、

文化五年の夏　山脇之豹しるす

古事記燈

於富牟泥上

平安　藤原成元述

上卷非史辨

古來神典をとく人、　みかどの御はじめ也と思はぬ人なく、この言靈におもひいたられざりしより、わが大御國、經のたぐひのなきをいきどほりて、儒佛の書をもて附會潤色し、しひて理ありげにときなされたれど、もとよりなにの徵する所もなく、私にときたる物なれば、或は經のごとく、或は史のごとくにて、信ずべく信ずべからざる事どもなり、此故に世々儒佛にもきそふめれど、すべて私言なれば、かしこはめでたく、こゝはあはしき所々ありて、敎とするにたらざる事どもなるがゆゑに、儒佛の敎にはけおされたるもことわりなる事也、しかるに近比、伊勢國松坂なる本居宣長、古事記の日本紀にまさされる事を見いでゝ、かの皇子の非どもをあげつらへり、げにその論をみるに、

いとも〳〵さる事にて、此記はわが御國言のまゝをしるされたる所多きにても、宣長が論あたれるは明らかなる事也、予も此ぬしの恩によりて、力をもいれずしてこの記の正しきをしりぬ、もと神代卷は此記の書ざまにはたがひて、諸本を大成し、その心をえて、かの皇子、からぶみまねびをむねと書たまひし物とみゆ、しかるに古來の神學者、こと〳〵く神代卷にのみよれるが故に、此記の正しきに心つく人もなかりしを、今かくよに其光あらはれたるは、わが御國千歳以來の大幸といふべし神代卷のからまねびなる事は、宣長くはしくあげつらへるがごとし、されどもとかの皇子、古書古傳を大成して書たまへるものなれば、大かたのむねこそ皇子の私もあれ、所々その言どもの取用ふべき事あるは、古傳なる分なるべし、ことに一書とてのせたまへるは、多くは此の記に言靈合して、とり用ふべき事おほく、又此記の言靈をしるにたよりある事どもあり、さればひたふるには捨べからぬ物なれど、わが神典はこれ別天神五柱こそ御教の肝要なるを、この五神をはぶきて、國之常立神をはじめとし給へる事、この皇子の大なるあやまりといふべし、そのあやまりによるが故に、諸家の説々、悉くあらぬ事どもとはなりにたる也、されば神代卷も、所々とり用ふべき所は、古傳の言をたちいれたまひしものとおぼしきなりしかるに宣長、さばかりわが御國のいにしへを明らめ、ふるき言どもその義をきはめ、其師翁の不及を補ひ過たるをけづられたるいさをいふばかりなきに、わが御國言は、言靈言靈の事、下にくはしくいふをみて心うべしをむねとする事に思ひいたられざりしによりて、たゞわが御國言は、みやびをむねとすとのみおもひもいひもせられたりこれ即その師眞淵が説なり、師の見を傳へて、しか心えられしなるべしされば此神典も、なほ詞の表をのみ見て、かくれたる所なきを我御國ぶりなりと、ひたふるに思ひとられしおのがひとへ心をのりとしてかく隱れたる事なき也と定められしは、何の據ありともみえず、たゞしひたる理をのみとける、古來の神學者流にきそひての事なるべくみゆとかれけるより、たゞ神典は　帝の御はじめにて、教のふみにあ

らずとし、教といふもの、もとてぶりあしき國こそあれ、わが御國のすぐれたるに、いかでか教はいるべき、此神典をみむやうは、　みかどの御はじめはかくのごとくくしびにあやしくおはし〻、其御するゑにましませば、たゞかしこみにかしこみ奉りて、その御おもむけにのみしたがひなば、なにばかりの智も無用のものなりとの心にみえたり、これ古事記傳の大意、かつ直毘靈とてか〻れしもの〻意趣なり、ひとわたりはさるべき事のやうにも聞ゆるが故に、近比よにこの說を信ずる人いと多し、げにおのが智を捨よとなれば、世のさまたげとなるべきいひざまにはあらねど、その說のおこれる所を考ふるに、この神典、いかにみれどもいかに思へども、いとあやしき事のみありて、これをとかむとすれど、その首尾人事に應ぜざるが故に、なか〱か〻る事をたづねむは無益の事也、神の御うへははかり知るべからず、たゞ　すめら御おや神たちの、不測の妙事を錄して、後のよまで御するゑの御稜威(ミイツ)にかきおかれしものなるべしとぞ思はれけらし、傳のうち、すこしもあやしく心えがたき所々は、か〻る事深くたづぬるはから心なりとみえたり、さらば聞えぬま〻になしおくをば、やまと心とやいはん、いとおほつかなき事なりや、（されども、さすがさばかり心を入れられし事なれば、中には言靈に近づかれし所々もみゆ、しかるを猶引かへして、もとのうはべにとゞまられしは、いとをしむべきことなり）しかるに此說を信受せる人々は、うまれえて世のすなほ人なるが故に、げに神の御うへはしるに及ばざることゝ思ひてもあるなれど、成元がごときしうねく、ねぢけたる

さがなるは更に〳〵これを信ずる事あたはねば、宣長が說もまたうくる事あたはざるなり、大かた世の人をみるに、これを信ずべきすなほ人はいとすくなく、成元がごときねぢけ人はいと多かり、そのすなほ人は、この神典みせずともさてありぬべし、ねぢけ人の此說うけざるに、しひてうけよといはむにうけむやは、うけよとすゝめても猶うけざらば其人をあはめむより外のわざあるまじきをや、成元がごときねぢけ人、かくよに多く成ぬるは、儒仏の敎わたり來てよりの事なりと、ひたふるにときおかれつれども、天地の間、晝あれば夜あり、男あれば女あり、聖賢もうまるれば虎狼もうまるゝに、わが御國のむかしとてよきさがなる人のみならんや、すでに神典のうちにも、苑の和迩を欺きたる事もあり、又佐久夜毘賣の一夜にはらめるを疑ひ給しこともあり、神武の御卷には、長髓彥兄猾弟猾磯城八十梟帥がたぐひ多かりしをや、これ白きをしりて黑きをしらずといふべし、さて人のさがよきわが御國なれば、敎無用なりといふ說もうけがたきは、かばかりたぐひなき御敎のあるを、いまだたづねきはめずして、みだりになきに定められけんもかたはらいたく、もと敎あるを無用なりとすてんこそ、實に捨るにはあれ、なしとし置て無用也といふは、たとへば貧しき人の、米もこがねも無用なりといはむがごとくならずや、さて又神典中、あやしき所々をもとむるは漢意(カラゴヽロ)なりとて、みづからもとかず、人のもとめむをもいさめられしは何ぞや、しからば何事を

ももとめざるを是とせられたるかと思ふに、中にはあながちに理をもとめてとかれたる所も打まじれり、そこをもてみれば、とかれざりし所は、前後の首尾もあはず、またあまり人事に迷へることにて、もとめえがたさなるべし、されどももしもとめえがたきが故ならば、中には心得がたしとかゝれし所もみゆれは其轍にこそあるべきにさもあらず、すべて注せられしやう徃なきは、言によりて、靈によられざりけるが故なり、そのもとめがたうせられし所々は、もとめがたかりしもことわり、すべて言靈をむねと書たまへるが中にも、すぐれて詞の正面をはづれたる所なれば也、今成元がとく所のごとく、言靈をもて前後を首尾し、天地神人をうちあはせてみれば、かくあやしくのみかゝれしふみ、ひと所もあやしき事あらざるぞかし、しかればから心なりと思ひて、さる所々をもとめられざりしは畢竟みづから力を餘されたるなり、此ぬしすらしかり、この典たれかあやしまざらん、成元もこれをあやしめる事多年なりしに、言靈の道のさきはひをえてより、言のうへこそ奇怪のかぎりなれ、内はたゞめのまへなる人情世態のいたりをとき示し給へるものなる事をしれり、もとふかき理をもとむるはから心なりといはれたれども、くはしからぬ事なり、その故は、わが大御國の言靈は、たくみに理をつゝむにはあらず、神をまげじとて也、その心ひとへにみる人の心もて見入れよとのわざなれば、そこを探らむをいかでかから心とはいふべき、もとよりその言靈とせ

られたる事どもも、賢愚利鈍にかゝはらずおのづからよくしれるめのまへの事理なるをや、されば此ぬし、さばかり我御國ぶりをいはれたれども、まことのやまとだましひよりみれば、かへりてから心といふへし、いかにとなれば、もと此典、人にしてとかず、神もてとき給へる主意、よろづの外様はすべて内の活所よりうむ所なるが故に、其活たる所をときたまへるなれば、外様をたのまず、中心に徹し、中心よりおこるをば、眞面目とする事、わが御國ぶりなるを、たゞみやびたる外様をのみたのまるゝは、から國の外様をむねとするてぶりに同じければ也、もしそれ、つくらずかざらぬ外様を貴ふ心ならば、詞はみやびが主也とて、祝詞などの詞づかひをほめられたるはいかに、しからば外様をかざるをぞたふとばれけん、すなほなるを貴ばゞ、かざるをばいかでか賞すべき、傳のうちに一所、言靈といふ事をいはれし所あるをみるに、その心、言のかざりある名也と思はれつとみえたり みやびとかざりとを混すべからす、みやびはかざりの事にあらす、さとびといふ詞に反したる詞にて、俗に上品下品といふこれ也、されば今我いふ御國ぶりのごとく、なにごとも正面にいはす、かなたより心をおこしてしるべきやうにのみいふ、そのいかめしからざるをこそみやびとはいへ、おもふまゝをいひ、しかもうはべをいたくかざるを、いかでかみやひとはいはむ、よく〳〵心えわくべきことなり 靈の字は玉の假名なりとの心にや、されど萬葉集中にことだまとあるには、みな此靈の字を用ひられ 文字はたのむべからさる事なれどもしか のみならずさきはふたすくるなど 此哥は、下の言靈の弁のうちに出せるをみるべし のみよまれたるは、かならず言に靈妙の物ありて、それが、わが思ふ所をたすけさきはふ心なる事明らか也、わが御國、禮制のたぐひ、仁義の教等すべ

てなきは、それらにまさりてたしかなる事、外様は悉く神氣のうむ所なれば也、かゝる御てぶりなれば、宣長がやまと心なりと思はれつる所はかへりてから心なりとはいふなり、わが大御國の御てぶり、委しくは此一部をときたるをみてしるべし、此ぬし此ふみをとかれしは、言の義などたゞされける事は精微なれども、まことはこの典をとけるにあらず、古來神學者流のひが心えをとがめ、儒佛にきそふこと專となれり、そのたゝかひのいとまをこのふみにいれられなば、さばかりの翁、かならず此言靈は見出られんものをといと口をしき也、今かくこの翁の説をあはむるは、此記を正しとをしへられし恩を思はぬに似たれども、古來の神學者流が説々は、論らふに足らず、このぬしの説は、近比よにすなほ人の信ずるが多き故に、そのあやまりを糺して、いよ〳〵此翁の志のごとく、此記のひかりを世にかゞやかさむとて也、言をみて靈をとかざれば死す、ころしてなにの益ぞや、それもころすべくは殺すべき事なれど、此神典、實錄とみては、奇怪かぎりなし、しかるにしひて史とするは、たとへば、火をともしてあたへたるをふきけちたるが如し、もと大御國人、かばかり他域にすぐれてさときに、他域にすぐれたる教もなくてはかなはざる事ならずや、うたがひなく教を言靈としたる物にて、すべての書ざま、あやしむべきのかぎりなるは、實錄と思はせじが爲なるを、言靈の道よにうしなはれて後の人々、此言の奇怪なるにもさとらすして、なにくれといひ

まげつゝ史とするはかたはらいたき事なり、此神典いできたりし世は、人みな言靈の道をしれりしゆゑに、よもこれを實錄とみる世はあらじとこそおぼしつらめ、是はたゞ〳〵このあやしさを導として言靈におもひいたり、發天地隱身の眞理をみつから發悟して、人々この神さびをなせとてなり、からぶみのごとく、言の表に教をあらはにすとも、とても人の中心にいらざる事はいたづらなりとさとりての書ざまにて、その言靈に御をしへをたれ給ひし也、この記の安麻呂が序のごとくならば　みかど御世〳〵これを誦して傳へさせ給ひしものなれば、此神さびは、たゞ　帝の御うへのみの御教のごとくなれど、卽この黃泉之件云上畧へ猶追到黃泉比良坂之坂本時取在其坂本桃子三箇待撃者悉逃返也尒伊邪那岐命告桃子汝如助吾於葦原中國所有宇都志伎靑人草之落苦瀨而患惚時可助告賜名号意富加牟豆美命かくのごとく、あらゆるうつしき靑人草のくるしみをたすけよとあるによれば、ひろく貴賤にわたして心法とせよとの心なる事明らかなり、されどこの一卷をば　神武の御卷のまへにつゞけ天之御中主神より次第して、しか　神武帝にをよぼし、史のごとく書なされたるは、　神武帝此御國を一統したまへりし事この御神佐備をおやとし給ひての御事なれば、やがて祖なるが故也、かくの如く此上卷は、史のかたちをかりながら史にはあらねば、わが大御國の御はじめは　神武帝にておはしますべきなり、しかるに漢士はや

く一統したるが故に、それに劣らじとて日本紀の　神武の御卷には、神代の年數、萬をもてかぞへられたり、年數の事はいかにもあれ、漢土にきそひて何かせん、ことに漢土はさばかり帝統長からざるものを、はやくひらけしとてなにかはうらやむべき、さる事を論らふは、いとも〳〵をさなき事なり、　神武帝の御祖は、いかばかり遠く久しくおはしましけん、それはしりがたきにて事たりぬべきをや、とにかくに此　帝、この御國を一統し給ひて天子となり給ひし事疑なく、それまではこの一國中、かの八十梟師がたぐひのごとく、おのがちから〳〵に地を領じて所々にすみ、いづれを此國の主ともなくてありしなるべし、されば　神武帝の御祖も、この　帝の御世までは、たゞ一方の魁首にぞおはしましけんとおぼしき也、この故に此上卷のうちに說たまへる天神は、悉　神武帝の大御身のうちなる御神氣に御名づけましゝものにて、地祗(祇)はみな天下衆人の神氣なる事うたがひなき事也、この神々、　神武帝の大御身のうちにかくおはしましゝからは、今の世のあやしき我等が身のうちにとてもいかでかなからん、この神々あらんうへは何事か思ふにかなはざらん、貴賤にわたして敎とすべきは此所謂也、かばかり大なるわが御國を一統し給ひしすら、たゞ此七神三段の初中段より出たる事なれば、まして小事はいとたのもしき事ならずや、もと人をもていはず、神をもて敎たまひしは、ひとへに萬言萬行の親となる所をとり給へるなれば、天地神人古今華夷貴賤

大小もるゝ所なき大議論なるを、たゞ一冊子にとき給ひし事、言霊にあらずはいかでかこれをうべき、されば此ふみをみむやう、前後の照應、物名の一律なる所をたよりとして、活かしおかれたる義をおし知り、簡易にしてそのわたる所廣大なる事を味はふべし、しかるを神の御世の事どもは、人のたばかりもてはかるべからずと、宣長かへす〳〵いへり、しかれども、もと神といふは何物ぞや、人といふは何物ぞや、人身のうちなるがやがて神なるをや、たゞ外にていへば人なり、内にていへば神なるばかりなるを、さもはるかにいはれしは、もとより神といふ物をば明らかにせられざりければなるべし、これは此翁にかぎらず、世々の神學者流もひとしき事なり、それ必、神祇(祇)とだにいへば、天地の神祇(祇)の事也と心えられたるなるべし、されどその天神地祇(祇)と、人身中の天神地祇(祇)、こと物のごとくおもはれしは、いとをさなき事なり、よに神代人皇ととなふるは古今集の序がはじめにて、拙きいひざまながら、上卷はおのづから神代なり、中卷よりはおのづから人皇也、古來ならびに宣長が說のごとく、神人さばかり遙なる物ならば、神倭伊波禮毘古命（神武の御名也）上卷の末に御名ありて、中卷のはじめやがてこの　命の御世なり、かく神の世と人の世とに跨りたまふべしやは、此　命の御祖母は、海神の御女豊玉毘賣にて、その本つ身は八尋和迩なり、祖母と孫とは、多くは世を同じうする物なるを、その御祖母は鰐にて、御孫はなほ〳〵しき人にておはしまさむやは、其

皇御祖たちは、くしびにおはしけるによりて神と称したる也とならば　神武帝を始め奉り、つぎ〳〵の御代〳〵は、いふかひなくおはしける故に神とは称し奉らずとにや、なほ　神武帝は、御壽百十一歳にまし〳〵けるに、その御祖父の日子穂々手見命は高千穂宮にましませる事五百八十歳とあるなど、言靈にあらずしては、いとも〳〵心えがたき事どもならずや、すべて上卷のうちあやしむべき所々は、神の御世〳〵の中に、陵をしるされしは、たゞ伊邪那美命と日子穂穂手見命二はしらばかり也、又國土をうみ給ひししか〳〵の事、また迦具土神の御頸を斬たまひし十拳劔を、青柴垣之件には、坐天安河河上之天石屋名伊都之尾羽張神是可遣（これ即その十拳劔の名なり、はじめにみえたり）若亦非此神者其神之子建御雷之男神此應遣云々　はじめはたゞ劔なるに、後にはかく活たるものゝごとく御子もあり、かつその御言までをあげられたる、又伊邪那岐命伊邪那美命、はじめは夫婦して御子うみ給ひ、後に禊祓之件よりは伊邪那岐命一はしらにて御子うみ給へり、男一人して子うまむ事やはある、又日神と速須佐之男命御はらからにまし〳〵、宇氣比之件に御子うみかはし給ひししか〳〵、又速須佐之男命の御妻なる櫛名田比賣は、大山津見神の御孫なれば、速須佐之男命の御ためには、御甥の御女なるに、これを娶り給ひし御よはひのほど心えがたく、猶速須佐之男命の御子八島士奴美神も、大山津見神の御女木花知流比賣を娶りたまひしは、かへりて從弟夫婦なり、そ

の御母なる櫛名田比賣のためには、木花知流比賣は伯母なれば、親の妻は姪、子の妻は伯母なり、また八島士奴美神の御子布波能母遲久奴須奴神、（衍）の御妻は、淤迦美神の御女日河比賣なり、この淤迦美神は、伊邪那岐命の御子なれば大伯母なる事、いよ〳〵あやしむべし、又莵和迩鼠魚鳥などがものいひし事、また大國主神の御妻須世理比賣は、速須佐之男命の御むすめなれば、五代以前の御女なり、猶また娶り給ひし多紀理毘賣命は、日神のうみ給ひてその物實、速須佐之男命なれば、須世理比賣におなし御父也、また大國主神の四世にあたり給ふ甕主日子神、淤迦美神の御女比那良志毘賣を娶りたまひしは、いよ〳〵あやしく、また八世なる天日腹大科度美神は、天狹霧神の御むすめ遠津待根神を娶りたまひしとある、この天狹霧神は、伊邪那岐神の御子なれば、十三代以前の神の御子なり、また大年神の御子羽山戸神、大氣津比賣神を娶りたまへるも、大氣津比賣神は、伊邪那岐命の御子なり、羽山戸神は、速須佐之男命の御孫なるをや、これらにかぎらず、かゝるあやしむべき事ども猶あげてかぞへがたし、これみな人のうへの理もてあてはかるべからずと、宣長はかへす〴〵いはれたれども、上卷と中卷の間はたゞ　神武一御世のうちなるに、人のうへの理にかばかり違へる事あらんやうなし、この故に此上卷はうたがひなく　神武帝の大御身のうちなる御神だちと、天下衆人の身中なる神との、やごとなき道をとき給ひしにて、此御神さびより此大御國をこ

とむけやはしたまひし事、この　帝の御卷、おほくの魁首どもの歸したるかたちの、さばかり手いたきたゝかひともみえざるに（神武紀云吾必不レ假二鋒刃之威一坐平二天下一矣）明らかなる事なり、かの神の世人の世といふ事、世みな上卷を神の世、中卷以下を人の世といひつけたるばかりにて、いかでしか神の世人の世とはわかるゝぞと、あやしみたづぬる心もなかりしまゝに、世々の神學者流も、たゞおほらかに見すぐされたるなるべし、もと我大御國、いとかみつ世は、文字などもなかりしかば、此御教をよにたれんために、國々に社を設けて、天神地祇(祇)をまつられ、その義を、物にやどしわざになしてさとさせたまひしなるべし、これ何をもていふぞといふに、今神社を祭るかたち、この石屋戸之件のたぐひたるべくみえ、且この神典、人の一身を八所とし、この大御國を八島としたまひしは、日本一國を、人の一身に配したるものなれば、其國々に社をたて給ひし主意は、人身のうちにもとより此神々ありながら所を得ざるが故に、その所を定めていつけとの御をしへにて、全くこれ書籍のかはりなるべき也、今のよになりて、かくからぶみの文字をかり、自在に事を記する世よりみれば、いとも〱不便なる事のやうなれど、義を文字に寓するも社に寓するも、たゞおなしわざなるをや、卽　神武の御卷に、天神地祇(祇)をはじめて祭りたまひし事のみゆるは、この神典御著述のこゝろにみるべし、社にかぎらず、三くさの神寶をはじめ、義を物に寓したる事、神典中に多きは、ひとへに文字のかはりなれば、社も

この轍にみるべき事なり、されば此上卷は、前にいひしがごとくおこれる所は　神武帝の大御身のうちの神々をば、人事のうへにて悟らせたまひしにて、よに敎をたれ給ひしもこの　帝なりとおぼしき也、このゆゑにその比は、社に神を寓し置て、心うべきやうを、わざにても口にてもさとされしなるべし、もと此神典、稗田阿禮が誦したりしまゝを記せられしとあるをみれば、いまだ文字なかりし世より、わざにか口にか、此神典一部の始末とゝのほりてありしが、もと文字なかりし世のならひを傳へて、御世〳〵誦しつたへさせ給ひしにこそ、されど、草薙劒といふ名などは、倭建命の御ときよりの名なれば、かうやうのたぐひは、後の御世〳〵にも補はれて、今の本とはなりけるなるべし、中卷以下は後にいたりて出來たるにや、たとひ同時に出來たるにもあれ、此上卷をおやとして書たる物なるべきは、上卷の言をかられたる所もみゆるなり、さるは中卷以下は、實錄と言靈とを相まじへて書たるものにて、上卷とはしかけぢめある也、よしいづれの御世にいで來たるにもあれ、たゞ此御敎のやむごとなき所をあふぎおもふべきなり、しかるにこの上卷と中卷とのけぢめを委しくもたづねず、おほらかに史とみしより、諸家のごとき說も、やむことをえずいはれしものなり、その弊ひとへに、靈より出たる言といふ事をわきまへざりしが故なれば、此下にいふ所の言靈の辨をば、いかにも〳〵委しく弁へて、古來神學者流のあやまりをしるべし、うべなる哉神を

主として說たまへる事、おほよそ人事多端なりといへども、たゞ其おやは神なるをや、しかるを、神人をひとつに見、またははるかにもみける私より、つひに此御敎の旨をおほひはてしなり、かへす〳〵この上卷ひと卷の史にあらざる事は、今わがとく所の言靈をば、まのあたり、彼我の實事にこゝろみて、さとりしるべきなり

言靈辨

稚かりし時より、父が志にしたがひて歌よみならひしに、成元十二歲なりし時父をうしなひつれば、たゞ父がつくりのこせりし脚結抄をば師として、歌をのみよみわたりしに、ふと思へらく、此詠哥、たゞもてあそびぐさならば、なにわざにもあれ我も人も益あらむわざをせん、もし益あるべきわざならば、いよ〳〵志を固くせんとおもひて、さま〳〵に心を用ひ來つるに、又おもへらく、かみつ世には、後世のごとく哥よむに師といふ物もなかりし事なれば、後世いふやうに、くだ〳〵しき事どもはあらざりけるなるべしと思ひよりて、ひたすら國史中の歌、萬葉集等ふるき世の哥、ならびに文どもを見しに、萬葉集第十三柿本人麻呂が長哥にへ葦原水穗國者神在隨事擧不爲國雖然辞擧叙吾爲言幸眞福座跡恙無福座者荒礒浪有毛見登百重波千重浪敷尔言上爲吾こ

の反歌にへ志貴島倭國者事靈之所佐國叙眞福乞曾このまへにもへ蜻島倭之國者神柄跡言擧不爲國雖然吾者事上爲云々といふ哥もあり、又同集第五山上憶良が長哥にへ神代欲理云傳介良久虚見津倭國者皇神能伊都久志吉國言靈能佐吉播布國等加多利繼伊比都賀比計理今世能人母許等期等目前尓見在知在上下畧また同集第十一にへ事靈八十衢夕占問占正謂妹相依また續日本紀長歌にへ事玉之當國度曾上下畧これらの歌にふかく目とまりぬ、おほよそ言といふ物は神をころすものにて、たとへばわが力つよきを人に示さむとするに、やがて、我力つよきにあらずやといひたらんに、(衍)は、そのひと、心に、つよしと我を思ひをりしも消ぬべし、されば、人の心から強しとおもはむこそ示したるにはまさるべければ、神在隨事擧不爲國とも、(事はすべて言の假名なり)神柄跡言擧不爲國ともよまれたる也、(此神典の神さびをだにすれば、言にまさる妙用ある事、即七神三段にくはしくとき、下にも所々いふをあはせて心うべし)しかるを、わが力つよきにあらずやといはん時、その人、げに強しと答へなばすなはちやみぬとみな人思ふべけれど、しか答へたりとて、更にその中心よりこたふるにあらんや、その中心かならず、われいかでか彼に劣らむとぞ思ふべき、もし其答をば、まことにしかおもふ歟いつわり歟と問はむに、誰かはまことならずといはむ、しかれば人の中心は、問をも用ふべからざるもの也、この故に、とても直言をもては、その中心に徹すべからざるがゆゑに、わが大御國、神氣の妙用をむ

ねとはするなり、（倒語する時は、神あり、これ言靈なり）神さびは、もと言の用にもいたくまさる妙用ありて、必かれが中心に徹すべく、中心にだに入らば、言は無益のものならずや、されば萬事たゞ神道に乘りてのみあるべき事なれども、事がらによりては、神にまかせてもゐがたき時もあるものなり、（言擧せぬとは、言をつゝしむにはあらず、言の用にまさる神の妙用をしるが故に、言の用はかへりてあは〳〵しくなりて用ひぬなり、老子のいはゆる多言不如少言少言不如不言などいふに混じ思ふべからず）これまた人のやむことを得ざる事にて、七神三段のはじめ、發天地の下にくはしくいへるが如く、人の心身すなはち理欲の主にて、人として理欲を具せざるなければ、神にまかせて居がたき事、時として出來るも、さらに〳〵私なることにはあらざる也、されば、直言を倒語にかふる也、倒語に諷と歌とあり、諷猶道絶たる時のために、わが大御國、詠歌の道はある事なり、此故に倒語は、いふといはざるとの間のものにて、所思をいへるかとみれば思はぬ事をいへり、その事のうへかと見ればさにあらざる、是倒語の肝要なり、されば大かた直言と諷と歌との三つを考ふるに、直と諷とは相反せる物也、歌は諷の一段とほきものなる也、此故に倒語はもと直を靈として言をつくるなれば、その言より、かれ、わが所思をおもひこみて知る、これをば言靈のたすけさきはふとはよまれたるにて、其言の外にいかし置たる所の、わが所思をば言靈とはいふなり、此言靈となる物は、更に〳〵邪正にかゝはらざる事にて、たとひ道理ある事にても、かれがゆるす事ならねば、そのしるしもなく、固くもあらざる物なるが

故に、すべて倒語を貴ぶなり、文も亦これに同じ、されば所思を直としおきて倒語だにせば、それ即神の言なるべきなり、言語の諷にしてたりぬべくは哥の道は別にはあるまじけれど、もしそれあはひ遠くて、諷とゞくまじくは、さる時をば、哥の時也としるべし、かの哥どもに、さきはふ國、たすくる國、まさき國、また言擧せぬ國など、國にしもかけてよまれしは、すなはちわが大御國の御てぶりなる事を示してなり、　崇神の御卷に、大毘古命を高志國につかはされし時、少女ありて、山代の弊羅坂にたちて歌をうたひし事ある所に云へ大毘古命思恠返馬問其少女曰汝所謂之言何言少女答曰吾勿言唯爲歌詠耳即不見所如而忽失云々また萬葉集第五卷云へ天平二年七月十日憶良誠惶頓首謹啓憶良聞方岳諸侯都督刺吏並依典法巡行部下察其風俗意内多端口外難出謹以三首之鄙歌欲寫五臟之欝結其歌曰云々とて三首の哥あり、其哥ども、さる故ありて、よまれたる哥とは見えぬ哥どもなり、そこを見て、かならず靈なくてかなはざる事をしるべし　即今わがいふ所のごとく直言をも諷をも用ふべからず、しかりとていはではえあるまじき時ぞ、詠歌は必用たるべき事、これらにてさとるべし、この　崇神の御卷なる勿言唯爲歌詠耳といへる事、直言と諷語と、詠哥とのけぢめあきらかなる證ぞかし（、）後世直と諷と哥との差別を弁ふる人なく、賀哀傷離別戀旅など、すべて人事につけてよむ哥は、たゞ言語に直言するとひとしく心得てよみ、花鳥風月のたぐひは、たゞその物を詠ずるばかりのことゝなりにたり、

しか直言するとひとしくてありなば、こと更に詠哥の道はあらんやは、詠哥と直言との別、よく〱弁ふべき事なり、言靈の道いつの比まではうしなはれずしてありきともしらねど　垂仁の御巻に〽物言如思とあるは即直言の事にて、言に靈なきをいふなり、これ　景行帝のわかくまし〱し時、〽八拳鬚至于心前眞言登波受とある所にみえたる詞にて、眞言とは即靈ある言の事にて、今わがいふ倒語の事なり、（萬葉集中にも、眞言といふ事所々にみえたり）これ言の直倒につくに、倒語を貴びし事、此御世などは專なりしことしるき證といふべし、それより後なれど、前に引たる憶良が長哥に今世能人母許等期等目前尓見在知在とあれば、その比はいまだ、世人みな言靈の道をよくしり、かつ言靈のさきはふしるしも見しりたりし事明らかなり、この　垂仁の御巻、憶良が長哥等にてみれば、それより後、世人しりたるもすくなくなりゆきしなるべし、言靈の道いまだ湮没せざりし世とても、あやまりて直言になりたるも、たま〱はみゆれど、哥も文も、かみつ世はたゞ此道をむねとせざるはなし、しりてのうへのあやまちは、昔の人とてもいかでかなからん、大かたたとひおもふまゝをよみたる哥のごときも、それは所思の正面にはあらずして、みな別に所欲ありての哥なる事かみつ世のてぶり也、後世とても、直と諷と哥のけぢめをよくわきまへられしとみゆるも、又おのづから此道にかなへりとみゆるもあれば、一概に後世いふかひなしとはいふべからず、されどからまねびさかりに

なりて後は、をさ〱此道かくれにけりとおぼしき也、なにのかゝはりもなき花鳥風月を詠じ、また正思にあらさるすぢをいふは、みなしひごとゝせじとするが故なり、この故に古歌には、その實物實事にしてみれば、ことわりたがへる事ども多し、これ靈を主とし、言を客として、物のうへ事のうへをよむにあらざるが故にて、さる所には貪着せぬ事、いにしへ人の言のつねなれば也、その心を思ふに、前にいふがごとく、いひてもとてもかれがゆるさぬ事なれば、あらぬ月花をよみて、たとひその言靈たすけさきはゝずとも、もと〱の事也と決定してよみたるものぞかし、かく決定する事、ひとへに外よりも内をむねと思ふが故なれば、たとひ人はえ聞とらずとも、神の道は直びたるに疑なき事をたのしむがゆゑなり、實物實事にたがひたる事をよめるは、萬葉集第十へ朝果朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮この哥、前後芽子花の哥なれば、萩の誤ならんといふ説あり、それは朝果の夕かげにさきまさるといふ事のなきものなるが故なり、されどかくさだかに朝果とかゝれしからはさにあらじ、此哥ならでもかく錯乱したる例は、同集第八山部赤人がへ戀之家婆形見尓將爲跡吾屋戸尓殖之藤浪今開尓家利といふ哥、前後霍公鳥の哥の間にあるがごとく、集中猶多し、物と實とたがへるよりさるうたがひはかゝるなれど、言靈の道ある事をもかゝる哥よりこそたづねしらるべきに、さはなくて、おのが心えぬまゝに、芽子花ならんなどいふは後世ごゝろなり、よく思ひしるべしかく朝がほをば夕かげに咲まさるなどさへよめり、これは、女の朝顔もなつかしけれど、夕かげにみる顔は、ひときはいみじくおぼゆる心をいひて、ゆふぐれをいそぐ後朝のわびしさを靈としたる哥なるべし、この言靈をむねとしてよむがゆゑに、かく朝がほの實にたがへるをも貪着せざる也、又同集第五にへ鳥梅能波奈伊米尓加多良久美

也備多流波奈等阿例母布左氣尓于可倍許曾といふ哥も、梅花が夢中に來てものいふべきかは、これ、梅咲たればみに來たまへ、もろともに酒をものまむと、人を招く心を言靈としたるなり、（此哥、あはせて四首ある梅の哥のをはりにありて、その前の哥へ美牟必登母我聞といふ結句二首あるにても、この言靈はしるし）かゝるたぐひ、ふるき哥にはかぞへもあへず多き事なり、くはしくは予別に大量と名づけて、言靈のことあげつらへるものにいへり、以上の歌ども、いづれも實事にかつてあるまじき事なるをや、後世にてはさる理ともしらず、よみ人のたくみにてかまへ出たることの如く心え、かの朝果のごときは、誤とさへ思ふ事、いといみじき事ともなりにたるかな、これらにかぎらず、すべてふるき哥どもには、脚結の置ざまにも（これは天尓波の事也）いとあやしむべき事どもあり、そのあやしみを導とすれば、言靈にはおもひ入らるゝぞかし、詞のうへのあやしくなるは、わざとあやしくするにはあらねど、かのいふといはぬとの間よりいつる詞なるが故に、おのづからあやしくはなる也、さればすべて古歌古文をみむには、詞とせられたるかぎりは、そのぬしの所思の正面にはあらずと決斷して、さてみるべきなり、たとひ一言一句たりとも、あやまちは格別かみつよの人は、おのが所思を正面にいふ事は、かつてすまじき事に思ひしとみえたり、此故に此神典、まつ天地初發之時といふよりして、天地を正面にいふにはあらざる事あきらかなり、天地の事をいはむとには、必天地を詞とはせられざるべきなり、古今集の序にへちからをもいれず

してあめつちをうごかしめにみえぬおに神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をもやわらげたけきものゝふの心をもなぐさむるは哥なり云々この感動をば、後世は哥の上手なるよりの事と心えたり、上手ならでは感動せずとならば、かみつ世には人麻呂赤人、中昔には、伊勢貫之より外に感動あるべからずとにや、しか力つよきもののみ必勝つに定まれらば、わが御國をば、ひろく言靈のさきはふ國たすくる國などいはれたる詮もなく、大かた歌の道のたのもしさもうする事ならずや(一)たとひ今日よみはじめたる人とても、言靈だにしつまれらば、いかでか神に感通せざらん、かの貫之が、馬のあしたちしへありとほしをばの哥、能因が、雨ふらせしへなはしろ水にの哥などを思ふに、貫之も能因も、さばかりの堪能なりければ、秀哥どもはいと多かるに、その中にて、この哥どもは、ことにすぐれたりといふべき哥にもあらず、しかるにさる感動ありし、さらに歌の巧拙によりてにはあらざる事明らか也、その馬のあしたち雨ふりしは、ひとへに言靈のたすけさきはひたるなるをや、わが御國ぶり、よゝに次第にうしなはれゆきけるに、貫之頗から心にて、詩經をやうらやまれけん、古今集をえらはれしに、はしめて四季戀雑等の部立をせられたり、これいはゆる花鳥の使とし活計の媒となれるをなげきてのわざにして古今集の假名序は、世にうたがひをのこせる人も多し、げに眞名序をば、後の人、假名にうつしたるものなるべし、されば眞名序の論は、紀淑望が見識なるべけれど、貫之の姪にてもあれば、もし貫之の見にたがへる論ならば、さてみすぐされんやはとて、今かくはいふ也哥をばまめ〳〵しきものにせんとせられし事、か

へりて後世哥の道をうしなひける始とはなりにけり、まへにいひしがごとく、諷語もなほ用ひらるまじき時のためこそ歌の道はあれ、相聞のうへは、哥の專用なるぞかし、しかるに戀の哥どもいにしへあらはなるを、心もしらぬから心なる輩、これをあはむるに、國學する人もそれに聞おどろきて、戀の哥はよむまじきもの也などいふひがことさへ聞ゆめり、わが大御國は、かゝることゞも他域にことなる所ある事、みな神道をむねとするよりの事なり（神道とは、すべて言にいださずして人中心におもふ所をさしていふ名也と知るべし、猶下にいふべし）すべていにしへ、男女の間の事おほやけなりしやうにみえたれば、なま心ある人これをそしり、又はかたはらいたき事に思ふめれど、神典の大意、美事はむさき所より生ずる事をさとりての御敎なるが故に、男女の間の事を幽に路せしむるは、公事が大切さにの事なり、これ凡情のをよびがたき所なれば、これをうれふる人よに多きぞかし、そこのことわりは、伊勢物語燈にくはしくときおけるをみてさとるべし、とにかくに、後世、哥を詠物になし、もてあそびものとしはじめられし共親は、古今集の部立なる也、（萬葉集などは、部立といふ物にはあらず、家持のしるされし時に、その類をよせおかれしものにて、それにはことなる事也）これひとへに言靈をうしなひかためられしわざ也といふべし、萬葉集第十等に、詠花詠鳥など題せられし、その家持のこゝろはしらねども、その歌どもをみるに、さらに詠物にはあらず、いづれも言靈ある哥どもにて、その花鳥などは倒語のためなる也、さればすべて言靈となる所の所思は先なり、題は後なり、しかる

を題を先にし情を後にするだにあるを、その題を詠ずることゝなれるは歎くべき事なり、此故に予は、つねに人に無題の哥をのみよますするなり、これらの理をよく〳〵わきまへて、今わがとく所の神典の言靈を信ずべし、代匠記今井似閑が聞書に云 〈言靈とは、言にたましひのあるといふがごとし、いはへばよろこび來り、のろへばうれへいたるか如し、 神武帝東征の時、いはひて物ごとに名をつけて勝利をえたまひ、 武烈の御時、平群眞人死せる時、のろひてまさしくうれへをなすがごとしといへり、世人多くは此説を信じたり、しかるにかの阿闍梨、その學、和漢梵にひろかりしが故に、かへりてわが大御國の御てぶりは、くはしく心をもいれられざりけるにや、この説今すこし心ゆかぬ也、いかにといふに、いはへば歡來りのろへばうれへ來るといふ事、直倒をたてたる説にあらざれば、いかでかそれを靈とはいふべき、おほよそよき事にはさちあり、わろき事には禍ある事つねなれども、それはいふも更なる理なり、もとさちあるまじき事にさちありてこそ、さきはふともいふべきものをや、たすくといふもこれに同じ、さればたすくる國さきはふ國といふは、たすけらるまじき事をたすけられ、さきはゝるまじき事をさきはゝるゝ國といふ心なる事おもふべし、いはひて歡來りのろひてうれへ來るをば、いかゞはたすくさきはふなどいふべき、私情ながらも猶達するは、ひとへに彼がゆるせば也、さればかれがゆるす所をいたりとして、善解除（ヨシハラヒ）悪解除（アシハラヒ）とて、

われより是非をたてざる事、わが御教なるに、いはへばよろこび來り、のろへばうれへ來るといふは、猶渾沌家を出ざる論なるぞかし 渾沌家とは、事ひとつを善惡とわくる見解なるをいふなり、わが御をしへは、人のゆるすとゆるさぬとを善惡とたてゝ、事一ツのうへには善惡をたてぬなり もと哥はさしつけぬものなるを、なほ歌のうへにさへいはずして、所思にあらぬ筋を詞とする事なれば、言語の倒語よりは、今一段の倒語となるがゆゑに、おもほえず感通もするなり、もとよりいふまじきをしりてのうへの詠哥ならんからには、いはひのろふがごとく、かれが神のまがらんをもかへりみず、神のまがり直ぶといふ事は禊祓之件にくはしくいへり しひて所欲を達せんとするたぐひにはあらざる事なり、されどもこの言靈の道世にうしなはれて久しきことなれば、これひとり此阿闍梨がとがにはあらねど、すべて有力のひとの說とだにいへば、名にまどひて取捨をもせざる事、凡庸の人のならひなるが故に、今そのまどひをおどろかしおくなり、後世哥のうへの巧拙をあらそふは、こと〳〵く歌合の遺弊にて、さらに〳〵此道のほいにはあらず、今のよと成て（衍）は、たゞ歌のうへをのみいひて、內の論はなくなりにたり、たとひ哥はあしくとも、內に靈あらんを、いかでかあしとはいはむ、よくて靈なきと、あしくて靈あるとはいづれ、たとへば社の莊嚴いみじくして、しづまり給ふ神なきは、たれかはいつきまつるべき、よく〳〵よろづにかへりみるべき事なり、これらの事は、かの大量にくはしくいへれど、わが御國言は、かの阿闍梨が說のごとく、情と詞とひと筋につく事なきよしをさとさむが

ために、其要をいふなり、この故に此神典をみむやう、すべてこの御教主の、をしへまはしくおぼしける正面は、詞にはかつて出たらずと決定してみるべし、人のための教をさへ、なほ言靈とし給ふわが御國ぶりのたふとさ、かへすがへすおもふべきなり（一）予かく神典の教旨を言靈もてとく事、その據とするは、神武紀云、初天皇草創天基之日也大伴氏之遠祖道臣命帥大來目部奉承密策能以諷歌倒語掃蕩妖氣倒語之用始起乎茲とあるこれ也、此密策とは、あたどもをやわしむくべき初中段をさす也、すべて幽中の機關たるが故に、密策とはいふなり、同紀中密旨とも見えたり、諷とは、言語の倒語なるを云、即言靈ある言をいふ也、哥とは詠哥の直ならぬを云、即言靈ある詠哥をいふ也、妖氣とは、かのあたどもの中心に　帝にわざはひせし神氣をさす也、この掃蕩妖氣とある事、即不假鋒刄之威坐平天下と同紀にある所以なるなり、上の非史辨にいひしがごとく、此御教は　神武帝の御發明にして、これをもて此六御國を御一統ましましける事信ずべし、倒語おこりてこの教旨おこらずといふ事あるまじければ、倒語はじめて起れりとあるは、即七神三段神世七代のおこれる證なるをや、すべて予がとく所この語を以て疑をひらくべし　倒語とは、わが所思の反を言とするにて詠哥も言語もともに倒語たるべきが故に、諷哥としもまづふたつにいひながら、倒語之用始起乎茲と更におしこめて書たまへるもの也、大かた直言すれば、人の中心にひそめる妖氣、滕佐備之件に萬妖悉發とあるこれなり　忽來りて我にわざはひするを、倒語すれば、その妖氣を掃蕩する事、たとへば、不遜にすれば かれ我を尊ばず、諱（闕畫）にすれば、かれわれを卑まざるが如し、誰とても、たふとばれんをこのまざるものなけれど、多くは直をもてむかふが故に、妖氣にのみいやしまるゝ也、もし倒をもてだにむかはゞ、かれが神氣、わが罟擭におつべき事かくの如き物なるをや、されば、哥も文も言語も倒語より外に、わが中心を

人の中心にはこぶ道はあるまじき事、思ふべし〳〵

古事記燈意富牟泥上終

古事記燈

意富牟泥下

平安　藤原成元述

神人辨

よゝの神學者流、いづれも神と人とをくはしく弁ぜさりしが故に、この神典の教旨、今までふたゝび世にあらはれざりける也、大かたわが大御國、人をもてをしへ給はず、神をもてをしへ給ふ事なれば、この神人のけぢめをわきまふる事は肝要の事なり、まづ人といふは、神を身内にやどしたるものゝ名也、神といふは、人の身内にやどりたるものを云也、されば神を主とするも、もと人をば要としての教なりとしるべし、此人身中の神なに物ぞといふに、人かならず理欲の二つありて、その欲をつかさどるをば神といひ、理をつかさどるをば、人といふ、（理欲は天地を親として、人の心身、この理欲の二性をうけ繼たる事、發天地の下にくはし）此理欲、天地にあやかりて、理はおのづから尊く、欲はおのづからいやしきが故に、人としては

理をたふとび、欲をいやしむべきことなり、されば人みな、いかにもして諸欲を制し、理を全うせむことをのみ急とす（これをば渾沌とはいふなり）しかれどもそが中に、よく勉め得る人はまれにして、欲のために理を侵すがいと多し、さればそのつとめえぬを愚と称し、かしこくつとむるを賢と称す、げに、たかくもいやしくも、ひろくもせばくも、世にまじらひとましらふ人はこれまぬかれがたき事也、これをば人道とはいふなり、しかるにその勉彊する人もつねにうれふるは此神にて、或は言行の肘をひかれ、あるひは自屓の心をおこされなど（これは身外を主とすると、身内を主とするとの、二種の勉彊なり、くはしくは渾沌の下にいへり）いともてあつかはれたるもの也、これにもてあつかふが故に、諸家の教はある事なれど、つよくいざなへば、しばしはそれにしたがひたるが如くにみえても、そのをはり、猶その性をあらためざる物なれば、人力してこれを制せむ事もとよりあたはざる所なり、これもと地の重濁なる性をうけえたるにて、さらに〳〵人の私にはあらざる也、しからばまことにせんすべなき物かといふに、其道をだにつくさすれば、やがて必妙事をうむ母となる物なるがゆゑに、わが御教、此神の道を盡さしむることを専とはし給へる也、されば、たゞこの神の道に乗りてのみゆくべきに、外様の人事に是非をたてゝ、この内なる神道を凌がむとするは、末より本を制するなれば、いかでか其しるしあらん、もと神道といふは、道理をはなれておもふ所のやむことをえざる道をさしていふ名にて、この名はじめてみえたるは、

日本紀難波長柄宮の御巻に「惟神者謂隨神道亦自有神道也と注せられしこれなり、これ舍人皇子の注したまへるがごとくなれど、古傳ありてや注し給ひけん、この皇子の見とはおぼえぬ詞なり、しかるに宣長、直毘靈といふものを書て、「神道に隨ふとは、天下をさめ給ふ御しわざは、たゞ神世よりのありこしまに〳〵ものし給ひて、いさゝかもさかしらをくはへたまふ事なきをいふ、さてしか神よのまに〳〵おほらかにしろしめせば、おのづから神の道はたらひて、他にもとむべきことなきを、自有神道とはいふ也けりと自注せられたり、この神代よりのありこしまに〳〵物し給ひて云々といふは、皇祖神だちのなし來り給ひし所にしたがひ給ふといふ心なるべく、しからば、神の御しわざ、凡人のはかり知るまじき所あれば、さるよしありてこそをさめさせ給ふらめ、それは庶人のしりて無用の事なれば、たゞ何ごとも　おほやけの御おもむけのまに〳〵あらんぞ人の道なるべきとおもはれたりとみえたり、しかるに庶人といへども、各その身相應の家業あり家人ありて、さま〳〵常にたがひたる事のみ出くるもの也、されどたゞひとしへにさる心にならせてんとの心なるべけれど、たとへば風ふき雨ふり地震雷鳴などするがごとく、かのぬしの思はるゝやうに、つねに無事なる事はあたはざる物にて、かつて人々の邪智より常ならぬことのいでくるにはあらず、さる時をいかにせんとかする、猶かの黄泉之件なる「於葦原中國所有宇都志伎青人草之落苦瀬而患惚

時可助とあるにもかなはず、さきにもいひしがごとく、これは貴賤にかぎらず、この神さびをもて、かのつねならぬ事ある時の所置とせよとの御うつくしみ詞なれば、この翁の說うけがたし、奪ひていはゞ、此神典の言の表のあやしさに、神の御うへ、　おほやけの御うへの事としてのがれられたるがごとし、又これを與へていはゞ、此神典の言靈、もとあらはにいふまじき事なるが故に、しかおほやうにときおかれしともいふべし、されども此御敎主こそあれ、この言靈を見しらむは、卽言靈のさきはふなれば、とかぬをよしともいひがたし、かみつ世には、世人も各よくしれりし事なればこと更にとくにも及ふまじけれど、今と成て、かくよにうづもれ、かつ外樣にのみかゝづらふことゝなりぬるを、いかでかこれをとかざるべき、このぬしの說、いとおほほしきことならずや、これひとへに神といふものをくはしくせられずして、たゞ　皇御祖たちを尊びて、神と称したる物なりとのみ思はれけんがゆゑなりとおぼしきなり、これによりて思ふに、古來の神學者は、神といふものを、人とひとつになし、ひとつになすかとみれば、又その妙用は人のをよばざる所とす、かくひとつになしながらまたはるかになすは、ひとへに神人の別くらき所以なり、たゞ道理をはなれたる所の人のわざ、すなはち神にてはあるぞかし、さればこの惟神者謂隨神道亦自有神道也といふ事、かの翁のいふ所の心にはあらざる事にて、まづこの惟神といふは、外にてみれば、人と神とはこと

ものゝごとくなれど、もと天地の神祇（祇）と人の神氣、妙用ひとしきをいふなり、さればたとひ人は、貴くともいやしくとも、身内には天地の神と同物なる神あれば、いかなる妙用もあたはざる物にはあらざる事をしるべし、すべて正面に口舌手足を用ふるは、その力かぎりあり、これを人といふなり、倒語して、しかも其正面の所思、口舌手足の用にまさるいさをのおのづからなる、これを神とはいふにて神典一部もはらそこをときたまひしもの也、さるによりて、これを注して謂隨神道亦自有神道也とはかき給ひしものにて、さるおほゝしきことにはあらざるなり、もとこの神道といふは、前にもいひしがごとく、理を離れてやむことをえざる道をさしていふ名にて、理の是非する所にはかならずしたがふ所ある所をいふなり、されば此道にしたがはざる時は、たとひ成れる事も固からざる物なるが故に、その道に乘りてゆくべきよしをばむねとをしへ給へるが、この神典なる也、この神典には、神道と熟せる文字はみえねども、幸易之件に〈於是其弟泣患居海邊之時鹽椎神來問曰何虛空津日高之泣患所由答曰中略以教曰我押流其船差暫往將有味御路（一）乃乘其道往者如魚鱗所造之宮室其綿津見神之宮者也とある、この味御路とは、卽神道をさしていふなり、味とは、〔七神三段の中段にいはゆる、宇麻志のこゝろなり、くはしくは中段をとける所にみるべし、なにごとも正面なれば無味なり、その反を宇麻志といふなりと心うべし〕この乘其道とあるにしるく、神道とは敎の名にあらず、人道に反對したる神の道をさす也、されば世に此敎をさして神道

と称するは誤なり、後世この神道に乘る教うしなはれて、たゞ神社をまつり、ゆふ襷をかけ、鈴をふり、大祓の詞をとなへ、潔齋をわざとして、これを神道とこゝろ得、甚しくしては、神は社のうちにのみおはします物なりと思へる事、いとも〳〵かたはらいたき事ども也、まへにもいひしがごとく、神社はすべて、人道よりも神道を先とすべき御をしへのためにて、文字のかはりに、形をもてをしへたまへる物なれば、神社をいつくは、人道の後とすべきをわすれさせじかためなり、わが所欲をその神にまをし、われは無爲にしてその所欲を達せんとせよとて、神社は設はじめたまへるにあらず、いのりて神のたすけを得る事もあれど、やがてその神をば我に勸請せんは、祈るよりもなほ近路なるをや、ゆふだすき鈴のたぐひは、これ皆この御教のさとし物にて、その寓せられし義をこそむねとはすべけれ、さるはかなわざをして、わが御國の道なりと心え、儒佛のよにさかりなるをいめりとも、いかでかしるしあらん、いとをさなき事ども也、おほかた人力といへども、つとむればいとしたゝかなる事もせらるゝ物にはあれど、その事たとひなりてもかならず久しからざる事、これ神道を後にするが故なり、神道に乘りてなす時は、たとへば、われ十人のちからあらば、千人が力なる事必成りぬべし一已(己)の力はたとひ天下にをよぶとも、かきりありて萬世のするまでにをよぶべからず、神の道に乘り、神力をかりてゆくちからは、その及ぶ所、無邊なるべき也、され

ば此乗といふ心は、たとへば舟車にものをつみてはこぶ時は、おのが力をいくらあはせてもあたはざる斤量のやすくはこばるゝがごとし、七神三段の中段にへ因テ如二葦牙一萌騰之物ヨ二とある因の字、この乗の字、かの随神道とある随の字、ともに照應なる事おもふべし、いづくとても、よきがあしく、あしきがよきといふ理はなき事なれど、なか〳〵人事のうへにて善悪をえらへば、かへりて事なりがたく、たとひなりても、天地と長久をひとしうせざるは、ひとへに神人先後の差別を弁へざるがゆゑなり、こゝをもてわが御をしへ、善解除（ヨシハラヒ）悪解除（アシハラヒ）はあるにて（此事は、くはしく七神三段にときたり）この善悪の二祓は、すなはち神道に乗らんがための御教なれば、人はおほよそまづ此祓をむねとすべき事なり、我はこの二祓をして、是非はすべて神の是非にしたがふこれ随神道なり、神の是非にしたがふはあやふき事にみな人思ふべけれど、こゝを危からずとする事、凡見に超たる所なる也、その危からぬ故は、天にくらぶれば地は卑しけれど、萬物の生ずるに、地を母とせざるはなければ、すべて尊卑とむかへるもの、其いやしき方が母なる事明らかなるが故に、渾沌して人欲を制しては、妙事をうむ母なくなりぬべきなり、さればいはゆる孝悌忠信のたぐひも、その生ずる母は人欲なる事しるければ、たゞ人欲をだに盡せば、孝悌忠信は、をしへずしておのづからうむべき也、この故に、わが神典、孝悌忠信等のをしへひとつもなくて、たゞその母をなすわざをのみもはらとをしへたまへるなり、

されども我とわが欲を達する時は、人諸せざる物なるが故に、初中段の御をしへ、ひとへに彼が欲をつくさするわざをのみときたまへる也、凡人欲かぎりなきものなるが故に、諸人これをもてあつかへども、そのもてあつかふは、盡すべきやうを深く考へぬがゆゑなり、さしも限なき欲なれども、初段の上に中段をかくれば、たちまち根たえて妙事をうむ事、實事のうへにこゝろみて、此御敎の實事に切なる事をしるべし　或問曰、人欲をきはめしむる事、もしおほやけの御いさめにたがへる慾博奕のたぐひをこのむ者などはいかに、それもなほきは(め脱)しめむ歟、しからばつひに命をもめさるべし、さならずとも、酒色を嗜み、放蕩懶惰なるものも、猶それをきはめしめむ歟、答曰、さる故に善悪の二祓をし、初段のうへに中段をかけて、すべてその神氣をつくさするなり、わざのいたりは神氣なるが故に、神氣をつくさするは、即わざの極をつくさしむるなり、こゝをもて、たとひおほやけのいさめさせ給ふわざをこのむ性なりとも、さらにその害あるべからず、神氣だに極にいたれば、そのわざは極にいたらずして、しかも妙事をうむ事おのづからなるべき也、くはしくは、初中段をときたるをみて、凡情のあやぶみをひらくべきなり　このゆゑに、上の隨神道とある神道は、かれがうへの理を離れたる道をさし、下の亦自有神道とある神道は、わがうへの理をはなれたる道をさし給へるなり、　孝徳紀にも「今者隨在天神(カンナガラ)屬可治平之運」云々とみえ、萬葉集中など「かむながらかみからなど、いと多くよめる、みな此心なる也、一人の力、たとひ聖といはるゝきはなりともかぎりあるべし、乘神道のちから、いかでかそれに類せん、こゝをもて我大御國は、他域の思ふ所にことなる事はあるぞかし、されば　神武帝を、堯舜に比し奉れば凡庸のごとくみえさせ給ふなり、しかれども、かの國ぶりは、もとより神道に乘るてぶりならざるが故に、その一人の事跡、記するにたれり、石屋戸之件に、天宇受賣命を、五伴の

緒のうちにもむねとしたまへる事、わが大御國の御てぶりなれば、神武帝の御神さび、その記すべき所は、あらはにはみえざる事なり、其故は、まへにもいひしがごとく、おほよそかの帝、天下を一統し給ひし、みな密策にして幽事なりけるが故に、御生中ふるまはせたまひし事、悉く初中段の御神さびにして、一事も正面なる事なければ也、されば神武帝以後は史也といへども、これまたから國の本紀などの書法にはたがひたり、綏靖安寧懿徳孝昭の御世〳〵などには、たゞその宮所、または皇子たちなどをしるされたるばかり也、これいよ〳〵たふとくおぼゆる御事也、すべて顯露の妙事は、幽事(カミゴト)よりおのづから生ずる所にて、その御わざとはみえざるが故に、かく記する事なきがごとくなる也としるべし、孝徳紀云へ尊佛法輕神道（斮生國魂社樹之類是也）爲人柔仁好儒云々この輕神道といふ事、いかなる心にてかき給ひつらん、儒佛のをしへひろごりたる世の事なれば、その心えがたき事也、これたゞ後世ぶりに神社をあがめ給はざりしとの心にて書給へる歟、されどももろ〳〵の神社をあがむるは、卽神道をたふとぶがゆゑなれば、生國魂の御社の樹をきりたまひしは、神道をないがしろにおぼして、人道を貴びたまひし事あきらかなる事也、日本紀神武の御卷に宜今當取天香山埴以造天平瓫而祭天社國社之神とみゆるは、儒佛のをしへいまだなかりし御世のことなれば、疑なく神道をあがめたまはむがためなる事しるし、これによりて八十梟帥兄磯城をほろぼしたまひしとあ

る事、ひとへに神道に乘りてしづめ給ひしにて、咸服にはあらざりける事あきらかなりしかるに今の世、神社を尊ぶは、乘神道のためともしらずなり、その身には人道を先としながら、つね〳〵崇敬する事、かへす〳〵齟齬なる事なり、とにかくに天地の神、人の神、ひとつなるに、此神道に乘りて、妙事生ぜざるへしやは、儒佛の教はしからずして、おの〳〵脩身をもはらとすめれど、儒佛といへどもその始を思へばしからじとぞおぼゆる、いかにといふに、堯舜も、その心術は人みる事あたはざるべければ、なほわが神典のこゝろにひとしかりしなるべくおぼゆる事どもあり、おそらくは後に儒のとく所は、堯舜の心術にはたがひたるべし、佛も、釋氏の心術は、後世佛學者流のとく所とはたがへる事なりとおぼゆるなり、されば今の世、かへりて儒佛ともに、その心術は傳はらずといふべきものなり、わが神典、かく乘る事を肝要とする事なれば、もとよりこれらにあらそふべき御教にはあらず、外体はたゞ儒たらば儒たるべし、佛たらば佛たるべし、神道に乘るうへよりは、儒佛の學をこのむ人も、なほ神道のひとつとらるべきなり、おほよそ位の尊卑、職常(掌)の大小にかゝはらず、渾沌をのがれざらむ人は、つひにおのれが志をとぐる事あたはざるべく、たとひ遂たらむも固かるまじき也、發天地のいさを、そのほと〳〵につけて、実事のうへにこゝろみ知るべきなり、いにしへ今をいはず、大かた世に一家の創業したる人々をみるに、その事跡人にあらず、かならず此神典の旨にかなひたり、今の世にも、實事にせ

ちに心を摧く人は、その智おのづからこゝに及ぶものすくなからず、これ卽かの惟神のしるしにて、亦自有神道といふも、これにて明らかなる事也、七神三段に神名をつらねられたる間なる次の字、すなはち天神地祇（祇）のやむことなき道をさとし給へるを、この次序に戾り、天班（斑）駒を逆剝にはぎで（て）、おのが是非をたて、言行をたのみ正面を路とするは、いと危き事なり、神人の別、これらによりてよく／＼あきらむべし、かへす／＼神は外体にあづからぬ物なれば、貴賤大小にかゝはらず、內にして貫きたる事、神典の規摸なるぞかし、しからば人とはこと物かといふに、さらにしからず、たゞ直をなすは人なり、倒をなすは神なる也、予近比、この御敎をつたへたる人々、各こゝろ／＼に神さびせらるゝ中に、獸にさへ貫通せるしるしを多く見聞ぬ、草木鳥獸のたぐひ、また人といへども理非をきゝわかぬきはなどは、正面の言語をもていひきかせたりとて、いかでかわきまへあらん、神の妙用、そのわたる所廣大なる事、信ずべし／＼、されば畢竟顯を據とせば人なり、幽を據とせば神なるにて、さらに／＼あやしむにたらず、男女貴賤とも、この神さびをだになさば、やがて神たるべきをや、人と同物にして、その用は筋たがへるが故に、古來弁じわづらひたる也としるべし

照應字律辨

この神典をみる事、同字の一律なると、照應する所とをみる事、肝要のわざなり、いかにといふに、儒佛のとく所、その經數千卷なれど、なほあかざるを、天地神人古今華夷をつくしたる大議論をば、たゞわづかなる一冊子となるばかりにとき給へるは、ひとへに言靈を主とするがゆゑにて、その言靈の道をたすくる物は、照應と字律とにあらざればあたはざるべき事なれば也、言靈の事は、まへに委しく弁じたるがごとし、そこにあはせてこの照應字律、やむことをえざるをしるべし、もと照應字律はくさびのためにて、其くざひ（さび）をさす所以は、それにまかせて、そこにいはで叶はぬ事もはぶかるゝが故に必用なる也、予この神典をみはじめし比、ふとこの事に心つきしは、七神三段の中段に、〽如葦牙萠騰之物とみえ、神世七代に〽角杙神といふ神名いでたり、この角杙神とあるにつけて思ふに、つぬぐむといふ事は、葦の生出るにかぎりて、餘の草などのうへには、かつていはぬ詞なれば、さては此角杙神は、卽かの中段なる葦牙に照應してみよとのかまへなるべしとおもひよりき、それより照應字律をかしこきたすけとし、一部をおして、つひに、照應字律は、もとこの神典言靈もて說たまひしに必用の事にてはありけりとおもひしりぬ、此照應字律ともに、今一部をつくして示さまほしけれど、はじめより終まで、悉くこのふたつを出ざれば、注にゆづりぬ、されどそが中をつみていはゞ、まづはじめの〽天地をはりまで一律なり、これをはじめとして、中段の〽葦

といふ字、下にみえたるは、水蛭子を入れて流しやりたまひし〽葦船、また〽葦原中國〽葦原色許男命〽葦那陀迦神〽如取若葦搤批など、いづれも中段なる葦に照應してみれば義明らかなり、これらにかぎらず、同字同物こと〳〵くしかり、たとへば〽天浮橋はじめて淤能碁呂島之件に出たるに、下の天忍穂耳命また迩々藝能命の天降ます所にも、天浮橋あり、これその立ましゝ神はかはりたれど、天浮橋はみな一律也、又伊邪那岐命、速須佐之男命、阿遲志貴高日子根神などの〽十拳劔、そのぬしもかはり、それにしたがひては、すぢもことなれど、なほ決斷のさとしなる事は一律なり、その外八の字なども〽八尋殿〽大八島國〽八雷神〽八俣遠呂智〽八稚女〽八頭八尾〽八鹽折酒〽八門〽八佐受岐などのたぐひ（猶この外にも多し）みな照應してこゝろうれば、一律なる事明らか也、數の文字、みな此心得なり、また七神三段なる〽隱身の身の字、やがて先言之件に〽汝身云々〽吾身云々とみえ、改言之件にも、〽身一有面四とみえ、末にも八俣遠呂智之件に、〽身一有二八頭八尾一亦其身生二蘿及檜椙一云々とみえ、本身之件に〽本身とみゆる、いづれも欲といふことを靈としたる事一律なり、又〽大山津見神御女〽淤迦美神御女〽天狹霧神御女などあるは、みなその前にこの神の御名出たる所の義を、そこへかけてみよとのくさびのためなり、かゝるたぐひ、悉くあぐるにいとまあらず、くはしくは、本文に注せるをみて信ずべし、すべての理、みな照應字律の間におのづから活かし置たまひ

しものなれば、これをおろかにしては、神典の旨はしらるべからず、しかるを古來神學者流、言のうへをのみたのまれけるより、此照應字律などは、あらんことゝもおもはれずぞ有けらし、さればこそ古事記傳に、天浮橋を注せられしをみるに、淤能碁呂嶋之件なると、言趣之件ならびに大御寶之件等にあるとは、こと物のごとくときなされたれ、されども、こと物なるに同じ名をとなへられんやは、すべて言靈をだにみれば、言はたとひ異言にても、義の應じたるが少からず、たとへば中段には〱葦牙といひ、大御寶之件には、これを〱高千穗之久士布流多氣といひかへられ、神代卷一書には、鰐の鰭たてをるになしてとかれたるが如く、こと物だにかゝり、まして同物に異義あるべきやうなし、大かたおのがおもふすぢに叶はずとて、古文古哥をわたくしせむ事、あるまじき事ならずや、靈を見ずして、言のうへにて理をあはせんとすれば、必あはざる事ある物ぞかし、かへす〲照應字律は、おろかにみるべからず、もし此神典、照應字律のたすけなくは、數千卷にときたまへりとも、猶この言靈あかざるべきものをや

神典一部心法

予多年日夜、この一卷、かたはらをはなたず見し程に、わが御教の肝要、一部の大綱は、此はじめ

なる七神三段神世七代なりと心つきぬ、その故は、へ獨神成坐而隱身也といふ事、はじめの七神の間にかぎりて三所あり、又天津神の御名、するゝいと多くあげたまへるに、この初中段の五神にかぎりてへ別天神とみえ、しかのみならず、くはしくみれば、淤能基呂嶋之件以下の文は、悉く七神三段神世七代の心をとき給へるものなりとは明らかなる也、しかるに下段は、へ隱身也とあるをもてみれば、上にしたがひ、又神世七代と称するは、この下段の二神よりをかぞふるによりてみれば、下の神世七代にしたがへり、されば下段は、上と下とに跨らせて書たまへる物なる事明らけし、これいかなる所以ぞといふに、人貴賤となく、我としてふるまふべき神さびは、此初中段のみなり、その初中段のいさをによりて、下段は彼より生する事必せる理をときたまひしものにて、次下の十神五代は、また此下段より生ずる心なる也、この故に下段は、上に屬すれば、七神三段の終なり、下に屬すれば、神世七代の始なり、これ何のゆゑにかく書給へるぞといふに、我より初中段をほどこすにも、下段が目當なり、彼我五代十神となるも、下段が主なる心をみせて、かく跨らせたまへるなり、されば我としてふるまふべきは、たゞ此初中段にして、下段はかれよりおのづから生し來る所、五代十神は、彼我の間におのづから生ずる所をいふ也と心うべし、されどかれより生ずる下段を目當としてわれよりふるまふ初中段も、神世七代をいたりとすべきが故に、かく神世七代をと

きつゞけたまへる物なれば、七神三段神世七代の分をば、わが御教の大綱とはみるべきなり、もとこの七神三段神世七代のことわり、何より出たる事ぞといふに、おほかた天地のかたち、天はつねにその氣降り、地は常にその氣昇る、その昇降の二氣つきあふ事なきより天地相和順し萬物生々して、長く久しきにあはせ給へるにて、その長く久しく和順なる事、昇氣を始とするにある事なるがゆゑに、下段を上下に跨らせて、今いふ所の義をさとしたまひしもの也としるべし、さてこの淤能碁呂島之件以下をば、以上の釈なりとみるは、なにを證とするぞといふに、伊邪那岐伊邪那美の二神、神世七代のうちにならべ給へるには神と称し、その次下の淤能碁呂島之件よりは、二柱ともに命と称せられしにも、神世七代までは、淤能碁呂嶋以下の例にあらさる事しるく、猶神世七代のうち、餘の八神にはことよさし給はで、この二神にしも、脩理國成のことをよさしたまひしにも、ことすぢなる事は明らかなれば也、おほかた凡庸の智は、人欲をおさふる所より忠孝等の美事は生すとす、されども前にいひしがごとく、よろづ母となるものは地なれば、それ大なるあやまりにて、互にその神道を（神道とは身外に出しがたき所欲をいふなり）幽にしてたすくれば、勉彊にまされる人道、おのづから立べき也（一）伊邪那美命といふは、われに和順なる彼が神氣をいふにて、天下にすれば、天下の人民に伊邪那美神あり、一國一家一人に對しても、猶これに同じく、此神、わが伊邪那岐神と夫婦の間のごとくな

る、これをば彼我の間のいたりとする事、わが御教の奥區なる也、この故に伊邪那美神をしも、伊邪那岐神の妹と称して、神世七代のをはりにすゑたまひしもの也、さてかの淤能基呂島之件に、脩理固成の任、この二神にしもあるをおもふに、この二神の相たぐふべき事は、天地をひらくはじめよりこもりたるが故也、されば七神三段神世七代をば、かく次第して書ならべたまへれども、七神三段の始に、やがて神世七代の終あり、神世七代の終に、やがて七神三段の始あるこゝろにて、所詮は環のごときかたちにみるべき也、その環のごときは何ぞ、昇降の氣の循環する事、始はやがて終をもち、終はやがて始をもてるに應したるもの也、この故に七神三段神世七代は、わが御教の大綱にて、淤能基呂島以下とはこと筋なる物なる事、これらの義をあきらめてのち信ずべき也、淤能基呂嶋已下をば以上の釈なりとはいへども、おしなへての釋といへば、たゞその理をとける物をいふ事なれど、これは、　神武帝、天下の實事に御心をくるしめたまひ、実事にみちびかれて、此活所をえたまへるなれば、全くその実事の導きたてまつりしかたちをば、淤能基呂島以下にときたまひしものなるべし、さればこの一部、七神三段神世七代は、この御教成就のかたちをとき、淤能基呂嶋之件は、その敎旨を實事にかけてさとし給ひしものにて、先言之件以下は、この敎旨にたがふ實事の弊をときしめし給へるなり、まなぶ者のためには、かく爲損シソンジをしめしたまふ事、敎旨をのみ

かへす〳〵とかれむよりも、益多き事おもふべし、まづ此一部をみむには、七神三段神世七代を大綱とし、淤能碁呂島の一件は、摠釋と見、先言之件以下、神避之件以上を、一段落と見、尾羽張之件已下、禊祓之件以上をば、また一段落とみ、三貴子之件以下、八雲之件已上をば、又一段と見、稻田御子生之件以下、尾翼鱸之件以上をば、又一段とみ、天之八衢之件以下、をはりまでをばまた一段落にみるべし、くはしくいはゞ、なほこれが中にも、小段落はある事なれど、今はその大段をいふなり、件々の大意、ならびに件々相うくる心、などは、本文にしるせるをみて心得べし、これ此神典をみるべき要畧なる也、この一部すらたゞわづかなるに、それもなほ淤能碁呂嶋以下は釈のごとくにして、大要はたゞ此七神三段神世七代二百一字なり、猶そのうち、初中段百七字、よろづ人事の本源を敎たまへるなれば、いかばかり下根の人なりとも、學びえざらんや、今わが御をしへの徳をいはゞ、我も人も勉彊用ふるにをよばず、所欲は公私大小となく達せずといふ事なく、しかも孝悌忠信等の美事、つとめずをしへずしておのづから生ずるこれなり、諸敎のごとく、勉めてなし、耻させて愼ますする時は、たとへば猫を飼ふに、紐もて繋たるがごとし、初中段をふるまひ、下段生じて、その極伊邪那岐伊邪那美二神夫婦となるにいたりては、たとひ敵の陣中にあるをのこたりとも、わが方人たる事、掌にあるが如くなりぬべきなり、これ放飼にしたる猫のごとくなれば、

毛々那賀之件なる哥に へ毛毛那賀尓伊波那佐牟遠（モモナガニイハナサンヲ）、また へ毛々那賀迩伊遠斯那世（モモナガニイチシナセ）などある、これ安寝のかたちをいふなり、たとひめのまへはいかにもあれ、つまりの所うたがひなくかゝりと、あらかじめ知る智をば、思金神と名づけて、石屋戸之件にはじめてみえ、また大穴牟遅神の所にも此神の思ひ弁（闕畫）をのみときたまひしは、勉彊のたしかならぬが故也、しかるに理をむねとし、かへりて實事にくらき人は、これを權謀術數のごとくおもふべけれど、天地の活所、かくのごとくなれば、さるは、天神なほ權謀術數をふるまひたまふとぞいふべき、それひとへに實事にくはしからぬが故也、此天地の活所よりみる時は、心にも思はぬ仁義を外体にかざるこそ、かへりて術數のごとくにはみゆれ、此初段のたつ所、ひとへに人を欺くがごとくなれど、欺くが如しと恥て、たゞ人道をのみ先とせば、そのかゞまれる神道より、かならず敗をとらしめらるべき也、されば幽顯をたてゝ、神人の道をひらき、神を先とし人を後とせば、神道は幽路に行はれ、人道は顯路におこなはれぬべきが故に、世にすたる物なく成ぬべし、天地もと、精妙重濁の二性なるに、ふたつながらならびおこなはれたり、しかるを善に片より惡をいみて、いかでか天地と長久をひとしうすべき、發天地の御をしへ、そのたふとき事、これにてしるべき事なり、天地の二性にわたくしすれば、かならず長久ならざるしるしは、漢土のよゝの王者これ也、よにふたつある物、天地を親とせぬはなきに、理欲の

みいかでかことものならん、これを弁へざるは、いと稚き事ならずや、宣長もから國のをしへ來りて後、わが御國人の心あしくなれるやうに思はれたれども、渾沌を人の質として、發天地ををしへ給へるをみれば、もとより渾沌は人のつねなるもの也、さる質ある所へ、から國ぶりの文をかけたるなれば、いよ〱後世わが御國ぶりに遠ざかりゆきしものなり、甚しくしては、から國のことをそしればはらたつる人さへ世に多くなりにたり、晝つくれば夜來り、夜つくれば晝來り、暑盡れば寒來り、寒盡れば暑來らずや、めのまへの固きをねがふは、行末のあやふきをうむわざぞかし、されば渾沌を憑むは、いとも〱うしろやすからぬこと也かし、今四海泰平をたのしむ時にあたり、千とせをこえてかくれたりしわが御教、本居の翁はじめて端をひらかれ、成元したがひてこの言靈をのべて、わが御國の御てぶり明らかになり謳哥ともに、後世の狹霧を拂へる事、さらに〱、これ成元等がいさをにはあらず、ひとへに泰平の餘化、かの大御神さびの御ひかりなるぞかし、されば民みな此御てぶりに歸して、神道にのみ乘らば、かれもわれもともにさちのみありて、國にあらそひあるまじければおのづから　おほやけの御つかさ〱、御いとまもいで來なん、それをだにとはしろき御うつくしみにむくひ奉らんと、たれも〱思ふべきことならずや、されは渾沌をひらかむ人の一部のみやすからんがために件々をわかてり、いはゆる

七神三段神世七代

右神典一部の肝要なり

第一　淤能碁呂島之件
第二　先言之件
第三　改言之件
第四　河海之件
第五　山野之件
第六　神避之件
第七　尾羽張之件
第八　黄泉之件
第九　千引石之件
第十　禊祓之件
第十一　三貴子之件
第十二　宇氣比之件

第十三　勝佐備之件

第十四　石屋戸之件

第十五　千位置戸之件

第十六　食物乞之件

第十七　八俣遠呂智之件

第十八　八雲之件

第十九　稲田御子生之件

第二十　素菟之件

第廿一　赤猪之件

第廿二　氷目矢之件

第廿三　五百引石之件

第廿四　毛々那賀之件

第廿五　胸形御子生之件

第廿六　蘿摩舩之件

第四十一　幸易之件
第四十二　光間勝間之件
第四十三　美智皮之件
第四十四　佐比持之件
第四十五　本身之件
第四十六　鵜葺草葺不合命御子生之件

右四十六件、

神典一部、舒れば四十六件、巻けば七神三段神世七代にして、その要、幽顯二路をたてゝ、理欲をひらき、幽を先とし顯を後とするにあり、理欲はすなはち、人と神とのもちわけてつかさどる所也神道をさきとする事、人道重きが故のわざなれば、人道を後とするをあやしむべからず、此神典を史よりさきに置給ふ事、人道は神道よりたつ所以なる也

文化四年丁卯仲冬

古事記燈意富牟泥下終

北邊本塾藏梓

文化五年戊辰初秋發行

皇都書肆

今井喜兵衛

永田調兵衛

葛西市郎兵衛

木村吉右衛門

あなたふといにしへ人はやあなかしこ上津世人はや言靈のたすくる國言魂のさきはふ國うへ言にはあらさりけりいてや千早振神ふみはそのさまくしひにあやしくして久かたの天ひきくあら鐵の土たかく志藝山の嶺くらくわたつみの底あかしこゝにあか北邊のうしくたれる世のけかれきたなきくさくを水鳥の加茂の河のへになけうて中津瀨におりかつきて天地のむたとほしろき吾　大御國のみてふりをしも楫の音のつはらかに言擧ましぬおほよそ火といへはあつからぬ火なく水といへはさむからぬ水あらめやは今より後蘆原の中つ國にあらゆる靑人草のくるしき瀨におちてうらふれたらむもときはにかきはにさきはひなむはもはら天神もろく北邊のうしによさし給ふなるへし

文化五年戊辰正月

浪速　源　賀　世　識

田　島　嘉　言　書

七神三段神世七代 第一

古事記燈 巻一

古事記燈はしかき

天兒屋命庶裔成元述

神祇（祇）辨

おほよそ此御をしへは神をもて御をしへさねとし給へれはまつこの神をしる事神ふみ一部をまなふへき肝要なるなりそも〳〵神とは幽中にありて動かさむとすれともうこかぬものをいふしかるに此神うこかさむとするにはうこかねとも心から動く次序ありこれを神道とはいふなりこれいかなる理とも得てとくへからさるものなりこゝにまた顯露のさかひにおきて道理といふものありいはゆる人道これなりこの人道の理はかり尊きものはなけれは此顯理をあてゝしたかはしめその道をかへさせむとするにかつてしたかはさるものなれは大（ヽアリ）かた人力をもては自在すへからさるこれ神のたふとき所以神道のやむことをえさる所謂也この顯露といふは天地さしむかひたる間の人の耳目にかゝる所をさし幽とは天地間人の耳目にかゝらぬ所をさす名なりされは神道といふもの天地のいつく

にあるそといふに東西の極の人の耳目にかゝらぬ所にありて昇降する二氣ありこの二氣のうちその降るは天神なり昇るは地祇(祇)なりすへて天よりするものは降り地よりするものは昇るをもて昇降の二氣の天神地祇(祇)なる事をさとるへし神ふみの中水火をいふは水は降り火は昇るものなるを以て昇降二氣のさとしとしたまへりくはしくはのちの件々を見て思ふへしこれをおしこめて神道とはいふなりこの昇降二氣すなはち人の體内にかよひて呼吸となれりこれ人の體内の虚間やかて天地の虚間同物なるしるしなりされは神といふものもなほ其神の道もまた人の體内に通ひて彼我の間に往來するか故にかくいふ據は大かた人の呼吸入る時はその來る所をしらす出る時そのいたる所をしらぬこれ即そのかなたは彼の呼吸たるへけれはなり彼我の迦美をは天神地祇(祇)とはときたまへるなりしかるに人のうへにて幽顯に配すへきことをたつぬるにおほよそおほやけなる事は顯(アラハ)にもすへく私なるすちは幽にすへきをもてみれは神祇(祇)と称すへきものは人々の私思欲情これなりすへて人の私思欲情は人道の理はしのく事あたはざるが故に深く胸臆にこめてみそかに行ひて他の見聞を耻る事これ幽中を處とするしるし也かつ深く思ひしみたる事はみつから理をせめておもひ(丶アリ)道理たに猶克(カ)つ事あたは(で脱カ)けにしかりとはおもひしれとも思ひすつる事あたはすしてなほその所欲の達せまほしき心はうちもみじろか(不動)ぬ事我より人の所欲を制止せむとするもこれに同しされともつよくおさふれはもと顯理はをかすへからさるものなるか故にそのかしらはえさしいたさすといへともそのおさふるにつけてはいよ／＼その勢つよくなりてこれいかでか達せすしてやまむとその道をみそかにもとむるたとへは齋日しも肉食のせま

ほしく又わか業と定まれる業しもいとはしきかことししかもとむれともつひに制止する事つよき時は或は病となり或は亂心し或は出奔しあるひは自殺するにいたるこれつひにその道を遂るなりかくのことく神ひとの體內にかよひては私情欲情となりたる事思ふへしされとも神はさはかり尊きものなるを今かく私思欲情なりとさたむるは古來いまた人のいはさる所なれは信せぬ人もあるへけれと天地にして神祇（祇）といふものゝうへをはおしかよはしておもふに私思欲情より外にそのさが同しき物はなきをやもと私思欲情なといふ名のおこる所をたつぬるに人道の理を上なき尊きものとたてゝ其人道にもとる物なるか故にいやしめて私思とも欲情とも名つけたるものなれはもしこれをは私思とも欲情とも名つけすはたゝ迦美にて天地の神祇（祇）同物たる事も明らかなるへしこれによりておもへはもとこれを私思欲情又は血氣無明なといやしめたる名をおほせたるはわか大御國にての事にはあらて皆他域の人の所爲なりわか大御國のいにしへかゝるいやしめ名のつくへき物ともしらさりし程はしかいやしむへきものとはおもはすしてかへりて尊みおそるへきものとさためて名はたゝ迦美とのみこそいひけめさる世にかへして今いふ所を思はゝこの私思欲情すなはち神にてたふとふへくおそれむへき事うたかひなかるへしたとへはもとたちたる人の久しく臥てそのふしたるをたちたりとしたちてありく人をかへりて臥たりとするかことし今予この神を弁するにたゝ迦美といふ名もてのみ

とくへけれとひさしく私思欲情なといふ名をおほえてこれをいやしめならへるよの人情なれはそのうたかひをとかむかためにわさとそのいやしめ名をもてとくなり竒を好むといはむ人かならすよにあるへくそれ予をあさけられんはいさゝかもいとふ所にあらねと此御教に入りかねむをおそりてかくしひことはするなりさるは今かくことわるも私思欲情を偏に尊きものとするにはあらすこれを幽におけはいと尊くこれを顯におけはいと卑しきものなりされはかの私思欲情とてひとへにいやしむは顯においての心にて幽を具せさる名なる事おもふへしされは畢竟は顯にあらは私欲といふへし幽にあらは神といふへきなりされとも人としては顯はいと重きものなれは顯のうへにていはゝ神もなほ尊しとはすへからぬ事なりこの故に人々その顯の重きによりて私思欲情のたくひをわれのも人のもこれをいやしめ制するをことゝしよく勉めて制するをはめてたしとすけにこれをゆるす時はつひに人道をもやふるものなれはしかおもふもことわりなる事なからおほかた人のおもへる所とはたかひて此私思欲情はかへりて人道をうむ母なる事たとへは草木の根のことし天地間の妙事ともゝこと〳〵くかの東西昇降二氣の機關より生する所なるなりそのしるしは大かた世の寶とするものならひに有用のものなといまた天より降れるを聞かすかつ家系を繼くへき子は女しもこれをうみ家産を増すへき子錢は貧人しもこれを生しよろつ造化の妙事はいやしきものを母とするを思ふへし私思欲情

のたくひもとあく事をしらさるさかなりとおもひて制するより外のことなしと心えたれとあく事をしらさるは私思欲情のさかにはあらてなか〳〵これを制するか故にあく事をしらさる也もと私思欲情のみつから世の耳目を耻るは顯理を破りてたに達せまほしく思ふ物にはあらねはその私思の爲に世の耳目をたになこめあたふれはみつから足（タ）る事をしるこれ私思欲情の本性なれは母とせん事もはらこゝにある事也されとも私思欲情に妙事をうませむ事わか御教の七神三段なる初段中段の五神の道にしたかふよりほかなき事なるか故に此御をしへよにかくれて後はたゝ私思欲情はいやしむへきものとなりはてぬるいとことわりなる事也人はたゝ一人二人の間とても神道をはないかしろにしては彼我ともに長く久しき事はえらるへからすまして天下國家をや神武紀にへ禮祭神祗（祇）ともまたへ敬祭神祗（祇）ともみえのちの御紀ともにも神祗（祇）をまつるといふ事とものあるを後世はたゝ神社をまつりたまひしこと也とのみ心え來たる事なれとこの神とは帝の御方の天津神なり祗（祇）とは臣民の方の國津神をいふにて彼我の私思欲情をいやしめたまはすして神祗（祇）の道にしたかひ給ひしことをいふにておほかた天下の顯事のうるはしきはひとへに天子と臣民との私思たかひに道を得るより生する事なるか故也されはかの紀ともに礼祭神祗（祇）とかゝれたるはこれ治國平天下といふへきをしかかゝれたるものなり礼祭神祗（祇）は本にて治國平天下は末なれは本を言とし末を靈としたるもの也神ふみの書法もみな此例也言靈といふ事は大旨にくは

しくときおけるをみるへしいはむと思ふ事は活かしおきて思はぬかたを言とする事神武紀にみえたる倒語これなりその倒語したるうちの心をは靈とはいふ也と心うへし　されは神道をさき人道を後とすへきことなるを世に處するにまのあたり顯の重けれは顯を先とし幽を後とするこれをは勝佐備之件には〈逆剝天班(斑)駒剝ととかれたり此故に所詮は世の耳目にかゝる所におきては人道を重くし胸臆のうちの世の耳目及はぬ所におきては神道を重くすへきなり初中段の五神を次序し給へるは即神の道をときたまへるにて顯理はいかにもあれ神の道はかゝりとさためおかれたるなれはこれにたにしたかはゝ幽には神道さきにして人道後となり顯にては人道さきにして神道後となりたるかことくなるへけれはいかなる私思欲情とてもいたつらになる事なくてしかも顯理やふれす顯事ます〳〵めてたかるへし顯理にのみよりて神道にしたかはさる人はおのれひとりか力をもてするなりおほよそ一人のちからはいかはかり勉むとも限あるものにてそのいさをせはく小(チヒ)さかるへし神道にしたかふ時は百人千人の力もをよはさる事力をも用ひすして意のことく成り出へけれは人たれかはこれを學はさらん孝徳紀に云〈惟神者謂隨神道亦自有神道也とみえこの記には无間勝間之件に〈差暫往將有味御路乘其道往者如魚鱗所造之宮室其綿津見神之宮者也とあるこれともに此七神三段なる初中段五神の次序神ふみ一部の次第皆神道をのへたまへるなれはのこらす隨ひ乘るへき神道なり初中段は一部をひきつゝめてとかれたる所なれはかくとりたてゝはいふ也にしたかふ事をいふにてこれひとへに實事のうへやむことをえさる所あるより隨神道をゝしへたまへるにて理をもて推すへからぬ事なり

理をたふとふ人は神道に随はむことを悟りうへからすこれ神道は顯理のうちに別に理をもちたる所なれはなに事もうはへのみをみてその內をしらすはその思こゝにをよひかたかるへき也されとも顯事のうへにおいて人力の及はさる妙事あらはこれ随神道のいさをなりとみるへし此故におほかた神道は上は天下國家ををさむるより士農工商(商)の諸業諸道の學業なほ遊民の諸伎乞兒の物こふにいたるまてその顯においては各ことなれともその內には悉く貫きて神道はあるものなれは神道はその外をもて論すへからすおほよそ融通は諸顯事の根なるこれ一言以て神道を蔽ふへきことなりかし

古事記燈第一

上卷神典第一

天兒屋命庶裔成元述

○七神三段神世七代

初段　天地初發之時

それ古來神ふみによりて天地をみる事神代卷上に古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含牙云々とあるかことく天地もとまろかれてありしかひらけたるなりと古來おもひ來れりされと有形なる物ふたつならはこそあらめ無形なるものと有形なるものとのまろかれん事あるましき事なるかうへにそのまろかれたるかたち雞子のことしとあるはいよ／＼いかにまろかれてありけんとあやしくてつく／＼と天地をうちなかむれともます／＼おほつかなくおほゆされはよく／＼思ふにすめら御祖は天地のはしめよりおはしましけるよしをしるして後のよまての御伊都にとの事なる

へけれとたとひ渾沌してありしか開闢したりしにもあれ如雞子と其渾沌の形までをいふにも及ふましくなほへ及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合摶易重濁之凝堨難云々なと開闢の樣をとくにもをよふましき事ならすやわか大御國のふる言はそのいはむと思ふ心にそへたるものにあらさる事わか大旨言靈弁にくはしく述たるか如くなれはこれ必そのいはむとおもふ心はふかく隱して天地を言とせられたる物也こゝをもてよに天と地のよりあひてまろかれたるはなにならんとひろくたつねつるに人おほよそうまるゝ時は母胎のうちにして心身具すれはそのよりて來る所をみるものなけれと死する時は心は天に歸り身は地にかへる事まのあたりにて身の有形なるが無形なる心をうちにしてつゝめるそのかたちすなはち雞卵のことくなれは天地の渾沌とは一人の人心身をひとつものにそなへてもたるかたちをさとしたる物なる事うたかひなし萬葉集第二はへ天地之依相乃極と人麿のよまれたるも依相とは卽渾沌の事にてこれ擧天下の人といふ心に用ひられし言なるをもても思ふへし伊勢國なる本居宣長はこの神ふみをは敎ふみにあらすとしてひたふるに実錄と定めたりし人なりしか実錄と定めたる人なから天地の渾沌開闢なとの事はさすかにあやしくやはおもはれけんこの天地初發之時をは萬葉集の哥によりて阿米都知乃波士女之登伎とよませられたりされと哥はもしの數もさたまれる物なれは波士女之登伎ともよめるなれは哥をもてふ

みはおしかたき事なりすてに開闢といふ字神代巻本文にも一書にもみゆるをもていはゝ此初發之時もかならす波士女氏比良祁志登伎とよむへきことなりいかにみれといかに思へとこの天地のまろかれたりしかひらけたりしものとはみえぬか故に宣長しかたゝ天地のはしめをいひしもの也と思へるもことわりなる事也されと前にもいふかことく渾沌のかたちをも開闢のさまをもいとねもころに記せられしからは必渾沌とは人一人のことをいふさとしなる事神代巻にあはせて思ひしるへし此記には初發をいひて渾沌をいはぬは初發はかならす渾沌なる物を質としていふ詞なるか故にさらにいはれさりける也しかのみならす發は天地の本然にて渾沌はもと天地のうへにはなき事なるか故にひらけたる天地の本然を言とし渾沌を靈とせられたるなるへくおほしきなりされは此記とてももとより渾沌をひらくへき事なる事をしへられたるにてその言靈においては神代巻も一律なるなり天はもと高所に位し地はもと低所に位し各所に其間遠くてある物なるを人は一人に天地を具して心身としその心身の用をはふたつなからわか有としたるは父母交接する間より生れて天地間に處するものなれはなるへしされとその心身をはもとの天地にかへしてみれは天地は雞子のことくまろかれたるものにあらすして二物にして其間遥なれは人の心身その本然をつくさむとすれは心身をともにおのか物とせすして心は心身は身と二物になし其間を遥になすへき也此故

に畢竟心身を一物とせるをはもとの天地にかへして二物とし其間を遠くなすを發（ヒラク）とはいふ也もと此心身の渾沌自然の事なるを其自然にもまかせすして各處にひらけとは何の故そといふに心は内思の主身は外用の主にて內思の如く外用するこれをは渾沌とはいふ也その內思の如く外用するかいかなれはあしきそといふに

（二十二行空白）

公にもあれ私にもあれともにおしこめて公とさたむへき事ならすや千位置戸之件にヘ於是八百萬神共議而於速須佐之男命負（千）□（虫食）位置戸亦切鬚及手足爪令拔而神夜良比夜良比岐とあるは神代卷一書にヘ科素戔嗚尊千座置戶之解除以手爪爲吉爪棄物以足爪（爲脫）凶爪棄物とみえたるにしるく此吉爪棄物凶爪棄物といふはのち〳〵の紀ともに善解除惡解除また善惡二秡ともいはれたる事にて善惡是非理欲公私のたくひはみなわか外行にいてゝのうへに世人のこれをゆるすとゆるさぬとはわかるゝ名にしていまたわか胸臆のうちにおいては公私のえらひはすましきこれをは善惡の二秡とは教給へるなりされと思は行の本なれは思慮のうへにてまつ公私をえらひおかては私思おのつから

行となり出へきか如くなるか故に世皆思慮のうへにてまつ公私をえらふこれ一わたりはさる事のやうなれとも外行をやすくせらるゝは私思のかたにはなくてかへりて公思の方にある事なりいかにといふにたとへは聖賢のときおかれたる語の天地にもとつきたるなとをふみさならても當然なる理をふみてそれを心とする時はわれかく至公なる心もてみつから行ふなれはたれかはこれを私なりといはんもしこれをそしらむ人はそのものゝ非なりとそのふみたる理のわれとたのまるゝ□（虫食）（よりカ）□言行に出すをかへりてめてたき事に思ふこれなりもし私思をふみたる人はもとより世人の許諾すへからさる事をしるか故に行に出さむ事いとかたかるへきにあらすやされとたま〱は私思をはやかて外行とする人もよにあるか故に私思は□（外）（虫食）行にいてやすきものゝやうに心うれとも私思を外行とする人はそれかならすやむことをえさる所より生する事にてかつてみつから心にたのむ所ありてうちひゝらきて外行とするにはあらさる事也そのやむことをえぬとはもと私思は外行に出へからぬ事はみつからしるといへともその私思をゆるしうなかす人なきか故に（制止する人のみ多きものなれは也）やむことをえすみつから外行とするにてもしゆるしうなかす人たにあらはいかてかみつから行とはすへきたとへはわれ偸盗をなさむに偸盗をなしてえんほとの財を人われに贈らはたれかは偸盗をなさむ偸盗は好む所にあらねともその人を得さるか故のわさなるかことしこゝをもておもふに大か

たわか私思といへともこれに輕重ありてその輕きは公に近きか故におもはす外行ともせらるれと至重にして不動なる私思は外行に出すへからさるをよくしることひとへにその不動なる私思の達せまほしきよりも八方の人（これをは八十神とはとかれたり）こそりてわか私なるをにくみ疎むへきかいたくうれはしきものなる也されともこれをゆるし促かす人なき時はつひにその世のにくみうとみにもかへかたく成てしか言行にも出るなれは所詮は私思のうちにもいと重くて不動なる所欲をたに心とせは外行にいてんことはおのつからおもひ絶らるへきなりとにかくにわか所思をはわれと外行にいつる事私におつる事なれは所思と外行ははなつへき事肝要の事にてそれひとへに善惡の二稜をしてわか欲する所□（虫食）不動にしておもひ捨る事のかたきをは心內に固く執るへしわれと外行にいてゝその所思を達せんことはしりたれと外聞外見のやふれん事はたれかこれをいとはさらんかならす外行は所思にはなるへきそかし私思といへともかろきは公思に近きものなれはみつからかうかへて外行にいづべしやいづべからすやをよくおもひはかりたえてこれは外行に出へからすと思ふわか所欲をは心とすへしたゝおそるへきは公思なるそかし以上の心法定まる時は所思と外行とは相はなるへししかるにその內に固くとれる不動の所欲外行にたにみつから出さねは私とは人いふましけれともと達せられてこそ所欲を執るかひもあるへけれとても達する事みつからはせられす

は内に執りたるもなほ思ひ捨たるもひとしきわさなるへしその所欲さきにもいひしかことく八方の人のうとみをたにいとはすはみつから達せん事いと易かるへけれと八方の人をかしかたく凌かたき物なるか故にみつから達せられぬなりされはその所欲を達せんは却てやすく八方の人情をは所欲のためにやふらさる事はわか力にあたはさる所なりされとも八方の人情を犯さゝらん事わか所欲のためにたにあらす□(虫食)れ□(虫食)かたしともいふへからぬ事なるか故にとにかくに所欲は制するにしくはなしとおもひて制欲を事とすること世のならひなれともとその欲を制する事たとへは百を欲するに九十を減するまてにはをよふものなれとのこりなくはらひつくさむ事□(孤)(虫食)獨なる人の後もなき輩はさてもありぬへしおのれひとり潔からんとて子孫をたちて先祖の家業をうしなふにいたるへき事遅速はその人の精力によれとも長久ならさる事必せるはわれ潔けれは人よる事能はす人よらさる時はわれまたたつ事あたはさるに思ふへししかのみならす豪傑の譏にかゝれる和漢古今その例いと多かるをやされは寡欲をよしとし無欲はこひねかはさる教もあれと欲をきらふ一筋にしていはゝ寡欲もなほ欲ならさる事をえさるへしたとへは君の賦税を收め忠臣孝子のものくらひよる寐る□(を)(虫食)はたれもこれを欲也といふ人はなき事なれといひもてゆかはそれも猶私なる事をのかるへからすこれなほ私なりとはしらて寡欲をのみ是とするか故にすへての人事大小ともに一を

もとらす二をもとらすして身を終ふるかよに多きそかしたとひいかはかり制すともかくすとも私をまぬかるゝ事人としてはとてもあたはさる事なる也しかるにもとその私ととなふるも八方の人情そのゆるさぬをなすゆゑこそあれ八方の人情たにやふれすは私とはいふへからすかの君の賦税を收め忠臣孝子のものくらひよるいぬるも其國君また臣子のみつから私ならすと定むへき事にはあらすそれか私なりとも称せられすしてあるは國民君父わかために八方の人情を和(ナゴ)め來らるゝかゆゑなり此故に所欲のために八方の人情を犯(ヲカサ)ざらん事みつからの力は及はすといへとも人ありてわか為に八方の人情をたになこめ來らはわか所欲をわれと達せむ事いとも〳〵やすかるへくみつからこれを達しても八方の人情はかつてやふるゝ事あるましきをやされは八方の人情所欲のためにみつからなこめかたきを思ひてわか所欲を制せむとするは根なき草木を枯らせしとするかことくなるへし（神道は人道の根なりとはしかき神祇(祇)の弁にいへるこれなり）こゝをもてわか不動の所欲はいかにも〳〵胸中にかたく執りてさてその所欲のためにやふれなん八方の人情を全うし來つへき人をえむ事急務なる事を知るへししかるに此八方の人情とは所欲のためになこめん事いかてかみつからの力には能はすといふそといふに大かたわかうへの事はあしき事こそみつからもいはるれ美事はわれと人には語るへからさるか如く言語にはいはねとも躬行を美にするはわがよきを人にかゝやかすにていはゝ不言の自負

なれは人たとひこれを称すとも心には嘲をいたくへけれはなり此故にわかうへの是非はみつからかゝやかす事あたはさるわさなれはわれを褒貶すへき八方の耳目をなこめむは人の力をかる□（よ）（虫食）り外はなきことならすやしかるに此人の力をからん事わか口より出ては事成る事なき物なれは不言にして人力を仮るへし不言にして人力をかる事いかにすへきそといふにもはら人を悦はしむるにある事なりされは一向に人を悦はしむる事をわさとせむかといふに五人十人の家族なとこそあれさるものたに猶よの交はひろしまして天下國家をしろしめさむ君なとは擧國の人をひとり〳〵悦はしめむやうなしされは擧國にその悦をつたふへき人をしてその人を厚く悦はせむかといふにこれは地といひ國といふわか御をしへの旨にはあれとこゝにいふは發の心のかゝらぬをとく也その人をのみ悦はしむれはかたはらの人これをねたみてかへりて擧國につたふる道たえぬへしこゝにおいて此御をしへはたちたるにてかく進退谷（きハ）まれる所において活路はあるそかしその活路とは卽神事にしてかの擧國につたふへき人を得むにその人をしてよろこはしめむ事神事にたになりなはかたはらのねたみはかつてあるましき也此事なほ此下にとけりされは返（隨）々□（虫食）身は中々なるわさにてよに勉彊いとつよきもありて生涯つとめおほするも少からねと精力かきりありて勉彊の力よわる人もまたすくなからすたとひ生涯よわらすともその精力を子孫につかせん事またかたかるへく二代三代これをつけりとも數代のうち勉彊のよわる時かならすいたるへ

したとひ五百年八百年といへとも天地の無窮なるよりみれはたゝ緩なるにしはらく盛也とて必衰の時あらんをかねて弁へぬは稚しといふへしこれわか徳をしかむ事自力のをよはさる所以なれはたゝ〳〵わか相識のうちにこの人こそはわか徳をは八方にしかむ人なれと思ふをわか胸中にて固くさたむへしこれをは地といひ國とはいふなり（地と國とのけぢめは中段のはしめにいふへし）まへにいひしかことくこの人をして不言にして徳を八方にしかしめむには此人をよろこはしめむにある事なからその悦はしむる事神事にあらされは却て害あるか故に神事をもてこれをよろこはしむへし神事とはその人の所欲を達せしむる事を幽においてする也されと此幽とは人にかくしてする事にあらす（かくしてするはかへりてあらはなるにもまさる事いふも更也）人前においてしてしかも所欲を達すとはみえ（さカ）たるをいふなりこれいかにせはしかなるぞといふにもとその人の欲を達せんとおもふにその欲を達するは又　　なれは

（四行空白）

しか外皃をもて得らるへきにあらす外皃をもて得たるは更にはなるゝ事いと速なるへけれは人を得むとにはその人の中心を得へき事也人の中心をえむはいかにすへきそといふにその目當とする

人もかならすわれに同しく不動の所欲ありて八方の人情をかしかたくてその犯しかたきをうれひをるへけれはその人の胸臆にふかく執りをる所の欲をしりそのすちをつたひてその欲のために遮りたる所の八方の人情をなこめあたふへししかる時はその人その所欲を達ししかも八方の人情やふれさる事おのれか力のあたはさりし所なるか故にわか恩をは中心に深くあつく荷ふへしその荷ふ所すなはちその人の中心をえたるなりとしるへし其人の感銘もはら八方の人情のおのか力にあたはさりし所をなこめられたるにあるか故にその人またわか所欲のためにやふれつへき八方の人情を憂ひをるすちをはかり來りて八方をなこめてその內にしてわか所欲を達せしめその報恩とせんとし來るへき事これまた必然の事なれはそこにおいてわか力にてはなこむる事難き八方の人情わか所欲をみつから達してもやふれさる事となりぬへくこれかの外行をはなして胸臆のうちに固く執る所の私欲の成就すへき所以なるそかしされはとにかくに此人こそわか爲に八方の人情をとるへき人と思はむ人をはよく見定めてさてその人の內思とせる不動の欲を察し審らかにしそれか爲に八方の人情をなこめむ事專務なる事をさとるへき也もとその人の爲に八方の人情をとる事もはらその実はその所欲を達せしめむを要とする事なれとも直にその欲をとひあらはにこれを達する時はその人とわれとのさしむかひの間にもさま〳〵の敝は生ししかのみならす八方の人情ねた

みにくみてその人のためわさはひとなりゆくへき事なれは其人の所欲を達せしめむを本意とはしなからかつて其人にしたしむへからすこれをは發（ヒラク）とはをしへ給ひしもの也されは親しますといふは其人にむかひてその人の所欲のすちをは言語にかつてかけぬをいふにて大かた疎濶にする事にはあらすと知るへしこれ我も人も所思のすちむなしからすしてしかも八方の人情やふれさるか故に長く久しく崩るゝ事なき萬全の心法なるそかし神代卷のはしめに天地開闢のやうをとかれしにへ古天地未割陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合摶易重濁之凝竭難故天先成而地後定然後神聖生其中焉とあるかことくおほよそ思慮は外行の本源なれは天地渾沌して一人となりたるに天と地いつれをかまつ我か有とせむといふに天の方をはまつ我か有とさたむへくしかりとて天は必地に對して地をもつて母とするものなれは誰にもあれわか所思のまゝをうみ來るへき人をは地と定むへしこれ天先成而地後定の所謂なりさてその對して母とせる地に天あひ親しめるものにあらすいと高處に位して地にはいたく疎きその間の疎濶なるこれをは發とはいふなりけりされは此發天地の御をしへ更にわたくしことにあらさる事これによりてしるへし初の字をおかれたるは今まて渾沌を是也と心えたる人のこの御教を聞てはしめて悟入するをいふ也これ學者のうへの事なるをまことの天地の事也と心えたるよりつひに此御をしへを

よにうつもらせたるなり之時とはその學者の悟入して發天地の決斷さたまれる時をいふ也神ふみの中へ之時またへ時ともかゝれたる所々みな今までの見解のうちかはりゆく時をさとしたまへる事一律なりこゝをも其心にてみるへし　されともこれ凢見よりはいと決斷しかたき事にて渾沌なから一生をおくる人多くあるへきそかしこれ公思を心とする事よからぬ事とは思ひも定められねはなりさる人はいかにともせむすへなき事なから勝佐備にて此事は勝佐備之作にくはしくいへり所詮はおのか公思なるをたのみて人の私なるをいたくせむるをいふなりとしるへし　萬妖悉發の時につひにいたらむはいと心くるしき事也この渾沌の敝をは阿豆那(アツナ)比(ヒノ)之罪とかみつ世にはいひたりけん神功紀に　〈適是時也晝暗如夜已經多日時人曰常夜行之也皇后問紀(ノ)直祖豐耳曰是恠何由矣時有一老夫曰傳聞如是恠謂阿豆那比之罪也問何謂也對曰二社祝者共合葬歟因以令推問巷里有一人曰小竹祝(シヌノ)与天野祝共爲善友小竹祝逢病而死之天野祝血泣曰吾也生爲交友何死之無同穴乎則伏屍側而自死仍合葬焉蓋是之乎乃開墓視之實故更改棺櫬各異處以埋之則日暉炳爍日夜有別　二社祝者をいふは天神地祇(祇)のふたはしらともにわか身のうちにあるをもてさとしとし給へり合葬といふ事渾沌の心なる事思ふへしけに身はもと地の化成なれは天地二神の一身中にあるを墓とたとへられしことわりなる事なり開墓の開の字は卽發の字の心にて各異處以埋之といふは彼我としひらけるかたちをいふなり常夜とは人その私思をせめらるゝあまりにやむことをえす顯を犯して私思をほしきまゝにしわれをうとひあたみてしたかはさるをいふなり公思を心とするをはりつひにかくなる事は勝佐備之件にみえたりそれを本としてこれはかゝれたるもの也此時皇后御勝さひのありて命にしたかはさるもの多かりけるを豐耳のをしへまつりてふたゝひ天地をひらかせたまひしことをいふなるへしその時この二祝合葬せることを巷里より奏せるを假りもちひて實事を靈としたるなるへし御代〳〵の紀とも多くは倒語なるは帝々の御ひかこともあり又御神さひのあらはならんをいとひてなりくはしくはこゝにいひつくしかたしとみえたりあらかしめこの阿豆那比之罪あらんことをさとらはつよく渾沌せるさかたりともおもひえむ事もあらんかと

てこれをいふなりたとひ一旦天地はひらきたりともさらにまとひて心身の用をひとつになさは初中段の神さひほとこすへき道なくしたかひては下段もかれに生せすして神世七代をとくる事あたはさるへきなりされは學者くはしきか中にもくはしく了解すへきはこの渾發なるなり此發天地の御さとりもと　神武の帝にして開化帝まて九御代たゝ　帝の御うへはかりの心法としてつたへさせたまへしなれは天といふは上位の人地とさすは下位の人たるへき事はいふも更なりしかれとももとこれ天地とは心身のさとしものなれは（本を言とし末を靈としたるもの也）この御教に悟入して天地をひらきたらん人すなはち天たるへけれは外皃なる五倫の上下にかゝはる事とはおもふましき也かへすがへすわれも人も私思のためのなけきは八方の人情にある事なれは天をするゑ地をさためてその地にしたしまさらん事人は高下となく業は大小となく緊要の心得なるにあらすや

於高天原成神

誰にもあれわか爲に八方の人情をなこむへき人を思定めなからわざと相したしまぬ時はおのつからその人とは淺交なる中の如きわ（衍カ）彼我の間を高天原とはいふ也おほかた人に接するに其所欲のすちをたにたすくれは速にしたしみいとふかくなる物にはあれともかの八方の耳目彼我の間にありてこれをねたみ□（か）（虫食）つ彼もおのつから我をあなどるにいたるか故にいと親しき中もつひには疎くな

りぬへしこれたとへは私情を通せし男女の末とげかたきか如しされは此人こそはと定めたる人の所欲のすちにはかたく言語を用ふまじくたゝその所欲にかゝはらぬすちをのみ言語としてましはるへししかる時はその人よりもわれにしたしまむとすれともなれかたきものとなるか故に彼我ともにそのあはひ疎きこれ高天原としもいへる心なり蒼々たる上天至高に位して地によらす地よりも生のほるもの山も高きあり木も長きはありなからしのく事能はざるこれすなはちまのあたりなる高天原にてこれをもて今いふ所のさとしとはし給へるものなり原とは彼我の中間なる空虚をいふなりこの高天原天地をたにひらけはおのつからたつ場にてこと更に心して設くる所にあらさる事へ天地初發之時於高天原とかゝれたる語勢にいとしるきをおもふへしもとかく地と定めたる人、なるにわさとしたしまさる事ひとへに彼我の中間なる八方の耳目あるか故なれはこの高天原とは畢竟その八方の耳目のために彼我の間をやふられしとてなるなりされはもと神事は幽事たるへき事なるが故に（神代卷一書に神事とも幽事ともかきてともに迦美碁登とよませたりその神事幽事に對して顯露事といふ事も同し所にありくはしくは神代卷をみて心うへし）すへての神事もまつこの高天原たゝすしては神事やかて顯露事となりて發天地の心法つひにとぐる事あたはさるへけれはこと更にたつへき場にはあらねともようせすは神事を顯露事となしてこの高天原をくつすへけれは今此高天原のたてるを崩すへからぬことわりを述さとすなりされはこゝに於高天原成神とは

とかれつる也かしこの成ませるといふ事かの神代卷に へ然後神聖生其中焉とかゝれたるに神聖なとあるに目をくれて帝のとほつ御祖のなり出ませる実録なりと心え來れる事なれとこれさにはあらて上に初發之時とある初の字をうけて成とはいふにて學者天地をひらきて高天原たつ時はそこにおいてまつ天之御中主神をはしめとし神世七代の終まて其次序やむことをえさる顯中の幽理をしめし給へる物也としるへし神とは此はしかき神祗(祇)辨にくはしくとけるか如くよに大かたの道理といふものあれともその道理をもて推すへからぬ道理の目にみえぬ所にあるをは神道といひその道理をもてしたかはしむへからぬものを神とはいふなりされは天地をひらきて高天原たつ時は人道にのみよらは足(タ)りぬ(ベ脱カ)き事なれとその道理もて推ししたかはしむへからぬ道理幽中にあるをは成神とはときたまひしなりされはこの天之御中主神をはしめ初中段の五神ならひに次々に神世七代のをはりにいたるまての神々の次序すなはち神道にてこれわたくしにくはたて設て教とし給へるにはあらていかなる道理とも道理はあてられねとも此次序のことく神さびせでは外こそさてもあるへけれ内かならす(内とは即幽にて目にみえぬ所をいふこれ畢竟人の中心をいふなり)ふたかる所ありてそのふたかる所よりつひには外をも崩すにいたるへきやむごとなき道を実事のうへにさとり給ひて教をたれたまひしものなりされは一部のうちなにの神と神名の下に神の字をおかれたるはことく\く人道の重きはいふもさら

なれとその内において人道の理もてしふへからさる道理あることをさとしたまへるにてこれおほかた一部の肝要わか御教の大本なる也されとも幽事に過れは顯事くつれ顯事にかたよれは幽事たゝさるこれ此御をしへの心を用ふへき所にて三貴子之件に　へ卽其御頸珠之玉緒母由良迩取由良迦志而賜天照大御神而詔云汝命者所知高天原矣事依而賜也故其頸珠名謂御倉板擧之神次詔月讀命汝命者所知夜之食國矣事依也と天照大御神に すなはち日神也 この高天原をよさし月讀命に すなはち月神也 夜之食國をよさし給ひしはこゝに於高天原成神とある心にて顯露事は日神のつかさとり給ふ所 日は晝の主なれは也 幽事は月神のつかさとり給ふ所にして 月は夜の主なれは也 さてこの日月の二神かく高天原と夜之食國とをもちわけ給ふといへとも日神のかなたには月神おはしまして日神にしたかひ給へるものなれは日神高天原をしらすにすなはち月神夜之食國をはしらすものなる事まのあたりもしかりなほ大御賓之件にへ此之鏡者專爲我御魂而如拜吾前伊都岐奉とときたまへるすなはち晝のかなたには夜具したる事顯幽の本然たる事をさとし給へるにて　伊勢の内宮おほやけをはしめて國人みなあかむるはこれをわすれさせしかためにいつきたまへる也 鏡は月神の御像なる事くはしくは兩宮弁にいへり されは畢竟高天原とはかの地と定めたる人の前をいひ夜の食國とはその地と定めたる人のうしろをいふにて前とは卽顯露なりうしろとはすなはち幽なるなりかく月神を御魂とすへき事をわすれて高天原にすくるすなはち速須佐

之男命の泣枯泣乾し給ふことを三貴子之件のをはりにときたまへるこれなりこゝをもて石屋戸之件に天之日影をとかれたるにて後世までも日蔭葛をかくる事もはらこの心をわすれさせしとてなり日神は顯をつかさとり給へとも物のかけになりたる所までは照らしたまはぬこれ天照大御神の御心ならひに高天原のこゝろえなるなり人とにかくに人の幽中をあばかまほしきさかあるものにてようせすはかの速須佐之男命のことくなるへしかれか前においてはかつてかれが所欲にかゝつらふまじき事はその所欲をいむにこそあらめもとその所欲を適せしめむかためなれは顯にすくるのみならすその母とすへき幽中をさへあばかむ事やあるへき石屋戸之件にとかれたる天宇受賣命といふはかれか所欲を達せしめむ事を主意としなからそのすちにふつとかゝはらぬをいふにてけに天之八衢之件に此命をは へ汝者雖手弱女人与伊牟迦布神面勝神といはれしもことわり（手弱女人とあるはわか所欲をはかれに達せられんの心あるをいふ也神ふみの中女神をいふはみなこの義也これ天照大御神をは女神とせられたるもこの心なりこれに對へて男神をいふはみなかれか所欲を達せしむる方をさとす也）この心術さたまれらはいかてか神世七代のをはりを遂ざらん此故に此於高天原成神といふ六字はかくはしめにおかれたれともこれ神世七代のをはり伊邪那美神までにかけたる詞なりとしるへしそのしるしみえたるはこゝに成神といひさて中段のはしめにも へ如葦牙因萠騰之物而成神といひ（これも葦牙に因るとはあれとなほ葦牙によりて高天原になりますなり）また下段のはしめにも へ次成神といひまた五代十神のはしめにも へ次成神とありてい

つくになりますともかゝれさりしはこれ皆高天原に成ます神なるか故にこゝにゆつりて末は畧せられたるにてしるへし（初中段のふたつは我よりふるまふへき神なるか故にのこらす高天原になります神なる中をとりわきてへ上件五柱神者別天神とはかゝれたる也かくことわられたるにてもはしめよりをはりまてともに於高天原成神たる事は明らかなるそかし）これこのしるしの明らかなる故のみにもあらすまへにもいひしか如くわれも人も所欲の達せまほしきはいふも更なれと顯路くつれては滿足ならすおもふ事なるか故にかれかためにする神事も又わか爲にかれかせん神事もともに幽中ならんこと肝要なる事をおもへとてのこらす於高天原成神とはときたまひしなりされは所詮高天原とは彼我の神事の舞臺なりとしるへし此はしかき神祗(祇)辨にいへるかことく迦美は彼我となく道理たに克つへからさる至尊のものなりといへとももし顯のさかひををかしてあらはならはたちまち人道の理のためにうしなはれん事氷目矢之件に へ尓其御祖命哭乍求者得見卽拆其木而取出活告其子言汝有此間者遂爲八十神所滅乃速遣於木國之大屋毘古神之御所云々 とある心にて神事をあらはにするを大穴牟遲神とはとき給へりされは大穴牟遲神も速須佐之男命の生太刀生弓矢もて八十神を追撥(ハラ)ひまして始作國也と五百引石之件にあるかことく高天原くづれてはかへりて地と定めたる人をもうしなふへきなり

名天之御中主神

かの地と定めたる人の所欲を達せしめむに顯露事をもてやかて幽事とせむの心法はさたまりぬさ

れはその人の所欲を達せしめむとするに所欲といふものもと世の耳目のゆるさぬ所なりとはいへともそが中にもゆるされたるもあり又ゆるさるゝともなくて達せらるゝもあるものなりそのゆるされたらむ所欲はかれか心中うれふる所はたえてなき物なれはもしそのゆるされたる所欲を達せしめはかれ感銘する事かつてなかるへしたゝうれひとするはその諸欲か中に他の人にかたく制せられていかに思へとも〳〵達する事能はで胸中欝々としてわするゝ事あたはさらん所欲こそわか神事をほとこすへき種なるへけれされはかれ他よりかたく制止せられてその制止やふるへからすしかもその所欲すつへからぬ内外おしあひの中間を握らん事神事の初門たるへきそかし神代卷下に〈天兒屋命主神事之宗源者也故俾以太占之卜事而奉仕焉とあるこの神事之宗源とは卽今わかいふ所のおしあひの間をいふなりまた神功紀に〈喚中臣烏賊津使主爲審神者（サニハ）（中）履仲御卷には沙庭とあり〉とある審神といふは卽かの制せらるれとも捨る事能はさる所欲を審にするをいふなりこのかれかおしあひの中間を掌握する事此天之御中主神の名義にてこれ此神のみにあらす神を審にする事大かた初段の主意なるなりとしるへしまつこの神名の天之とはわか神よりうみ出せる心算のある胸中をさしていふなり御中の御は眞とかよはするも同音にてふたつを具したることを体になしていふ詞なり萬葉集中第七〈左右手とかきて麻傳とよめる心をおもふへし大かた顯のうちに幽を具したる人をはたゝ

へて宇麻人といふこの麻といふに同しく顯中に幽あるその中間といふこゝろをは御中とはいふなりその顯中に幽ありといふ事卽かれ他より制止せられて內の所欲をうれふる所をいふ名なる事おもふへししからは國之御中とこそいふへきを天之御中としもいふはいかなるよしそといふに御中はかれか內外おしあへる御中の事なからこれわか胸中の心算のうちなるかれか御中なれはなり主とは乃宇斯のつゝまれる名なる事宣長古事記傳にくはしくとかれたるかことしその御中を掌握する義にてかの主神事之宗源とある主の字と一律なりこの御中といふは卽神事之宗源なる事これをもておもふへし天兒屋命の裔をは中臣といふその中臣の中といふ字も卽この御中の中にてその義は中執臣の心なりと宣長かいへるに從ふへしされと中執るとは神と君との御中をとりもちて申す職なりといへるは此下にひける大中臣本系の詞を見あやまりたるものなりそれにはしたかふへからす祝詞式に伊勢齋宮內親王奉入時宣命云〽御杖代止進給布御命乎大中臣茂桙中取持氐恐美恐美毛申給久止申云々また延喜奏覽大中臣本系帳に〽高天原初而皇神之御中皇御孫之御中執持伊賀志桙不傾本末中良布留人称之中臣者云々また台記の別記にも〽本末不傾茂槍の中執持氐奉仕留中臣云々なとみえまた舒明紀の詔にも〽大臣所遣群卿者從來如嚴矛取中事奏請人等也とあるなと御中とも中ともいへるともに此御中に同しき也天下の廣きみかと御身ひとつにて國人の神を審にし給ふ事あたはさりしか故にその職にあたるへき人を中臣とはし給ひしなるへし本系帳にみえたる皇

神之御中皇御孫之御中執持とあるはかの宣長か神と君との御中をとりもつといはれし心にはあらでこれ皇神皇御孫とは皇神はまことの天津神の御心をいひ皇御孫とはその天津神の御心を御心とし給ふ帝をいふにてこれ二事にはあらすされは御中とは神と君との御中といふはあやまりにて地祇(祇)のおしあひなる御中の主におはします天神の御心をつたへて御心とし給ふ帝の御心をうけて職とする心をいふなり（枠はこの下なる淤能碁呂島之件の天沼矛に照應してみるへし）かくかれかおしあひなる御中をとる事本末を傾くへからねはしかいはれたるなりこれはその人の所欲にひとへに荷膽(擔)すれはそれを制止する人の心をうしなひそれを制止する人の心にもはら荷膽(擔)すれはその人の心をうしなふこれをふたつなからうしなはさるをいふにて本とは制止する方をいひ末とはかれか所欲の方をいふにてあるへき事制止せらるゝより所欲のうれひらるゝものなれは也これをは内外ともにうしなはさらん事もし三貴子之件の心法なくはかならす本末かたふけさる事能ふへからすから國にて豈弟之君子爲民之父母（詩經）といふ此豈弟は今いふ所の本末と同しかるへくおほゆ（後儒の詩書なとをとく事古聖賢の心にはあらすとおほゆる事ありその論長けれはこゝにはいはねとそのあらましをいはゝこれらの語すへてわか修身のうへにとりて見るかあやまり也わかみる所にてはひとへにわか身のうへの事にはあらてかれをなすうへの事なるへしとおもほしき也くはしくは猶閑をえてこれをとくへし）しかるに三貴子の心法なきか故にや礼記のうちにこれを具せられしはたゝ虞舜はかりのやうにいはれたりされは今此ふたつをうしなふましき三貴子の心法をいはゝまつかれか所欲と他の制止とをくらふる

に制止は顯理にあたり所欲は顯理にはつれたるものなりこの是非のけちめあるからは制止のかた
に荷膽(擔)してかれか所欲をいさめ捨させん事すなはちかれか爲のことくなれと制しいさめてやめん
はかりの所欲ならはもとよりかれとても思ひ捨へけれと思ひすてられねはこそその制せられてを
かしかたきをうれふるなれはそれを諫めんにしたかひたりともまことにしたかふにはあらさるへ
くしかのみならすその後はかれわれにさへ心をおきてわれを疎ぶへけれは必それ諫むへからすし
かりとてその非に荷膽(擔)せはその所欲もつひに長かるましき事なるか故にいつれをも輕重すへから
すといへとももとかれか心世の耳目ををかし人情をやふらん事をたにいとはぬ心ならはいかてか
しかその外をおさへられて内に所欲をなけかむそれ必まへにもいひしか如く所欲達するはうれし
くもあるへけれと外聞外見をすてん事のうれはしきかゆゑなりされはその所欲においてはかれみ
つから達せんに難からねとその八方の耳目人情をなこめむことにおきてかれみつから力に能はさ
る所あるか故なる事明らかならすやこゝをもていはゝ八方の耳目とかむる事なくて其所欲を達せ
まほしき事かれか欲のある所なれはそのかれかみつからもなすにかたからさる所欲の方はわれ力
をくはふるにをよはさる事にてわか力を厚く加ふへきはそのかれが力のあたはすとする所の顯路
を全うしてあたへむ事これ内外をかたふけすして中を執るの心得なる也八方制止する所の耳目を

たに心をいれてなこめあたへなはその所欲はかれみつから達せんにいとも〳〵易かるへけれはなりその制止の方をなこむることを顯事としその顯事の內にその所欲を達せしむることを幽事とし もはらかれか制止せられて內をなけき外をかへりみたる所にかゝりてこの顯幽をぬからすほとこすへきこれ三貴子の三貴子たる所以なりこの神高天原の第一座におはすもことわりこの神たによく胸中に勸請したてまつりてかれかうれふる所の世の制止をたになこめなは（八俣遠呂智をきるとその遠呂智之件にあるはこの事なり）神事はこれにてたりぬへきなりその世の制止をなこめむわさはすなはち遠呂智之件にとかれたる八塩折酒の事にてそのわさをはこゝに中段の終に天之常立神とをしへ給へるなりされは初中段はこの天之御中主神と天之常立神との二神にてことたりぬへき事なるをもてこの別天神五柱を次序せられたるか中に此最初なる天之御中主神と最後なる天之常立神とにのみ天之といふ二字をかうふらせられし也しからは此二神をのみとかれて此間なる高御產巢日神神產巢日神阿斯訶備比古遲神三はしらは無益のものをとかれたるかといふにこの三はしらまたこの二神の間に次序せてかなはぬ事ありそのこゝろはなほ次下にいふへし

古事記燈神典第一　終

古事記燈卷之一

洛陽　富士谷御杖　述

上卷神典第一

（十九行分空白）

（とカ）
た□（虫食）ひ渾沌のひらけたらん物ならはかく不易なるへきやうなし必うたかひてみるへき文意ならすや神代卷一書にへ天地混成之時云々とかゝれたるありされは渾はすなはち混なり發は一書に初判ともみえたり字義おもふへし　されは此天地渾發のことはふかき靈ある言にてたゝ天地のむかしをかたられたるにはあらさるへしかれおもふにおほよそ人の心身心は無形身は有形なるすなはち天地の化成なりそのうまるゝ時は母胎のうちにして心身具足するか故にいつくより來れりともしらされとも死ぬる時は心空虚に歸り身は土中に歸るはまのあたりなれは天地より來りて化成したりし物なる事明らかなりかの神代卷のへ渾沌如雞子とはからふみの淮南子と

いふにある語なるをやかてかり用ひられしはから國にならふにはあらて此御をしへに用あるかゆゑにて今いふことく天地(の)□(虫食)よりあひて人ひとりと化成したるかたち身を外とし心を内としたるかやかて雞卵のことくなれは也(萬葉集中へ天地依相極とよまれたるもこれより出たる也)この心身かくもと天地よりなれるなれはおのつから祖たる天地の二性を稟て心は尊く身は卑しくこの尊卑やかて二念となりて心身に屬したる事身にかゝつらへる念は皆卑しく身をはなれたる念は皆尊きこれなりたとへは道をきくに心はやかてしたかへとも身はしたかひかたきかことしされは此二念體外にいてゝ言行となるこれをは善惡二事とはいふ也かの神代卷なる清陽重濁天地の二性をとかせたまふにて卽人の心身にこの性をうけたる事おもひあはすへし(この外五倫の尊卑をはしめすへてよにあらゆる尊卑はこと〳〵く天地をあやかれるものなりされとすへて體外のことは體内よりおこる物なれは今は一人體内のうへにていふなり)神代卷には吉凶のもしあり紀中には善惡ともみえたり此記には手足をもてよしあしの二事をさとし給へり(これは手は上にありて用をなし足は下にありて用をなす物なるか故に尊卑の二用をさとしたまへるなりすへて吉凶善惡ともにもしにはかゝはるましき也たゝ内にありては尊卑の二念外に出ては尊卑の二事なりと心うへし)此故に天地は本なり心身は末なれは末とてもなほ本とひとしくあるへきことわりなるに天地は尊卑位をわきてたてれとも心身となりては身を器として心その内に入りこのふたつを兼(闕畫)て一人となれるかゆゑに尊卑位をことにせすこれにしたかひてしらす〳〵その本性をうしなひ尊も総に卑に渾したりかく尊卑を渾する時は末なりといへとももと同性の天地なれはその本の天地をさへやかて渾

沌せしむるわさなれは渾沌は天地のうへにはもとなきことなるを人心身二念を渾沌せるよりやかて天地さへ渾沌するか故に人意もて渾沌せしむるよしをさとれとて如雞子とはかゝせ給ひしなりけり（されはひらくるも亦人意なり下にいふをみて心うへし）されとも人意もて天地を渾沌せしむといふ事あるへからぬ理のことく思ふ人もあるへしけに天地は本にて人は末なれはさる理はあるへくもあらねとたとへは天に日あり雨ありてかはかしうるほす妙用あり地に物を生し長する妙用はあれとも人種をまき苗をうゑされはさる天地の妙用もいたつらなるかことし其外國君賢明なれは天地これをたすけ暴惡なれは天災地妖しきりなるもまのあたりなりかの白虹貫日なとから國にもかゝるためしいと多かるをおもふへしおほかた天地は尊卑に位しそのあはひいとはるかにして相したしむ事なきかゆゑにその中間にして萬物生々てやますいやとほ長き物なれは人もしか尊卑を渾沌しては萬物生々萬世不易をあや□□（かる）（虫食）事あたはさるへけれは渾沌をいさめ發をすゝめたまへる事たゝおのかうへのみにあらす其本なる天地をさへ渾沌してその妙用をうけたすけをうる事あるましきをあはれみ給ひてなりこの渾發の事はわか御をしへの眼目人の一大事なるかゆゑにかくはしめにその大綱をとかせ給ひなほ次下の件々この理をさとし給へる事いとねもころなれはなほ下の件々にくはしくときおきつれと今まつこの渾發の肝要をいふへしおほよそよことあしことのふたつは即かの體内なる尊卑二念

よりなり出るなれは卑念を制し尊念をもはらにせむと聖のをしへをまたすして人みなおもへり（今世こそあれ上古には他の教いまたわか御國にいたらすその世をおもひてかくはいふなり）しかれはよにあしことする人はすくなくよことする人は數多なるへきにかへりてよことする人はすくなくあしことする人は多かるいかなる故そといふにけに卑念はやかてあしことゝなりいつへけれはいかにも〳〵勉めて制すへく制しえては卑念地をはらへるかことき人もいてくるを思へは制しえさるはその人のいふかひなきか故なれはたゝ卑念を制しえぬはその人のいふかひなきにてやみぬしかはあれともとより制し難きは卑念のつねなれはよく制しうる人はいゝと稀なるか故によにすてらるゝ人多かるをおもふにたゝ制しえぬをいふかひなきにてやみなんは平等ならぬことゝなりかれしかしてやみなんはいとくはしからぬわさなる事しるしこゝに精しからさるより人々體内にして尊卑の二念をたゝかはしむるかゆゑに體外にてもしたしかるへきあはひもにきびずうときあはひもうるはしからすして體内體外ともにやすきいとまもあらすかしかゝるきそひの中よりなり出る言行なるか故におほかたの人事たゝうはへにてみれはよごとあしごとのけちめはありといへともまことのよごとゝもいひかたしその故はよにきはめて孝なる人のいまれてしりそけられすくれて忠なる人の譏せられて逐はるゝたくひ古今和漢すくなからぬはこれ一子孝なれはその兄弟はいふもさらなり人の子といふ子悉く不孝となり一臣忠なれは

その同僚はいふも更なり他の臣といふ臣こと〳〵く不忠となるか故也されはひとり忠孝なる時は他の不孝不忠をしめすわさとなるこれかのきそひの中よりおこれゝは也されとさるすくれて忠孝の人かたはらを不孝不忠にせむとの心はかつてあるましき事にてたゝ誠実に忠孝をなすにはあれともひたすら孝ならん忠ならんとする程におもはすかたはらをして不忠不孝におとしむるなりなほその人一代ならす先祖子孫をかけていへはいよ〳〵不仁なる事もあるへしかくよごとにしていたらぬ隈多かるはもとまへにいへるかことく心（は）□（虫食）純粋なる天の性をうけて尊き物なれともその器地の卑性をうけたるか故にてかの水の方圓にしたかふかことくおのつから卑念にしたかへはなり心の（虫食、身に）□□したかふしるしは禽獣の心といへともなほ人の心と同物にしてその本はともに天なから人身のうちにあれはおのつから人心なり禽獣の身内にあれはおのつから禽獣の心なる事おもふへしかく尊念も卑念にしたかひてよごとなからまことのよごとにあらさるゆゑをたつぬるにそのよごとをなすに言も身の用なり行も身の用にてその身の用をからされはすへてのよこともなすへきよしなきか故によことはよことにして私なる事をまぬかれすこゝをもてまへにいふかことくおのれ忠孝なれはかたはらをして不忠不孝におとしむるわさとはなる也けりかくよことにして言行を用ふるをは渾沌とはときたまへるにてかならす渾沌のひらくへき事をすゝめ給へるはよによことをなす人たゝよことなる事はしりてかたはらときそふわさなることは辨へしらさるをあはれみたまひてなりされは大かた

のよこともよことはよことにして人とのきそひに過さるわさなり神代卷一書云 へ及其與妹相鬪於泉平坂也伊弉諾尊曰始爲族悲及思哀者是吾之怯矣とある卽これなり（此下文にへ時泉守道者白云有言矣吾与汝已生國矣奈何更求生乎吾則當留此國不可共去是時菊理媛神亦有白事伊弉諾尊聞而善之乃散去矣とあるこの菊理媛神いかなることをかまをしけんそれをいかにきこしめしてか善したまひけんいとおほつかなき書さま也これこの渾發の間はふかき理ありてあらはにいひかたき事あれは也されは今も猶あらはにとかす口授とす）かく人おの〳〵胸中にして是非をたゝかはしむるよりおこりゆく外事なれはよことすら猶きそひとはなる也けりされはもろ〳〵の外事の本源なる胸中にてのきそひをはまつひらくへしそのひらくへき心法他なし人としてよことはなさてかなはさる事はいまさらいふに及はさる事なれとも言行を用ひてなす時はよことゝはならさるものなるか故によことにかたく言行は用ひじと决斷するをいふ也かく决斷する時は胸中にして尊卑の二念あひたゝかふ事ふつにやみぬへけれは外これにしたかひてきそひあるましき事おもひやるへし千引石之件云 へ最後其妹伊邪那美命身自追來焉尒千引石引塞其黃泉平坂其石置中各對立而度事戸之時(云)〻 神代卷一書には へ故便以千人所引磐石塞其坂路与伊弉冊尊相向而立建絕妻之誓とみえまた一書に へ于時不直默歸而盟之曰族離又曰不貟於族乃所唾之神號曰速玉之男次掃之神號泉津事觧(コトドケ)之男凡二神矣なとみゆ事戸とも（こゝに絕妻之誓と書たまへる心也されと万葉集中に留別の哥にもへ君かことゝをおひつゝそゆくとよめるもあれは夫婦離別のことにかきらさる詞なりこれは一書に事解之男とある神名のことく事杼計の下畧なるへし事は言の假字にて言もてむすほゝれたるを解く心にて臨別の時の言をいふなるへし）絕妻之誓とも事解ともいふは族離又不貟於族なといふ心にてこのゝちふたゝひ言行

をからじの心なり千引石をは（千人のちからして引つへきほとの石を云やすくはとりのけかたきさとし也）此間に引塞給ふとはすなはちこの石を道反大神とも塞坐黄泉戸大神とももをしてこのよことゝ言行の間のかよふへき道を斷たるを云（のちに五百引石もあり又力競之件に〽其建御名方神千引石擎手末而來言云々とあるはよことはなすにしく事なしとおほゆるよりこの千引石もおのつから手末にさゝくるはかりかろ〳〵ととりのけられて言行を用ふるものそとのさとし也くはしくはその件にいふをみるへし）これらをあはせてよことにかたく言行の用をからじとする心なる事を知へしかくよことを思ふ念と言行との間に千引石のことくへたてをたてゝ其通路を斷たるこれをは天地初發と□（は）（虫食）いふ也けり人おほかたよことゝ言行との間かたくかよはさる物となりぬる時心身處を異にしてまことの天地の尊卑に位したるに合すまつ心身をしてその祖たる天地にかなへされはすへてなに事も天地のことわりにたかひ神祇（祇）たすけむとおほせとも御力もをよはさるへしかしおほかたかくよことに言行を用ふることをいさめられし所謂はもはら天下をしてきそひなからしめ給ふなりけにうはへはたゝ各うるはしつくりてましはれるか故にいとのとかにもみゆれとたかひに心のうちにはきそひたえさる□□□（より小）（虫食）にしては訴たえさるへく大にしては干戈にもをよふへし人すへておとりもなくまさりもなくてたにあらは心のうちのきそひあるましけれは天下治平萬世不易たゝ掌中のものなるかことくなるへけれはなり毛々那賀之件の哥に〽毛々那賀迩伊波那佐牟遠また〽毛々那賀迩伊遠斯那世（毛々那賀とは股長にて足をのへてぬる安寝のかたち也これあらかしめ天下泰平萬世不易を掌握したる御さとしなり）ともみゆるこれ也大かた上の重きほとは

人みなかくのことくきそひにのみきそひなから猶うはへにうるはしつくりて寧きかことくにもみゆれもし上すこしも輕くなりなはたちまちきそひはあらはれぬへけれはうはへの寧きはたのむましき事ならすや（左傳に周のするの事ともを記したるをおもひあはすへし）されは上はいかにも重からてはしづめとはな□□□（らさる）（虫食）事いふも更なれとそれもなほきそひをまぬかれさるへしよにすくれたる人のいてくるは諸藝のうへにすらその益はとほしろきものにはあれともそのとほしろ□□□（きことカ）（虫食）のあやふさをくらふれはその益いかはかりそやなか〳〵よのきそひをすゝむるわさなるへししからはわか御教人をしてすくれんことをいさめ給ふかといふにしからす天下上下をしてよくもちあはせむかため也わか大御國の御てふりこゝにおいてとほしろさをさとるへし神武の御卷は御國初のことなれはしるさるへき事も多かるはさもありなんそれすらいたくすくれたまへるはかりのこともみえす（萬葉集第一卷にへかしはらのひしりの御世とよめれといと後にたゝへ申せしにてなほひしりといふ事から國にて聖といふとはことなり日知とかけるなり正字にてへ高てらす日の御子なとよめる心をもてたゝへ申せしもの也）それより開化の御卷まてはなて□（虫食）ことをもしるされす天下のさまおもひやられたる事也されは天下泰平萬世不易あらかしめ毛々那賀にあらんはよことに言行を用ふましき事上下ともにかたからんにあるへき事也まへにもくはしくいへるかことくまことの天地はもとよりひらけて尊卑に位したるを人その末にして渾沌する時はその本源なる天地までを渾沌せしむるか故に天地妙用ありといへとも人のために無益なるかこと

くなり行へし天人地の循環は經なり人と人との應接は緯なりその經の間にして天地の心にたかふ時は緯をもて經をみたるへしされは渾沌はもと天にも地にもなくてたゝ人の心身のうへにある事なから人渾沌すれはやかて天地にも渾沌あるかことくなる也天地くしひなれとも人またくしひなる事おもふへし（この事次下にくはしくいふをみるへし）之時とは人ありてこの眞理をさとりてはしめておのか心身の間族はなれてよことゝ言行と□（虫食）（を）ひとつになさすなりぬれはやかてまことの天地もはしめてひらけたるかことくなるその時をさしていふなりされはよにことゝおもへるはいまたよことに精しからさる事この御をしへによりて發悟すへし

於高天原成神名天之御中主神

高天原ももとより天にある所なれと渾沌の人天をみれはかくれてなきかことしされは天地初發之時於高天原云々とはつゝけさせたまひしなりこの高天原といふ名もとより天は高處にあるをことさらに高天としも名つけられしはいかにといふに上にとけるかことくよによごとゝおもへるはよことはよごとなれとも精しくすれはあしことにも混したるか故によごとが中にも一級低きよごとなりかく一級低き所もなほ天は天なれともこの高天原とさす所は地氣のほれとものほりいたりかたきところをいふなり（これにかきらす古文古哥には此高天原といふ名のことくいとあやしむへき事多かるはみなみむ人の心もておもひいたらしむるなりこれ言靈の道いつねなりあやしむへからす）たとは

ゝ地氣のほりて雲となり雨雪降れともその雲より上は日月光をうしなひ給はさるこれ也 末にいたりて天照大御神に高天原をしらせとよさしたまへるをも思ひあはすへし されは地氣昇るといへともなほ□□(いた)(虫食)りかたき高處をさす也としるへし猶末に此名出□(た)(虫食)る所々をもあはせてこゝろうへし 成神とはこれ又もとより高天原におはします神たちなれと渾を□(ひるカ)(虫食) 時はしめてなり出給ふかことくなれはなり次下の神たちみなこれになすらへてしるへし 上の之時といふことをはづさすしてみるへし此下なほ皆この心法たるへし 神とは神代巻云 ヘ天先成而地後定然後神聖生於其中焉とあるをこゝにあはせて思ふにすなはちこの記もこの心にて天地ひらけてのち神はなり出ませるにて天と地との間に活用ある物を申すことあきらか也人にしていはゝ言行をからすしては何事をもなす事あたはさるに言行を用ひたまはすしてしかもその妙用言行もてなすにはまさる事雲泥なるこれ神といふ名の所以なり これは神典中にとき給へる所を大成してその義をいふなりからふみにも神といふ名おほく出たりおのつからそれらの義にかなふ所もあるへけれと今はそれらによりていふにあらすもしなほからふみにとける神といふ義にかゝつらひてわか神典を思はゝ必たかふ所もあるへけれは今これを弁しおく也 わか御をしへはしめよりをはりまてひとへに神をもてとき給へるはもはら人との別をしらしめ給へるなりされは今いふ義を心えて天地ひらけされは神おはしまさすそのおはしますは天成地定の中間なる事をもさとるへし 名とは神の御たまをさとしの爲に奉られたる物也しかれとも神の妙用はたゝへつくしかたけれは御名ひとつにて尽さるはふたつもみつも奉られ大穴牟遅神なとは五の御名さへあるにておもふへし されは神名はくはしきか中にもくはしく心う

へきことなるに上古の詞今は他域の詞をみるかことくなりにたれはおほつかなき事のみ多かるそいと心くるしきそか中にもこゝかしこ御名みえまた他の書にも御名あるは□（からかカ）（虫食）へあはせておしはかりもせらるれとたゝ一所にて外にあともなき神たちはいかにもおしはかるへきたよりなしされは中にも心えられぬ神名は追考を加ふへし　天之御中主とは天之とは國之といふにわかちたる也　別天神五柱のうち初後の二はしらのみ天之とたゝへたまへるを思ふにもと初中段は□（虫食）の初後の二神をむねとする事なれともその意心えかたかるへきかゆゑに中間の二神はとき給ふなるへし　御は眞におなしく平等具足のかたちをいふ名なり萬葉集にまでといふ脚結に　脚結とはよにいふ天尓乎波也　左右とかゝれたるは左右の手の□□（こゝ）（虫食）ろなり又宇麻志といふ麻もこれにてよき人をは宇麻人とも眞人ともたゝへられたるはすへてかたよりたる所あれは廣からさるか故也これらをもてその義思ふへし　くはしくは下の宇麻志阿斯訶備比古遲神の所にいふをあはせみるへし　されは中といへともいさゝか片よれるもあるならひなれと釐毫もかたよらさる中間をは御中とはいふなりかく天地ひらけて第一位に此神ましますはおほかたむかひたる物こなたよりかなたに通するは必中間に物ありて三段にわたらされはこなたの意直には通せさるもの也もし二段なる時はその通する事倒なるそのしるし明らかなるは水上にものゝ影のうつるは悉く倒なるこれ也千里鏡といふ物山水人物等のうちなる鏡にうつるは倒なりそのうちなる鏡にうつれる影の倒なるかわか目にうつるはまた倒にうつるか故にかの山水人物かなたにあるまゝに直にみゆるかことし人の眼もとこの千里鏡のことくみる物みな倒にみえぬはかく三段にうつるかゆゑなりとそかく二段なれは倒に三段なれは直なるはその本をたつぬるに天人地のことわりにて　から國にても天地人を三才ととなふる也　天氣はまつ人にうつり

人より地にうつる地氣もまた人にうつり人より天にうつるか故に天氣さなから地に通し地氣さなから天に通するにて天より地に通し地より天に通するにはあらすかくいふゆゑはたとはゝ人ありて屋を造れば天氣も地に降る事あたはす地氣も天に昇る事あたはさる（昇降の二氣天は降るを常とす地はのほるを常とす人情もこれをあやかりて尊位の人は降るをこのみ卑位の人はのほるをこのむそのやことなき事思ふへし）これ天地の通塞人にあるしるしにて天氣の通氣循環は中位に人といふ物ありて三段なるをおもふへし（この七神三段すなはちこの天人地三段の旨をとき給ふ也）されは中位をたてされは天地の通氣かへりて倒にのみあるへきか故にかく天地ひらけて第一位に天之御中主神はまします也けりおほよそ天地間にあらゆる物はみなこの神のみたまによりてある物なから草木禽獸のたくひ人に及ふ事なけれは此神の中位とし給ふはもはら人なるへくおほしき也中臣本系帳云 へ茂梓本末不傾中良布留人謂中臣云々 とあるこの本末とは尊卑を云（尊卑は即天地なり）尊卑の中位にありてよく尊卑をもちあはするを中臣とはいふにてされはこそ天兒屋命をあかめさせ給ふ事いと厚くその御すゑもいまに長者たるをや大かた人のうへにもおのつから尊卑の位あるは即天地をあやかれるにて人はたゝ尊卑の二位なる物也と心うるはくはしからす（から國にて五倫をたつるは今いふかことく人を尊卑の二位也と心えたるか故也）もとかく天地の中位たるへき物なるか故にあらゆる人悉く中位なる事をさとるへしたとはゝ君あれは民あり（臣は中位なり）親あれは孫あり（子は中位なり）かくおのれはたゝ中位なるをや此御教よにかくれて後はたゝおのれ尊しおのれ卑しと

のみしりて尊卑の中たるへき事をしる人なくなれりこれ天地神祇(祇)の御心にそむける本なる事思ふへしかし

次高御產巢日神次神產巢日神

此次の字神典におきて一大事なりその所以は神道と唱ふるはかく神名をつらねたまへる次序のやことなきをみせたまふにてこの次序に私せすしたかふへしとの心なり孝徳紀に「惟神といふことの自注に「惟神者謂隨神道亦自有神道也とあるを思ふへし　神道といふ名孝徳紀よりはしめてみえたれはうけかたき事にいふ人もあれと無用なれはいはす有用の時にいふへけれは所見はこの記(紀)をはしめなれとふるくつたはりたる名にもあるへしいたく著しておもふましき事也　此神典に火遠理命に塩椎神のをしへたまへる詞に「差暫往將有味御路乃乘其道往者如魚鱗所造之宮室其綿津見神之宮者也とあるこの味御路とはこの次序の神道をいふにて乘其道とは卽孝徳紀の隨神道とある同義なるへしおほかたよことあしことゝなりいつるは心身の二念に屬せるものにてその本源は天地なる事まへにいふかことしこの故によこともあしことも本源にかへせはたゝ天地尊卑にてその尊卑たかひに孤ならすしてともにたつへき事なへてに思はゝさる道はかつてあるへくもおほえぬことなれと神の道にしたかへはふたつなからたつへき道は必然たるか故にその心をおもはせて味御路とはとなへられけるなるへしことにたゝその道を往者ともいはすして乘其道往者とあるはかならす神道の事なるへけれはわたくしに

神道といふ名をいやしむへきことにはあらさるへししかのみならす孝徳紀の自注もかの皇子のはしめておほせ出られたるにもあらさるへきをやされは神と神とのあひつぎ給ふにはいとふかき理あるを神名にておもはせむか爲にたゝ次の字をおきてその理をふくめられたるもの也此故にすへて次の字はいかにもふかく思ひ入るへき事也（ある法師にこの事をかたりけるに大智度論の復次といふ事はしめてとけたりとてよろこはれきかの大論はもと一千卷ありけるを龍樹菩薩つゝめて百卷にせられつとその時に上下のうちあひにておもはるへき理ははぶきて一段々々のかしらに復次の字をおかれつとおほしき也いとはるかなる國なれといとよく似たる事にてこゝを心えむためにしるしおく也）さてこの次の字の義をこゝにとくへけれと高御産巢日神ありて後より此次の字はおかれたる物なれは（すへて上なるものは下ありてのちおく物なりたとはゝ子孫ありてのち先祖といふ名もあるかことしおほよそものをとかむには此心え肝要なりすてにこゝの天地初發之時なともものちよりいへる物なり）まつこの神の名義をときてのちいふへし（以下倣之）高御産巢日神神代卷には高皇産靈尊とかきたまへり高とはすなはち高天原の高にてなへての人の天とおもへる所より一段高き天をいふ此神典中建といふも加介音通ひて同し詞なりされは建におなしく低處よりはをよひいたりかたきさかひなるを高とはいふ也萬葉集中〈高々にとよめる詞にてもしるへし御は上の御中の御に同し産巢日は自生するをいふ詞なり苔むす草むすなといひなほむすこむすめなともみなこれなり此詞の心をおもふに蒸をむすといふに同し義なるへきは地中蒸す時は草苔の類おのつから生すされはもと蒸といふ心にて自生のことをおもはする詞なるへし日は古事記傳に（本居宣長）日は踈備荒備なといふ備にて夫流といふ詞の夫理にかよへるを

その二音をあはせたる也といへりけにしかもあるへけれとむすといはゝ備ともつゝくましき詞の常なれはむすびと熟したるが本にてむすと用ふるはその備をはふけるなるへし（むすふといふは用也むすひといふは体なり字緯を伊緯にかよはして用を体(とす力)□る事つねなりひかるひかりいたゝくいたゝきなとのたくひみなこの例なるを思ふへし）結ふといふも蒸結するかたちなり（後世露むすふなといふもなほ蒸結して自生する心也）氣蒸す時は必物おのつから生するか故に蒸をもて自生をさとす詞なる事思ふへし此神名の義はなほ神産巣日神とひとつに下にとくへし神産巣日神とは神はまへにいふかことししかれともかく上にかうふらせて末にもへ神屋楯比賣命へ神活須毘神なといひへ神倭伊波禮毘古命なとたゝへ奉り又へ神集へ神夜良比ともいひ祝詞なとにはへ神問へ神議なとさま〳〵みえたりかく上にかうふらせていふは何の神と申すとはたかひめありとおほしそのたかひめは下に何の神といふ時は体となり上に神何とおく時は用となるへしたとはゝへ人皆へ皆人と用ふるかことし又山松といはゝ山に生たる松といふ也松山といはゝ松の生たる山といふけちめあるか如きを思ふへしされはかく上に神とあるは神は無形にましますか故に人目にあつからぬ妙用をいふ也（此義おのつから活路をいふ心とはなるなり）産巣日は上にいふに同し此神高御産巣日神にならひ給ひて同し御名なるに御の字は高御産巣日神にのみたゝへられたりこの神にもかならす御と申すへきことなるになきは脱たるにやとおほゆれと宣長か得られたる諸本にもなきよしをいひおかれおのれ得たりし本なとにもみえねはもとよりなき

にやあらんされは神產巣日とうつる音便におのつから御の音こもるか故にはふかれたるにやと宣長か考けにさもあるへし神代卷いまの普通の刻本に一書へ次高皇產靈尊次神產巣日尊皇產靈此云美武須毘とありてかたはらにつけたる假名にヘカンミムスヒとあり此傍訓はたのもしからぬかこ とくなれと二神をあはせて此云美武須毗とあるは必みの音はありしなるへくおほしき也御中主神より御の字あれは此神にも必御といふへき御たまはあるへき事なりこの末にいたりてへ高木神者高御產巣日神之別名とみえなほこの高木神天照大御神とあひならばして葦原中國を言趣(コトムケ)たまひしによりて祝詞に高木神を神漏岐と申し(此岐即木と同し)天照大御神を神漏美と申すまた神產巣日神をは此末にいたりて御祖命ととなへらる於夜とは母をいひて父をいはさる名也木といふ稱は此末にへ伊邪那岐伊邪那美へ沫那藝沫那美へ頰那藝頰那美なとみえてこれをおもふに岐美は父母のいさをいふ稱ならんかとおほし(君を岐美といふにあてられたるも父母のことききをかしこみていふ義なるへしから國にもへ豈弟君子民之父母なといへり父母といふにはそれとこれはたかふ所あれと相似たれはいふ也)されははこれらをあはせて思ふに高木神は父のことく御祖命は母のことくましますか故なるへし父母とはもと子孫を生する本源なれはこゝも物を生し給ふ本源にますことをおもはせたまへり(中段なる葦牙の父母なりそこを見てしるへし)おほかた父母のうつくしみいつれをいつれともいふへからねと父は嚴に母は慈なる事おのつからのことわりなれはこの二神すなはちそのけちめありとしるきは末にい(衍カ)いたりて石屋之件

のもろ〳〵の事高御産巣日神の御子思金神におもはしめ給ひ神代卷に思兼神とかゝせたまへりこれ正字とみゆ言趣のときのくさ〳〵も猶この思金神に思はしめたまひ又天若日子か雉を射たりし矢を高御産巣日神とり給ひてその矢の穴より衝返したまひし其矢にあたりて天若日子まかれるなとみえそこにへ此還矢可恐之本也とみえ神代卷にはへ此世人所謂反矢可畏之縁也とありこれ又此神の御たまのさとし也神産巣日神は速須佐之男命の大宜津比賣を殺したまひし時その神の御身になれるくさ〳〵をとり給ひて種となし給ふとみえ又大穴牟遅神のやけたる大石にやかれたまひし時蚶貝比賣蛤貝比賣をつかはして作り活かしめ給ひし事ありこれらの事をあはせておもふに高木神は地氣の一途に□(尊カ)(虫食)からむとするをいやしめ給ふ御祖命はそのいやしきを尊ひたまふ二神かく次第し給ふは地氣もと昇るを一途とする事中段にへ如浮脂といひ素菟之件にへ素菟をいふこれ也くはしくは中段に云これ卑位のものゝ常なれとそれに任せては降氣いたるへき所あるましきか故に高木神御祖命と次序したまへるなりと知るへしおほよそよの中にあらゆる物のそのはしめはこと〳〵く此御たまによりて生産せすといふ事なししかれは大かたにかけてときたまへりといへとも前にもいへるかことく萬物皆有用なりといへともこと〳〵く人のための有用にて天地にはあつかる事なし人はそのしわさによりて天神地祗(祇)の通塞にあつかる物なるか故に此二神はもはら人といふ物のいできそめたるはしめになしてときたまへるなりけにはしめは此中段にみゆるかことく葦牙のごと地

中よりやもえあかりけんそれはしらすこれまた天地初發之時といふことをはづさずしてみるへき也天地の渾發上にいひしかことくはじめはしかもありつらめとしかありけんかしらすたとひしりたりとて何はかりの益かあらんそれもまことは人の心身尊卑の渾發をいふにて渾をひらきたらん人のいてきたらん時をは之時といふにしたかひてその時天地間いまた一物もなき時とみれははしめて尊卑の中位となるへき心(の)□(虫食)人に生したるこれ卽この二神の御むすひによりてわか身の卑性かの浮脂のごときがその中位たるへき心をは生するよしをさとしたまへるにてさる心のはしめて生したるはよの中に人といふ物のはじめてなり出たるにひとしけれはなりこれによりておもへは人といふ物大かた尊卑の中位たらん事職常たるへしけに尊位の事を卑位に通し卑位のことを尊位に通してやみなはこれにまさる事あるへからすかゝらん心もたさらん人は天神たちの御心には人のやうにはおほしめさゝるへき事これにて發悟すへし大かたわか神典の御をしへ人の心の決定たゝこれにとゝまれりから國にてはくさ〳〵の敎こちたきまてあるを此神典もとより何ことをもあらはにはいはぬ事わか大御國ふりなれとも言靈のうちにすらなほ他事はをしへたまはすしてたゝこの中位たらんことをのみかへす〳〵ときさとしたまへるその簡易おもふへし簡易ならされは人にわたる事ひろからねはかく簡約に敎をたれ置給へれとかの浮脂のさがやことなくてこの二神の御

子とはなりかたきそかし

此三柱神者並獨神成坐而隱身也

以上を初段とす並とは三神の御たまその筋同しきことをさとし給へるなりこの初段は天地ひらけての天の方におきて高天原になりませる神にましくてその御たまともに中位をたてて天地の氣を通することをかの千里鏡のことくなし給はむかためなりされは人も心身の渾沌をひらき身の事門たる言行をかたく用ひぬ物となりたるその心の方は即まことの天と同しくなる也そのまことの天とおなしくなれる心の方にていへはまへの三神にくはしくとけるかことくもはら中位となるへき人をうへき事急務たるへしわか言行を用ひすしてよことをなさむ事たゝ中位の人をうるにある事なれは此初段の御教は中位の人をうへき心法なりとしるへし　獨神成坐而とはこの神典には初中下段ともにおなしさまにあるを神代卷にはこの初中段五神をはぶきたまひて（かくはふかれたる心は下にあけつらへるをみるへし）へ于時天地之中生一物狀如葦牙便化爲神號國常立尊次國狹槌尊次豐斟渟尊凡三神矣乾道獨化所以成此純男とかゝせたまへるは即こゝにては下段の獨神なりしかれとも獨神純男義はひとつにて獨神成坐といふことをはかくからふみふりにかゝせたまへる也されとこれをはからふみふりなりといふ人もあれとしからすしてなほこの獨神成坐といふにかなへり宣長もこれを自生し給ふ心

にとかれたれとおのつからといふへきをひとりといへる事ふるくはみえぬ事也これは五代十神のをはりへ上件自國之常立神以下云々とある所の細注にへ上二柱獨神各云一代次雙十神各合二神云一代也とあるを見れは獨神とは雙神の反にて双神とは夫婦の神をいひ獨神とは鰥寡をいふなる事明らかなり夫婦のことこの五代十神をはしめとして一部のうちかそへもあへぬを此神典をは史とみるきはゝ疑もあるましき事なれと神を神としては理なきかことしこれひとへに御さとしのためにて大かた婦は夫にしたかふ事意の如きものなるかゆゑにそこをおもはせむとて也されは獨神とは婦なき男をもてさとしとしたまへる也と知へし是神代卷にへ乾道獨化所以成純男とあるこゝろなりかくさとしたまへる心はおほかた婦なき男は婦ほしく思ふが常情なりされは末の毛々那賀之件に（長哥下略）へ夜知富許能迦微能美許登波夜斯麻久爾都麻（麻脱）岐迦泥氐登富登富斯故志能久迩々佐加志賣遠阿理登岐加志氐久波志志賣遠阿理登伎許志氐佐用婆比尓阿理多々斯用婆比迩阿理加用婆勢云々とみえてそこに三女をいひてしひて婦をもとむる事の丕からさるよしをくはしくときたまへりされはこの獨神とは御心にはよことをおもほせとも言行をたのみたまはぬを云垂仁の御卷にへ物言如□（く）（虫食）思ひにやかてしたかふ物は言行なれはそこをおもはせたまへる也とするへし　而とは（上下条理たかへるかともに動くをいふ脚結なり）　獨神なれは身は隱し給ふましき理なるにとの心也隱身とは人に

ていはゝ隱遁亾命なとのことくなれとしからすもとより神には御身のおはしますへきやうなけれはまして隱したまはむことわりもなき事なりされと古來諸說神典一部の諸神はこと〳〵く皇御祖にますを神とたゝへたるものなりと多くは一定なりけに萬葉集に卷へ大きみは神にしませはともまたへわか大きみの神なから神さひせすとともまたへたかてらす日の御子なとさま〳〵によまれ紀中にもあまた皇御祖とあれはそれやむ事なき事なりとはいへともよゝの帝はすなはち天つ神たちの御心をつかせたまひておはしますかゆゑにやかて皇御祖とは申すにてまことのすめら御祖にあらさる事はその證かそへあへす此事兩宮弁にくはしくとけるか故にもらしつけに神たちを皇御祖とせは隱身もうたかひあるましきをいかなれは心から石をいたきて淵に入るそといふにこの諸神をは皇御祖としてはことわりしかるへからぬ事あるか故也そのよしくはしく大旨にいへるかことく　神武天皇より命とのみとなへ奉りて神とはたゝへられさりしは天忍穗耳命より後すへて命とはとなへられつれと上卷と中卷の書さまはいと異なるか故に中卷のはしめ神武天皇よりをいふなり皇御祖たちに劣らせたまへるか故なるかことし子孫は先祖にはその德もおとりゆく事つねにはあれともさはかりの帝にもおはしましことに上卷の終にも御名出たらむからは此帝はかりにても神とたゝへたまはむにあかぬ事はあるましからすやこれをはしめとして神とは皇御祖たちのたゝへ名也とする時はなか〳〵なる事とも多かれは神をは神とし人をは人として

かくはうたかふなりけりされはこれらもなほ高天原といふ名と同法にて人身をさとしに取てその神の御たまをおもはせ給へるなるへし隠身といふ字諸書にもたえてみえさる事にて（隠の字は此末に言代主神へ天逆手矣於青柴垣打成而隠也とみえ又大國主神へ僕者於百不足八十坰手隠而侍とのりたまひし事みゆなほそこにいふをあはせて思ふへし）たゝ土左國風土記に　雄略天皇四年庚子春二月葛城山に御獵し給ひし時一言主神ともにかりし給ひし事をかける所に へ或説云時神与天皇相競有不遜之言天皇大瞋奉移土佐神隨而降神身已隠以祝代之云々 とあるのみなりされとこれはすでに御身を現したまひしことを書たれは隠身といふもことわりなるかことくなれとこれとても猶記事にはあらて倒語なる事しるし（神典の外はすへて實録と倒語とあひましへたる書法なり）　されは思ふに身とはまへにいへるかことく言行の用をさしていふなりまへに引ける言代主神の へ天逆手矣青柴垣打成而隠也とあるも大國主神の へ於百不足八十坰手隠而侍とあるもともに言行を隠したまへるよしをいふ事そこをあはせておもふへしもと此隠身といふ事かの へ物言如思と垂仁の御巻に見ゆるは御子品牟都和氣命 へ八拳鬚至于心前眞事登波受（事は言の假字にて眞言とはまへの天之御中主神の下にとけるかことく中位にしての言を云双方のためなれは眞とはいふなり登波受とは不言の心なりこれをは成長したまふ迄御もの仰られさりしことも也と心うるはひかことなるしるしはその下文に へ物言如思とあるにてあきらかなるをや）とある下文なりおのか思ひをやかておのか言行もてなす時はいと便よき事なれは誰もそれかしかるへからさる事を弁へすしかれともいさゝかも私なるすちには言行をつゝしむ人もあれとよことのすちには言行をつゝしむ人なしたとひいかはかりことわり正

しくとも思ふか如く物いひて人心に通徹する事なきはかの千里鏡にておもふへし此故に神武紀にへ以諷歌倒語掃蕩妖氣倒語之用始起乎茲とある倒は卽中位までの言をいふにてわか的とする人には言行たえて道なき事なりされは獨神とは思へともその思にしたかふ言行なきをいひしからは必言行のしたはしかるへき事なるに言行をは跡なく隱したまひてたはふれにも用ひたまはぬを獨神成坐而隱身とはときたまへるなりとしるへしけによことには通徹すましき理はよくわきまへなからおもはす言行を用ひらるゝならひなれは力競之件に へ其建御名方神千引石擎手末而來言誰來我國而忍々如此物言然欲爲力競云々 とはさとし給へる也けりこの故にもとこの獨神隱身いひもてゆけはたゝひとすちなる詞なれはいつれにもあれ一方をいひてありぬへき事なれと獨神となりてもなほ身はしたはるゝならひなれはかくはとき給ふにてもはら御をしへのねもころなるなりされは神代卷に へ乾道獨化云々 とかゝせたまへるも詞はからぶりなれとこの神典にあはせておもへはなほその義は同しき也しかれとも隱身といふ事かけたるはすこし口をしきこゝちせりされと へ是後伊弉諾尊神功既畢靈運當遷是以搆幽宮於淡路之洲寂然長隱者矣とあるは卽この隱身の義なれはこゝをもて思へとのことなるへし

次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用弊琉之時

此國稚とは所詮は國のいまたかたまらさりしはしめをいふなりされとこれまたいつよりかく國土はかたまりたりけんその始をしらねはなほこれも渾沌をひらく人の意より國稚とはいふなりはしめに天地とあるからは地とのみあるへきにこゝをはしめとして悉く國とのみありあやしむへき事也かれ思ふに地も人住まぬ地は天地の妙用もいたつらなるか上にまへにいふかことく中位なくては叶はさる事なるか故に人のすめる地としていはむかために地とはいはすして天國とのみとき給ふなるへしされは國といふにはおのつからそのうちに人ある心なりと心うへしはしめの天地といへるはいまた渾發のはしめなれは國とはいふましき理なるか故なるへし迩々藝命の御名を へ天迩岐志國迩岐志天津日高日子番能迩々藝命と申すかことく天國とむかへ給へる事つねなりされと末に大年神御子之件に へ大土神亦名土之御祖神ともありてこれらは地の義にてたゝへ給ふ御名にてうつたへに都知といふ事のなきにはあらす又國土なとも先言の件にみゆれはかた〳〵けちめあ（虫食）□と思ふへし　稚とは 神代卷一書には へ古國稚地稚之時云々 と訓せられたり伊斯といふ義いかなる心にか解かたし宣長は和可久と訓せられたり天若日子と此記にはかきたまへるを神代卷には天稚彦とかゝせ給へるなと例もしるけれは宣長か訓にしたかふへし此國稚といふ事前にもいへるか如く人心身を渾沌すれは天地もやかて渾沌するに同しく人稚き時は國もまた稚かるへけれは

これまた國のはしめをいふにあらす人意渾發の上にていふなり此するゑ多賀之件に〽故各隨依賜之命所知看之中速須佐之男命不治所命之國而八拳須至于心前啼伊佐知伎也其泣狀者靑山如枯山泣枯河海悉泣乾云々　また神代卷に〽次至蛭兒雖已三歲脚猶不立云々　また此記の中卷垂仁の御卷に景行天皇の御はらから品牟都和氣命の御事を〽是御子八拳鬚至于心前眞事登波受云々（これは神典をならひてかゝせたまへるなり眞事の事は言の假字にて（虫食、まこと）□ゝはすとは物のたまふ事成長の人のことくならぬを云なり）これらみな稚きかたちをいふにて卽垂仁の御卷のそこの下文に〽物言如思尒而勿言事云々ともみえて稚の義をしるへき所々なりかれ思ふに八拳鬚心前にいたるは成長の人のかたちなるに啼伊佐知伎とも眞事登波受ともいひ蛭兒は三歲なれとも脚不立といふ事ともにかの物言如思とあるかことく昇氣のみ一途を稚しといふなるへし地祇（祇）は人に同しからねとも人の稚きをもて國の稚きをもしるへしされは國稚とは所詮は天とひらけていかに落（マヽ）ゐへしともしられぬほとを云也（天の方をまつときたまへるかゆゑなり）人のうへにいはゝわか言行を無用の物としてその落成しられさるほとの心なりと知へし如浮脂とは神代卷には〽開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也とみえ同一書には〽古國稚地稚之時譬猶浮膏とももまた〽天地未生之時譬猶海上浮雪無所根係（この雪は雲の誤にや）ともまた〽又有物若浮膏生於空中ともみえたり脂とはなにのあふらにもあるへしあふらの水にうかへるにたとへたるはあふらは水の中におとせともましらすして浮ふものにて火をつくれは火にし

たかひてたちまち立のほる性なりされは水にはしたかはす火にはしたがふ事昇るを好み降るをこのまさる大かた地の性なることをさとし給へる也（上に地は昇ることを性とすといへるはこのゆゑなり）すへて卑しき物は卑しからむことをいとひ尊からむことをこのむ事この地の性をあやかれるか故なるへし末にいたりて素菟之件に菟をいふは菟は前脚みじかく後脚長きか故に山をくたることを難くしのほる事を易くするをもてさとしとし給ふすなはちこの浮脂をいひかへたまへる也くはしくはそこをみてこゝをもおもふへし大かた上坐にすゑらるれはよろこはしく下坐におかるれはたのしまさるこれ人身この浮脂の性をうけたるかゆゑなり初段にくはしくとけるかことく國の性かく浮脂のことくたゝひたふるに昇らむことを欲するものにてそれにまかする時はさはかり生産の妙用ありなから無益のものとなりぬへきか故に御産巣日の二神まつこの浮脂にむかひて神わさはほとこし給ふなりけりまつこの浮脂にむかひたまひて抑揚し給ふ事をおもふに此氣地上にのほれはしはらくは盛なれともつひに永く保つへからす火のあぶらつきて消るかことし此氣を地中にもたすれは卽生産の氣となるか故なるへし（こゝにはしめて火水の事出たり火水の二神末にみえたり）なほ神避之件をあはせて心うへし而といふ字は浮脂のことき性なるにのほる事をえすしてたゝよふ事をさとし給へる也これもはら初段のいさをゝみせ給ふ也久羅下は國のかたまらて海にたゝよふかたちを表したまへる也海月をとられたるはたゝ海にたゝ

よふ物なるか故にて別に意もあるましき事なから猶おもふに末に　へ於比良夫貝其手見咋合而云々とあるをおもひよすれはもと昇ることを一途としたれとも初段三神の御たまによりてのほりもえすまた卑しくもなりはてえさるは平なるかゆゑにたひらなる海月をしもとられたるにやとおほしきなり那洲とは如といふに同しけれとけちめあるへし如とはその物を主としていひ那洲とはわか用を主にしていふかたかへり遠呂智之件に　へ於湯津爪櫛取成其童女而云々なといふ成は脚結にはあらねともその義は同しこれをもて思ふへしすへて裝と脚結とのかよへるはへいぬへぬなとの類多しくはしく亡父脚結抄にあけつらへるをみるへしされは見なし聞なしいひなすほとの心なりとしるへし　多陀用弊琉とは漂にてかなたこなたして係りよる方なきを云まへにいふかことく產巢日の二神をうけてかの浮脂のことき地氣の地中におさへられかつ揚らるゝによりて猶豫不定なるさまをさとし給へる也されは卽浮脂のことき地氣のたゝよふにてこれ生產の本源なるをいふ也と心うへし淤能碁呂嶋之件に　へ脩理固成是多陀用弊流之國賜天沼矛而言依賜也とみえその下文もはら交接して子を生する事をとき給へりこゝはもと地にむかひての初段をときその初段をうけたる地氣をとかれたるなれとこれ人といふものゝなりいつるはしめをときたまへるなれはまへにいふか如く父母あやかりて子をうむを思はせたまへる書法にて淤能碁呂嶋の件にひとつ筋なりかれこゝに　へ如浮脂而久羅下那洲多陀用弊琉とは卽母の情をときたまへる心也とみるへし父沼矛をもてかくほと母の情たゝよふ事こゝのかた

ちにひとし生産のはしめおもひあはすへき也この浮脂久羅下の二喩もと今いふかことく二すちなるを神代卷にあるひは一喩なるにまとひて一すちに二喩を取りたまへるかことく思ふ人もあるへけれと神代卷にも遊魚浮雲なと二喩なるもあり此神典には而といふ字をはさみたまへれは二喩二すちなる事あきらかなる書法なり之時とは初段をうけたる時の地の方の情をいふ也これまた天地初發の下にいへるかことく人ありて天地をひらきたらんその地の方の心をおもはせんとて初段のゝち之時とは書たまへる也

如葦牙因萠騰之物而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神

國稚の上なる次の字はこゝまてにかゝれりと心うへし如葦牙とは葦牙は葦の芽をいふ名なりもとこれをしもとり出たまへるは國稚くしていまた埿土のことくなる所より生する物をいふへきか故にとられたるなり末にいたりて〻葦舩なといひまたわか御國の大名をは豐葦原之千秋長五百秋之水穗國ととなへられたるもみなこゝの葦牙をうけて葦の字もておもはせられたるもの也これは此葦にかきらす神典中こと〳〵く同字一律なる事くはしく大旨にのへおけるかことしかく如とも之物ともかゝせたまへるにてまことの葦牙の上にあらさる事はしるけれともしからは之物とさし給へるはなに物そとも思ひたつねたる人古來なかりしはいかに今更いふもさらなれともこゝにかく

あるはたとへにてまことに葦牙の萠騰るといふにあらすされは如とも又之物ともかゝせたまへるなり神代卷には〽天地之中生一物狀如葦牙便化神號國常立尊とみえおなし一書には〽天地初判一物在於虛中狀貌難言其中有化生之神号國常立尊亦曰國立尊ともまた〽于時國中生物狀如葦牙之抽出也因此有化生之神号可美葦牙彥舅尊ともまた〽天地混成之時始有神人焉号可美葦牙彥舅尊ともまた〽天地未生之時譬猶海上浮雲無所根係其中生一物如葦牙之初生埿中也便化爲人号國常立尊ともまた〽天地初判有物若葦牙生於空中因此化神号天常立尊次可美葦牙彥舅尊とも又〽有物若浮膏生於空中因此化神號國常立尊とも見えたりまつその時をいふには或は天地ひらけての後あり或は天地混成之時ともあり混成は渾發の心にかゝれたるにやともおほしその處をいふにも或は虛中あるひは國中或は空中なとありて一定ならす狀をいふにもいさゝかの異同あれともまつ如葦牙といふたとへ一定なるかうちに狀貌難言とあるは見所あることゝちすその故はもとこのもえあかる物のかたちいかにとも形容しかたきかまことにてしひて比すれは葦牙の如しといふ心なるへけれは也されはいはゝ葦牙の萠騰るか如しといへとももとその狀貌いふへからさる物をいふとみゆるかうへにその處も虛中空中國中なとあれは萠騰るとはあれともこれもたゝ形容していふにてまこと埿よりいつる物をいふにはあらすとみえたりこれ何物ならんたつねしらん事いと難きわさなりしかれともこれらの書ともを大觀

するにこの如葦芽といふ物は人なるへくおほしき也人のうまるゝ□(はしめカ)(虫食)母胎の内にてその身の出來る時□(け)(虫食)にいかなる狀ともしりかたかるへけれと母胎に自生するは母の身はまへにいへるかことく即地なれは也 涅中より葦芽のもえあかるかことくなれはいふなるへし虚□(中)(虫食)空中は天のことにあらす空虚の中をいふにて卽天地間なり國中といへるもかく人なりとする時は諸傳にかなふへき也まへに引たる神代卷一書の中に〵始有神人とも又〵便化爲人ともかゝれたるはさる故にやとおほしさて此物に因りて成ますとは天地初發の下にいへるか如く人の身は地なり心は天なり男女ましはりて孕む時ふと子宮に出來る身にすなはち舍るはやかて天神にしてしか人身に舍り給ふさまを因とはかゝせたまへるなりこの因の字からふみをもていはゝ如の字の上にあるへき文意なりと心うへしされともわか御國文はから文字をかられたるまてにてたゝよみやすからんやうにのみかゝれたるなれはひかむましき也 而といふ字は人身に因りたらんからには天神にはあるましきかことくなれとなほ天神なるよしをみせられたるなり成神の心えまへにいふに同し 此成神の二字初段の三神のはしめさてこの中段二神のはしめ又下段二神のはしめ又五代十神のはしめにあるはその神たち或は三はしあるは二はし□(虫食)なとおの〳〵御たぐひのわきあるをしらしめたまへるものなり 宇麻志とは神代卷には可美と書たまへれともと此詞は美味をいふより他の事にも形容に用ふるなるへし末に〵味御路とも又〵阿遲鉏高日子根神の阿遲鉏も味しき心なるを思ふへしそのあちはひいふへからさるをいふ詞なりよき人を眞人宇麻人ともたゝふる事此神名なとよりおこれるなるへし 日本紀にうま人といふに君子なとかゝせたまへれとからくにゝて君子といふにはすこしたかふ所ありそのたかふとはひろきとせはき也くはしくは神典一部をみわたしてその同しからぬを知へし わか口腹の

欲するにその食味のよくかなふをいふより□□□（すへて）（虫食）双方のうちあひのいふへからさる味はひをはいふ也　阿斯訶備とはすなはち葦牙をいふにてその葦牙のこととき物に因り給ふか故に御名とせられたるなり比□（古）（虫食）遅とは神代巻に彦舅とかゝせたまへる舅の字はいたくなつみてはみるへからす此末に大國主神の嫡后須勢理毘賣命いたく嫉ましゝ時に〽日子遅神和備氐云々　とありまたその奥に火遠理命をも〽其比古遅荅歌曰云々　ともあるを思ふに比古遅とは夫をいふ名とみえたりこの神を比古遅神ととなへられたるは身の方を妹として身と配偶し給ふかゆゑなりかくいふ故は先言之件に〽於是問其妹伊邪那美命曰汝身者如何成荅曰吾身者成々不成合處一處在尓伊邪那岐命詔我身者成々而成餘處一處在故以此吾身成餘處刺塞汝身不成合處而爲生成国土奈何伊邪那美命荅曰然善云々これ心身のことをとかせたまへるものなれは也　淤能碁呂嶋之件人のうま□□（虫食、るゝ力）はしめよりをのへたまへるそのつゞきなれはいふ也　されは阿斯訶備比古遅神とは葦牙を婦としてその夫の神なりとの心也此神名の義をつかねて思ふに天神御身をかくし給ひて言行おはしまさぬにおのか言行とし給ふへき身をえてそれにやとり給ふそのわか言行にあらすしてやかてわか言行となるあちはひをはたたへたまへるなりされはまへにいへるか如く人はおのかおもひをはおのか言行とすへきものにはあらすおのか言行はたゝ双方の情を通はすための物なりとさとりてゆめ〳〵中位をうしなふましき事也もし中位をうしなはゝ天つ神の御心には

そむくへしかしわか大御國の御てふり他域にたかへる事もはらこゝにあり大かたおのか言行なれはやかておのか思をかくれはいと便よき事なるをそのひかか心えをあはれみ給ひてかく御をしへのねもころなる御うつくしみをあふくへし上に夫婦の事をいふをこの神の御たまにておもひあはすへしされと此神は獨神にましますか故にうたかふ人もあるへけれとこれは中位の人のうへをいふにて獨神にはあつからすおもひまとふましき事なり

次天之常立神

天之はまへにいへるかことく國之といふにわかたれたるものなり常立は字のことく常に立ます心なりと古來いひ來れゝと神代巻一書に〻其中自有化生之神號國常立尊亦曰國底立尊とあるによりて常立は底立といふが本にて登古とかよひ又同書に〻次國狹槌尊亦曰國狹立(衍)立尊とあれは立は槌のかよへるにて常立は底槌の心ならんと宣長いはれたりけに何津知と申す神名いと多かれはしかにもあるへしこれにしたかひていはゝ底はもと曾伎古のつゝまれるなり曾伎とは放の義にて萬葉集にこの字を曾伎とも佐氣とも訓せられたり同書に〻山乃曾伎野乃曾伎なともいへり後世は曾古とたにいへは海底水底なとの類にのみいへとかみつよにてはたゝこゝもとより放たる所をは皆いへりその例いと多しされはこれも曾伎古の心にみるへし此山の曾伎野の曾伎とは山は高く野は低けれは即この天の曾伎國の曾伎をいひかへたるなるへくおほゆ古は處の義也こゝかしこは此處彼處の心なりその外ありかすみか雲のおくかなともかよはせ又いつくいつこなといふもみな處の字の心なり津は野椎神天之狹土神國之狹

土神なとの津に同しく時津風天津風なといふかことき脚結なりその方に著（ツキ）たるをさとす詞なり知は母知といふ詞の上畧なりと眞淵ぬしか説にて宣長もこれに同しけに〈因河海持別而〈因山野持別而なともいひ又〈久比奢母智神なともみえまた大穴牟遅神を〈大名持神と□（か）（虫食）かれたるもみゆれは持の上畧にもあるへししかれともこの久比奢母智大名持なとは久比奢も名もその間に津とはいはてたゞちに母智といふこれ母智といはゝやかて持別給ふ心となるか故なるへしもと母智といふ詞をおもふに何津持とはいふへき詞にあらすましてこれらの例もあれはかの説うけかたしかれおもふに　まろがちとある知の心にてすなはち比古遅の遅も同しかるへし父を知々といふ知また烏賊なといひてその恩の廣大なるをたゝへていふ称なるへし神代卷に〈於是共生日神號大日孁貴（大日孁貴此云於保比屢咩能武智孁音力丁反云々）とあるこの武智（ムツチ）は親知のはふかりたる称なるへけれは（親は親詞に皇親とあるこれなり）これらをもおもひあはすへし此曾伎處とはいつかたをいふそといふに天より中間に人を隔てその人より地までの間をさすなるへし天と人との間は現當なり人を隔てのかなたは放處（ソキコ）なれはかくはいふ也されは人身によりて天の意を地に達したまふこれをは天之常立神とは申すなりすへて此より彼に達するは中間に物ありて此よりはその中位まていたり彼にはその中位より達するにあらされは此の□（虫食）に彼に通徹する事あるへからさる事まへにいへる千里鏡のことわりおもふへしま

へにもいへるかことく人の言行はおほかたわか思のためにはあらすかく中位にての言行といふ事わするましき事也上の比古遅神はわれに言行なきにわか言行にまされる言行あることをさとし給ふにて此天之常立神はその中位となりての言行のやうをさとしたまへるなりとしるへし中位の人わか思を言行とする時はかなたよりみきく所そのあちはひかきりなきものなり此意味ときつくすへからす人事にせちならん人はこの二神の御をしへもやかてさとるへき也されは上の五神の御心をつきて此神道にしたかはむ人は中位の人をえむ事急務にしてその中位の人をえむ心法はもはら初段三神たりとしるへしその要をいはゝかく中位となるへき人はわれに屬したらん人は用ふへからすそのしるしあるへからすたゝわか的とする方より葦牙のことくもえあからんをは中位とはたつへしとの心なりけにいかはかり中位とすへき人からたりともわか方よりたてたらん中位は天之常立神もしるしなき事今めのまへにもこのためし多き事也しかれともかなたよりもえあかれる葦牙の如き物をはわか言行とせむ事いとも／＼かたきわさにて（こゝにはあらはにいひかたきよしもありくはしくは口授にもらしつ）こゝにおいてふかく心は用ふへき事なる也くはしくは末の件々をみてしるへしかへす／＼此中位をたてゝその中位の言行をかる妙法百萬億兆の人の平等なるへき事これにしく事あるましき也此末五百引之件に〽内者富良々々　外者須夫々々　とある内外は神代卷に〽顯露事(アラハニコト)〽幽事(ヤミコト)といふに同しく此内

とは中位よりこなたをいひ（これ幽なり）外とは中位よりかなたをいふ（顯露なり）たとはゝ女のすきかけはあらはなるより心にくきかことく中位よりこなたの幽事かなたの顯露事のうちより透く所意味森々たるへし夫婦のさとしまへにくはしくいへるかことく思に言行のしたかふをいふかなかに五倫のうち夫婦は房事あるかゆゑにて卽この內外幽顯のさまを思はせたまへる也常立神の妙用なほこゝろみてさとるへし

此二柱神亦獨神成坐而隱身也

亦とは初段の三神に同しといふ也されは獨神隱身の義もまた同しといへとも此中段は天神なから人身によりたまふ神にませは人事のうへとなりたるかゆゑに獨神隱身もひときは切なるを思ふへしこゝをもて天神は人をしていはせふるまはせ給ふよしをさとし給へる心なる事明らかならすや此故に人の下位にむかひてほとこす言行はたゝ上位の人の意を傳ふるより外はあるへからすその言行みな中位よりいつるか故に天地はたかひに直にしたしむといふ事なしつねに獨神にまし〱てしかも御身をかくし給ふはみつから言行をほとこさむよりも中位の人の言行を用ふるはまへにいひしかことく地に通徹すへきかゆゑ也されはいかはかりやむことなく□□(虫食)ありともさしむかひて言行をほとこすへき事にあらすみな中位よりかなたにて言行はあるへき事なるをわきまへすし

て直言する事いとをさなしともをさなきわさならすや

上件五柱神者別天神

かくこの常立の二神の間をかきりたまへるはふかき理ある事也かくたりをひきくして注せられしは神の類をわかち段落をしめしたまへるなり□(虫食、ま)た細字に神の数なと注せられしはその段落のうちの小段落なりそのゆゑはまへにもいへるかことく上の天之常立神は人天意を地に通することをつかさとり給ふ神にてその以上の四神こと〳〵くこの神のためになりませるなりされはこの初中段の五神はともに天より地にむかひての神わさなれは人事におきても上位より下位にむかひての心得也こゝをもて別天神とは注したまへる也此下の諸神も地祗(祇)にはましませとも猶よことの方は天にひとしきかゆゑにそこにわかたむとて別の字はおかれ此常立二神の間をしもわからて段落をみせたまへる也神代巻には初中段五神をはふきて下段國之常立神を第一位としたまへるももと此神典天子の御つたへにて以上五神は庶人の無益なりとおほしてよにひろくなしたまへる時にはふかれたるにやまたはこの初中段をはひめたまへるにやあらんされと庶人とてもほと〳〵につけてかならす上位あることはたかふ事あるましけれは猶あらんにしくへからす此記は　天武天皇まて御代〳〵誦しつたへさせ給へるよし序にみゆれは返々正しき事思ふへし

次成神名國之常立神

これよりを下段とす次の字の心はまた下にいふへし成神名の三字はまへにいふに同し國之とは天之といふにむかへたるなり常立の二字も亦上に同し此神所詮はまへの天之常立神と同神にして天の方と國の方とに御たまをわかちたまへるなりかくいふ所謂は神代卷には　天地之中生一物狀如葦牙便化爲神號國常立尊とありて葦牙のことき物をは直に此神とし給へり一書にも此例ありされは此記にはその葦牙の如き物に因り□□（虫食）をは宇麻志阿斯訶備比古遲神と申しさて天之常立神國之常立神と次第したまへる也葦牙の如き物とは尊卑にかゝはらすすへて人は中位とたてゝいふにてその用の尊卑につくをわけて天之常立國之常立とわけて次序したまへるなるへしとは神代卷に葦牙のことき物をやかて國常立尊としたまへるに明らかなる也されは此下段のはしめにも中段の如く次如葦牙因萠騰之物而成神名宇麻志阿斯訶備比古遲神とありて次に此神をおかるへき事なれと上にゆつりたる書法なりしかのみならす天之國之とわけたるのみにて同し御名をたゝへたまへるにかならす比古遲神をふたつにわりたる物也とは明らかならすやされはこの神の御たまは上の天之常立神に反して地意をもて天に通し給ふ御たま也その人より天までの間は地よりは人を隔たる放處（ソキ）なるなりすへての心得上の天之常立神の下にいへるかことし此國之常立神天之御中主神より次序□□（してカ）（虫食）なりませれは第六位の神にはましませとも（神代卷に天先成而地後定とあるをもおもふへし）しかれとも此下段にお

きてあやしむへき事ありその故は此下段の國之常立神豊雲野獨神隠身とあるをもてみれは此二神は上に屬しまた五代十神のをはりに へ上件自國之常立神以下伊邪那美神以前竝稱神世七代とあるをもてみれは此二神は下に屬せられたりしかる時は上にも屬し下にも屬することをさとれとの書法なる事明らかなり神代巻に初中段をはふかれたるももと下段はことにみつへきかためとおほしき也こゝをもておもふに下段の二神は上の五神の尾にして下の五代十神の首なり此下段二神を上に屬しては七神□（虫食、三）段をいはせたりこれ私の名なから三段といふ字は末の宇氣比之件にも出たれはなり神世七代は古名にならひていふまたこの下段の二神をのそきて上五はしらをは初中段五神とも別天神ともいはせたりおなしくのそきて下十神をは五代十神といふこの名も亦わたくしなれとそこの細注の心をえていふ也これ學ふ人の心えんにたよりよからんかためにわたくしの名をもいはする也これひとへにこの下段の二神は上下の眼目たる事をさとしたまへるなりとしるへしこゝを眼目とするゆゑは大かたわか御教の要訣なりもと天地昇降の二氣いつれをはしめとするそといふに東方昇氣を先とし西方降氣を後とする事日出を朝とし日沒を夕とするに明らか也しかるにその昇氣は地より昇る也降氣は天より降る也もと天は尊く地は卑しけれは西方降氣の方をこそ朝とはすへきに東方昇氣を朝とするふかき理ある事にて凡情とたかへる所也その證は伊邪那美命火神を生まして神避ましゝ時多具理屎尿の神をうみ給ひ次和久産巣日神をうみ給ひその神の御子を豊宇氣毘賣神とあり此神は今伊勢の山田原にます外宮の大神なり倭姫命世記に天照大御神　雄畧天皇に へ朝夕乃大御饌毛安久不聞食とのりたまひしかは驚悟りたまひて丹波国吉佐宮より此神をむかへ奉りて今

の山田原にうつしまつらせたまひしよしみえたり此驚悟とは今いふかことく通情には天は尊く地は卑しとのみ心え□□(虫食、たる)はあやまりなる事をおとろきさとらせたまひしを云なり此神吉佐宮におはしましゝは崇神天皇の御時はしめて倭の笠縫邑にまつらせ給ひそれより丹波の吉佐宮にうつしたまひまたそれより倭の伊豆加志本の宮にうつさせたまひしその時天照大御神はかりをうつしたてまつられて此神は吉佐宮にのこし奉られしなるへしくはしくは両宮弁にいへるをみるへし　宇氣とは食をいふ大かた食は人のくらひていのちいくへき物にてこれを生する事もはら地の妙用すなはち豊宇氣毘賣神の御たまなるなり此神典には大宜都比賣神を神代卷には保食神と申す異名同神にますこの保食神をは月讀尊のころしたまひし此神典には大宜都比賣神を速須佐之男命のころしたまひつとみゆその神の御身にくさ〳〵の物なれり此神典にはへ神産巣日御祖命令取茲成種とはかりみゆ神代卷一書にはいとくはしくてへ天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可食而活之也乃以粟稗麥豆爲陸田種子以稻爲水田種子又因定天邑君卽以其稻種始殖于天狹田及長田其秋垂穎八握莫々然甚快也とみえたり萬葉集中の哥に多くへ聞食ともへ御食都國ともよまれたるけに食はいのちいくへき物なるか故に食を重くし給ふ事此神典中にも所々みゆるはもはらかの神避之件を思はせんかためなる也かく食をもて□□(おも)(虫食)しとし給ふ事はかの昇降の二氣昇氣をはしめとすといへともその昇氣のおこる本源をたつぬれは地の卑處ありて降氣をうくるよりおこるなり天は降氣をつかさとり給へは降氣をくださむ事はいとやすけれとも中段にいへるかことく地の性もと浮脂素苑のことく卑しからむことを好ますしては降すによしなし此故に初段をもて卑處をたてしめたまひて終に天之常立神には

をよふなり此天之常立神は卽降氣にてこの神をうくる處卽地の卑處にしてそこを本源として此國之常立神はなりますよしをおもはせられたる文法なりされは天之常立神と國之常立神との中間まことに昇降の循環萬代不易なることの本始なるか故にこゝをしもかきりて上をは別天神とはし給へる也また神代巻には國之常立神をはしめとし給へるもなほ此心なるなりしかはあれともその天の降氣も昇氣地より來らされは降氣久しくつゞくへからす此故に昇氣をはしめとはし給ふにて食とは卽此國之常立神の御事にてその食は地の卑處を本始とするよしをさとしの爲に多具理屎尿の神をとき給ふ此多具理も屎も尿もみなそのもとは口より飲み食らひたる物なるをおもへとてなりその終に豊宇氣毘賣神ますは卽國之常立神ならひに豊雲野神の御事なる也豊の字の照應をもてみるにまことは豊宇氣毘賣神は豊雲野神の御事なるへけれと國之常立神をも兼(闕畫)たりとおほゆるよしもあればこゝにいふなり（いはゝ畢竟下段の二神は一神のことし初段中段もこれに同し伊勢の外宮の社傳に國之常立神をあはせ祭られたりといせにてある人のいへるいと見所あることなり又遷宮を拜みける時外宮に用ひらるゝひらはりこと〳〵く雲形の二大字ありこれはもとは雲の形を画にてかきたりしを儀式なとに錄するとて雲形とありしをよくも心えすてしか二大字となれるなるへしこれらは豊雲野神の御さとしにこそとおほえし）かくいふしるし神典中に多きか中に木花之件に大山津見神の御女石長比賣木花之佐久夜毘賣姉妹をたてまつられしに姉は醜く妹はかほよかりしかは妹をとゝめたまひて姉石長比賣をかへし給ひし時大山津見神いたく恥てまをしたまはく「我之女二竝立奉由者使石長比賣者天神御子之命雖雨零風吹恒如

石而常堅不動坐亦使木花之佐久夜毘賣者如木花之榮々坐宇氣比氐貢進此令返石長比賣而獨留木花之佐久夜毘賣故天神御子之御壽者木花之阿摩比能微坐故是以至于今天皇命等之御命不長也とあるこの壽又命とはすなはち食をくらはされは永く保つましきものなれはいふにて姉の醜く妹のかほよきは即醜は卑也美は尊をさとしその醜は妹たるへきに姉とし給へるは尊卑はもとやむことなけれと卑の方をかへりて上とせされはつひになにごとも永くつゝくましきよしをしめし給へる也かく姉をかへし妹をとゝめ給ふは人情のうへをいふにていのち長からさるを弁へさるをはさとらしめ給ふ也けりされはおほかた尊卑といへは上下はいふも更也とおもふは人情にて尊はもと卑より生するゆゑをさとれとて此下段をしも上下にわたして眼目たることをしめし給へるなり眼目とは所詮は卑を尊の本始とする事をいふ也としるへし此故に上なる別天神五柱は初段は地をして卑處を設しめ給ふ也中段はその卑處に降氣をくだし給ふをいふされとも卑處は人にしても誰ありて耻さる者なきものなれは中位に人をたてゝその中位より降氣をくだし給ふこれその卑處をあらはにせさらんか爲也あらはにたにあらされは耻る所もうすけれはたつましき卑處も猶たつへき理なれは也また天の方も卑處はこの中位の陰となりてあらはならすこれ中段の妙功也されは此卑處といふもあらはに卑處のたつにはあらすその味はひおもふへし此故に降氣は先なれともなほ先とせす

して昇氣を先とたつる事天津神の御心なれは此國之常立神は浮脂の如く根なし草にはあらぬ事しるへし 浮脂はよにいふ俠者の類也一時はめてたけれとも天地循環の常にそむけりすへて一時の事はいかはかりめてたくともつひには保つへからさる事もとそのおこる所出へき所より出されはなりかへす〳〵天之常立神國之常立神二はしらの間をおもふへし

次豊雲野神

此神をは神代卷には 〽次豊斟渟尊 國常立尊次國狭槌尊次にこの神也 とみえ一書には 〽豊國主尊亦曰豊組野尊亦曰豊香節野尊亦曰浮經野豊買尊亦曰豊國野尊亦曰豊齧野尊亦曰葉木國野尊亦曰見野尊ともみえて御名くさ〳〵ありといへとも此記の雲といふ字正字なるへくおほしきは末に 〽茲大神 速須佐之男命の御事也 初作須賀宮之時自其地雲立騰尓作御歌其歌曰夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻碁微尓夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐袁とみえて出雲國はことに故ありけに所々に出たるか故也もと

葉木は運の下略にやしからは水をはこふ雲の主といふ心にや見野尊とは水主の義にて即雲は水をふくめるものなれは同義なるへし

文化二年乙丑詠藻（墨消）

古事記燈　三

古事記

平安　富士谷成元謹述

天地初發之時（アメツチノハシメテヒラクルトキ）

天とはすへて上たる位を引すべていふなり君父夫兄師長その外すへて賢者また位階の一級にてもたかき人またその一事一道にて先なる人なとをは天といふ中に蘊在してさとしたる也これいかて蘊在したりといふといふに上としてしのく事能はさるものゝ最第一なるものは天なりさて人の上となりて君父夫兄師長なとみな天をあやかりたるものなり人にのみもかきらす服器なとまても袴は肩にかけかたく肩衣は袴にしかたく頭巾は足袋とすへからさる位あり又食器は土にすうへからす下駄は席上におくへからさるかことく猶これらもすへて此天のうちにふくめていふにて即これも又天にあやかれるものなり〇地とは臣子婦弟門弟その外不肖者淺官卑位の人また衣服器材まてもおしこめていふなりこれ又天と同しくみな地にあやかれるものなりす

淨不淨モナホ上下ナリコノ故ニ神道ニハ不淨ヲイムヿナホコノ天地ヲヒラキ玉フ故ナリ淨シト云フハ上下ノ正シクテイカナル寸（トキ）モ乱レヌ也或ハ上下或ハ下上トナルヲ不淨トハイフナリコレ即隱身ニ合ス淨ハ身隱ルヽナリ不淨ハ身アラハルヽナリト知ヘシ隱身ハ即天地ヲ發ク術ナリト思フヘシ

コレハコヽノ三神五神ニカヽレルヿニアラス下ノ天孫天クタリマシテ此國ノシツマリシマ

テヲ云ナリ次ノ國稚云々之時トイヘルハ伊邪那岐命ノ神功ヲヲヘ玉ヒシマテニカヽレリ天之御中主神ト豊雲野神トニテ天地發タリトハ云也

初ノ字ハ下ノ成ト云字ニ應セリ

發ノヿ一旦ヒラケテモ又混乱スルヤウナルヿニテハヒラケタリトハイヒカタシ造次顚沛ニモ混セヌヲイフヘシ

へて下たる位を蘊在せる也○初發之時とはよく心えすはあるへからす此初發の義を心えあやまり給ひてかの舍人親王は神代紀に古天地未割陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合摶易重濁之凝堨難故天先成而地後定然後神聖生其中焉とかき給へりこれは天地をまことの天地とみたまへるよりのあやまり也此事大事なる事は神道の意趣たゝこゝにある事なれはもとよりたかひては何も〳〵たかふなり此論くはしくは惣論にゆつりてこゝにいはす宣長此親王の天地をはからふみにもたれてかき給へるをみあさみたるは実に古今の大功なりされとも猶実にもたれて天地をさとしとしる事能はす此故に此初發といふ事をひらくるといふはからめきたりとして萬葉の哥によりてはしめの時とよめるはかへりて誤れり萬葉は哥なれは文字の數定まりたるによりてはしめの時ゆなともよめと文にはその例にしかたき事あり畢竟ひらくるといふがからくさきをいかりてのわさなるまて也されは今は猶ふるき点にしたかひて訓する也さて天地初發といへは天地の出來はしめたる時のやうなれとさにあらす天も地もいつはしまれりともいふへからす人ありて天を天とし地を地とするより天地もあるへしされはたとひ天地はありてもこれ

スヘテ蘊在スルハヿヲ器スルニアラス四維上下小大ヲモスヘテモラサジトノ爲ナリ心エタカフヘカラス漢土ノ凡ハヒトツ〱論スルヿアラハナリアラハニスレハソノ一ツ〱ニ片ヨル故ニツクサントスレハ儒教ノ如ク委シクイハテハカナハヌナリ委シケレハ煩ナリ煩ナレハ行ニ切ナラヌカ上ニ物ニワタル所セハシコノ故ニワカ國ニ委シカラヌヲ貴フハ物ニヒロクワタリテシカモ行ニ切ナルヲ貴フナリ皇國ト漢土トノ教ノサマノタカフ所コヽニ見ルヘシ

をよくひらきはしむる人なくてはいつまてもひらけさるにひとしたとへはひとつの國あるにその國の民をよくをさめやすからしむる人ある時はその國はしめて上下わかるゝ也これその一國の天地のはしめてひらくる也しからはその國もとよりなきかといふにもとよりある國にしてはしめてひらくる也この反をもていへはたとひ君ありて臣もいと多く諸官とゝのほりて民國にみちたりとも上下の別みたれたる時はありてもなきにひとしき也これを天地のいまたひらけさるさきとすれは初發はよく心えしるへし小さき一家わか一身一心といへとも猶これに蘊在してさとしたるものなり頭巾を足袋とし足袋を頭巾とせは頭巾も足袋もありてもなきにひとしからすやいかなる事ありとも頭巾はかしらに著て足にははかし足袋はいかなる事ありともあしにはきてかしらには著じとしかと心を定めたる時か初發なり此故にこれたゝむかしの事にあらすこれは

主上の皇統めてたく今にいたる迄此國に君とまし〱て人しのく心なきその御はしめを記したるものにて一國一縣一邑一家の主たりともこれをまなひたらんにいかてかその子孫めてたくさかえさらんされは天地初發といふはたゝわか身わかめの前に

ある事なりと心うへしさて又心うへき事は初發といふ事は上たるものは上たるをたのみて下に私する事なく下たるもの上をかろしめ蔑にしてをかす事なきをはひらくといふなりたゝ上を上下を下とすとのみ心えては又下の隱身の道に心えたかひ出來へし儒教にては五倫とわけてをしへたりわか國にてはこまかにわかたすしてたゝ五倫を天地におしこめて上下にはかりわけてをしふる也いつれをいつれともいふへきにはあらねとわか國風はたゝ物をあらはにせす穆々として人に心を用させてゆくをしへなりその心を用さするは事を活かさん爲也儒教よりみれはいたつてあらく危なる教と思ふへけれとさにあらすたとへていはゝ暖なる時には風邪を感するかことくくはしくをしふるにも又弊はありてかたをたのみてかへりて心に油斷か生する也その油斷をさせぬやうにするには大くゝりのみをあたへてその中のこまかなることをいはぬ時は人みなよく前後を考へて後事に處する也仁義といふも仕方をしる時はそのかたによりてそれを（もて）はかへりて人目をたふらかす事ありこれ心の死したる故也上下とのみわけて細目をさとさぬは活たる仁義になし出させんか爲なり仲尼は心を廢して形をとるといふも理なるはあまり心にかゝつらへは形をわするゝ物也しかのみ

ならす心はいかやうにも理屈のつくものなれはたのみにしにくきもの也形をもてくゝれは心は形にしたかひてやむ事をえす道に處するか故なり又わか神道のをしへは形を上下といふものにてくゝりさて行はよく思ひはかりてふるまふやうにといふ也さらに形をすつるにあらす猶下の隱身をあはせて心うへし儒教をあしといふにもあらすわか國の風俗にはわか神道の切なる所をのふる也されは麁なるはかへりて人に深切なる也と知へし麁も深切密も不深切とみるか神道の大事なり之時といふ之はよむへからす時とは卽此神々のなり出たまへると同時なるを云也これ神代卷の說にたかふ所也かれは然後神聖云々とあれは後と心えたまへる也これ誤也はしめにもいふかことく天地のひらくるは人のひらく故にひらくるなりひらき給ひし神おはしまさすはいかてか天地もひらけんしからは神さきになり出給ひて後天地ひらけたる歟といふに天地をひらかぬ神人はありてもなきにひとしきか故にいつれをさきいつれを後とはいひかたし神のひらき給ふ故にひらけ天地ひらくる故に神ともたゝへられ給ふ也たゝへらるゝとはその德を称せらるゝ也しかれは衆みな感して事おのつからなりゆく事うたかひなきもの也かくたゝへられぬ人はありてもなきにひとしきか故に

いつれを先いつれを後ともいふへからねは初發之時と大やうにかける也されは時の字は同時の心なりとみるへし上下の別をみたらさる事正しけれはおのれをひきくしてもおのつから衆みなその徳をたゝふる也しかるに人みなおのれを貴はれんとする事は大なる不調法なりわれをたふとはれんと思はゝ上下の別をはかたく正しくすへししかる時はおのつから人貴ふへき事うたかふにをよはす此時の字こゝをさとしてかきたるものなり

於高天原（タカマノハラニ）

これ又宣長は實にもたれて高天原とは神のおはします國にて天にあり即此國のさまと同しき也これを有無とうたかふは人の智を用ふる也といへともなきにたかはぬ事をありといはむにいかてか天下の人のをしへとはならん人みな合点するこそ公なる敎とはいはめ宣長ひとへにから人の理をこまかに論するをいみたる儆よりかへりて此道の旨にたつねいたる事麁なりけるこそ口をしけれすへてわか國は活たる事多合なる義はのふるにのへかたきか故に物をもてさとすかつねなり上の天地もこれなり末々に出たる物々もみな此心え也惣論にいふかことく予哥のよみやうに年來心をゆ

造次顛沛ニモ天地混セヌヲミレハタノモシキ心ヲオコス故ニ人ソノ徳ヲ称スルナリ徳トイフハ上下ノ分ヲカタク混セヌヲイフヘシ

私ヲ交ヘオクヿアタハサル地ヲ云ナリ

神代紀上廿九丁左石窟ノ段ノ一書云上畧於是天下恒闇無復晝夜之殊故會八十萬神於天高市（タケチ）而問之云々纂疏云一云大和國高市郡是也コノ纂疏ノ一云ノ說ワカイフ高天原ニカナヘリ本文ニハ天安河原ニツトヘ玉フトイ

ヘリ安河原ハ卽高市郡
ノ河ノホトリナルヘシ

たねたるしるしに此神書のみやうをもしれる也ゆめ〳〵うたかふへからすされは宜長かいはゆる智を用ふるにあらすわか國風にしたかひてとく也されは此高天原はその德廣大にしてしのくへからさる神のおはします場所を設ていふ也されと設たりとて無下になきことをいふにあらす眼前にこれある場所なりこれも心を用ひてよくみれは此高天原といふ位はみゆるなり常人の心身をすうる場所とは及ひもつかす高尙なる場所なるを云也その高尙なるとはいかにといふにたゝ自然の道理のとほりなる所に安んするを云也人の常情よりみれはその自然の道理はことの外なる所におほゆる也佛も法華經に安住希有地と說れたる此希有地といふは卽この高天原のこと也さて此天といふ名をつけたるもの末々にもいと多し天沼矛天之御柱なといふこれ也これ皆自然のさかひにてしのくへからさるをさとすなり卽上の天地といふ天も自然の道理ありて才畧智謀にてしのきかふる事あたはさる分際のかきりをいふ也されはその居場所の高尙なるをは高天原とはなつけたるもの也此故に別に設たるにはあらておもへはめのまへにもありおもはされはなき場所なり今日より此神々の御德に合すれはおのつからわか身は高天原に處するなり儒敎にも大人君子なといふは德の名な

りこれらの称すなはちこれにひとしきいひやうなりさて神道にては高天原　葦原中國　根國とみつにわくる也みつにわくる中に根國は即高天原と葦原中國とにはふかれたる所を云くはしくは下にいふへし釈氏は十界にわかちていふなりこれらをもてみるに五倫は上下に蘊在し十界は三つに蘊在したゝ簡約をもて大くゝりをたてその中に活かして全うする道をえせしむるかわか國の風俗なり簡約なるは自行に切なるか爲也此下の神々はみな此高天原にまします也たゝ神をのみはいはて高天原といふ事をいふは神々の御徳をこゝにすべてみする爲なり自然にしたかふ人の居る場所也と心うれは明らか也されとこゝにてはその義のへつくしかたし下文にいたりてその所々にて證をもつてさとるへしかつ又此四字はこゝにはさみていふなり　初發之時成神名とつゝくへきか中にはさめる也これは文の法にて末々にも多し或人わか此高天原をいふことを信せすしていふ天降また天にのほるなといふからは猶釈氏の三十三天のことく天にかゝる所ありとしていふにあらすや今かく眼前にありといふにその證ありやとゝふ答へて曰その證あまたありといへとも中にもいとよく聞ゆるは此書に故其伊邪那岐大神者坐淡海之多賀也とあるを神代紀には是後伊弉諾尊神功既畢

靈運當遷是以搆幽宮於淡路之洲寂然長隱者矣亦曰伊弉諾尊功既至矣徳亦大矣於是登天報命仍留宅於日之少宮矣とありこれたゝよには一說としてみれともさにあらす淡海之多賀は卽天なる日之少宮なり多賀宮をやかて日之少宮と称したるものなりしかる時は高天原は猶葦原中國とこと所にはあらさるもの也ある人高天原は日向也根國は出雲也なといふはちかくして遠し日向も出雲も大和も和泉も高天原とすれは高天原也根國とすれは根國なるへき也猶すゑにいたりて解しうへき所々あるをみるへし宣長かいふことくいかに智をのそけといふとて天に安のかはら眞名井なとあり又天若日子の射上たる矢をその穴よりつきかへし給ふなといふ事をは三才の童子ならすはいかてか信せん

（赤紙貼付、異筆）神ト云所ニテ 不故 タスヘシ

神ハ下ヨリ上ヲ称スル名ナリサレハ下ヲソタテ、不測ノ徳アルヿヲヨロコヒアカメテイフ心ナルナリ

成神(ナリマセルカミ)。名天之御中主神(ミナハアメノミナカヌシノカミ)

成ますとはうまれ給へることゝ思へれともさにあらすたとへは三十にして天地をひらかはその時が成れる也と知へしその中にはうまれ給へるもあるへけれとそれにかゝはりて実事にもたるゝは神書のみやうにたかふ也うまれたるにもあれ年たけてにもあれ天地をひらきたる時をなるとは心うへきなり○神といふ事よく心えしるへし

いはゝ人のよと成てはみな人と称し神のよにては人をみな神と称すといふへけれとそれはなほいたらぬ所ある説なりしからは又よき人を神と称するかと思ふにあらふる神あしき神なといひその外にもたゝの人を神ともいへることありこれらをあはせていふに神と称するはもと上の義にて上としてあふく人を称する也その證あり伊邪那岐伊邪那美の二柱をはしめには神と称しそれより天神の命をうけて此國をさめ給ふ所よりして二柱ともに命（ミコト）と称すさて伊邪那美命黄泉比良坂にしてことゝわたし給ひて後は号其伊邪那美命謂黄泉津大神とありこれは夫あるうちは夫にしたかひ給ふ故に命と称しこゝにてひとりとなりて黄泉をうしはき給ふ故に大神といふなりはしめに神といふはいまた夫婦となり給はぬさきなれは也又伊邪那岐命もこゝよりは又伊邪那岐大神と称すこれはみそきの段にかゝる處なれは也いかにといふに日神月

神ト命トイフヿ同寸（時）ニウマレ玉ヘ𪜈日神ハ神ト云月神須佐之男神ハソノ寸ヨリ命ト云コレヲミレハ命ハ仮人□（ナ）リ神トハ下ヲメクミテ下ヨリ褻犯スヘカラサル徳アルノ称ナリ　上トイヘハモノ、上下ノ名也神ハ上声上ハ去声ニテソノ義ワカル、ナリ日本紀ノ至尊ヲ尊ト云ノ説ハ可笑ヿナリ文字ヲ以テワカツハカラノヿナリ

コノ例ヲ以テスヘテ何神ト斗カキテ事跡ナキモ皆ソノ下ニ下トスル黨歟又ハ一村一縣ノ長タルヿオシテ知ヘシサナケレハ一人ニテ或ハ神或ハ命ト称セル例ニアタラス

神産巣日神モ大國主ノ神ノ段ニハ命トカケリコレハ天之御中主神ノ御言ヲウケ玉フ故ニヤ高御産巣日神ハ代リテ事ヲトラセ玉ヘハイツマテモ神ト稱スルニヤ

神武紀ニ饒速日命ハ長髄彦君トシツカヘタリ後コノ命長髄彦ヲキリテ神武ニ歸順スコノ段ヲ□（ミ）ルニコノ命トイヘルハ借号タルヘシ　モトコノ命モ天神ノ御子ナルヿハ羽々矢歩靫ヲモチ玉ヘリサレト天降タマヒシハ天孫コソ天神ノ命ナレコノ命ハ私ニ天降玉ヒシナルヘキハツヒニ此神武ニ降玉ヘリ天神ノモト命シ玉ヒシナラハ歸順スヘキニアラスコレ借号ナル所謂也コレラヲ以テ命トイフ号ノ義ヲ知ヘシ宰ヲミコトモチト訓スルモコノ命トイフニ同シ心ナリ

字面ニテハタヽ天ノ眞中ニ主タル神ト云心ナリコレハ形容ナリ人ノ私智ノカヽラヌ所ノシカモ片ヨルヿナキヿヲ心トシテオハス形容ナリ御中トイフニテ同シ天トイヘ𪜈コトニソノ眞中ニ主タルナレハ不測ナル中ニモ不測ナルヲタトヘタリ即天ノ造化ノ力ト御徳合シタルヲ云ナリ造化ハマコトニ不測ナルハ人ヲモ生シ草木ヲモ生スルカ如シコレヲ表シテ中ト云

御中ハ眞中也眞ハ外ニソレニ及ハヌモノヲタテヽイフナリサレハ中トイフ中ニモキツスイノ所ト云心也

神なとの御父とあふかれ給ふか故に称を改たる也又須佐之男命も大國主神の根堅洲國におはす時より大神と称せりこれ又根國にてうしはき給ふ故也これらの證明らか也されはたとひ邪神とても人の上となりその一村一邑にても一黨の上となりたるをはたゝへたる物也と知へし命といふは天神の命にあつかり給ふを称する名也○天之御中主神御名の心は自然の道理に御徳合したるをしめす也御中とは眞中也眞中とはその變化自在にして不測なるをさとす也片よる物はうこくにかたき理にして中はいつれへはたらかんにも自在の地なりこれ下の隠身の論に合する也自然の道理はある時はわか心にはたかふ事もとほる事あるもの也しかるにその中をとりていかやうにもなる事を御徳とし給ふ神にましませはかくはたゝへて眞中の宇斯とは申奉れる也すへて神名は後よりたゝへて申したるもの也と知へし御みつからつき給へるにはあらさるもの也さて神名はよくたつねしるへき事は神書のかきやうにて多くは事実をは神名にふくめて思はせたるものなりことに伊邪那岐伊邪那美二神の天降ますまての所はたゝ神名をあけたるのみにて一事も事実を記せられさるはみな神名にて思へとの事也されは此神の御徳まことにあふくにもあまりある御事なりしかるに此次の

高御産巣日神神産巣日神は末々に御事跡あるか故に神名帳なとをみるに御社も所々におはすに此神の御やしろはひと所もおはさぬは心えぬ事也これひとへに御事跡のありなしによれる事なるへしこれをもてみれは　崇神帝の御代に八十萬神たちをまつらせ給ふ事はしまれりしかるにその御社とものの中にはかならす此御神の御社もありけんか神名帳つくられける比はうしなはれたるなるへしそのうしなはれたる源をたつぬるに舎人親王の敝をつたへたる也いかにといふに神代紀はこの記の別天神といふ五神をはふきたまへりされとも産巣日の二神はまのあたり御事跡あるか故に御やしろもつたはり此御神の御社はこと神の御社となれる歟又はたえたる歟又はむすひの神の同社なるにこれはとなへすしてかれをとなへ奉れる物歟この疑いつれそはかならすあたるへき也此神をはつしては神道の大旨にすへてたかひゆく事也御事跡こそしるされね神名とかつ下の隱身といふ事をかけあはせ前後をはかるに此神にまされる神はましまさぬ也御事跡のありなしにかゝはるは日に執して心の死せる故也後世になりて神道次第におとろへたる事かゝる心えたかひよりの事とおほしき也猶くはしくは隱身の所にあはせていふへし

次高御産巣日神次神産巣日神

次とは宣長竪横をもて弁したりそのことしされとそれはたゞ次といふ字の表の心まて也ふかき心をこめてかゝれたる物とみえたりその故はいかなる故ともいかなるよしともかゝてたゝ次云々次云々とかけるは此次の字にてそのつきてなりませる心はえをかうかへしれとての事なる事明らか也されは今思ふに天之御中主神の御徳によりて感し來りて事をたすけ給ふ神たちなるを云にて此次の字に感應の道理をおもはせたる物也猶下の葦牙の所にいふをあはせて心うへし人を得るは難き事にから人の論あるはさる事なれとわか神道にその人をうる道ある事此次の字にこもれり凡人をうるとてたつねもとめたりともいつこをたつきとしてかもとめんもとめえたりとも我をたすけん哉たすけしやもはかりかたし人を得る道さやうの事にはあらすみな上下の別を決してみたらぬ事たしかなるをみる時はいつこよりとなく我業をたすくへき人あつまり來る事うたかひなしたとはゝ治世には勇猛の士かくれていつかたにありともしらねと世みたれて良將明將の下には英雄豪壯の士いつかたよりとなく來りあつまるかことしたゝ〳〵人をうるわさにかゝはらす一心不亂に天地をひらきたらん

にいかてか我業をたすくる人の感得せられさらん天上にあり地下にあれは萬物おのつから生し來る道理にこれ又あやかれる道理なれはかへす〳〵智畧の道をたちて無二無三に上下の別をくつれ倒れさる心かけ道理にかなはゝおもふ筋はもとめすしてなり出來らんものなりもとめてえたる物は危ふし感得せるものゝたのもしき事はいはすとも明らかなる事をや○高御産巣日神神産巣日神　高も御も表徳なり神もこれに同し日は尊称なりくはしくは宣長弁したりされと日は夫里（ブリ）のつゝまりたるなるへし里言に何ぶるといふはわさとしかしなす事をいへとも古言のはさにあらす内のやうすを表していふ義なり奇毗（クシビ）なといふもこれに同しふたつの産巣日神そのむし（産）給ふ御徳はひとしくて高と神とふたすちなり高は下への号令この神よりいつるをもてたゝへ奉れる也神は下を活かしゆくの名なれはこれは下を活かし給ふ御徳を表する也されはくはしくいへは高御産巣日は外をつかさとり給ひ神産巣日は内をつかさとり給ふ御神也この證は へ於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神脩理固成是多陀用弊琉之國云々 これは天神とおしこめていへと下の例をもてみるに高木神むねとおはしゝ事しるし へ今吾所生之子不良猶宜白天神之御所卽共参上請天神之命尓天神

中昔ヨリハ夫流トイフ詞ソノ義タカヒ來レリことなしふともトヨメルハヿアルチヿナシトイフカホスル心ナリ今世ノ云フ所コノ義ナリ古ハサニアラスちはやふる神トイフモイチハヤカラヌチシヒテイチハヤガル心ニハアラス只イチハヤキサマノ内ニアル所チ云ナリ

或案日ノ字清音ナレハ須日ノ反志ナルカ故ニむしノ神トイフチ巣日トカケルニヤ可考

高低ハ物ノ場所ニツキテ云加美志毛ハ思ノ上

ニテ云コレヲモテミレハ自ラ内外ノ心ソナハレリ加美志毛モ高低モ中ヲタテ、オキテノ別ナカラ高低ハ目ニアツカリ加美志毛ハ思ニアツカレリ　又宇倍トイヒ志多トイフハ方角ニアツカル詞ナリイカニトナレハ万葉ニ〽三非ノウヘヨリ〽高野原ノウヘナトヨメル皆ソノホトリノ心ニテ下トノ方ヲワクル爲ノ詞ナリ志毛志多ハコレヲオシテシルヘシ

御ハ眞ニテむすひニモタ、普通ノムスヒモアリコレハ非類ノムスヒナルヲモテイフナリ

之命以布斗麻迩尓卜相而詔云々　この天神も同前たるへし〽八百萬神於天安之河原神集集而高御産巣日神之御子思金神令思云々　この思金神すへてなにの思慮をもはしめて出し給ふ神なり此神の御子なるか故なる事思ふへし〽尓高御産巣日神天照大御神之命以於天安河之河原神集八百萬神集而思金神令思而詔云々　これは天孫を葦原中國にあまくたし給はむとての事なりそのはしめてつかはさるへき神をえらひ給ふなり〽高御産巣日神天照大御神亦問諸神等云々　これ又その時の事也この下にも今一所同し詞あり〽坐天安河之河原天照大御神高木神之御所中略高木神取其矢見者血着其矢乃至取其矢自其矢穴衝返下者云々　これは天若日子の段なり〽天照大御神高木神之命以詔天宇受賣神云々〽問大國主神言天照大御神高木神之(命脱)以問使之云々これは建御雷神天鳥船神の言なり〽尓天照大御神高木神之命以云々　これは天孫にあまくたり給はんことを命し給ふ時の事也〽高木神之女萬幡豊秋津師比賣命云々　これは忍穂耳命の妃火照命迩々藝命の御母なり葦原中國をなかくをさめしらせ給ふへき迩々藝命の御母たるも此神の御女なれは也〽故尓天照大御神高木神之命以云々　これは猨田毗古神をとひあらはしに宇受賣神をつかはされし時の事なり記中の例かくのことしすへて

顯露事(アラハニコト)の大事にあつかれる事はみな此神の御ちから也又顯宗紀三年二月阿閉臣事代を任那につかはされし時月神人にかゝりて高皇産靈尊に山城の哥荒樔田(ノアラスタ)をたてまつれとのたまひ又四月日神人にかゝりて事代にのたまひて同し尊に磐余田を奉れと仰られし事ありその御德のほと思ひしるへしかくのことく御德の肩をならふる神なきをもて高とは申奉れる也又神産巣日神の御事は〈其御祖命哭患而参上于天請神産巣日之命時云々　これは大國主神の八十神たちにやき殺され給ひし時此神に請給ひてふたゝひ活たまへる時の事なり〈此者神産巣日神之御子少名毗古那神故尓白上於神産巣日御祖命者答告此者実我子也於子之中自我手股久岐斯子也故与汝葦原色許男命爲兄弟而作堅其国云々　日本紀には高御産巣日神の御子とあるは此ふたつの神を女男のことくおもはれてあやまりたるものなるへし少名毗古那神は神産巣日神の御子たるへき事は大國主神顯事ををさめ給ふをたすけたまへる神なれは高木神の御子にはあらさるへし〈高天原者神産巣日御祖命之登陀流天之新巣之凝烟云々　これは櫛八玉神大國主神の膳夫となりての詞なりこれ食物のうへの事なりこれら皆人をめくみ活かす事にあつかり給ふ御德不測なるを表して神産巣日とは申奉るなり拾遺に〈君みれ

はむすふの神そうらめしきつれなき人をなにつくりけんとあるをもみるにこれは神産巣日神の方たるへく思はるゝ也狭衣にへいとかくしもつくりおききこえさせけんむすふの神さへうらめしけれとあるも同しかるへしされは高といふは高下(マヽ)神といふは上下の高と上となれは同し心にはあれとも高といふは位にあづかり神といふは徳にあつかれり此故に高と稱するは仰きて褻犯す心なくうやまひいつきて下よりいふ名なり神といふはおもふにおもひいたられす不測の徳のしのきかたきを下よりいふ名なれはおのつから配してみれは外と内とを持わけ給ふなり日本紀神代卷上云於是大己貴神報曰天神勅教慇懃如此敢不從命乎吾所治顯露事者皇孫當治吾將退治幽事乃薦岐神於二神曰是當代我而奉從也吾將自此避去卽躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣云々この顯露事幽事はすなはち此高御産巣日神と神産巣日神との御徳にかなへりされはすへて今よにある所の顯事は高御産巣日神のむすひたまひ幽事は神産巣日神のむすひ給ひしなりと知へし記に出たる所の御事跡はその大なるをあけて餘を蘊在したる也と知へし

此三柱神者竝獨神成坐而隱身也

すへて神を柱と称する事下の天之御柱の所にくはしくいふをあはせてみるへし凡柱といへるは屋と地とのもちあひをなすものゝたとへに用たりされは天地の間にして天地の妙用を和し給ふものは神なれはいく柱とはいふなりこれも猶尊称なり此故に不徳の人にいくはしらなといふ事更にみえぬ也此三神を別天神の中にも又さらにわかちていふは此次々の神たちにも御徳いたくまさり給へるを示したるものなりけに〳〵天之御中主神なくはふたつのむすひの神いかてか事をとり給はむふたつのむすひの神なくはいかてか御志を遂給はん此事は猶下の隱身の所にて思ひしるへし○並宣長みなとよめるは祠(詞)の義にくはしからぬ故也皆とはたとはゝこれほとならんとおもふにその餘までも皆といふ心也こゝには叶ふへきにあらすならひにとよむへしならひには此三神同等なるを云なりこれは獨神以下隱身也まての事をはさしたる也○獨神成坐而　ひとり神とつゝけて宣長はよめりこれは下の細注に獨神とあるに對して獨神とあるをもていふ也されとひとりがみと濁る時は古めきては聞ゆれと登の

上下のくつれぬやうに持あはすの名なり龍田ノ風ノ神ヲ天之中柱國之中柱トイフモ風ハ天ト地ノ氣ヲ和スル物ナレハナリ氣ハ動ク和スル也風ノ徳ヲ柱トイフナト他ノ國ニナキヿナリ

此三柱ノ神ノ隱身ノ五シタル所ニテ凡隱身ノ道ハ明ラカナルカ故ニコトニ此三柱神ヲ引分タルナリ此三柱神者云★トイフ一句コノ三神ヲ以テ隱身ノ道ヲサトレトテノヿナリサレハコノアトノ四神ハコノ隱身ヲマナヒ玉ヘルナリ

又案
二人ナレハイヒアハセテモ徳ヲ成就シワカ非ヲモ彼ガ見ル故ニ自ラツ、シマル、モノナリシカルニコノ神タチハ自ラ非ヲシリ已(己)ニ克玉ヒシコトヲハ獨神ト成坐トハイフナリコレホトノ神々ナルニ御身ヲ隱シ玉ヘリト云也サレハ即アトノ双神タチハスコシハコ、ノ七柱ニハ及ヒタマハサリケルヿ自ラ言外ニコモレリ此故ハ伊邪那岐伊邪那美ノ二神後ニ御身アラハレ玉ヒシヿ記中ニ見エタルヲ以テコ、ノ獨神成坐トイフヿノ格別ナルヿヲシルヘシ

字なくては語をなさす猶これはひとり神となりましてと古点のことくよむへきなりさて此而もし心をとめてみるへし下の隱身といふまてにかゝらては而もし詮なき也まつ獨神となりますといふは獨にて双へる神一代の徳をあはせ給へるほとの神と称せられ給ふをいふ也成とはみつから成るにあらす神と称せられたまふをいふ也さて而もじの心二人の徳を一人にあはせたるほとの神なれは御身はかくし給ふに及はぬはづ（す）の事とたれも思ふへき事なるにそれに御身をかくし給へりといふ也その御志の天下萬世に一向なるをみせていへる一句なり而もじふかく味はひしるへしこの句をもつて塵斗も私の心なくたゝ天下の民をあはれみ萬世に安からんことをおほしめす事を思ひ入らせんとてかゝれたる也成といふ事みつからなる事にせぬはいかにといふに全体修行といふものこれにてよしとみつから定むる道理はなき事也人より定めされは徳のほとはさたまるへからすこれによりていふなり○隱身也　これ　神道の肝要天下國家天子庶人大小長短古今貫通の大規範なり宣長もこれはたゝ神さり給ふことのやうに見たり神避玉ふならはやかて神避玉ふとこそかゝめ末にも皆しかりこゝにのみ隱身とかゝんやうやはある又此記中たゝこゝの七柱の神にのみ隱身とあるを

竝トイフ字心ヲツクヘシ此三神御事跡アルトナキトハアレトモナホ三神𪜈ニ隱身シ玉ヘリトイフヿヲコノ字ニテサトシタルモノナリ下ノ隱身ノ所ニトクヲアハセテミルヘシコレ言行アルモ隱身ナキモ隱身ナリトイフ說ノ因テオコレル所ナリ

も思ふへしこれかつて神さり給ふ事にあらすまつ此七柱の神より末には隠身の字ふつとみえぬに土佐國風土記曰土佐郡郡家西去四里有土左高賀茂大社其神名爲一言主尊一説曰大穴六道尊子味鉏高彦根尊暦錄曰雄畧天皇四年庚子春二月獵于葛城山或説云時神与天皇相競有不遜之言天皇大瞋奉移土左神隨而降神身巳（已）隠以祝代之初至賀茂之地後遷于此社而高野天皇宝字八年從五位上高賀茂朝臣田守等奏而奉迎鎮於葛城山東下高宮岡上其和魂者猶留彼国于今祭礼令正月十五日（立例）といふ事ありこれをもておもふに此神もとより此時に神さりたまへるにあらす雄畧帝の御妨をなし給はすなり給ひし事を隠身と書たるもの也されは隠身は死するにあらす人の耳目にあつからぬやうに身を持なすを云也もとより天地の間には必人ありて天地の間を隔つへたつるか故に天地の氣通せすして邪氣行はるゝなり君臣父子夫婦昆弟朋友の間も猶かくのことしわか身を以てさまたけされは上下の情おのつから塞かる事なくよろつ幸來る事疑なき事也さて此隠身隠の字にもたれてみれは山林へ身をかくす歟さらても人前に身をさし出さぬ事のやうなれとさにあらす身といふ字もすへて言行のいつる器なれは概して身といふなりと知へしされは隠身は時により所により身分により事からに

タトヘハ父ノヨミタル哥ヲ子カ上木スルハ産巣日ナリワカヨミタル哥ヲワカ上木スルハ人コレヲソシルヿシラス〱隠身ノ道ノ人心ニアル證ナリ又古書ヲ注スルハ古人ノ意ヲ述ルナレハモツテヒラキテスヘシコレ又産巣日ナリ

天地トイフハ上下ナリ上下トハ君臣父子等ナリサレトコレヲ君臣トイフヲ實物ニシテ心エテハキコエヌナリ君モ臣モ象ニタテオイテサテ身ヲ隠スヘシ臣ノ身ニシテ身ヲカクスハ即臣ノ象斗ニテ身ノカクル、ナリ君ニシテ隠身スルハ身ハカクレテ君ノ象ハアルナリト知ヘシサナクテハ隠身トイフヿ心エカタシソノノコル象トイフハ何ソヤ

ナホ此ワカ身ナリワカ身ハアリナカラカクル、コレヲ隱身トイフナリサレハ實ニモタルレハ山林ヘニテモ身ヲカクサ子ハナラヌナリ私心ナシニ道心斗ノ君道心斗ノ臣トイフモノニナル也コレヲ隱身ト云也牡丹餅カ大小サシテ行タル話ノ如シ孝子ナトノ無爲ハ此身ヲヤカテ無爲ニスルナリソレハ實ニモタレタル也

よりていひ行ふも隱となりいはす行はぬも顯となる事あり又いひ行ふか顯となりいはす行はぬか隱となる事もあり此差畧坌からねは隱身は坌からぬなり此隱顯時所位にしたかひてたかふ所人々の修業のある場所也この隱の字に幽顯ともにかゝる事はなにゝよりて知るそといふに此三柱の神の御行跡をもて察し知れりその故に天之御中主神は萬物をあはれみなかく此國を安國としつめまさむの御志はありなから御ふるまひには出したまはぬを産巣日神二柱はその御志をうけたすけ奉りて幽顯に持わけ給ひて（この持わくる事は前文にいふかことし猶そのもちわくるといふより所は下文に川海によりて持わけ山野によりて持分たまふといふ事ありくはしくは下文をみてしるへし）御ふるまひに出してもろ〳〵の物事をむすひ出したまへりしかるに二柱の神は御ふるまひはあれともわか御心にあらす天之御中主神の御志なり天之御中主神は御志はわか御志なから御ふるまひに出させ給はすされは天之御中主神は御ふるまひなくして御身かくれ産巣日の二神は御ふるまひありなから御身かくれたりこれをもて隱身の道はたゝわか私情かゝらんはたとひ公なる事からとてもふるまへは身あらはれ又いかはかり人の耳目に入てふるまへとも他の志をうけてわか私情にあらねは身あらはれさるをむねとすこれを引つかねていはゝ善事惡事によらすわか心に乘する事はいはすふ

るまはぬか隱身也たゝなにこともわか心にいとはしくきらはしく思ふ事のみをいひふるまひのみする時はしらすく\身はかくるゝなりたとへていはゝ物見にゆくと學問にゆくとは物見にはゆかまほし學問にはゆかまうき也されは物見にはゆかて學問にゆくを身かくれたりとす又身にあつかれる公事と學問にゆくとは學問にゆかん方おもしろくもあるへけれと學問にはゆかて公事を務むるか隱事也又公事ひとつのうへにても世に勤ずきといふ人ありさる人は輿に乘してつとむるもの也その外立身出世を心として人に抽てつとむるはいふに及はす公務といへとも餘りつとめ過る時は衆人にかゝるへき惡われ一人にかゝるへきか故に衆の爲に上下の道をは身を以て塞くなりこれらをもて隱身の旨をはかり知へし礼記礼運に君は身を政の內に藏すといふ事あり似たる事なれとたかふ所ありそれは政をさためてそれはかりに任して私情を出さぬをはいふ也我隱身は政なとやうにかたをたてゝそれに任してゆくにあらす我國は文字の義にはかゝはる事にあらねとこの隱身藏身はおのつから隱藏の字義のわかれありてかれは政の內に身のみえぬやうにするなりこの隱身はをさむるの義にあらすよくく\思ふへし身をかくしてその禍福の來る事たかふ證は伊邪那岐命の禊

の段に八十禍津日神次大禍津日神此二神者所到其穢繁國之時因汚垢而所成神之者也これ此國をうみをへすして妹の命をうしなひ給ひし故に國のために再ひ呼かへし給はむとて黄泉におはしけるなからなほ甚しき御ふるまひなるより御身あらはれたるか故に此二神の禍御身になりませり又次爲直其禍而所成神名神直毗神次大直毘神次伊豆能賣神この三柱神はふたゝひかへり給ひて御身をかくし給へるか故になりませる也これ禍を司とり給ふ神と福をつかさとり給ふ神なりこれ卽隱身のせてかなはぬ徵なり又石屋の段に於是天照大御神見畏開天之石屋戸而刺許母理坐也尒高天原皆暗葦原中國悉闇因此而常夜徃於是万神之聲者狹蠅那須滿万妖悉發云々これ速須佐之男命御身をあらはして上下の妨をなし給ひしか故に此妖いたれる也猶その證あくるにいとまあらす猶はしめの伊邪那美命の言さきたてたまひて御子をうませ給ふに淡嶋と水蛭子とのうまれ給ひしに後天神の御もとにとひ奉り給ひて詔のまゝに再言を擧なほし給ひてもろ〳〵の國をうませ給ひしなと身の隱不隱の故なりすへて記せる所たゝ此身の隱不隱のふたつを出す卽此三柱の神の隱身の道をのりとしてみれは一部の意は全くえらるへきなり此隱身の道ののりにたかふには禍來りのりにかなへるは

福來る事そのしるし明らかなるをみるへし此隱身といふも儒道にいはゆる仁義をはしめ孝悌忠信なとすへての德名を藴在したるもの也藴在せるは事をいかさんとての事也漢土はひろき國なるか故に四方に夷狄ありて人の心もおのつからのとかならさるを以て心を廢して形にくゝり形をもつて心をならはせたるもの也我國は四面海にして人心もおのつからのとかなれは形をたてゝくゝる事を貴はすたゝ餘藴ありておのつから感通することを貴ふか故に德名をはすへて隱身の中にふくめたりたとへは子の父にむかひて身をかくせは（自ラ）孝となり上より下にむかひて身をかくせはおのつから悌となり君に臣のむかひて身をかくせは（自ラ）忠と成故にむかひて身をかくせは自ら信となるこれみなたゝ隱身をこひねかふ中よりしらす〳〵なりいつる德なりすへて何事もせんとしてしたるはその事死すおのつからせられたるはその事活たりたゝわかいとはしき筋をのみつとむれは孝悌忠信はしらす〳〵せらるへし孝悌も忠信もたゝむかふの物によりてわかるゝ名なり凡私情は再うこかさらんやうに斷しはつる事はとてもかなふましくたとひかなへるもかの月支の阿羅漢のことく佛も二乘は作佛せすとのたまへりされはたゝその私情は內にありなから外を礼にくゝり內を樂に和す

るか儒の敎也佛も煩惱卽菩提と仰られたりこれ人心を制するの法のかれかたき所なりしかるにわか隱身の道は內にもなづます外にもかゝはらすして自ヲ私心あらはれす外行道にあたりてしかも意味こもる爲のをしへなりかの老子の無爲に混すへからす人の耳に喧しきまていひ人の目にまはゆきまてふるまひなから耳目にあつからぬのり也宣長か葛花といふものにおのか見を老子の見といはれてさま〳〵いひことわられたれと宣長かいふ所は猶無爲に落る事うたかひなしこれ此隱身の道の記中におのつから弥綸せるかおのつから心にうつりてふと無爲に混したる也をしき哉神代記の非をみいてたるは宣長なるにさはかりの目にしてこゝに目の及はさりしをこれひとへに儒敎に反せむとの志つよかりけるよりかへりてうちひかまれける也これらも隱身ののりにたかふ故也かへす〳〵恐るへきは隱身ののりにたかふ也隱身の事こゝにいひつくしかたしたゝこれは大樣をいふ也下文その所々にいふをあはせてふかく思ひて心をうへし

○以上の文すへてわか國史の眼目なり大綱なりこれをくはしく心えたらんには下文たゝ掌をさすかことくなるへし上にもいふかことく別天神五柱の內を又此三柱を引

わかちて記されたるは此大綱たるをさとしたるなり猶また此三柱の神々伊邪那岐伊邪那美命まてはなにの御事跡をもしるさゝれは古來たゝ見なづみて御事跡のなき故也とも思ひまたなにの分別もなき代也なとおもふ事大なる誤なり漢土の書なとにはかはりて記せりとてそれか実にもあらず記さゝれとも実ふくみたるもある也これらは皆隱身としるすより御事跡はおしてしるへけれは記されさるもの也その證なほ下の天沼矛の所にいふへし又惣論にいふかことくもと春秋なとの意とはたかひてもと

　神書をはしめ奉りて代々の史たゝ　天子の御系譜なるまてなれはむねとは御系譜となるへき事のみを記せり惣論をみて思ひあはすへしされは此神々の御代も記する事なきにはあらすと知へしゆめ〳〵実にもたれ靈にたゆむ事なかれ我國の風俗はつひにみる事あたはさるへき也漢土の書の人のをしへとかける物とはかはりて　天子の今の御代迠もめてたく皇統さかえ給ふ事たゝ此神の隱身より事おこりたる事なれは一國は一國の天地一家は一家の天地一人は一人の天地なるか故に　天子のさはかりめてたくおはしますをまなひ奉りて此隱身の道を脩せんに開國創業いかてかならさらん

國稚トハアルヒハ一邑一縣一國ナト各魁首アリテイツレチ君イツレチ臣トイフヿナクメイ〳〵ワカ勝手ニシテキタル故ニ五倫モ勿論ナカリシ寸(時)チ云

稚子ノオヤノ良チ足ニテケルカ如ク人倫ノタヽヌチ云

イカサマ尤ナヿナリト思ヒシ心ハ再私心ヘモトルニモドリニクキモノナルチ浮脂ト云也ムカフニ隱身シテゴザル神々ガ目前ニアル故サスガニ足モ出シテキラレヌナリサレハタヽ浮ト斗デハコヽガカヽラヌ故ニ脂ト云也

而ノ字ノ心私心チ鼓動セラレタルホトノヿナレハ是非チ決スヘキニ

次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用弊琉之時

國稚とは此神たち上下の別をよくわかち正して天下萬世にをよほさむの大志をたてさせ給ひてたかひに隱身をなし給ひしかとそれまで國人さる事もしらす上下の別を（國中ノ人ノ心ノ稚キチ云也）みたしてありしかは此神々の身をかくし給ふをみていまたふかくもえおもひしらさりしさまをは國稚とはいふ也國といひしはすへて此國中の人をさすと知へしたとへは稚子の大人の言行をみたらんこゝちにひとしく目にみ奉り耳に聞奉りなからその筋の心に入らさるかことき をたとへたる也如浮脂といふは下に落つかぬたとへ也久羅下那洲は定まる地なきたとへなりされは浮脂堅にかゝり久羅下は横にかゝりていふ也國稚といふは綱なり浮脂と久羅下はその目にて竪横にわりて形容せる也さて浮脂とたとへたる所の心は今まて上をも下とし下をゝ上とし各勝手に身をもあらはしあひてありしものどもがこの隱身をみてさすかに今までの心もちを鼓動せられて弥らしき事にみな人おもひなれる心のさまをたとへたる也久羅下那洲は今まて各仕來りたる非か此神々の隱身か是歟いつれを是いつれを非ともいまたえおもひ定めさりしみな人のさまをたとへたる也是非に猶豫して定まらさるをは久羅下那洲多陀用弊

サモナキ心ニテ而ト云也
海月ハ活テキナカラ目鼻モナクテシカモトチラヘモスワリノナキ性ナリ儒ノ所謂小人ヲタトヘタルナリ小人ノ小人タル所ヲツクセリ賢キカホニテ動止スレ𪜈目鼻ナキカ如ク仁義ヲシラス利ヲノミ懐ヒテシカモ善ニモツキ悪ニモツクヿ小人ノ性ナルタトヘ物ノスヘテ妙ナルヿコノ一ツニテモ思フヘシ
之時トイヘルハヒロク伊邪那岐伊邪那美神マテヲサシテイフナリサレハ上ノ初發之時トイフハ大綱ナリコノ之時ハ又ソノ中ノ小目ニイフナリト知ルヘシ上ノ之時モヒロクカケタル也

琉とはいひしもの也されは此一句早竟は國稚之時といふへきをその國人のさすかに隱身し給ふさまの心にはあたりなから是非を弁へえさりしさまをくはしくいはんとて此二ッのたとへものを出されたる也此たとへまことに神妙也といふへし脂は水にうかひてはいかなる事ありても沈まぬ物なりされは人心私に執しなから隱身の道にあひてさすかに私心へはたちかへりにくきさま思ふへし久羅下は海月の所を定めぬ心より是非を弁へぬさまにたとへたる也ことに海月はとらんとすれはにくるか故に耳目も心もあるへきにみれは耳目もなきをもて國人耳目も心もありなから海月のことく無面目同前なるをもかけてこの海月をしも出されたる心を思ふへしいつれも水上のことにしてたとふるよりこれらの物をとり出されたるなり

如葦牙因萠騰之物而成神名宇摩志阿斯訶備比古遲神

葦牙とは葦のつのくみ出たるを云なりいかて葦をしもとり出られけんといふに上文に天地初發國稚といふ時なれは國中すへて泥土のことくなるさまにしていふか故に

葦牙ハ國ノタヽヨヘルトイフヨリシテ出シタルタトヘ物ナリ
泥土ノ如クスル喩ノ心ハ水ト土トノワカレヌナリコレ即天地ノワカレヌト同シ禮記ニモ水
土ノ品ヲ以テ籩豆之實トストイフヿアリ土ノカキリハ水トカヤウニワカル、カ實ニワカレ
タルナリ國稚ハ即コノ別ナキ也サレハ泥土トニナシタルナリ

とり出られたる也泥土のことくなるさまにしていはれたる事は下の雙神十柱の神の御名宇比地迩須比智迩と申すより角杙活杙意富斗能地大斗乃弁と次第したるにしるきなりさてこの葦牙のことく萠騰之物とは何物にたとへたるそといふにかの前文のことく國中の人こと〱く是非を得弁へすしてあるさまを泥土と比して（即國稚といふは此こゝろなり）その衆中よりふと抽出て此三神の大なる御志に歸する心決定したるその心の奮激したるをたとへていふなり因とは即此奮激したる心が根となりて神とあふかるゝまてなり給へるをは因といへるなりすへての事習熟したる風俗の私なるにしたかひて奮激の心なき時は事業をなす事あたはさるもの也孔子も義を見てせさるは勇なしと仰られたるも即この心なりされは此神は天下萬世おしなへて隱身の道に敎なりし祖におはしますなり大事にもあれ小事にもあれ此神の御心をまなはすはつひに區々として志あるもいたつらなるへしよく〱思ひしるへきこと也騰とは三柱の神は高天原におはしますにしていへるなれはのほるとはいふ也即此神の奮激し給ひし御心と

コノ如葦牙といひしは形容にて萠騰之物とはいひなからそれは何物とも記せらさる（マヽ）をよく〱思ふへし此物とあるは即此神の羣小人の中より奮發し給ひし御心をいふなり人凡此心なき時はその身つひになりいつる事あたはす此奮發の心ある人は身必その心に因りひかれてつひに業をなす也されは因とはその奮發する心に身のよるなり因は種にする心なり仏のいはゆる因果の因なりかく之物と斗いひて實物をもかゝれぬを宣長我朝の事は實傳なるを寓言とみるはから心也といふ事あたらぬ事也もし之物とさせる物實物ならはその名をこそかゝるへけれ名なきはたとへなるか故なりよくしれとてかくかゝれたるを宣長かことくいはゝいつまても我朝の本意みる事あたはさるへし

之時とあるは下の十神までをかけていふなれは此葦牙のことく萠のほるも即次の十神までにかゝれりと知へしその中にも此阿斯訶備比古遲神その魁たる神にまします也と知へし

りもなほさす高天原にその位いたりしかはかくはたとへられたるなり志あらん人は此神の御心をあふくへし貴ふへし　而といふはたとひ奮激したる心に因れるとて神となるへき理はあるましきことゝ人みなおもふへけれと奮激ほどつよき物なけれはその心に身を任する時はおのつから神ともなりのほらるゝよしをさとして暗に人々にこれを勸むる心有凡心に激したる時は私心はおのつからわすらるゝもの也世に事をなせりし人をみるに多くはその本奮激よりおこる物也

此神の激したまへるはみな人隱身の道心を鼓動せられてゐなから是非を弁へぬ中にましへられて快からぬ所より衆人のさまを見あさみておほえす拔羣し給へるなりされと此奮激も我心をおこして奮激せんとて奮激せらるゝ物にあらすみな時をえて奮激する也たとはゝ雷の蟄を發するかことしこれひとへに　天之御中主神の大御志を高御産巣日神産巣日神のたすけて諸ともに隱身まし〳〵けるか感動したるもの也此

萠騰は此神の御心にもとよりさる凡ならぬ御心ありしか三神の隱身の陽氣をえておのつからもえ出たる也人々皆かくのことく心のうちにはみなかゝる心は蟄してあるなりされは神道隱身の道を聞道に志をたつる時はおのつからわか心のあしかびきざしのぼるへきなりとりひろけて天下にしても此道理とりちゞめて一身一心にしても此道理也天下の一身のとわけてみるへからすこれをわけて論するは宣長のいはゆるから心也わか國はたゞ大をも小にふくめ小をも大にかねてひろくわたるをむねとすこゝはわか國風のわかるゝ大事の事也よく〳〵思ひうへし

故に人を感動して私心をわすれて身をかくすへき心を奮ひ起させせんとにはたゝ己か身をかくすにあり身をたにかくせは時おのつから至りてかくの如く人心をして奮激せしむる物なる事をさとしたるもの也卽葦牙といふものをとり出たるも葦にはかきらねとも泥土のうちに蟄したるか春の氣に感動せられて萌のほるをもてかの三神の隱身の春氣にひとしく此神の奮激時をえてなりのほり給へるをはたとへたるなり此たとへ物を出されたる事その事理に切にしてその理のわたる所廣き事これらをもてもしるへしかゝる書さまなるものをたゝうはへの実にもたれてみたりし古來の神學家なけくへき事なり神道の世にかくれたるもことわりそかしたゝ神道といへは烏帽子淨衣をきて手に鈴をふり中臣祓を口にとなふる事のやうになり火をきよめ祓禊するもたゝうはへのかたち斗にて実をうしなひたるなりこれに比するに漢土の礼といふもの猶かくのことし孔子三代の礼の実をうしなひ義を思はすたゝかたちのみになれるを歎給ひてふかく心をくたき言をつくし給ひしもけにことわり也○宇麻志とは日本紀には可美をよみ萬葉には酒のよきを味（ウマ）酒といひ又うまねふりといふは熟睡の義なり俗にウマイといふも猶この心なり味の內より生するをめてゝいふ辞なり猶紀

に可怜(ウマシ)小汀可怜御路可怜國なともあり崇神紀には甘美(ウマシ)とありこれはさる稚心の中より萠ひ出たまひし御心のほとを味(ハ)ひ賞して宇麻志とは蒙らせたる也阿斯訶備をやかて御名としたるは上文にいふ所のことくその稚心のうちより高天原にのほりたまひし敘徳をむねとしての事也此神の神となりませる種は何そといふにかの葦牙のことき萠發の御心なりその御心が此神の神体なれは御名としてその神となりませる種を人にさとせる也因の字即たねになる心なり此神の御魂はおよそ天下古今ともに業を成すへき因となる所を司とりたまふなり此神をいのらはおのつからわか胸中の泥より葦牙はきさしのほるへしあふくへし尊ふへし千載の榮を得るか失ふ歟はたゝこゝにあるへし　比古は比は即産巣日の日に同しく内の徳の外にみゆる形容也古は子にて我にしたしみ奉る称也父母のことくに思ふほとのしたしみをすへて子とさす也女を子といひしもさはかりのしたしみをさとしていふ也されは此比古はすへて男を称して女にいはぬは男は上たるへき物なれは下よりしたしむ心なるか故也遲とはをぢの畧也をぢは長者を貴ふ称なりわれを幼とし此神ををぢと貴ひ奉れりしは即この葦牙のことき物によれは神とならるゝことをさとし給ふ恩をよろこひてたゝへ奉れる

也かの塩土老翁（ノヲヂ）なとも神武に大和のよき國なるををしへ奉れる故なるへし此神もすなはち上の天之御中主神の大御志をたすけ給ひしなり此末々の神たちもみな同しき中にその第一に得たまひし神かむすひの神なり此むすひの神を得たまひし故にかゝる開國創業の因となるへき神をもえたまひしなりその中にむすひの神は卽三神にして一神一神にして三神なるかことく天之御中主神は志を司とり給ひむすひの二神は行を司とり給ふ也されは神を得たまひしは此神をはしめとすへし（すてに此葺牙彦舅神たちのなり出給ふも產巣日の神の御德によれり）此奮發の心開國創業の因たる事世の小事をみても會すへし此神をは神をえたまふはしめとすへしとて三神は此三柱神者云々としてわけていふなりはや此神より開國の因は出來たるなりと知へしいはゝ上の三神は主人のことし此神よりは仮人方なりこれを得給ふも早竟三神御心を合せて隱身し給ふより時至れるを云也

次天之常立神

此神名の義は宣長くはしくいひてその論あたれりといふへし常は底に通し立は都知

此葺牙彦舅神ノヿハヨク心ウヘキヿアリ唯御自ノ奮發斗ト見テハソノ意ツキス国人皆久シク私心ニ習熟シタル物ナレハタトヒ志アル者モ自棄スル者多カルヘキヲ自ラ奮發マシ〳〵テ衆ノ自棄ヲ捨サセテ道心ニ奮發スヘキヿヲ天下ニ不言ニシテ教玉ヒシモノナリサレハ此神カク成リ出玉フニヨリテ世ニ多ク自棄ヲナステ、道心ニ奮ヒオコレリシ神多カリシヿシルク記セサレトモ他ニ及ヘルヿハ疑ナシカクイフヿハ末ニイタリテ天兒屋命太玉命宇受賣命ナトヲハシメ八百萬神タチアリソノ神タチハイツシタカヒ奉イツ歸シ奉ラレシトモ記セスシテ下文ニフト出タルヲモテ云ナリ皆此神ニヨリテ奮發シ玉ヘルヿウタカヒナシコノ神ナリ出マセルニヨリテ人皆心イヤシク海月ノ如クナレモ奮發スルトセヌトニテ神トナリナラサルノ別アルヿヲ世ニシルヤウニナレルナリ成元カコトキモコノ理ヲ弁スルハミナ此神ノ恩ソカシ佛ノ蓮華ヲモテタトフルニ似タルヿナリ

に通する事姓氏錄に天底立尊とみえ又國之常立神を書紀一書に國底立尊といへり都（天

（津風ナトノツナリ）知は書紀に國狹槌尊を亦曰國狹立尊とあり萬葉に 十五卷 安米都知乃曾許比能宇良尓

云々これ天地ともに底といふ證也曾ことは曾伎處（コ）なり曾伎は宣長引證多きかことく（底トハ人ノ常情トイタク放レ遠サキタルヲ云）

放（サカル）のうつれる也此神の天乃曾伎處をしも御心とたゝへられさせたまひしは天にしてしかも遠さかりのきて及ひもつきもせられぬ處を御徳とし給ふの名なれとこれも猶表徳にして実の天の極といふにあらすされと天極に處したまふといふはよしある事なり今かりに実の天にしてさとすへし天は地をつゝみて尊位にありて地のものを生しものを載せて生々すへき用をたすくしかるにその妙用を下す事天のおのれかためにするかと思ふにその極をたつぬるにことく\く天下衆民をはしめ万物の生々すへき爲に歸す今天之底といふもこれに同しく　天之御中主神の大御志を産巣日の二神承たまひて事をとらせ給ふは天下に君として榮花をねかひ給ふかとみゆれとその三神の御心の底たゝ隱身を旨とし給ひてその極たゝ天下万物のやすくたひらかにして各業をたのしまむ爲の御心なりされと私心に習熟したる世人の心よりは此三神もたゝ御みつからの御爲のやうにおほゆるか常情なるを此神かの三神の御心の極を悟り

此神なり出まして天之御中主神の御心の底の人の常情とはいたくたかひたる事世にあらはれたる也此故に天之御中主神の御志なとも記せられさりしもの也されは此五神始末端奥首尾しつくせり葦牙彥舅神もすなはち天之御中主神のはしめ神となりませるやうをさとり給ひしもの也此故に此二神は天之御中主神の始と底とを世にさとし給ひし也むすひの二神は天之御中主神の外行を世にさとし給ふ也此故に葦牙彥舅神天之常立神は天之御中主神の御志のたちしはしめと御志のすわりたる所とをさとし給ふにて內德也むすひの神は外行をさとし給ふなりと知へしこれを一身の具足する所とはいふ也

しりたまひてそこに感して御みつからもそこに御心を安んしさせたまひし故に天之底都袁遅の神とは世にたゝへ奉りしなり此神かく上たる人の心の極たるへき所をさとり安んじたまひしより天下この神に鼓動せられてかの奮發したる神々はいふに及はすさならぬ神々も天神の大御志のかたしけなきをさとり天下の安からんことをたのしみて上の凌くへからさる事を心にふかく思ひしりしなるへし猶下文において次第にその徴をとくへし天下ををさめ給ふ御身は申すにをよはすかしこくも　此御神たちの御すゑにおはしませは也その餘一國一縣乃至一小家の主たりとも上たるものはたゝこの極をさとり此天之常立神の御をしへにしたかはされは一家もいかて安からんまして一縣一國いかゝはのとかならん此天之常立神の神となりましゝによりて天之御中主神は御わさはなけれと大御志の極こゝにあり產巢日神の二柱も御わさはあれと天之御中主神の大御志をうけ給へるにてひとへに御身を隱したまふといふ事言外にその意趣あらはれたり又上にのふる所の隱身のしかたもこの神の御德によりて世にはあらはれたるなれはふかくあふきふかくたふとみたてまつるへ

此二神を儒教にあてゝいはゝ葦牙彦舅神は智勇なり天之常立神は仁義にあたる也これ即天之御中主神の內德なりされは實は今まなふもののうへにしてみれは

阿斯訶備比古遲神
天之常立神
天之御中主神
高御產巣日神
神產巣日神

かくのことく次第すへしされともされとも此內德をはしめて成就したまひしは天之御中主神なるか故に記はかくのことく記せられたる也內に德ありなから外むすひの二神を用たまふ天之御中主神の御さまをみて內德をさとり給ひしか此二神なりすへて修行にかけてわさにかくる時は先を後とし後を先とするものなり即乾坤を坤乾とする理に同しきもの也

き事そかし　葦牙彦舅神も此神も御みつからさとり給ひてさる御徳をもちわけさせ給ふのみならす天下の衆人これをみておのつから鼓動せられたるへき事上にいふかことしその中には人をもよくすゝめをしへさせたまひしもあるへしこれは二筋とみれは二筋なりされと教ふる人あれはおのつから感激する人もあるもの也感激する人あれは必おのつから教をねかふ人もいてくるもの也二筋たゝ一筋にみるへし下々の神々みな此心得をもてみるへしすへて此記文章簡約にして上下の照應理の首尾する所をもてさとしたるもの也此故にかうやうの所はふかく心をつけてみぬ時は宣長はかりの人すら実にもたれられたり今いふ所みな虚誕にあらさる事はいつ歸順し給ふとも記せられぬ神達の下文にふと／＼記せられたるをもていふなり心厚からん人はいとゝく心をうへし　日本書紀の誤りこゝにおいてみゆる事は以上五神をみなはふかれたるは天神の部はさらてもたしかならぬに此五神はことに設てもつたへたるやうに思ひてのことゝおほゆ惣論にいふかことくはや此皇子の時神書は実にもたれたる事しるしいとも／＼心くるしき事はかたしけなくも　天照大御神の神鏡を天孫にたまひしもたゝこゝの五神七神の大御志をは　御代／＼にうしなはせたまふなと

おほしめしての事なるをはかなく実にもたれてこゝをはふき給へるいとも〳〵あさましき事なり今の世までも　皇統のめでたくおはしますはたゞ此以上の文意にふかくこもれる事ぞかしかたしけなくとも一家一身にもこれをまねひ奉らんにいかてか創業すへからさらん

此二柱神亦獨神成坐而隱身也

獨神成坐も隱身もたゞ同し事なから上の三神にはへ竝といひ此二神次の二神にはへ亦とかけるをもてその差別あることをさとしたるなりひとり神となりませるは上におなし隱身は上の三神の御身をかくし給ふさまをまなはせ給ふなりされとみな御徳を持わけ給ふものなれは各その御身のかくしさまもたかふなり此阿斯訶備比古遅神は天下みな私心に習著して猶豫したる中よりたゞひとり奮發したまひし事なれは人の常情としてそのえ奮發せすして多陀用比をるものともを見あさみ侮りそしりみつから慢する心かならす生する物なるにさる御心おはしまさすしてかの私習に貪著してたゞよひてある衆人をあはれみおほしめしてみつから奮發したまひしは御みつからの爲ならすして世人を鼓動して道心に奮發せさせんの御志なるをは隱身とは申す也

天之常立神の隱身はみつからかの上たる神々の大御志の極たる所をかくあらてはかなはぬ道と悟り知たまへるより人の常情かならす（博）博識多聞かつ又高尙の境をしる時は必人を輕しめいやしむるならひなるにこれ又世の人の見解この極にいたらさるをあはれみてみつからこゝに御德をなしたまひしは天下をしてこゝにすゝましめむの御志にして塵はかりも御身の爲にはおはしまさゝりしを隱身とは申すなり下位にして謙るは易し尊位に在て遜るはいとも／＼かたき事なり此五柱の神の御身をかくし給ひしは至尊にしての事なれはことに／＼かたしともかたき事そかし孔子魯の大夫となりて悅ひ給ひしをあやしみてとひ奉りしに尊位にゐて謙遜せんことかうれしきと仰られしなとまことに聖といふに口をしからぬ事なり　隱身の事かくのことくその身その位にして各ことなり猶次の所にもくはしくいふをみるへし儒敎のことくかたにはまりたるにはあらすおのれか身の位をよくかへりみすゑて後隱身の志はたつへき事也位すわらねは隱身のさしかねとなるものなき也位をさしかねとする時はその隱身理にあたるへき也

上件五柱神者（カミノクダリノイツバシラノカミハ）別天神（コトアマツカミナリ）

此五神の御徳にてすへて人の一身の所置をつくせりこれを規として万事万行をせんになに事か仁義忠孝にならさらん

五神を一身の修行とみ奉れはたゝ一神なりすちをわくれは五神なりされは此五神の御徳の廣大無辺いひつくすへからす

別天神と称したるわけは以下の神々は天神なから地の方につきての徳なれは民にあつかれり此五神は君徳なるか故に別天神としてわかちたる也

天神とは衆人仰きて君としたるをさとしていふ也後に命をうけて君たりし神々とはかはれ

別天神とは天神と申すうちにも又ことに御徳のたかくおはしましゝ神たちなれはかく引わけてさとせるなりその故は此次下の神たちもみな天神にておはしませとも國のことにかゝつらひ給へは以上の五神にはたちならひ給ふへからねは也わざいやしけれは位いやしわさ高けれは位高き事おのつからのことわり也たとへは足輕といへとも文武に志あつけれは士にもすゝみ日雇のむすめも哥舞に堪れは諸侯の妃となるかことし飛脚をのみつとむる足輕の立身したる者なし飯のみかしきおほえたるむすめの諸侯にめされたる例なき事なりそれもおのか位をいてゝすへきにはあらすさるは又隱身にたかふ也たゝ足輕は飛脚をむねとつとめ日雇は人の役を懇につとめて餘力をもてたかきに志す時はおのつから位も立まさる事かたしけなくも此神々の神なからかく御位わかるゝをもてさとり知へし今此五柱の神の別天神と称し奉らてかなはぬ故あるをとくへしまつ天之御中主神は申すもさらなり高御産巣日神神産巣日神は內外の事をむすひ給ふ御徳これまたもとより地に屬すへき御神にあらす宇麻志阿斯訶備比古遲神は泥中より出たまへとも泥にまみれてはおはすましき御徳にして天下をして私心をはなれしむる神にましませはこれ又地に屬すへからす天之常立神は

りそれは天神の命なれは人服せすといふ事あるへからすこれは人服せされは君たる事あたはさるなり衆の仰く所を天と比喩したる妙なり君となる上にとりてはこゝはかたき所也命をうけたるはやすき也かたきをさとして天神とはいふ也實にその徳天と合すといふへし

天の意をきはめしらせたまふ御神なれはこれ又いかてか地に屬せん此故に此五神を別天神とは申奉れる也しかりとて此次々の神たち地神といふにはあらすいつれも天神におはしますその中にて物をはしむる御徳おはします故に五柱をしもことに引わかてり國之常立神より以下はうけて施す御徳におはしますか故に此五柱をはつしたるものなりされは神書の大旨わか　皇統のかくめてたくましますす理ならひに一國一家一身まても此道のおしわたれるは此以上の文にそなはれり舍人皇子此五神をはふきたまへるは返々あさましき事なり今われ神書の大旨　皇國の規範とこの上文をいふは此下文みなたゝこゝをのりとしてこれにかなはぬは禍至りこれにかなへるは福いたるをもて徴していふなり下文それ〳〵徴したる所々はその所々におきてさとり知へし凡ひとの心のうち此五柱の神のなり出たまへる次第にたかふ事なきもの也うまれ出たる時はたゝ自然の天地のことわりにかなひたるかやう〳〵天地を混したゝわか身の私心のみと成るを此神道を聞てはしめて天地心にわかるゝなりそれよりおのつから内外のむすひは出て三神の徳おのつから心にそなはるへししかる時は卑小人と混する心なく拔群してつひに天下萬物のためにのみ身心をゆたぬる事となるを

人のいたりとはいふへきなり此五神その御徳四海に君たるの御徳にしてこゝに君とも称せされとも天之御中主神と申す御名に君たる事はしるし下文に天照大御神月神須佐之男命にをの〳〵國をことよさし給ひ又天孫をあまくたして此國の主とせさせたまひしなとは此神々の命なりこの五神はかく命じ給ふへき神ありしにあらすみつから天下に君たる御徳とならせたまひしなりしかれともみつからおして君とならせたまへるにあらす天下の衆民服して君とあかめつるをもてことに君とは記せられさりし也かく記せさるは衆民の服したる御徳なる事をしらせんとて也わか心より君となるといふ理はなき事也易經乾卦用九の辞にも見羣龍无首吉といへり此神々の御徳おもふへし

次成神名國之常立神

常立は天之常立に同しく底津知なり國とは天にむかひていふなり地といふはひろくさしていふ也國とはかきりていふかたかへり地之常立神とは申さぬは人によりていふか故也人のすむ物にして國とは称する也されは天の事をうくる物か地なれはその地の曾伎處をしろしめせる神也その地の曾伎處といふは上の事をうけてするには必

上よりその賞を得報をえんのこゝろある事人の常なりしかるにそれは人情のつねにてまことの底とする所はたゝ上の事をうけて上の御爲にするはかりにてかりにもわか身に報を求むる心なきを云也これ下たるものゝ心の底とすへき所也下文にいたりて伊邪那岐命大國主神の御をはりともおもひあはすへし猶徵する所いと多しかく下としてはこの底に徹すへき事をはしめてをしへさとり給ひし御神にましますなり故に國之常立神とはたゝへ奉れるなりされは天之常立神國之常立神ふたはしらにて上は下の爲にし下は上の爲にする道の極たてりこれを上下の隱身といふ也此故に隱身の道此ふたつの常立神にて根ぬけする也さるによりて此次の豊雲野神まて七神に隱身といふ事を記せりこゝまてか隱身の道の規則となる所なれは也これより後は隱身の則とはしかたきを示して也すてに伊邪那岐伊邪那美神は先言と黄泉へおはしゝとの顯身あり下文をみて徵し知へし

次豊雲野神

日本紀には豊斟渟尊とありて一書に豊國主尊とあり此豊國主尊とあるか此神名の正字たるへし豊雲野も豊斟渟も皆音通する也その外へ豊組野尊へ豊香節野尊へ浮經野

古刻本ニ此神名ノ下ニ脇止ノ字アルハ上ノ字ノ誤ナリ延佳本雲ノ下ニアルハ佳ナリ

豊買尊　へ豊國野尊　へ豊齧(ゆ)野尊　へ葉木(ハコ)國野尊　へ御野尊なといつれも音かよへりこの御名の心は豊國とさかふへき國の御あろじたる御徳を表し奉れる也これ百姓のなかくさかえたのしまむ事を御魂としておはします神なりさて此神は上の天之御中主神と相むかひましたる神也天之御中主神は君上たるへき御徳にまし〳〵此神は群臣庶人まても都て下たるへき御徳におはします也此天之御中主神と豊國主神とにて天地は全くひらけたりし也はしめにいふかことく天地初發之時とは此神までをかけていふ也主とは人みなこれにしたかひまつりならひまつるへき御徳を表してなり此神なり出まして此國今にいたるまて百姓さかえて安國とたひらかにあらんことのあらかしめあらはれたる也そのあらかしめあらはるゝとはいかなる故そといふに下たる位をいかなる時もこえすみつからより事をはしめすして上の御ためにつかふることを堅くさため給ひてかり初なるたちろきもなくおはしける也これ國の豊國とたひらかにさかえゆくへき源なり

此二柱神亦獨神成坐而隠レ身也（コノフタバシラノカミモマタヒトリカミトナリマシテミヽチカクシタマヘリ）

これは上文にいふにおなし心えなり此二柱を別にかくあけたるは國のかたにつきた

スヘテコノ七神ハ今ノ世マテカク此國ノメテタクサカユヘキヿノ相違ナキ道理ノ此七神ニテ定マレリシナリコノ寸國ノナレルニハアラス道理ノ定マリテ立タルナリコノ規ニアテ、國家ノサカエサルトイフヿハナキヿナリ天之御中主神ハ皇統ノカク今モツ、キマス種ナリ豊國主神ハカク國ノ豊ナルヘキ種ナリ

九目前の事又後則（マヽ）の事なとはわかいきてあるほとなれは思ふまゝにも成ぬへし目の及はぬ國々永世の子孫の事なとは人力のをよふ所にあらすこれを思ふまゝにならせんは此七神を心に勸請するにありいかにとなれは天下万世の人の情のたれにても戻らす服すへき道理を

る神の御徳なるか故也隱身の心はまへにいふかことくかりにも偕する事なくたゝ上の教をうけてつとめて上の御爲に歸するを身をかくすとはいふ也國之常立神もこれ又おなし心なりされと國之常立神は下たるものゝ心の極を御魂としたまへり豊國主神は治國平天下をつかさとり給ふ也此故に國之常立神は内徳也豊國主神は外行なり卽天之御中主神外天之常立神ふたはしらと同し事也されは此七神をもつて凡庸より身をおさめ治國平天下にをよふ迨をくゝりたるものなり儒教にいはゆる仁義なとのことくこまかにはをしへねともその大本たる所をおしくゝりてをしへたるものなれは此本をうしなはされは外行おのつからこれにしたかふへきをもつてなりこれをすぶれは隱身の一事につゝまるその故に以上七神のみ隱身を記せられたるなり上は下のために身をかくし下は上のために身をかくさはいかなる國かいかなる家かをさまらさらん神道の大事たゝこゝにあり此下文に神々の御事跡を記せられたるはみな隱身のこまかなる仕方なれは以上は本也以下は末なりと知へし本末とたてゝいふ時本をしれは末はおのつからしたかふ理なれとも末なけれは本あらはれさるか故に末またしらすはあるへからす此故によく／＼本をかためて末をつとむへきなり本といふ

は此七神の具しそなへ給へれは也

唐の五倫はめい〳〵一□□に成ルなりわか主人を大切にすれハよその主人ハかまはぬ氣味也わか國のをしへはさにあらす彼我の別なく天子も庶人も上にいたゝくものは天なれハ天とたとへ地とたとへたる也されはわれより上と思ふものをのこらすかけていふにて五倫なとのことくせはくいひしものにあらす

は隱身の一事なりその隱身の中に上と下の位ありこれ卽天地なり上は下をみだらず下は上ををかさゝるをは天地發（ヒラ）くといふその發らくるはいかにといふに上は下の爲に身を隱し下は上のために身をかくすか故也その上に內外あり下にも亦內外あり內とは內德也外とは外行也內をかためされは外たしかならす外たしかならされは內かたまらすこれによりて內外たかひにすつへからすこれをたかひに捨しとするは志なりたゝおしへたる人にましりてありてはつひに本をも末をもうる事あたはさるへしされは天地をみたり身をあらはしたる人の中をみつからふるひ起して身心をは隱身にすうへしこれ卽阿斯訶備比古遲神の御たまなりたゝ此神のみたまを招（チキ）奉るとをきたてまつらさるとにて天も地也地も天也まのあたりみえすといへとも天も地地も天となりて久羅下那洲たゝよへるかことしこれか位なくてはたゝ方丈の內をたにをさむへからすよく〳〵おもふへきは此七はしらの神の御德なり○すへて此神書一部をくゝりてみるに產巢日の二神は末までも出ましあとの五神は御名の出たる事なしされは五神は內德也二神は外行なり五神はすなはち產巢日の種とならせたまふ也と知へしされは產巢日の二神は五神の德を內にかゝへて外へ施したまふ也五神は二神を

外につかひて内を治め給ふ也と知へし

内

宇麻志阿斯訶備比古遅神

天之常立神　　天之御中主神

國之常立神　　豊雲野神

内

外

高御産巣日神

神産巣日神

外

此七神を引くゝれは隱身の道より外なししからは隱身の道は此七神にかきるかといふに今のよの人までに及へりされは隱身は神道の大規範なりその中にて此七神を本とし末々の諸神を末とするなり

次成神名宇比地迩上神妹須比智迩去神

この神より男女の御名をゝ（つ）けられたるを以て古來神學者流みなこゝにおいてはしめ

て男女をなせりと思へりはなはた誤れりそのあやまれる證は上文に天地初發とあるをもておすに天地とわけてみる時は萬の物も皆天地はわかるゝなりわけさる時は何もわかるへからすはしめにもいふかことくわかれなき時はあるもなきも同しければ男女のある事ゆめ／＼此時よりと思ふましき也卽男女交合の事もむかしより伊邪那伎(岐)伊邪那美の二神をはしめと思へれとこれ又あやまれりこゝに妹云々 の神と男神にたくへて記されたるからは夫婦なる事疑なし夫婦ならんからに交合なからんやうなしこれをもつて男女のこゝにはしめてわかれさるをも知へしかゝる事すへてわか國風にて上下の道理いはすして明らかなる事はなるたけいはさる也これをしらすして記したるをはしめと心うるはいと稚き事にあらすや返々みゆる物によりみえさる物によらさるは幼兒の心にひとしこゝにわか國の言語はこゝをしらさる人はつひに心をうる事あたはさる也されは天之御中主神の御時とても男女はありつれとも男女とたくひての用なくおはしけれはあけさりしもの也こゝよりは男女とたくひたる處において用ある故に女神たちを記されたるまて也みん人まとふへからす　宇比地迩ハ浮涅也須比智迩は沈涅也迩はともにしたしみあかむる詞何根といふ根と通する称也

あにあねなとこれ也あなにえやなと思ふへし須は洲といふも卽浮まぬ砂の川中にある故なるへし

次角杙神次妹活杙神

角杙はつのくむにてものゝ萠出る義也活杙はもえ出たるものゝ活てゆく心也嚴茂なといかしとよむも思ひあはすへし

次意富斗能地神次妹大斗乃辨神

斗は所也と宣長說也辨は女をめと訓する訓源にそ有へき

次淤母陀琉神次妹阿夜訶志古泥神

おもたるは宇受賣命をいましは面勝神也と仰られたるに同し詞にて見たる所の滿足なる也阿夜は阿那夜の心也かしこは恐るへき御さまなる也

次伊邪那岐神次妹伊邪那美神

いさなひの心也と古くいへりけにさる事也されとなもじまてをかけていふは誤れり
いざとはかりにていさなふ心なりなは乃のかよひたる也その證は末に猨田彦神の条
に沫那藝頬那藝といふ神ありこれあはなふつらなふといふ詞にはあらで沫のぎ頬の
ぎといふ通音なるを思ふへしいさとたゝへたてまつれるはよく人を和する徳おはし
けるをいふ也以上の八神もおの〳〵御徳はたかくまし〳〵けるを此二神をしもえら
ひ出て大事を任したまひし事は此二神和をなす事を徳とし給ふ故也こゝをもて大事
はすへて和を本とすへきこと明らかなり此二神をえらひたまひし天神たちの御心の
ほとおもひやるへし○さて此十神の御名をおもふに自ラ次第しておはします也まつ
　宇比地迩須比智迩の二神は種なり種といふは地となる種は埿土なれは也次の角杙
活杙の二神はその種となる埿にたましひある也次の意富斗能地大斗乃弁の二神は處
をなしたまへり卽上の四神の功のなりあへる也次の淤母陀琉阿夜訶志古泥の二神は
外貌のそなはりたる也次の伊邪那岐伊邪那美の二神にいたりてはしめて外と和する
事出來たまへるなり宇比地迩等の二神より淤母陀琉の二神まてはおのおの御みつか
らはたかき御徳にこそましませ他に及ふ事あたはさるか故に彼二神にはしめて事を

任したまへる也　淤母陀琉　訶志古泥なとはことに威勢凛々としたまへるにこそと思はるれと夫にては天下を修理する事はならぬ事なるか故也此二神と岐美の二神との次たまへるもいとその理ふかき事なるへしよく／＼思ふへし人を用ひ擧る法この十神のうち岐美の二神をえらひ出たまひし事萬世の龜鑑たるへし○此十神のうち岐美の二神をしもえらひ出たまひて大事を任したまひし事よく／＼思ひ知へき也たとへていはゝ宇比地迩須比智迩の二神は地の種となる神にておはしませはすへての物のたねとなるものには此神鎮まりますへし金銀といふものなくて叶はぬものなれとも金銀多く持たりとて天下ををさむる事は出來ぬ事也又角杙活杙の二神のことくよく金銀を衍（フヤ）しのはす事をするものなりとてこれ又天下經營の事は任しかたし又意富斗能地大斗乃弁の二神のことく地をひろく領し家藏なと多くもつ才ありとて大事は任すへからす又淤母陀琉訶志古泥の二神のことくみつから滿足し人もかしこみおそるゝほとの徳ありともたゝみつからのうへはかりにして人の益とならさるか故に天下を任すへき事にあらす以上八神のいさをしいつれもなくては叶はぬ事なれともかくひとつ／＼になりては大事を任するに足らす岐美の二神は以上八神の徳をみな具し

たまひて他をいさなひたまふ徳おはしませるか故にかならす天下のくらけなすたゝよへるをつくりかためなしたまはむ未然を察したまへ（ひ）て任したまへるもの也されは伊邪と称し奉る事此二神は上の八神の徳をみな具したまへるを喩す也此八神の徳を皆具するにあらすはいかてか天下の人をいさなはむいさなふといふ徳卽天下を治むるの徳なる事知るへし此故にすへて大となく小となく事を人に任せんとには此伊邪なふ徳あるをえらふへしその事必成就すへき事此二神によれは疑なき事そかしこれを徳行のうへにしてとかは宇比地迩須比智迩の二神はたとはゝ學問なと多くしたる也博學多識のみにしていかてか天下を治めん次の二神は才畧計較の智ある也次の二神はよくわか一身をいさきよくしたる也一身を潔くするは人の身の土臺とすへき事なれとも潔清なる人は必人をそしり人に斟酌なきものなり次の二神は威あるなり威はなくて叶はぬものなから人かならす親ますかくのことく八神はすくれたる所おはしませとも又その敝おはしませり此故に岐美の二神をしもえらひたまふ事此八神の御徳を具したまひし事明らかなり○或問七柱の天神さはかりの御徳おはしなから御みつからは天下の經營はし給はて此二神にしも任し給ひし事すなはち隱身なり

上件自國之常立神以下伊邪那美神以前竝稱神世七代〔上二柱獨神各云一代次双十神各合二神云一代也〕

これは

於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神脩理固成是多陀用弊流之國賜天沼矛而言依賜也

これ天下經營のはしめ也前にいふかことく此二神こゝより命と称し奉るは此天下草創のみことのりをもちたまひしか故なり○多陀用弊流とは卽最初に久羅下那洲云々といふをうけていふ也天下の人みな隱身の道に來りまつろはすしてうきたるをよくをしへ導きて上下の別を正しくし身をかくさせよと仰付られたる也これを脩理固（フクリカタメ）

イサナキノ命天照大御
神ニ玉ヲタマヒシヿ

成(ナセ)とはたとへたるもの也これ卽たゝよへる國といふよりかくはいふなり〇天沼矛沼は瓊(ニ)をかよはせていふ也矛は直なるものにして直ならぬを正す器なれはわきて矛をたまひしもの也これ卽此草創を命したまひし證にたまへる也凡なにことも人は證とする所あるへき事也證とは卽目にみゆるうへの事を云也たとはゝ心にいかほとふかく切に思ふとてわさに深切なる事なくては深切と思ふ人あるへからす此天神のみことのりも此矛なくは二神いかほと身をかくしたまふとも人信受すへからす日本紀神武紀に云神武帝の天孫たる事を長髓彦うたかひけれは天上の靫天羽々矢を出してみせたまひしかはこれを信したりし事みゆこれらこゝに徵して知へし後に　天照大御神の皇孫命に神寶をたまひて今にいたる迄四海の人得しのき奉らぬは此御しるしあるか故也されはすへての事内と外とをうちあはさては叶ふへからぬ事神の御をしへなるを此沼矛によりてしるへしたゝはことよさし給はて此沼矛をたまひて言依したまひし事天神の御心のほとあふくへき事也人凡内によりて外を私する事多しよく〳〵つゝしむへき事也わかおもふ心によりて外を自在にせはつひに天地はわかるへからすかろ〳〵しくおもふましきは此御をしへなり〇言依は任の字をもよめり言は

事の假字なり事を任し給ふ事也

故二柱神立天之浮橋而

天浮橋　橋はすへて絶たる所を通する料の物也されは天神と國人との間を通する場所をは天浮橋とはいふ也浮とは天へも地え（へ）もよりかたまらておはします二神の御身をみせて浮橋とは名つけたとへたる也これをは実に天より地にかよふ橋とみてむかしは天と地との間近かりしなと宣長のいひしはかへす〳〵我國の言語のつかひやうをしらさるか故也これすへてたとへなり卽此天浮橋といふは身を隱す場所をたとふる也たとへは先祖の心を子孫につたふる間にたち又主人と國民との間にたちてかりにも私意をましへぬ場所をはみな引すへてたとへたるもの也されは二神はしめより天神の御心を主としてかりにも私地をするたまはさりしこととみるへししかゝる事言語にのふれはくた〳〵しく成てしかもその條理みたるへし比喩をもていへは簡にしてしかもその理蘊たりわか國の言を用る事神妙なる事知へし

人ハ唯スヘテ天浮橋ニ立ヘシ天降ルヘカラスソレモ人ヨリユルサハ天降ルヘシコレ神ノ御敎ナリ誰ニテモワカ一身ヨリ上ト下トハアルモノナリソノ上下ノ間ニ立テ上ノ意ヲ下ニ達シ下ノ意ヲ上ニ達シテ和シユク寸ハ自身ハオノツカラ立ユクヿウタカフヘカラス神々ノ隱身タヽコヽニアルニシカモ人神トアフクヲモテウタカヒヲ去ルヘシ

指下其沼矛以畫者

さしおろすとは卽天神の御心をもて國民の不直を正したまひしを云也畫とは字を畫

引上トイフヿ甚心フカキヿ也今ハ命ヲツナクモノナレト多過ナレハヒトリト和セス外療ノ血ヲヌクモヨキホトニハカリテフタカサレハヨキ血マテ出ルナリコレホトナレハコノ上ハモハヤヒトリ出來ルハトイフ勢ヲ見ハカリテ世話ヲ引ヘキヿ也コレ

するかことく縱橫にかきまはしたまひし也これ天下をひろく直に導きたまひし形容なりかつ畫といひし事は速に功をみむとしたまひしにはあらてたゝ天神の御心を國民につたへてゆる〳〵とむかふよりしたかひまつろひ來るやうにまちたまひし比喩なりすへてなに事も功はすみやかにみむとすましき也この御をしへにしたかはされは成れるものは又崩るゝもの也小大となく此御をしへにしたかふへき事也これ天神の御心斗をさしたてゝかりにも私意をくはへ給はぬを指下云々といふさて速に服せしめむとてはしたまはぬ也これをみれは兵なとはあさましき事也

鹽許袁呂許袁呂迩畫鳴而引上玉フ時

塩とは國民にたとへたる也許袁呂〳〵は凝々なり氷をこほりと書くは恐らくは誤にて許袁理とかくへきことゝおほしき也これは國民の一族〳〵歸順し來るさまをたとへたる也物を烹るに杓子なとやうのものにて隙をいれてかきまはせは自然とかたまりゆく道理これに同し別事にあらす同し道理にて二神國民の歸順せん事を速にせんとしたまはさりし故に彼よりおのつからかたまり來れるをたとへたる也畫鳴とはかたまれはおのつから音ある也されはかき鳴すとは二神の御もとに一むれ〳〵あつま

り來りて賑はゝしく喧しかりし形容也かの一年にして邑をなし三年にして都をなすといへるもおもひあはされたり鳴の字まことに形容妙なり○引上とはもはやいきほひ彼よりおのつからあとはつゝきて歸し來るへきか故にその勢をはかりてかきたまふ事をやめたまふ也いかにもかゝる勢となり來れは世話に及はす歸し來る事あとをつくものなりそれをなほ世話やく時はかへりて害となる事もある事なるをしろしめして勢をはかりて引上たまひし神慮のほとおもひやられたりたとへは人を敎たつるにはしめはひとつ〳〵こまかにをしへをしふるまゝに次第に長しゆくを猶いつまてもひとつ〳〵こまかにいふ時は後にはさほとの事はわれもしれるものをなとかへりてうらむる事とはなるもの也こゝまてにおほしいたりたまひしまことに凡慮の及ふ所にあらさるもの也

ハモノ、節度ナリ唐ハコレヲカタニシテヲシヘタリ我國ハソノ勢ヲミシリテ引ケトイフヲシヘナリコノ引クヘキ寸ノ見ヤウハムカフノモハヤヒトヿ（リカ）ガデニモサウナツテユクヘキホトヲ見ハカルヘシ手ヲハナスヿハヤケレハ崩ル、ナリ手ヲハナスヿオソケレハ害アリコノ引上ヤウカ時ニ應シタルユヘニ自凝島ハヒトリナレリコ、ヲモテ矛ノ末ヨリトハカケリコレ引上ヤウノヨカリシヲミセテソノ功ヲサトシタル也

自其矛末垂落之塩累積成島是淤能碁呂島

其矛末とは國民歸順のあまりにこゝにいたれるをはさとしたる也歸順のあまりにと

いふ心を末とはいふなり末といふよりしたゝるとはいひしもの也累積とは國民談しあひてその談合なりて此嶋を御まし所にさため奉りしを云也成といへる事妙也かつて二神のもとめ給へるにはあらて有かたさの餘りに談しあひて此嶋をおのつから奉りしをは成とはいひしもの也されは自然になり出たるも同然なれは成嶋とはいふにてそのたとへやう後人の及はぬ書さまなり淤能碁呂は自凝の義也此名にもひとへに國民の心もてたてまつりしをあらはせりされは此嶋にはしめて天降ましゝといふより二神の御居所はしめてさたまれるなりこれまてはたゝ天浮橋におはしましたる也此故にこれより以前出雲にもおはしませ近江にもおはしませいつかたもわか御居所と定めたまはねはたゝ出雲も近江も天浮橋なり此理よく〳〵思ふへし○此淤能碁呂嶋の事ふかき故ありすへて貴賤によらすわか位する所すむ所ともに衆人のゆるすより定まる也衆人ゆるさゝる事をみつから定むれは忽害あるへき也たとへは金銀多くあまれりと人もしりたるものゝ家藏を買ふは人もゆるす所也しひて金銀をかりてかふはゆるさぬ所なれは必久しくたもつへからすこれにかきらす小事とても此理をもて推知るへし此理をさとして二神淤能碁呂嶋にはしめて天降ましゝ也

天降ハ上ニユルサル、ヲ本トスサテ下ニウケル所ノアルヲモ云ナリ自ラ天降リタル神ハ一柱モナキナリユルサル、所ニシタカフノタトヘナリ人ノユルシモセヌヿヲワカヨキヤウニ思ヒテオシツクルヿ人ノツ子ナリ行ハレヌハコトワリナリ

於其嶋天降坐而

於其嶋といふは衆の心に順したまひしを云也たとひ人はすゝむるとも私におつる事はせしなと思ふは却而隱身の道にたかふ也それは事によるへき事也こゝをよくはかるか隱身の大事の境なり此時つよくいなみ給はゝかへつて人心（衆）をうしなひ給ふへきをや○天降坐而　天降とはたゝ天より降り給ふことゝするは例の實もたれ也かの天浮橋よりくたりて此嶋に居をさため給ひし也されは此二神の私にくたり給ふにあらす衆すゝめ奉りたる事上の成嶋といへると且はしめより二神天浮橋のうへにたちてかきたまひしをもてあはせ知へしさて此天降といふ事もとより天神の御身にしてのうへの事なり末々みな同ししかれはつねの人はたゝいつまても天降る事あるへからすたとひ天神のことき徳を具したりともおしなへたる人にて天降るへからさる事しるし天下の衆情ゆるす所より天降り給ふなれはおほろけの事にあらすされともおしなへたる人とても一己〳〵の天地なれは一己のうへにして衆ゆるさは天降るへしさ

なくはたゝいつ迠も天浮橋にたつへき事也たとひ天降りたりともたゝ衆情にまかせ順するはかりの事にて心は猶隱身の道は身をおふるまて忘るましき事は天神たにしかりゆめ〳〵天降れりとて心をほしいまゝに持ましき也此二神もつひには天にかへり給ひ　迩々藝命もつねに　天照大御神のたまひし神寳と御あらかを同しうせさせ給ふはこれ此御をしへにしたかひ給ふ也

見〔二〕立天之御柱〔ヲ一〕見〔二〕立（ミタテ玉フ）八尋殿（ヤヒロドノヲ）〔一〕

すへて刑のたくひはみな柱ヨリオコルヿ也重箱ノすみを楊枝にてさらへるやうにせぬは殿也されはゆるさぬ所あるは柱也ゆるす所あるは殿なりと知へし

見立は見は御の假名也御寢（ミネマス）なといふ美也と知へし○天之御柱　神書にはすへて柱といふ事あまたありていたく大事の事とする也これふかく故ある事也まつ柱といふ物は下は地に入り上は屋をさゝへて上下の持あひをなしてくつれさるやうにする料の物也㝡初にいふ天地といふは卽上下の事にて此上下の持あひよくいつまてもくつれ頽れさるを天下泰平とはする也此故に柱をもてたとへて此柱たにたしかなれは天下泰平たる事をさとしたるもの也されはこゝも卽此殿のはしらをたてたまへるをはそ

の御心持とりもなほさす上下の持合をよくしてなかくたふれくつれさらんやうにとおほす御心掟なるをたとへてみせたるもの也龍田の風の神の御名をは天之御柱國之御柱といふ事も風は天地の氣を持あはせてよく和するものなれは名つけたる也柱といふ事神道に大事とする事よく〳〵思ふへし○八尋殿とはいとひろき殿といふなり卽こゝに八尋なる殿をたてたまひしなからその御心もちすなはちいかほとの數あるものをもさはりなくやしなひ給ふへき御心の內のひろさをたとへていへる也されは天之御柱は上下の別の正しき也八尋殿は橫にひろき也これ卽縱橫にてからの道にあてゝいはゝ天之御柱は禮義等也八尋殿は寬恕なる也人をひろく容るゝにはあはれみなくては叶はぬ也あはれみ過れは上下みたるゝ也上下を正し過れは人心はなるゝ也此故に天之御柱と八尋殿は人としてしはらくもわするへからぬ事しはらくもかくへからぬ事也たゝ此ふたつを同しほとにかけあはさは天下國家ともに草創せんこどうたかひなかるへし

高魂神オヒタヽシキ御子ナリシヿ神代紀ニミユルモ交合ハハヤクアリシ例ナリ

これより前には二神を以て一代とするか證也これより後は今眼前に虫まても交合するか證也

もし此時かはしめならは人も此時かはしめて出來たるならては道理なし人はありて交合せぬ理はなき事なり今のよにもいたりて愚頑なる人は年たくる迄交合の道をしらぬもあれと

於是問其妹伊邪那美命曰汝身者如何成答曰吾身者成成不成合處一處在尓伊邪那岐命詔我身者成成而成餘處一處在故以此吾身成餘處刺塞汝身不成合處而爲生成國土奈何（訓生云宇牟下效此）伊邪那美命答曰然善

衆のゆるしたるを第一とし夫より堅きと和らかなるせはきとひろきの心をきてを定めたまひさて夫よりたらぬを補ひ多きをへらして平均したまへる也これをたとへて此交合の事とす此交合の事此二神をはしめと昔より人思へるは大に誤れり人あらんからに交合の道しらぬことやはあるへきそれも猶人こそさもあらめ禽獸虫魚にいたるまてをしふともならふともなくおのつからしれるをみるへしこれははしめてしるしらぬなとの論にあつからぬ事也人とうまれてはおのつからしれる事そかしことに此前の八神に妹の字をそへまた二神をたくへて一代とするからには夫婦にたかはす夫婦ならんからに交合せさらんやうなしこれは衆の不足を補ひあまれるをはふきたまひしさまを交合の事にたとへたる也交合にたとへたるは男女の過不足を平均するか故に和して子をも生するなれは衆に過不足なきは和のもとゝなる此二神の御徳をさとしたる也神代紀にはこれを弁へ給はさりしにやまことの交合のやうに書たまへ

その愚頑をもて大徳の神たちに比するはかたはをもて美人を祭するにひとしかるへし今の世に遠國邊鄙の人とても世上通用の理は行はれされとも物くふ事と交合の道はしらぬ人なきをもても思ふへしわか柳川上妻郡といふあたりは山中にして人みな太古の民のことし兄弟を夫婦にせんといひしを村長にとひしに何よりよき工夫也と賞したりし事ありかゝる民ハ實に神代の民なれともなほ交合の道はしれるをや

りされとまことの交合のやうに書たまへりともなほ義は此義たるへき事也此書のめてたき事は男陰を成餘處女陰を成不合處と過不足の事とし刺ふたくといひて過不足なく平均する事にしていへる妙也からにも井田の法なとこれ也けにものに過不足あるか故にあらそひは出來る也あらそひをやむるは此のりにしかぬ事也〇汝身者これを身にはと訓するはあしゝ全身いかやうになれるそととはせたまひし也されは身はとよむへし日本紀のことく陽元陰元なといはゝ身にはとよむへき理也〇爲生國土生とは交合の事よりうつりていふ故也されと子のうまるゝは男女の氣の和合したるより生するなれはそれにたとへて衆人の和よりその一國〳〵の國用を生しゆきし事をいふ也されはものゝ財用となるは和より生する事しるへき事也兩親もゆるし天神地祇（祇）もつけて嫁に得たる女も交合せされは千年むかひそひゐても夫とも妻とも思はれぬ故にたかひに心和する事なし和せされは子うまるゝ事一期あるへからす外にたとへもあらんに交合の事にしもたとへたるはこゝまてをふくめていふへき故也むかふには成餘りたる所をもちて男ありこなたには成不合處をもちて女ありて千年むかひゐるともつひにうちとくへからすまして子はうまるへからすよく〳〵思ひしるへ

し生國土とは國土より財用の生して世のためとなるへきやうにしなしたまふをいふ也たとへて茶わんありても疵ありて茶のまれすはあるもなきかことし金銀山のことくあれとも倉庫にかたく封しこめ置たらはなきもひとしかるへしされは生ははしめてなり出たるにあらすはしめて用にたつやうになれる也猶末々に引あはしてみるへし國土はもとよりありつるに疑なしたとひありとも用にたゝぬはなきにひとし〻かれは也外の事にてたとへたるよりは人々情欲の至りなる事なれはいとよく味はひし故に生とはたとへたる也すへて此交合のたとへは人の身に人々よく思ひあたる事なられるゝをもつて也生といふもはしめて生給へるにあらさる事は子といふもうまれたる時にははしめて四肢五体の出來たるにあらす十月以前より母胎のうちにてなれり四肢五体たにあらは胎にある時もうまれても同前の事なれとうまれさる子に家をつかする事は出來ぬ也されは子を生むといふも有用の物とはしめてなれるを云也さらにその物のその時出來たるにはあらさる事なり國土またしかり此時はしめて國土の出來たるにあらさる事子をうむに同しはしめて有用の國土となれるをうむとはいふなり〇故をかれとよむはかゝれはの畧也ばは下へつゝくる爲の詞也古語はすへて後世

のごとく連續せずすなほ也此故にかれとはかりいふ也彼をかれと訓するも同し心也かはもと思ひあたりの所をさしていふ詞なりこゝもこの二神の身のなりやうをいふ（う）てさて國土をうむことへ此二神の身のさまをさしあてゝいはん爲也

尓伊邪那岐命詔然者吾与汝行廻逢是天之御柱而爲美斗能麻具波比

これより婚礼のいにしへの式なるへし此二神天神の命をうけて天下をつくりかためたまふはしめのさま先祖の業を子孫につかせん爲に女を娶りて夫婦となるはしめに同し意なるか故にたとへたりたとへ物妙なり天之御柱をめくる事婚礼のいにしへの式なりとみえたり上下の別のくつれぬ樣次々につたはりゆく爲にする婚姻なれはそれを示して式にする事なるへし古の式の格別なる事知へし此故にまつみとのまくはひよりはしめにする也今二神天下を周遊したまふもその本意天神の上下の別をたてたまひしをくつさぬ爲に天下へつたへ給ふか本意なれはまつかくはいふ也〇美斗能麻具波比はみとのは御所能也下文に久美度といふはこもり所の心にて閨也されは御所といふは御久美度の畧也と知へしまはほめていふ也具波比は

如此之期乃詔汝者自右廻逢我者自左廻逢

右左は尊卑なりこれいにしへの婚礼なるへししかるを今此二神男神は大事をとり女神は小事をとり給はむとの約に比したる也上役下役なとの所行のことしと心うへしこれより左は尊く右はいやしき事もおこりて下の左の御眼右の御眼なとはらへの所にいへるも同し

約竟以廻時伊邪那美命先言阿那迩夜志愛上袁登古袁後伊邪那岐命言阿那迩夜志愛袁登賣袁

この二句の言は婚礼にいにしへ必となへし事なるへしそれ即男よりとなふへき礼なるをもつてそれをたてゝこゝに女人先言よからすといふ也されとこゝはなにも此言

の意によりたるにはあらて女神の男神よりはさし過て事をはかりたまひし事をたとへていふなりわか國の昔にはかゝる事多したゝ表の事にかゝはらす理をかりてたとへとする事也よくみて思ふへし○迩は阿迩兄なといふ迩也阿祢といふ祢その外たちねなといふ祢も此迩の通へるにてあかめ親しむ詞也　夜は詠なり　志は下の愛袁登古袁の詞を上の詞にそはせて形容する爲にそふる也　愛はよきにかよふ詞也古事記傳に例多く出たり　袁は詠のを也その八重垣をなとのことし後世なきを也

各言竟之後告其妹曰女人先言^{ヲミナコトサキタテ、サカナシ}不良雖然久美度迩興而生子水蛭子此子者入葦舩而流去

女人先言云々　は卽婚礼の古式によりていふにて卽天之御柱の法にたかふをもて仰られたるもの也これは甚大事の事也これ卽此下文までの処天之御中主神の天地をひらき給ひしわけをはみせたる也上下の別をざつとすれは行末不祥の事出來る理をさと

しての給ふなり○雖然　不良とおほしめさはめくりなほし給ふへきに猶さなからに
して御あひましゝをすまぬ事にして雖然といふ也されはすへてわか氣にこれは不都
合と思ふ事を改めすしてする時はいつとてもかゝる不祥のわさはひは來る也すへて
氣のすまぬ事はすましき教也不良としらはさつそく改むへき事也　此ために此神後に祓といふ事はおほしつかれし也
その氣のすまぬといふは皆上下をみたるの事なるもの也天神上下をかたくわけ給
ひしはかゝるわさはひをは人々のうけん事をあはれみたまひての事なる事知るへし
○久美度は上にいへり○興とは起す也これは御寝ましたる事をくみどといふにふく
めてさて起すといふ也起すとは子をうまする形也須佐之男命の段にも久美度迩起而
所生神名謂八嶋士怒美神云々　とありされはくみどはもとより閨の事なれはねたるに
し置ていふ詞也生子うむにかきりていふ詞也こゝは雖然みとのまくはひし給ひ懐妊
したまひて月滿て後おこしてといふへ（衍）へきをこれほとの事は久美度といふからはこ
れほとの事はいふに及はねは也おこすといふからはねたるはいふに及はねは也簡古
の文章まなふへしこひねかふへし　さて此たとへは女神のわろきなりにかばひ給ひ
し形容をいふなり○子　此子といふ事すへて心得ある事也実にうみませる御子もあ

るへし又は子のことく思して養ひたてたまへるもあるへしいつれともに父母のことくめくみたてたまひしものをは皆子とはいふ也実子をも他人をもすへて子といふ事父母の慈悲のことき をもていふ也その人物をなし（敎へ）たまひしことをは生とはいふ也唐にても民之父母といひ四海皆兄弟なともいひ釈尊も法華に其中衆生悉是吾子と仰られしもみな此心に同し人たるもの此心なくては叶はぬ道そかし○水蛭子は水蛭に似たる子をいふ也と（宣長）いへり水蛭ならすとも足たゝすしてもこよふ物はあれとも此虫にしもたとへしは國いまたかたまらさる時としていふなれは水蛭の泥土に多く生するか故に名つけしなるへしこれはまことに足たゝぬにもあるへけれとなかしやり給ひしをみるに片輪者といふ斗の事にはあらす覺ゆる也片輪者をすてむは甚心なき事なりされは思ふにこれはやしなひ給ひてより三年になれとも何の益にもたゝす一國ををさめさせらるへき力なかりしをいふなるへし三年試みて用不用をしるへき法とをしへたまひしもの也足といふは志す處へあゆみをよふへき用の物也されは一國ををさむへき材にあゆみいたるへきけしきのみとせまてみえさりしをたとふる也此一神をもて思ふに此下々の御子もみな三年試みたまひて後國をも任したまひし事明ら

か也これ（マヽ）を人材を試むる法也下村氏か家僕を三年つゝ試みしこれに叶へりその故にしか蕃昌するにこそ○葦舩　世に思ふ通りの此御代のさまならはいかゝは舩あらんわか說のあたれる事これらをもて思ふへし前の天沼矛なともかゝる時にあらんやうなし葦といふは葦葉のこときといふ心にて小舟なるへしこれ流罪の濫觴也されとこれは後世の流罪といふものにはあらすたゝ此たひ天下を固めたまふ役人の内に入れすはふきたまひしたとへ也葦舩に入れてなかしやりたるやうになされしと云也

次生淡島（アハシマ）是亦不入子之例

淡島とはいへともこれ畢竟は此神の名也あははあは〱しき心にてあはむるあはめにくむなといふに同し人のあはむる性なる神なりし故なりされは子の例にいれ給はさりしなるへし二神上にもみゆることく和より天下をかためなさんの御志なる事この淡島をはふき給ひしにもしるし人のあはむるやうなるうまれ付にては天下和する

事なし此故に用たまはさりしなるへし此淡嶋を又その神のうまれ付あは〱しきうまれ付なりしともいふへしすへてかうやうの人は用ゐましき事言外の御をしへなり○例　かすとよむも聞えぬ事也例の字も快からぬ字也今案例は列にてつらと訓むへくや　是亦の字は上の入葦船云々をも釈したる也と知へし○此二神をしもはふき捨させたまひし事心をとゝむへき事也これを捨給ふこそあとの用たまひし神々のすくれ給へる事をきかせたるもの也これ我國の言のつねののり也これをかくいはねはあとの神々一神〱その徳をあけていはねはならぬなりからの列傳なとのことしそのくた〱しきをいとひてかくかゝれたる也埒の明たるもの也

奇魂　天之御中主神

荒魂　高御産巣日神

和魂　神産巣日神

幸魂　宇麻志阿斯訶備比古遲神　泥土ノ中ニコノ神必アルノ敎

天　天之常立神

地　國之常立神

人　豊雲野神

宇比智迩神　妹須比遲迩神

角杙神　妹活杙神

意富斗能智神　妹大斗能辨神

淤母陀琉神　妹阿夜訶志古根神

伊邪那岐神　妹伊邪那美神

天之常立神

國之常立神

神名尊稱

主（天之御中主）　日（高御產巢日・神產巢日）　彥男（あしかひ・ひこぢ）　奴（主ト通ス豊雲野、豊斟渟ヲ一書ニ豊國主トモアリ）

高（トソへ神トソフル）　宇麻斯　天之　國之　立（つち）ト通

天子　親王　公卿　將軍　諸侯　士　農　工

商　醫　儒　僧　遊民　非人

君臣　父子　夫婦　兄弟　長幼　賢不肖

古事記神典燈

古事記燈巻之一

上巻神典其一

天地初發之時

（朱）〇神代巻には渾沌開闢之さまをくはしくしるされたる此記にはたゝ天地初發とのみかゝれたるはくはしからぬやうなれと渾沌せる様とは天地もなきにひとしく清（陽）湯重濁わかれて治（始カ）て天地はなりいつるかことくなれは渾沌せりしか開闢せるをはやかて天地初發とはかゝれたるなり神代巻くはしき様なれと渾沌せる様とは天地もなきにひとしき心は此記の初發に明らか也すへて此記のかきさまかゝる事多し神代巻は舎人皇子もとから様をうらやませ給ひし物なれは本行は中々なることゝもゝ打ましれり一書の類はみな諸家の傳のまゝをあけさせ給へれは此記にもゝれたるめてたき事ともゝあり此記にてうして義をさとるへきふし〳〵も少からす近ころ伊勢人本居宣長わか御國の御てふりを貴ふあまり彼皇子のから國うらやみをふかくいみて其誤を正し此記の正しきことをくはしくあけつらへり古事記傳にみゆ具に此記の正しき事はこの序に安磨呂（マヽ）ぬしかかゝれたることく　み

かとの御代〱の御口つから傳へさせ給ひしを阿禮ぬしか暗記せるまゝを錄せられしかは御國言のまゝに假名にかゝれし所々も見え此記のまされるをは宣長か論らひいたれりといふへししかれとも古來國學者流善はらひ惡はらひを貴ふわか御國振に思ひ至らす萬事皆たゝこれを本として出たる事に心(つ)すかすして詞のうはへにのみめをとゝめけるより其說々こと〱く本意に叶はすまつこの天地渾沌開闢の事誠の天地渾沌して有しか開闢しける始をしるしたるものにてみかとの御始は天地開闢よりなり出ましゝ神のみするにましますことを錄したる物也とのみ心得來れともよく〱考るに此天地渾沌したりしか開闢しけむこと信しかたし其故は或は丸き物と方なるもの或は白き物と黑きものなと社(こそ)渾沌はすへけれ天は無形にして地は有形なり有形なるものと無形なる物と渾沌したらむはいかなる樣そや又はしめあるものゝ必をはりなけれはもしはしめ渾沌してありけむか開闢したるならはさらにまた渾沌せむ世もあるへきに此天地ふたゝひ渾沌すへきものとも見えす疑ふへき書樣也されはこゝにかきらす神典中に疑しき事のみなるをこれかれくらへあはせて思ふに大方人生るゝ時は其因て來る所をしらねとも死する時は心は天に歸し身は地に歸すること皆人しれる處也されは心は天の化成身は地の化成疑なしかく天地化成して一渾となる一人となる其心に屬せる念と身に屬せる念ありて心に屬せる念は淸く身に屬せる念は濁れりこれを神代卷

に清湯(陽)天となり重濁地となると見えたり此二念言行(となり)(衍)となりいつるこれを善惡といふ也此善惡を本にかへせはたゝ心身に屬せる二念也此心身をまた本にかへせはたゝ天地尊卑の二性なる也されはこゝに天地をいふは誠の天地のうへをとけるにはあらて所詮は善惡の上をさとし給へるなりしかれともこれあらぬものもてさとされたるにはあらすまへにいふかことく次第にもとにかへせは天地は則善惡の親なるか故に其末をさとさむ爲に本を詞とせられたるもの也是大方吾御國言の常也神代卷に〈渾沌如雞子とあるはからふみ淮南子か語をからせ給へれはよしもなくひたふるにからふみをまなはせ給へる物のやうに思ふはくはしからす心の心身有形を外とし無形を内とすこれ雞子の如くなるか故に此かたちをさとさむによき語なりとてかゝせ給ひしそかしこゝにおもひいたらすしてひとへにからのみするも所詮は我御國言必本意のすしには詞をつけさる大方の法則にくらきか故也しかるに渾沌をしもいふは天地の二性はもと筋を異にせるものなるに二性を渾沌して一人となる其渾沌中よりいつる言行なる故におのつからあやまりて善惡もまた渾沌し善と思ふも誠の善にあらすこれ渾沌の開闢すへきいはれなる也開闢の文字も猶かり給へるにてひらくといふ義にはあらて天地の二性渾せすしてふたつなからたつをいふ天地渾せすしてふたつなからたつ則渾沌の開闢したるか如くなれは也猶此ふたつなからたつへき様は下の天之御中主神にさ

とるへし初發の字の心は渾沌せる天地はいまた天地のなきにひとし天地を渾せすして尊卑の二性を二なからたてたるこれはしめて天地のなり出たるなれは天地初發とはいへるものなり萬葉集中に天地のはしめのときゆとよめるに随ひてこゝをもしか訓したる宣長か点よしかく學者の渾沌しかるへからさることをさとりて始て天地の二性を全くしたる時をは天地はしめて成出たりとこそかゝれたれさらに〳〵まことの天地のうへにはあらさる事也たとひこゝは誠の天地のうへなりともみよすへて神典中実事にかなはさることのみ多かるをいかにせむとかする宣長はこれをすへて実事と見（是は宣長にかきらす古來學者のわか御國言をくはしく心えさりしよりのつひえなりこゝにひとり宣長か名を擧たるにそのせつをことわらんかためなり）実事にかなはさる所々に至ては神の御うへははかるへからすこれをはかるはから心なりとつねにいへり神人の境をことにする事はいふもさら也しかれともひとのたはかりもてもとよりはかるへからさる事ならは錄したるも何の益かあらむよく〳〵思ひかくその遯辞なることを明らめてまとふましきなり大かた我御國言のやう此神典のこゝろえは萬葉集燈大旨此神典燈大旨にくはしく述たるをみるへし○之時とはさらに太古の事にあらす學者渾沌をまぬかれ天地の二性をはしめて立たる時をさす也前にもいひしかことく渾沌したる程は天地もいまたなきにひとしけれはわさとかく太古のやうに書なされたるもの也されは此之時はいにしへ今にかゝはらすたゝ學者のさとりえたる時をさすなりとしるへし

（謹按）人貴賤となく事大小となくつゝむれはたゝ善惡のふたつなりされは人として善惡のふたつをよく弁ふへきことはいふもさら也諸教もたゝ此ふたつをむねとする事なれは今更いふに及はさることくなれと善惡の所置いまたくはしからさるか故に神典はをしへられたる也凡善惡善をよし惡をあしといふは人としてしらさるはなけれともとその善惡の本を糺す事いらさるか故にみつからは善事をなすと見（思）へと惡にのみ混するをしらすわか御教人をして純善をなさしめむと也諸神のふるまひ給ふ所人智の及はさるは卽このけちめなる也善の惡に混する所以は古今和漢英雄豪傑の其志を遂さりしに察ししるへし〇按この故にくはしくするかうへにもくはしくたつねしりてよく善惡を明めされは善事も皆いたつらわさなりぬへし然る時は善惡共に弁したるかことくにして弁せさるにひとしけれはかへすく〵神智に隨ひ善のあくに混するを能く弁別せよとの心なり

於高天原成神名天之御中主神

（言）此高天原をたゝ天上の名なりと心得るは麁なり其故は天はもと高處にある物なるを高天としもいふは稚語也これ必低天とさすへき處あることを示しての（衍）名なることとしるしされは思ふに人智に天と思ふ所はいまた低天にて誠の天にあらす其天の上に高處ありこれ誠の天にしてそこを高天原とはいふなりこれによりて考るに

高天原
天
葦原中國
地
根國底國

大方此圖のことく五ッにたてゝ名をつけたる物なる事神典をしへ給へる大要也とはしりぬ此高天原といふは上に論らひおけるかことく大かた人の天とおもへる所はいまた高処にあらねはおもはす地と渾沌する也高天原あることをしれははしめて渾沌をのかれて天まことの天とはなるへし此故にもろ〳〵の天つ神達皆この高天原におはしますよしをかゝれたるにて神智と人智の別をしめし給へるなりすへて神智は人智の及はさる所にて人智よりおもへは思ひの外なること共也され共人智いかはかりかしこくともいたらさる所あるへき事卽天と思ふも地と渾沌するにて思ふへしされはたとひ條理なきことく思ふとも人智はかきりあるものなる事をかへりみいさゝかもまけし心なくひたふるに神智に随ふへき事神典を學ふ第一の心得なる也今こゝに此事を論らふこと此高天原をしらむに人智の及はさる所あるかゆゑそかし其故は神典中五百引石件へ於底津石根宮柱布刀斯理於高天原氷椽多迦斯理而云々また力競之件へ於底津石根宮柱布斗斯理於高天原氷木多迦斯理而云々また天降之件へ於底津石根宮柱布刀斯理於高天原氷椽多迦斯理而坐也此外祝詞なとにも此詞あるみな此例

にて底津石根をさき高天原を後とせり ある人とふ此たとへもと柱をたてゝ後屋根をつくるものなれは其前後に随ひたる詞なれは予か說うけかたしといふ答へていふたとへ物とせむに其さとさむとする事の先後にたかへる物をうらやむはその前後よく實にかなふかゆゑにかゝれたる物なるそかしたとへは善悪をさとすに天地を詞とす其天地もし善悪をさとすによくかなはすはいかてかかり用られむよく〳〵弁ふへし後世はこれをまことの宮作りの事と心得るは例のいひかひなき事なり 此前後をおもふに高天原をしらむにはまつ根國をしるへしとのさとしなりたとはゝ清き物と不清物と混したるに清き物を撰らむよりもまつ不清ものを拂らふへし不清なる物たにえらますはおのつから清き物はわかるゝ如く根國たにたしかならはおのつから高天原はたしかにたつへしと也されは詞の上にはたゝかく於高天原とはあれとも今いふかことくもし根國たゝさらはもとより高天原たつへくもあらねは幽中に根國たしかにたてる故也と心得へし根國たしかならは高天渾またたしかなりこれ天地ふたゝひ渾沌すましき所以にて人の思ふ所の天地はまことの天地にあらねはあれ共なきにひとしき事をさとるへし大方人智の上にては根國なからむにこそ高天原はたつへけれと思ひてもはら根國をうしなはむとすしかれとも上にいふかことくもとこれ天地の二性なれは其うしなはむとするよりかへりて天に混するこの眞理におもひ至らさる事卽人智の神智に及ひかたき故そかし(朱)○成神この高天原にしも神なり出ませりといふは人のおもふ所の天は概するに地に混するを上に論らへるかことしさるいやしき天には神おはしますものにあらすされは人智をのかれ神智に随はむとにはまつ高天原のたゝむ事肝要なりとの心をさとしたる物なり此

成とは自成したるをいふされは神はしめてなり出ませるやうなれと人智には高天原をたつることなきか故に神もおはしまさぬにこそあれもとより高天原におはします神なる也天地よりはしめて神發といふにひかれて神もなり出ませるやうにかゝれたる也これひとへに學者の上にて天地混沌をえわきまへさる學者はもとより神智におもひいたる事もえかたかるへしさる人は生涯たゝ人智の内にもこよひていたつらにくるしみの中に生をふへし返々もまけし心をのそき天神たちにあひたて奉らむことを願ふへき也此下神のなり出ませることをいふみな此例に見るへし(朱)○名神に御名をたてまつれるは其神の御たまをはかりて奉れる物也されは其神々の御たまをしらむには神名を明らかにすへきなり(朱)○天之御中主神此神は天地の中をつかさとり給ふ神也天之といふ事を冠らせたるにて疑ふ人もあるへけれと天之中は卽地の中なれはかくいひてやかて天地の中なることを思はせたるなり此下の天之常立神も（常立は底立のうつれるなるへきことそこにくはしくいふへし）天の底はやかて國の底なることこれに同しもとより天の方はかりを詞として地の方は言外に靈となりたるなれは天之御中とはいふ也けりこれ予かわたくしにいふにあらすわか御國言のつねなれはなり此下にくはしくいふかことく天の方をいふは地の方を思はせむか爲也後世心をもて思ひまとふましき也御中の御は眞ともかよはしていふ詞也萬葉集中にまてといふ脚結に左右手とも又佐右ともかけるは手の左右を具足せる

をまてといふなりこれによりて思ふに眞御ともにふたつを具足してかたよらさることをさとしていふ詞なること明らか也これより人をたゝへて眞人といひ言をたゝへて眞言といひ心をたゝへて眞心といふなほ玉を眞玉山をみ山よし野をみよしの熊野をみくまのわかの浦をまわかの浦なとたゝへたる大方片方によれるはめてたしといふに足らねは也これらをあはせて考るに天地の二性をそなふるを神御心とし玉へは人もこれに隨ひて天地の二性を具するを眞人眞心眞言ともたゝへてあるにてこゝの御中も天地の中なる事これらにて明らか也天の性をたてむとすれは地の性たゝす地の性をたてむとすれは天の性たゝすこの故に天地の二性をたてむには天地の中位にをらされはふたつを具することあたはすあらゆる諸神の第一にしも此神のおはしますは天地の二性を第一との事也とおほしめす神の御心なれは也主は宣長か說のごとく乃宇斯のつゝまれるにて奴之といふ時はのをいふへからす乃をいふ時はぬしとはいふへからす（萬葉集卷五にへこのぬしの云々とよめるは此樣人のうしのといはむをはふける物也これによりて宣長か說を破する人も聞ゆれと猶宣長か說正しかるへし後世何のぬし何うしなといふはひかことそかし）宇斯とは宇斯波久といふ詞を体にいふなり此神典に（青柴垣之件）汝之宇斯波祁流葦原中國者云々　また萬葉集卷五（長歌上下畧）宇奈波良能邊尓母奥尓母神豆麻利宇志播喜伊麻須諸能大御神等云々　なとありてすへてそこを領ししれる心なり神とはすへて御身はおはしまさねとも其妙用人のおよひにあらさる事をたゝへ申御名なり

（闕朱）靈上に諭らへるかことく天地を詞とせられたるは善惡のさとしにて高天原はおほよそ人の善と思へる所より一段上の善なることをさとされたる也其一段上なるゆゑは惡に混する事なき善なれは也これ根國たたされは此純善もたつへからす（さ（マヽ））妙理述つくすへからす口授　根國とは即黄泉の事（件）と心得へし此根國にはいふもさら也高天原といへ共さなから言行に出る時は二性ともにたつましきか故に惡解除善解除のをしへあり惡解除は誰もよくしれる事なれと善解除といふ事人智の及はさる所にてわか御教の肝要なる也他域のをしへこれをいふこととなしこれわか大御國振の他域のてふりにたかへる所以神智の人智に遠へる所以なり此事神代卷上一書　即科素戔鳴尊千坐置戶之解除以手爪爲吉爪棄物以足爪爲凶爪棄物云々　と見えたり其本文には　ヘ科之以千座置戶遂促（セメハタル）徵矣至使拔髮以贖其罪亦曰拔其手足之爪贖之と見え此記の神典にも於是八百萬神共議而於速須之男命負千佐（位）置戶亦切鬚及手足爪令拔而神夜良比夜良比岐とあり後には履中紀に車持君をし（マヽ）ありけるに善解除惡解除をおほせられし事あり又延曆太政官府に善惡二祓とあり又大祓祝詞に天津罪國津罪と見えて此ふたつの罪をはらふことをいふも即此善惡二祓にて大高（マヽ）祓の本意は善惡のふたつをはらふなりけりしかれとも本此祓といふこと後世心得誤りてはらひ除く事也とおもへるは例の後世心也はらふとは身外をはらふにてかたく言行に出さるをいふなり此眞理くはしく述かたし口授　上にもいひし

かことく地の性もゝとやむことえさる物にてこれを失はむとすれはかへりて天の性をさまたくるものなれは此二性をたてむこと一大事にてつら／＼わか上を考るに此二性をたてすしては叶はさることにて天下衆人猶これに同し此故に中々一家一身の小事には其弊もすくなけれと天下國家をゝさめむには此二性をそなへされはたとへ目前は治平なるかことさもたのもしかるましき事也されは此ふたつを具せむとするには善惡の中を言行とすへしこれはおのれか上のみならすあらゆる人これをよろこはさるものあるへからすこれこの神典に（石屋戸之件）是以八百萬神於天之安河原神集集而高御産巣日神之子思金神令思而云々また（娟附之件）尓高御産巣日神天照大御神之命以於天安河原神集八百萬神集而思金神令思而云々とありこれ也（此石屋戸の件は須佐の男命の御とゝのひ娟附之件より以下は大穴牟遅神の御とゝのひを示したるものなるかゆゑに其はしめはしめに此文あるなりこれわか御をしへの要なること下の件を見ておもひしるへき事也）かく八百萬神達をつとへ思金神に思はしめ給ひて決定し給ひしは諸神の御心一致したるよしを示し給へるなれは彼我ともにたとひ賢不肖さま／＼の辟ある人もあれとそれにかゝはらすおしなへてよろこふへき肝要をしめし給へるなり是たゝ今いふ善惡の中を言行とするにあること也（葦原中國といふことは此善惡の中位を示したる名なりこれにかきらす國号みなわか大御國の御手振をさとしたる名なるを後世心よりたゝ大方に見るは産（衍）なりくはしくは神武紀にさま／＼の國号あることをとけるに見へし大方中は佛も儒もこれを尊ふされともおのつから國國の手ふりに隨ひて中をいふ淺ひあるかことしくはしくは口授するをきくへし）善惡の中とは尊くもあらす卑しくもあらさる所をいふ也人智の上にては卑しきを卑しからすなすこと難しと心得てもはら卑しきを制する

を常とすけにこれも難からさるにはあらねと此神典のはしめに　へ如浮脂とあるは水にうける油は水中におしいれんとすれとも入らす火をつくれはやかてもえあかる性なるかことく人も卑しくなることを好ます尊からむとは好む性なるをさとし給へる也猶素兎之件なる菟をいふも同しさとし也菟はまへのあしみしかけれは高所にのほることはやすく下ることかかたきものなれはなりくはしくは其件にいふをあはせ見てこゝろうへし他域はしらすわか御國人は尊きことを好み卑しきことを好まぬ性あるをさとし給へる也これいはゆるまけし心也此故に卑しきをいやしからすなすことはかへりてかたからすたゝ尊ふときを尊とからすなすこといとかたき物なるかゆゑに後に諸神の天降をいふは即このさとしなりくはしくは下件にいふへし神典中かへす〲此かたきことをしへしめし給へり是又神智の人智にたかへる所なりかし善惡ふたつを具すといはゝ人事にうとき人々はあさましきことにおもふへけれとよく〲思はゝ思ひ至るへき也これ又予か私にいふにあらす宇受賣命の石屋戸之件　へ爲神懸而掛出胸乳裳緒忍垂於番登也と見えまた勝佐備之件　於聞看大嘗之殿屎麻理散といひまた木花之件　我之女二竝立奉由者使石長比女者天神御子之命雖雨零風吹恒如石而常堅不動坐亦使木花之佐久夜比賣者如木花榮榮坐宇氣比氐貢進云々なと猶いとおほかれとはふきぬ　いへる皆善惡の中をすゝめ給へる也かへす〲善惡の中を言行とせむことわか御をしへの第一の事なり學者ふかく心をくたくへき事也　歌のよみさまをは年比思ふにこれ又善惡の中を詞とする也詠哥言語ともに詞なれは此のりひとしかるへき事いふもさらなり哥のことこゝにくはしくいはす下の件々哥あるところにあけつらふをみるへし

次高御産巣日神次神御(マヽ)産巣日神

（朱）○次といふ字こゝを始として下の件々いと多し古來の先達たゝ神の次第してあれましゝ也とのみ思ひていかなる故ありて其神の次てあれませるともたすねす大方に見過したるは例の产（疵）也此次の字を思ふに深き理を此文字にかへられけるものとおほしく神々の次第し給へるを始め件件の次序やむことなき事一部を檢糺するに明らか也此次序神一柱をも除へからす錯置すへからす件々も又是に同し其次序をたてられたる列理こゝにいひ尽しかたしといへとも其大要をいはゝたとはゝ十二月に至らむとするに正月二月三月四月五月と次第に□（過）（虫食）されはいたり難きかことくかりそめにも此次序をゆるかすへからすこれによりて思ふに孝德紀に惟神（カムナカラ）といふことを舍人のみこ自注し給ひて　惟神者謂隨神道亦自有神道也とかゝせ給ひ猶此神典にも无間勝間之件差暫徃將有味御路乃乘其道往者如魚鱗所造之宮室其綿津見之宮者也とある此隨神道乘の字を思ふに神道といふものは此神道といふ名孝德紀に始て見えたれはいと後の名也と先達いへりけに孝德紀よりさきには見えぬ名なれはさもあるへけれとそれよりふるくありける名にても紀に用なかりしか故に見えさりしにもあるへしあなかちに孝德紀を此名のはしめとも定めかたくこそそれはいかにもあれ神道といふ名ゆゑなくてはあるましきことなるをや　此諸神の次第件々の次序をさしたる名にて其次序にしたかはてはあるましきことをさとし給へるなるへし此故に此次第たとへ人智におきてはしかるへからす覺ゆる事はありともひたふるに此次序にしたかふへき也此事をある僧にかたりけるに大智度論に□（こカ）の一論每に始に復次とかけりこの次第何のゆゑともたつねしる人なかりしか今予か説にて始てこれをしりぬもとその大論千卷になりしを龍樹ほさちつゝめて百卷とし給ひけるよしいひ傳へたり十分か一とつゝめなせはひとへに其論と論との間に多くの詞をはふきてつゝめたるものにて上下の論と論とをもておせはおのつからその義はしらるへきか故也とはほし

めてさとりぬとて予を合掌してよろこへる事ありき此の次といふ字をこゝろえむにたよりある事なるか故にこゝにのせつされとわか神典はしかつゝめなせるものにはあらす本〆わか御國ふりにていはて叶はぬ事にてもいはてありぬへきかき□はいはすまして無用の詞をやされはわか神典の次の字はそれとはたかへり　上下の神の御玉をくはしくおせはおのつから次第すへき理は明らかなるへきをや(朱)〇高御産巢日神の高は建にかよふ詞也建速須佐之男命建御雷神建御名方神なとみなこれ也かは阿ぬきの音けはえぬきの音にて　わか亡父世にいふ五十韻をつねに經緯といへり　おのつから其義たかへりくはしくはこゝにいひかたし此末に天降之件(筑)笠紫日向之高千穗之久士布流多氣云々とある多氣は山の高きをいふ名也これをもてそのかよふをしるへし　嵩ノ字を多氣にあてたるをもておもふへし　たけといふは反ひかたくしのきかたきかたちをいふこれ高の義に同しきか故也御はまへに御中主の神の所にいへり

古事記燈　四

（國神生の段）

國神生の段

大事忍男神より豊宇氣毘賣神まて

（表紙）

○十四島をうみ給ふ事　此事又別祿（錄）あり

如此言竟而御合云々といふは卽わか身をわか心もてしたかへ給ひし儒見なり此御夫婦してうみ給ひしといふは威服し給ひしものなりはしめ自凝嶋よりおこり給ひて淡路四国隱岐九州伊伎津嶋佐度大倭豊秋津嶋と次第したるその勢小より大にうつれるはその威次第にまさりゆき給ひし事あらは也その国々に神名あるはいさなきの命の御神氣をそゝきとゝめ給ひしをもていふなり御神氣なれは末にこれをもこめて三十五神とはいへとも實はまことに自然の妙用にあらされはいつれも神といはすこれその別をみせたるもの也此故に此次に既生國竟更生神とは書かれしなり此生國儒見にてはこれを平天下といふわか神道にはこれを平天下とせさる事明らかなるは末に大國主神ありて國造り給ふといへり國を生むと國を造るとの差別儒と神とのたかひめなりこゝに生國とあるからはもはやこれにて此あとの乱はあるましき事なるに　神武紀にいたりてもかの長髓彦八十猛か

たくひいと多かりしをやされはこゝは威を以て無理に威服したまへる屈服のかたちなり周の天下を治めたるかことし祓禊より以前は文王武王のことしとみるへしかれは威服とおもへれとそれはいはゆる肉眼のうへ也佛の佛眼といふかことくわか神眼にてみれは屈服也此故につひに終に火神をうみていさなみの命神さり給ふとはいふなり屈めたる物つひに伸さる事なき事をしらさるは儒の見の淺き事みつへしみなこれ御一人の身心をもつて屈服し給ひし嶋々なるか故にこれをまことの平天下とせぬはつひに久しかるへからさるか故なりこれ我道の貴き所なり　此嶋々の神名はその嶋の形あるひはその嶋の産物又はその嶋の風俗氣質なとにしたかひてつけたるものなり男神と女神とのあるは男神の分はいさなみの命の功女神の分はいさなきの命の功なるへしいさなきは心なりいさなみは身なり心をもつて服するむかふのあしかひを無理にかゝめ給へる也身を以て服するはむかふの高みむすひを無理にかゝめ給へるなり此ふたつともに危きわさにて心をもつて葦牙をかゝむれは八雷神生し身を以て高みむすひをかゝむれは八百萬神つとひ給ふ事上にいふかことし夫婦して生むとは一人してする事也これ言靈ある書やう也

○既生國竟更生神云々

こゝの女男神は二神としてかそへて拾神といへりこゝの風木津別までの神心えかたき事なり宣長

は此神名みそきの段の神々に名かよひたれは異本なとのを重複したるにやといへりそれしかりとも決しかたしかれ今按下の事代主神といふも事は言事ともにかけていふ御名と聞えたり萬葉に言靈といふを事靈とかき又言擧を事擧ともかき又此記のよみの段の末に事跡といふも言の心とみえたりかた〳〵おもふに此大事とはすへての言となる神氣の事とおほしき也それより下をみるに石土石巣も假字にて云の心なるへく吹は耽を枕草子にふきかたりなといふかことく耽言の事のやうにおもはるゝからこゝはこれをもつて解へしまつて解へしまつへ大事忍男神とは言になる事の神（身ハサナカラニシテ先出ルモノ言ナレハ言チサキトセリ）をいふへしたとへはわかあしきにあらさるをあしと人のいふ時それをことわらねはならすと思ふ情又人のしらさる事人の思ひたかふ事なとすへてことわらで叶はす思ふ情はみな大事忍男なり男神といふはその情を以て人に聞得させんとする神なれはなりこれ哥の道にいへは言靈となる所の神を云なり正面をいへは死しかたはらをいへは活く即此神の事也こゝに言の事をむねといふ事神道をさまたくる物言にまさる物なけれは第一番にいふなり下に和迩といふも口を恐るゝたとへ也又事代主といふも言の正面なるをきらふ故也鳴鏑といふも口やかましきたとへなりかの萬葉の人丸の哥にも へあしはらの水穂の國は神のまにことあけせぬ國といひしも神道には言は敵なれはなりされといさなきの命わか身に配し給ひたれは人とは別物な

るか故にすへての物事自然に意に適ひ來る事なくおはせしか故に國を生みて後は言は必用の物なれは言の神を生し給ひし也國を生むとは畢竟わか心のする所なるわか身をこしらへたる也そのこしらふるも身は地の種姓にして心の如くはならぬは（す）つの物なるをしひて心のことくし給ひしをは國を生むとはいふ也それまては心は天の種姓身は地の種姓なるこれいさなき・いさなみの神なりそのおしあひにて心の方勝たるをいふ也身の方おされて是非なく心に隨ふをはいふなり隱身となれは人みなわか心のまゝをなす故に言は不用なり顯身なる時は言必用なり此故に大事忍男神を國神の次にうみませり次に〈石土毘古石巣比賣とはともに云の字の假名なるへしこれに女男ある事は石土彦はこなたよりいひ出てむかふにしひて問入さする神也石巣姫とはむかふよりいふを返答し或はしひて論し問答する事也神道にはいひ出すはいふに及はす答ふるも又むかふの問をかゝむる也とする也此故に問ふをも答ふるをもこゝにいはん爲に男女の神をいふなるへし次に〈大戸日別神戸は假名にて七神三段の大斗のち大斗の弁にいふかことく|とはわか人にまかせぬ所を云みとといふこれなり石土石巣にて議論する時は必むかふのと|としてかくしたる所をあらはすにいたるか故に大戸日別といふなるへし日は夫理の約なり別はわくるの心なり下文にも持別て云々又石戸別神またいつのちわきちわきてなといふに同し日別は別日と

（コノ二神女ハアヤマル言ノ一ナルヘシ男ハアヤマラスル心也）

いふへけれと日はむかふにつき別は此方につくにて大戸をむかふよりふるまふ内の處をわけ入る神といふ也されは大斗(戸)日とはすへての人のかくす處ありおほふ所あるその心の用を日とはいふにてそれをわけ入てあらはす神氣なる故に別とはいふ也これ又むかふの身をしひて分入る故に男神也上の石土石巣のみ男女なるは問答議論の事をさとす爲也次にへ天之吹男神とは吹は耽の假名にてまへの大戸日別神にて身の方のかくしたる所を分入りて論しあらはし給ふ故に此方こそまされり勝たりと思しめしけるその耽り心をふき男とはいふ也天之といふは是の方にて是にはかならす自負の心生すれは天之とはいふなり男といふもしひてむかふにまけたりと思ふ心にならしむるか故也次にへ大屋毗古神此神下文大穴牟遲神此神の御もとにおはしける事ありそこに木國の大屋毗古神といへり紀の一書に大屋川(つ)姫をすさのをの命の御女といへり卽此いさなきいさなみの神のうみましゝ大屋毗古神により給ひし故にしかいひしものなるへし木國とは大穴牟遲命のその時にげおはしゝ國なれはいふ迠なるへし大はいつものことく大凡の心なり屋は人のこもる物なれは言を出さてこむる心なるにや紀の一書にかのすさのをの命の御子三柱五十猛神大屋津姫大抓津姫ともに紀國にわたしまつるとみえたる紀國ひとしけれは大屋つ姫は同神異說なるへし此三柱ともに八十木種をまきほとこし給ひしいさををいへるはいかゝ此大屋毗古もしかなるへし木を生する事を

なし給ふは卽種を内にもつ心なる故歟いつれにも内にこむる心より屋とはたとへし御名なるへし次にヘ風木津別之忍男神風は加邪と訓すと注せられ訓木以音とかゝれたるを宣(長脫カ)誤あらんといへるもさる事なり木字以音とありけんか上の訓レ風の筆うつりに書誤れるならん風木津別は風持別歟又宣長か說のことく風木津(ガ)とよみて風氣を別てもつといふ心にやいつれにも風を内にふくみおさへたる皃の御名也これはかのおもふ事いはぬは腹ふくるゝわさなりと(兼好か)いへりしかことくいはまほしき事をもじつとおさへたまふ神を云これ卽地の氣をかゝめたまふなり別とは上にもいふことく物のわかれをつくる神をいふにてこゝも風のふきいてんとするを内にもつことをふくとわけてもちたまふ心なり忍男とは地より吹いてんとするをしひておさへ給ふをいふなり風はすへて火氣の水氣におされて生するなれは内よりいひいつる言にたとへていふ也これまてはすへて言の事にていてんとするは地の神なるをしひてかゝめ給ふを云なり次にヘ海神大綿津見神下のみそきの段にて上中下の綿津見神をうみ給ふとあるはいさなきの命一人神にてうみ給ひしものなれはこゝとはこと也こゝは夫婦してうみ給ひし故に一人して生し給ひしにてしひてうみ給ひしなり上は言の事にてこゝは海の事にうつれるはことやうなるやうなれと上の風木津別は外へはり出んとするをしひておさ□(へ)(虫食)給ひしなりこれより内にてしひ

木ヲもト用ルコト例ナシト宣長ハイヘレトコヽハもトヨムヘキ心トミユ

てむかふのいさなきの神をうくる海のことき神を無理に生し給ひしをいふなり次にへ水戸神速秋津日子速秋津比賣これ元來河より海を次第すへきに海より川を次第し給ふは地をか〻むる事をむねとなされし故也むかふを海のことくしなしてわれは川のことくなりてその水をうけしむる心をみせていふ也これらも皆しひてし給ふ心をみせたる也速秋津といふ名は速はいさなきの命に神むすひなきをいふ也降氣のみをひとしへになし給ふを云ちはやふる心なり秋は假名にて開(アキ)の心歟水戸といふは卽川より海へ入る所也そこを無理にあけ給ふ心にていふなるへし日子は此謂也比賣とは海の方につきたる方をいひ日子は川の方につきたる方をいふ也海の神大綿津見とは惣体の海のことを云速秋津比賣はその海の小口の所をいふなりしひていさなみの神に海をこしらへさせしひて川の水をうけさせ給ふを云也こは七神三段にいはゆる豊雲野神の反にて地の方の心から豊雲野神をのほして天の水をうけて海となるにてこそ神道なれこれは儒のいはゆる民有耻而且格といふかことく必也使無訟乎といふなとみな此仕方にてむかふの豊雲野神あるにはあらさるなり以上の十神はいさなみの命の言にいてんとするをはしひておさへていはせすつひには海のことくまでおしくぼめ給ひしをいふなり大事忍男より此水戸神速秋津比賣にいたれるはいさなみの命の先言を改いはせ給ひしことをくはしくいふなり全く儒教なりこ〻のおさへ給ひし極をいふなり下文の

黄泉の段は日神の石屋戸の反にてあまりにおしかゝめ給ひしかは風木山草野と次第しつひに火神をうみ置て神さり給ふといふは天をみかきりたるをいふなりこゝまては理をもつて非をかゝめぬき給ひしをいふ風神より末はおさへ給へともおしかへされて力及ひかたき事をいふ也此はしめの大事忍男神より天之吹男神まては上にいふことくはしめ身の方より出さんとする言をおさへましゝよりおさへ勝たまひしまてをいふ也忍男の忍は押の心なるへし押勝なとすなはち押の字をかけりしからはすへての言の□（出）（虫食）んとするを押へ給ひしをいふなるへしいはつち彦はいはゆる理屈をいふなり石巣比賣はあやまらする也大戸日別は身の方の非をあらはし給ひし也天之吹男は□□（いひ）（虫食）勝たりといふ耽心を云也（天之といふはいさなきの命の方につけていふ爲也）こゝまては中位より外の方上の方出はる所を内までおさへ給ひしを云也大屋彦は屋は屋根の心にて上の方はもはや出るへき口なく覆ひふさき給ひし心也これかの老子か多言不如少言少言不如不言ともいふをみていかさま何事もいふはあしゝといひたき事をもしひておさへたるをいふなり風木津（モ）別之忍男とは忍男は押男上に同し風もつわけとは身の方のいはまほしきをおさへつゝみたる故に内よりはる心なるを風もつといふ別とはそこへ別入り給ひて猶それをも押へ給ひし也まへの忍男は外にて也此忍男は内まても押ふるなりされは大事忍男は儒のことし佛も律又戒なといふはこれ也風木津別之忍男は佛の坐禪入三昧なとすへて心法

をとくは此忍男也外を押へたるはかりにては危し內までをさつはりと掃除せねはならすとてする
わさ也一應はさる事なれともおさへぬきてのうへに風神生する事をしらさる稚わさそかしさて此
次の大綿津見神とは身の方の中位とする內よりは猶下の方裏の方へ窪まするを云也海卽しかり中
位なる陸地よりは引こみたるものにてその極が海也これは又內の掃除のうへにまだ裏門の掃除を
する也これひとへに風木津別之忍男の力にて海となす也此次にしも水戶神をおくはもと大事忍男
より以來大綿津見神までのわざなにのためそといふに天の方の水をおくらんとてのわさ也されは
此次に水戶の神をたてその次に水をくまる事をいふ也此水戶神二神となりて水をくまらんための
忍男なりしことをしらせていふ也卽次の風神より山神までは火の神をのほさんのためなる事こゝ
の反をみせたりはしめ國土をうむとは今までは他人のすみたる所をその他人をおひのけてわか領
とする所これを生國とはいふ也わか身もと人の心のすみ所なるか隱身の道なるにそれをわか心の
住所とするこれを生とはいふ也されは上の十四嶋の神々はみなその他の心の國としたる所をわか
國とし給ふをいひこゝの十神はその國の種姓のもちまへの神氣あるをかゝめ給ふを云也早竟生國
と生神とは綱目のことくわさと心とのたかひめ也古來學者なかりし國をはしめてうみ出し給ひし
ともひらき給ひしともいふ事言靈をしらすもとより國もありて人もすみ領したりし也それをわか

身心の一力にてわ□(か)(虫食)領とし給ひしを生むとはいふ也人の物なれは無きも同(然)前也此故にはしめて出來たるやうにいふ也本居か子をうみたると同しくうみまし〻也といふは沙汰のかきりにて小兒のたはふれのことし

○此速秋津日子速秋津比賣二神因河海云々

日子は河により比賣は海による也これ身心のさかひを水戸とはいふなり此持別も下の山野によりて持別も横わり也卽儒佛のわれる天尊地卑□(也)(虫食)秋とは上にいふことく開の心なるへし河と河との日なれは也速は高みむすひ一ッ火なれは也さてこれより水をくたす神たち也水をくたすとはたとへはこれはかうせねはならぬといふことのあるをその通りを身にさする也こ〻は一身もしかり□(虫食)されと生國とあるからは天下の政事みなかくのことくなりしを云也大嶋筆記の祭を禁したりし話思ふへし制度命令みな正をも□(つ)(虫食)て下に令し給ひしさまをいふなり生國以前はいさなきの命のみつからの御身にむかひての事也生國以後は天下の政事にしていふ也大といふは此故也されといさなみの命といふは日本國の國津神をすへていふ名なり此故に日本國中はわか一身のうちとしていふ事下文まて此一律なりその所々にいふへしされは水とは儒のいはゆる天之道なといふ正しき理の事也それを國に施し給ふを云也　ヘ沫那藝沫那美此次のつらなきつらなみのなぎなみも伊邪那岐伊

邪那美のなぎなみに照應したるもの也その昭應の正しき事みるへし沫とは水上の事也淺き所の事也下文猨田彦の段の底どくみたまつふたつみたま沫さくみたまといひし沫すなはちこれに同しこれは上水の事也河の上水を海の上水とする也類は宣長かいふことくつぶらの畧語なるへくかのつぶたつに同しかるへしされはこれは水の中ほどの所をいふ也河の中ほとの水を海の中ほとくたす事也はしめ上水をおくりくたし次に中ほとをくたしたれはもはや底の水はかりになりたる形なりさて此なきなみといふにて心うへき事ありいかにといふになきなみはもと水の平なるをなぐといひ水のさわぐをなみといふよりつけたる名にて上より下へくだすは平氣にてくたす也下へ上をうけたる時は快からすうくるか故に上よりくたるをなぎといひ下へうけたるをなみといふ事上のいさなきいさなみの命の處にくはしくいふかことし川は淺き所にて大浪はなし海には大浪あるはもはやむかふへ水のゆき所なくつまる故也もと浪のたつは底へゆきあたるか故なれはなみといふは下へうけたる心のつまりてかへる心をみせたる也次の　へ天之水分國之水分天國とは卽なきなみといふに同しこゝの水の極に自然と聞ゆるは上の四神は平生なかれてある分なり上中と海へ入れて後は天之水を國へさつはりと配しはつる一段になりたるか故也されはこれは河の底の水をさつはり海へおくる神を云國之水分とは河の水底まてくだされたるか故にうくるの極となりたるから國

よりその水を天にのこらすかへしのほさんとする心の生する也卽上のへなみといふもひくゝ平なるへき水の高くたつは高き所へかへさんとする心のあるさまを云上よりの神も下よりの神もたかひに□（た）（虫食）ゝかひたるを思ふへしさてこれにて河の方の水は底まて海へ送りいれはてたるやうなれと河の底にも凹ありその外池井なとの水は流しやる事あたはさるか故に杓を以て汲て海へやらされはやられぬ也久比奢は汲杓（ヒサゴ）なる事宣長か說妙也といふへしされはこれは極のうへの極にて水といふ水は一滴ものこらす海にもたせんとするを云也國之久比奢母智はうけてはゐなから丁ど國の方にも又一滴ものこらす河へかへさんとする心の生するを云也されはこゝの八神上四神はいさなきの命のうみ給ふ神氣也下四神はいさなみの神（命）のうみ給ふ神氣也こなたより理をもつてむかふその淺深をいふにてその淺深にしたかひてうはべは理なる故に服したるやうなれと丁どそのとほりに敵する心のむかふに生する事をいふ也理といふ理の分はすこしのこりたるまても人身にうけさする事を云也うはへにはうけてゐれともといふ事をはづさずにみねはならぬ事也これは杜撰にいふにあらすはしめに汝身いかになれるととひ給ひしに成合はすと答給ひしはうはべ也それをたのみにして久比奢持までにいたり給ひしいさなきの命の誤外をみて內をしり給はさりしことをのふる也外を目にみなから一段むかふの內を心におく事わか神道のつねなるをやされは生國一段生神一

段さて此水分一段生國は今まて領したる神をはらひのくる也生神一段はむかふの神性をかゝむる也
水分一段はわか令を聞かするなりこれおのつから七神三段の反をなせり君子と小人とのつきあふ
さまをいふ也以上高天原の右の方高みむすひの神の一トツ火をのふるその極こゝにあるなり理を
もつて非をかゝめおほせたるなり此ときのいさなきの今はすなはち儒學にいふ聖賢これ也此後は
聖賢も力にあたはさる所ある事をのぶ孔子魯に卿たりしがつひに用られすありしは此以下の處を
さとり給はさりし故そかしされはおもふに三皇五帝の時なとはわか道と同しかりしを書經をはし
めその三皇五帝の幽事をしらす顯事はかりをみて錄し孔子出てこれを述へ給ひしよりあやまり來
れるにこそあらめ武王までの心術は孔門のふる所のことく一火にてはあらさりしにこそ

此へ沫なき沫なみへつらなきつらなみへ天のみくまり國のみくまりへ天のくひさもち國の
くひさもちといふ次第むかふを海にし置て川の方より水をやるなれは河の上水海の底水と
なり河の中水河(海)の中水となり川の底水海の上水となる也天の方よりいへは上中底とゆく也
これは順にして逆なり底中上とゆくは逆のことくにして順なり此故にわか道底をたつとふ
事一旦むかふへゆきてかへりの所か肝心なる故也逆を尊ふはかへりを尊ふ故にて一段見こ
したる也祓禊の段も猨田毗古の段も底中上と次第せるはしひて海にしたるにあらすおのつ

からの海なる也かへりの次第をいふなり

○次生風神名志那都比古神云々

これより上よりおさふるの極にいたりて身の方國の方民の方の根氣つきておさへをやふりたる事をいふ也こゝよりはしめ生み給ひし國々乱暴おこれる也兵乱の事をかくは書なしゝもの也とみるへし此風とは卽上に忍男のおさへ給ひし風木津別の風の發したる也すへて大抵の事はうけてもをるものなから極にいたれは是非なくわか性を發する事なり風といふもの火氣の水におさへられたるが隙をみて發する也國を一身とするより風も一身中の發する氣にひとしとしていふ也蘭人近來舟路をきひしくかへて沖を乘るに風雨なくつねに晴天和清也とそ風は地よりおこる物なる事明らか也これはのほらんとする氣のおさへられたりしか說法つきて發したるさまを云也息をつむるにしはしは堪てもゐらるれともそう〱は叶はで息のつかるゝに同し此故にしなつとは息長の心なりすへて歎とは長息にてこれもおさへゐたるか根氣尽てつかるゝ息の事なりされは此風の神とは國の方に歎息おこるぞと云也しなか鳥とは息長鳥の心にて志那のしなに同し○木神久々能智は莖のをちの心也まろがちなとよみてたゝちともいふ也父（チヽ）といふもこれ也父のことをいふ稱なりこれ風の神は形なしそれか形ある物になりしか木なりこれはその歎息か言行にいつるを云なりこれ

石屋戸の段の五百箇の眞坂樹その外門なる湯津かつらといふ事天若日子海神宮なとにみえ又大蛇の身に檜杉なといふはみなこゝにつゝまりて同し物也いつれも歎息のわさに出たる象也木の生する事卽かくのことく風の發するに土中の木種のもよほさるゝ也これ七神三段にいはゆるあしかひ也さてこゝに草の神なきは下の鹿屋野比賣こゝにありしが錯簡せるもの歟日本紀にはかや野姫を草の祖とすこゝは野槌の本名とするは誤なるへし紀によれは下の鹿屋野姫草神にて木は山につき草は野につくか故に野の方へつけたるにこそ○山神これは土を高くもちあけたる也これは地の高くなりて天(たる極也)に実をあらする風木山とつゝけるはまへの大事忍男より海神にいたれるに同しはしめは無形の發氣をいひ次には有形の發氣をいひ終に土をもちあくる山をいふなりさてこゝも海をさきにいひて水戸神をいふかことく野山と次第すへきか山をさきにするはまつ山となし置てさて夫より野とはいふ也故に山野に持別とはいふ也こゝの鹿屋野姫まへにもいふかことく草神云々とあるへきかともに野神となれりし歟下文に野椎神を大山津見神にならへたるも一名を用ひんやうなし鹿屋野とは草をかやといふ事とりて屋にふくか故に云也かやぬは草主(カヤヌシ)の心なり野槌は野川知(つ)の心也されは此野といふはいさなきの命のいさなみの命はいさなはれてつきもとされ給ふさま也こゝか浪といふ所のかたち也天は虛といひ地は地(賓カ)をいふその虛に賓をもたする極が山なりこれは上

の海といふうらにて實□(中カ)(虫食)に虛をもたするか海なりされは此時はいさなきの神は山のめくりの空氣をいふ也とゝるへしされは野神とはいさなみの神の方を云也海は空氣の實中を犯して凹ませたる也山は實の虛中を犯して虛をくほませたるもの也海をもつてみれは地のおされたる也山をもつてみれは天のおされたる也かくして儒のことく天尊地卑と横にわる時は虛中にも實あり實中にも虛ある也しかる時は天を尊とも地を卑ともいひかたしこゝをもつてわか神道これを又竪にわる也竪にわらされはいさなきいさなみの神のことくたかひにおされおさるゝ也發天地のおこる所海山にある事也されは此下文つひにいさ(な脫)みの命は比婆の山に葬りいさなきの命は海に入り給ふといへりこゝをもて知るへしいさなきの命とは海にいりたる神をいふにて實中に虛あらする神也いさな(み)きの命とは山にのほる神をいふにて虛中に實あらする神也下るは順也上るは逆なれはナギナミとはいふ也いざとはもと壓合ひてくぼまされたまひし故也此二神は大祖とまつるうべなる哉こゝをしらされは發天地の生する所なし

○此大山津見神野椎神二神因山野持別而云々

へ天之狭土とはかの虛中にたかく入りたる土といふにて山の事也　へ國之狭土とは國の方にて少し高くもちあけたる土をいふなり横に中をたつれは野と川との間の所か天地當分の横仕切なり此狭

はさきの心なるへしさくとは紀に秀起浪穗なといふかことくもちいでもちあげたる心也花のさくといふもこれ也土のもちあけたるなれは狹土とはいふ也天國といふは天の中と國のきはとなれはなり次に〽天之狹霧國之狹霧とは山にたつ霧と野にたつ霧と也これふたつなから虛中にをかし入る氣を云也霧はもと水氣の火氣におはるゝなり湯氣これ也風は火氣の水氣におはるゝ也此故にはしめに風神ありこゝに霧神ありこれは卽上の水の反對にて火也後に火神をうみますといふその火の氣なり此狹といふもさき霧の心にてたちのほる霧の心なるへし〽天之闇戶〽國之闇戶とはこれは卽大斗といひし斗に同しく處なり處とはその分際分限當位の事也天の方も闇處となり國の方も闇處となるなりこの三神土をもちあくるより霧のほり霧のほる故に闇くなる次第也これまてが上の沫なき沫なみつらなきつらなみ天の水分國の水分のうらなり上中底といふは順にてまへの順なりこゝは逆にて底中上とつゝけり土は底なり霧は中也闇は上なり神道順は道とせす逆を道とするははやきを尊ふか故也順にゆけはおそき也儒佛のいふ處もあしき事はひとつもなしたゝ順にしたかふ故に遲鈍いたれりわか道は逆をむかふる事を詮とするは順にはやくあはん爲なり此故に三貴子も天照大神宮をさきとするは逆をむかふる神氣を云なり卽山のくるりの天氣日神なり神むすひの神也天をさきとすれは順なり地をさきとすれは逆なりうへなる哉逆をさきとする事木を植るに

土を掘るかことし此三神の理妙いたれり非をもつて理をしのく事をいふ也身(サツチ)をもちたてゝ思(キリ)ふまゝをしいつれはもろ(クラト)／＼の理こと／＼くくづれてむちやになる也此次第をいふ修理なくなるは國の方の事一途になる極なりさて此次のへ大戸惑子神へ大戸惑女神はまどひひこまどひひめを畧せる也これは上のくひざもちの二神にあたる也修理なくなりてのうへのわさにてこれはどうせうぞとうろ／＼するにいたるを云なり天闇くなる時は地中は明きなりその上に猶今一段惑といふものをむかふへやる事也けに此道理をみたる事つくせる哉いかに奴僕といへとも無理に來る時極にいたれはせんかたもなくまとはるゝものそかしこれ天といへとも地によらされはたゝさる所以也

此説非ナリ天ノ方ヘヤレハソノカヘリノ地ヘクルト云ヿヲシラセタルナレハ浪トイヘル反ニテナホ天國トツヽクカヨキ也

へ(此説非ナリ)こゝの天國の次第の事國の方をさきにいふへきが天をさきとせるは心えかたしこれは原本をみて後人その逆なるを誤とみて直したる物なるへくみゆ此故にわれ改てこゝを前後すこれ上の水の所の反なれは必こゝは逆たるへき事也下文の天之逆手思ふへし逆剝もこれ歟思ふへし國の方の土を天に迸り土の中の霧を天に迸り霧の中の闇を天に迸り猶國に凹なる所に心のこりなる惑までを天に迸れりしかたちをいふなり」上のくひさもちの神まて八神は天の十分を云こゝの八神は地の十分をいふ也十分にいたれはむかふとはなれ／＼になりて互にたゝぬことをさとして此下文いさなきの命崩し給ふをいふこ

れ七神三段の浮脂のたとへこゝよりおこれり火をうちに少し半分はのこす故に身も死せさる也十分あしかひをもやせは身も死する也火は母をころす事これ也あまり是にしておさふれはその極またかれか非の極をなすにいたるしかれは彼か身ほろふる也此故にはやく目當の極たる天の常立神をあてかへは得心して火を半分内にたくはふる事になる也神の妙用をとく事いたれる哉おさへて斗ゐれはいつくまてものほるが國の性なりあしかひひこぢとは燈心のことしと知るへし放蕩のものをつよくおさへて縊れ又相對死をし盜をもする時は己か身もほろひ父母も家をつかするものなくなるそかし

○次生神名鳥之石楠船神云々

上のつゝきに此神たちの名とも思ひかけぬ事也こゝにかへりて意味はあるそかしまつ船といふものは身をぬらさすして水上をゆく事疾きものにて足にてあるくよりは速なるか故に鳥のとはいふ也これは天のあはれみの事也わか身をぬらさすに思ふ事をとくなさするはむかふにある事をしらする也此神後に建御雷神にそへて天降し給ひしはこゝにて身を出たまひしをもとし給ひし也これはいさなみの命の身の今まて死せすおはしゝは此鳥船神うちにありてわがいやと思ふ水をうけいるゝ所より身も全かりし也天より來る水をしのきわたる事を云也とくその水をわたる事を云也水

の次には火かつゝきてある也これは身の方に勝手のわるき事來らはなるたく（け）それをはやく仕廻ゆるやうにおさ□（す）（虫食）にうけよといふ也そのおさへすにうくる心を鳥船神といふ也これを生むとは内に此心をなくして外へ出し給ふ也わか身の奎き事はいやなるを隨分はやくとほりぬける事肝要也いや／＼と思ふてゐれはいつまても來る也これは天の方にて非の來るをおさふると同しく鳥船神となりてとく來る水をわたる神をいふ也石楠とは楠は水につよきものなり石楠とは石のことき楠といふにて朽（杇）さる心なり水の上にゐて朽（杇）さる心をもつ事な□（り）（虫食）非を性とする身なれは理來れはいやなるは勿論なりされとそれをいやとしてゐれはわかせんと思ふ事その一段むかふの尻につゝきてあるからはいつまてもする事叶はさる也はやくむかふの岸につかむとするこれを鳥船神といふたとへはわか身にのかれぬ難澁出來る時は物ををしますその世話一途になる時ははやくその事すみよる也これを鳥船神といふ也これは勝手のわるしと思ふ事の來るむかふの岸へはやく見越す神氣をいふなり次にへ大宜都比賣これは萬の食物の事也むかふより入り來る物ならてはわか身をやしなはさるなりこれをしる神を大宜都姫といふ也う□（くるカ）（虫食）神なる故に女といふ也これは天の神にては神むすひの神也されは鳥船神は天之御中主神にあたりて勝手のわるき事もむかふにきれ処ある事を今より見越す神なり次にへ火之夜藝速男神これは高みむすひにあたる也此故に男といふ國の方の

勝手得手をする神を云也大宜都姫となれは火神ももえらるゝ事なるをこゝは鳥船の神をまつうみましてうしなひ給ひしより火神をさきにして天をしのき給ひし故に身ほろひ給ひしをいふ也國の方を久しくせんには大宜都姫をさきにせねはならぬ也鳥船をうしなひ給ひし故に次に大宜都姫をうしなひ給ふかく身やしなふものなくなりてつひにわか欲をも達する事あたはすなり給ひしと云也このいさなみの命の神避といふはかのうみ給ひし國々再ひみたれはてゝもとの一身となり給ひしを云也漢域なとの諸王の末みなこれ也此三神たかまのはらの三神にあたる事みにくき事なれとも下文の昭應(照)にてあきらかなりかへす〳〵妙文そかし大國主神といふはしるへし猶いさなみの命の御事也大國主神より末はこゝのとりかへしなりとしるへし此神の子の大年神のその又御子なる羽山戸神大氣都姫神を娶とは山より低き此姫をめとり給ひしにてこゝのとりかへし也それよりつゝきて建御雷神に鳥船神をそへてくたし給ひしとは鳥船のとりかへし也たけみかつちはをはゝりの神の子といふ事もをはゝりの神は火神のみくひをきり給ひし刀なりこゝは又その子なれは水の神のくひをきる刀也此故に子と云也くびとは頭と体とのつなかりの所也これは火は水を体として火を頭とする故いさなきのをはゝりは火のあとに水のつゝきたる事をみこし給ひし神也たけみかつちは水のあとに火を体としてある事を見こし給ふ神にしてうら表也さて後に彦ほゝてみの命う

まれ給ひしは卽此火神のとりかへし也これをもてみるへしされは火神をうむとはわか欲をもうしなひ給ひし事をいふ也

○因生此子美蕃登見灸而云々

此陰門とは身の方の欲を出す口にたとふるなり大宜津姫は口なり陰をやかると(いふ)(虫食)は欲は後にするにあらされは達しかたきをさきにしたるを云欲をさきにすれはその口やけたゝれて再ひうむ事あたはさるものとなるそと云也火神といふ故に見灸とはいふにてたゝ再ひ欲を達せられぬものとなる事を云也口より入る道もこれによりてふたかる心にて次に多具理を云也たくりとは神液にて內をうるほす物の事也これはむかふよりうけたりし水の事也人死する時は喘して神液を口にかへすさまをいふこれ卽浪のわさにあらはれたるなり浪はたゝ海のうちにてかへしたき心のうこくを云也多具理はそれを川の方へつきかへしたる也これ卽內にうけをれは內をうるほす物なりとのさとし也これを金山彥金山姫といふは金は海川にすたりしつめとも又ふたゝひ山に集りて地上にいつる物なれは多具理の性を金にあはせていふ也これに男女あるは彥は我よりつきいたす神也姫はわか身へ再うくる神なり次へ屎尿をいふは屎は食物の終なり尿は飲物の終なり屎尿ともにみな身中にありて今まて身をやしなひたる物にてもとみなむかふより入り來れるもの也後文にもためつ物

祝詞なとにもしかいふは天より賜ふ物といふ心にて今もたぶると食ふ事をいふも此義によりていふ神道言也これにて今まて內にうけて身をやしなはれたる三種をいひ上にあるは上へかへし下にあるは下へ出し給ひしにて身中はさつはり虛(カラ)になりてもはや身をやしなふ物なくなりし事をいふなり金もつかひ捨人にくれたるはふたゝひもとらす屎尿ももはや再ひ身をやしなふ事はなき物のやうなれともむかふの物の內へ入る時は卽再ひわか身をやしなふ物となる事をいふ也金も上にいふかことくすたりたるも又山より生しつかひ又くれたるもおのつからまはりてむかふよりわれをやしなふ屎尿も土中にいれは再土を肥やして五穀を生長して口をやしなふされは上の火神をうみませりといふまてはまことにわか身の死する極をいふなり鳥舟神大宜津(都)比賣火神の三神これ也こゝの多具理屎尿は又いつまてもいれ置てはかへりてわか身のためにはならぬ也隨分出せは卽まはりて惠み來る也されはこれらは隨分むかふの內へ入るゝかよしといふ也こゝが隱身のはしめを云也わがで(て)にわれをやしなふ事はならぬ事にてたゝむかふの內へいるゝ事をおもにすれはわか身は自ラやしなはるゝそといふなりこれは吝嗇をかへりて身のためにならぬ事をさとす也されは火神まてはわか勝手を出す也このたぐりよりは出てはあしゝと思ふ物の出てゆく事をいふなりこれは豊雲野神の事なりされは鳥舟大宜都姫火神の三神はいまた極にあらす此三種まてを出すか極なり

極にいたれはかへりて幸となるを云すへて（わカ）□（虫食）て物をすませはつひにむかふより極にいたらさるゝ也われより極にいたれは卽かへりて幸となる也されは此三種は豊雲野神也その出たる虚（カラ）身が國之常立神なりこれ天より火神を出さすれはおのつから其尻につきて豊雲野神生する理を云也　波迩夜須ははにには子バ土也田土なとを云それをねばらせこやすか故也はにをねやすの心也男女あるは彦は内より出すなり姫は内へ（再）うくる神也　弥都波能賣とは弥は水也水津の心也波は音義もていふなるへしすへて波の音葉なとのことく外にはりいてゝわ（か）□（虫食）手の及はぬ所へちるの名也歯も同しこれ天水を土中におとす故なるへし下にも闇みつはの神ありさて此神のみ男神なきはいかに心えかたし落たるなるへし又案にこれ又ともに土をこやす用あれは上のへはにやす彦をはこれも男神とたてゝ女神のみをいふなるへし尤なるいひやう也小水の通するも大便を通すると同し下氣によれゝはなり次にへ和久産巣日神和久は若也むすひは生也これは金屎尿三つにかゝれり一旦人の身をやしなひて出たるはもはや糟粕也と人思ふ事なからそれか卽又われに幸を賜ふ物なるを以て再生する事を若産靈とはいふ也その終なるを老とたてゝ若といふ也人の死生も亦こゝのみやうなる事いさなみの命をいふにてみるへしされは此神は上の男神と女神との間にたつにて卽男神の出し女神のうくる間にうまれます心也こゝまてが三十五神也

○此神之子謂豊宇氣毘賣神云々

これは此和久むすひの序にこれをさとしたる也これは豊うけといふはづ（ず）也かの糟粕になりたる物（ウケハ食ノ亊トイフハ麁ナリうくるトイフ心ナリ食チウクル内ノ□□（虫食）ナリ）か又肥となりて五穀を生する神を生すその神すなはち人をやしなふ事外より來るか故に内にてうくる心にてしかもそのつくる期なき也されは金屎尿の女神をひとつにしてさて盡る期なきことをさとさんとて豊とはいふ也環の端なきかことくめくりてわれをやしなふ事となるか故にたゝ此豊宇氣毘賣神を心のうちに勸請せよと云也これ吝嗇の根切也一文半錢もなくなりても氣□（虫食）なきはたゝ此豊うけ姫の神たにあれはうたかひなき事也　天照大御神いと御心ほそしとて此神をともにまつれと勅し給ひしは崇神帝の御心に天の方の日神は勸請し給ひしかとも地の方の豊うけ姫を勸請し給はさりしかは告給ひし也恐れていせの外宮にまつり給ひしとは卽御心に勸請し給ひし事也けに御心ほそしとの給ひしもことわり日神は天の方の非をうけ給ふ神也豊うけ姫は地の方の是をうけ給ふ神□□（なり）（虫食）此二神をしも伊勢の　內宮外宮とまつり給ふ事天地の昇降の氣をさゝへぬ爲にて有かたさいふはかりなし天は日神を主とし地は豊うけ姫神を主とすされは是非ともにたちてあらそふ事なし儒佛にまされる事こゝをもてみるへし伊勢の兩宮に參る人なにとそこれをしりて詣てなはその利益廣大なるへしこゝにいさなみの神此豊うけ姫の神出來ましゝよりこゝにいさなきの神

は入りましいさなみの神は比婆の山に葬りまし丶はいさなきの神日神をうみまし丶によれりかの夜見とは火神の方を主としなから幽とし(てカ)□(虫食)ゐる方を云也豊うけ姫を顯とする卽片方に夜見はある事也天の方にては日神は顯をしろしめし月神は幽をしろしめすこれ也此方より出すほとはむかふよりまはりて多くなり來りてつくる事なしこれをしらすして浮脂となる時はつひに身をうしなふにいたる也豊うけ姫の妙用思ふへし

○故伊邪那美神者云々

此詞は上の火の神をうみまし丶までが極にて金屎尿はもはや豊うけ姫をうみ給ふ下地なるか故にそこの間をきりてみよ(と)□(虫食)て此上下にて火神をうみまし丶より崩し給ふ事改めていはずとも聞ゆへきにことさらに因生火神云々とはことわれるもの也あの間がきれ所也さなくては此詞聞えぬ事也出すにもあしきとよきとある也自然と出るがあとの三種也むりに出すがまへの三種也出ねはならぬやうになり來らは出へしといふ也そこのまとひをことわりたる也　神避とは昇る一途なりし神のさり給ふを云也死する事にあらす豊うけ姫うまれますが卽これ也夜見とは片方の主たる所をかけにしてある所を(虫食)下文の海神の女豊玉姫とは卽いさなみの命の豊うけ姫なるへし豊の応したりこ丶は地の方の事をいひさしたる也大國主神の段こ丶につく心也

とかくむかふから出さる丶時に出せといふ也
此故は豊うけ姫を終にいふ也

○凢伊邪那岐伊邪那美二神

此島一十四島神三拾五神といふははしめ天より是を以て地の非をおさへて極にいたるより地の非激して天にのほりて是をおさへかゝめて極にいた□（り）（虫食）又それよりその欲も自然と出さるゝ時あるよしにいたりてむすへりこれは國の方の種姓をときたるもの也いさなきの命主のやうにかけるは例の客なり此次の文よりすさのをの命の段か□（天ヵ）（虫食）を主としたる也すさのをの命主のやうにかけるこれ也天には日神あるに地には豊うけ姫あるにてたかひに高みむすひ火神をよみとしてゆく事平天下のもちあひ也三十五の數は上よりおさへられて極にいたり又それをつきかへして極にのほりてそれか終身をほろほし肝心の欲もむなしくなる故にとかく豊うけ姫か肝要そとの落着まて三十五の神を經る事そとのをしへなり

第三十七　大御寶之件

古事記燈

古事記燈　之巻

天兒屋命麿裔成元述

○第三十七　大御寶之件

尒天兒屋命布刀玉命天宇受賣命伊斯許理度賣命玉祖命并五件緒矣支加而天降也

この五はしらの命はともに天石屋戸之件にみえたる神々にて委しくはそこにとき置たれはあはせてみるへしされとこの件はかの件をとりつかねたる意なれは今その要をいはゝ天兒屋命は布刀詔戸言禱白し給ひし神也布刀玉命は布刀御幣と眞賢木の根こしなるを取持たまひし神也天宇受賣命は爲神懸而掛出胸乳裳緒忍垂於番登たまひし神也伊斯許理度賣命は鏡をつくりたまひし神也玉祖命は八尺勾璁之五百津之御須麻流之珠をつくり給ひし神なりもとかの天石屋戸之件の大意は速須佐之男命の勝佐備によりて　天照大御神天石屋にかくりまし高天原葦原中國ともに常夜ゆきけるか故に思金神におもはしめて　天照大御神を招きたてまつりしをいふ也その言靈は人おほよそ理

をたのみて言行とする時はおのか心に慈はありなからかくれてなきかことくなる也これ彼我の間も亦同しき事まへにくれ〳〵いひしか如し　しかる時はよろつの所欲か丶まりてやかて禍となり來るか故に勝佐備之件のをはりに於是萬神之声者狭蠅那須満万妖悉發とあるこれ也　慈を招き出てふた丶ひかくれさるやうにする心術ををしへたまひし也その心術といふはまつ第一にわか心にふとかれとをしふへしこれを天兒屋命といふ也ふときといふ事布斗麻迩之件にくはしくいひしかことく俗にフトイといふに同しくたとへは算盤をたのみてかそふるは細き也それを算盤をたのますしてかそへしるかことく眼前には不當の事ありてもそのつまりの所をかねてはかりしりて心を安んしたるこれを布刀とはいふ也かの布刀詔戸言をつかさとり給ふ神といふはわか心に布刀かれと告をしふる神氣なるをいふ也今の世までも此命をいつきまつらせ給ふは此五伴の緒の第一たるか故そかし凡情た丶めのまへの事にのみ心をと丶むるか故に欲を制するわさをのみむねとすこれ畢竟その欲のをはりなからんことをかねておそる丶か故也神道の味御路にたに乘れは八俣袁呂智のことく草薙劔はえらる丶へき事必定なれはそこをさとりて欲をおそれさるこれを布刀志とはいふなりをしふとは詔戸言の心をえていふ也わか心にわかをしふるこれを天兒屋命といふ　さて次に布刀玉命といふはわか身のいさきよからんことをはのこらすやむる事をなす神を云これ根こしにこしたる眞坂木をふとみてくらととりもたしまし丶ことを心えていふなり　これもつとめてなすにはあらて天兒屋命もて心をふとくなす時は脩身の力そのいさを小さき事さとらる丶か故

におのつからいさきよからん言行をたのむ心なくなるを云也かへす〳〵いひしかことく脩身の力は人の中心に通徹するものにあらす中心に徹せされは如意滿足してしかも長久なる事をうへからすこれ脩身の力のをよひにあらすたゝ初中段の力ならてはあたふましき事也とする時はおのつから天香山の五百津の眞坂樹も根こしにこして天つ神にたてまつらるゝそかしさて次に天宇受賣命といふはふとき心となりふとみてくらとわか言行をたてまつる時はよろつの事凱子のことくなるその神をいふ也すへての言行正面をはつるゝか故に爲神懸といひ（言をいふ也）掛出胸乳裳緒忍垂於番登とはある也前件天之八衢にいへるかことく言行正面をはつるにはむかふほとの神に勝たさるといふ事なき也凱子のことくにして面勝つをこれを宇受賣とはいふ也天兒屋命ありての布刀玉命布刀玉命ありての天宇受賣命なるか故にかく次第したまへる也されとも此中にはことに天宇受賣命貴き事初段の三神の神御産巣日神を主とするかことし天石屋戸件のくさ〳〵此命を主としたるをみるへしたとへは人かならすかくいふへしかくすへしと思ふ所にはつれたる言行とのみなる時はあらそふ事あたはさるこれ此神の御たまにてふとき心よりかくはなりゆく事なりさてこゝに伊斯許理度賣命玉祖命をならへたまひしは以上の三命おのつからたつへきための御をしへなる也その故は鏡は月神の御かたにて夜之食國をしるため也玉は　日神の御かたにて（此事天之石屋戸件にくはしくいへり）高天原をし

るためなりされは伊斯許理度賣をもて鏡をつくれは玉祖のつくる玉も全きか故に此二命をかく次第したまへるなりこの二命たによく心にたては天兒屋命布刀玉命天宇受賣命はおのつからその御たま全かるへしとの心也今かくいふ故は天石屋戸件に　〈科伊斯許理度賣命令作鏡科玉祖命令作八尺勾璁之五百津之御須麻流之珠而召天兒屋命布刀（玉脱）命而中畧天宇受賣命手次繋天香山之天之日影（云）〳〵かくのことく次序せられたりその石屋戸の件とこゝとの次序をあはせて思ふに今いふ所の意なる事明らかなれは也けに人欲より奥の所にわか領としてわか欲を養ふへき國必ある事をかねてさとらは彼の前はおのつから慈となりて心ふとくなりもろ〳〵の言行をすつる心となりゆきつひに凱子のことくなりぬへき事也されは此五命をくまりくはへ給ふとは中段のための初段にして初段固からされは中段も亦固からさることわりをさとし給ふ也この故に迩々藝命に此五命をくはへたまひしとは說たまひしものなりたとひ中段をはつよくふるまはむとすとも初段たゝさる時は葦牙のこと萠あかるものあるましけれは因るへき物なかるへけれは也よく〳〵此五命の御たまを味はひて中段の臍をかたむへきなり夜之食國をさとりて高天原たては心おのつからふとく言行の用をかる心なくなりて天宇受賣となるは中段一途となるか故なれは天宇受賣は中にも主たるへきなりかの箸をおとしたりしたくひおもひあはすへし心に中段ありてたゝそこにのみ一途なる人は外様は

たゝ凱子のことくみゆるものなりたとへは物思ひある人のめのまへの物もみえす音も聞えさるかこときこれ天宇受賣也此五命の御をしへその言靈筆端につくすへからすもとかくつくすへからさるか故の言靈なれは人みな實事に試みてこの言靈のたふとさをしるへし〇五件緒とはくはしく宣長翁かいはれたるかことしそのともからをわかちてめしつかはれし臣下の事也今この五命各そのつかさとりをことにしたまふか故にてこれを臣下のことく説なしたまひしは　迩々藝命のうしろにそひまゐらするこゝろをいふにてこれ初段をかたくする教也との御さと

（巽筆、貼紙）

劉立德か事歟 名ヲハ入ヒ成てハ如何

しのために臣下とはときたまひしもの也後に此命々の御するゑを臣下にたてたまひしも予か社の説に同しく此神典の義をかたちとしてつねに此大御寶の件の心をわすれ給はしの御たはかりによれる事なるへしとおほしき也〇支加といふはこの五命のつかさとり給ふ所上にいふかことくそれ〱にわかれたるか故也加とは迩々藝命にくはへて天降したまひしなり

於是副賜其遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝劍亦常世思金神手力男神天石門別神而詔者此之鏡者專爲我御魂而如拜吾前伊都岐奉次思金神者取持前事爲政

遠岐斯とは招き出だすことをいふ也斯は脚結也かの天石屋戸之件をさしていふか故に遠岐斯とは

あるなり神代紀には〈巧作俳優と書てたくみにわさをきすとよませたりかの件にいへるかことく
人々心のうちに　天照大御神はおはしませともすさひ速ふるによりてかくれたまへりしかるに萬
の事意のことくなりて心身も彼我もよく持あふ事はひとへに　天照大御神あしはらの中國をてら
したまふより葦牙も萠騰るにて葦牙なけれは御孫命の御わさもその因るへき所なき事なるか故に

天照大御神を招きたてまつる事肝要の事也しかれともしひて此　神を招きたてまつらんとする
時はたとひ心にいつきえたりとも事にふれては再かくれやすかるへしこゝをもて天石屋戸件の御
をしへはしひて招きつとめていつくわさにはあらておのつからわか心の内に慈悲の心のおもはす
出來へき御をしへなる也さてこの慈悲といふ事今やむことをえすさとしのために此字をか□(りカ)(虫食)てい
ふにて他教に慈悲といふとはすこしたかふ所ある事初段の神御産巢日神の下にいひしかことくも
ろ〳〵の欲をはすこしもおさへすその神の直ふる事をなすをは　天照大御神とは申すなり今これ
を八尺勾璁とたとへ給ひしは八尺は卽例の八の數にて身の八所の欲をいふ也尺とはさらに深き義
あるにあらす此勾璁の大きさ八尺なる心にいふにてたゝ八の字をかふらせむかため也かゝる事は
一部中にいと多き例にて八百八十八咫なといつれも下の字にはふかき心あるにあらさる也勾璁は
宜長翁か說のことく目炫玉の心なるへしこれは　日輪のさとしにて目炫くはかりなる丸き物なる

か故に勾璁とはたとへたまへる也おほよそ地の方の欲をてらし八所の欲をまけたまはぬ　日神の御たまをは八尺勾璁とはいふ也と心うへしされは宇氣比之件にも　天照大御神の左右の御美豆羅また御迦豆良また左右の御手あはせて五所に纒たまへる八尺勾璁之五百津之美須麻流珠とはみえたるにてその件なるはやかて　天照大御神の御かたちをさしたる也天之石屋戸之件（やかて此大御寶之件なる璁也）なるはその　日神の御たまを招きしなれはこと物なから猶おなし物なる也と知るへしこれを八尺勾璁とはかりはいはて五百津之美須麻流珠としもそへて称せらるゝはもとかさりにかけし玉の多くつなぎたるその親玉あるによりてその親玉なる心にて五百津之美須麻流とは称せられしもの也須麻流とは神代紀に統の字をあて給へる心にて五百津の□（玉）（虫食）を此親玉の統たるをいふ也昴といふ星をすまる星といふも多くの星の一所にあつまれるか故也扨この五百津とさしたるはなにそといふに初段の別天神五神なるへしその故はさきにもいひしかことく初段も神御産巣日神なくてはたゝす中段はましてふるまふへきよしなければ別天神五柱といへともつゝまる所は地の方の欲を直ふるにとゝまる事なるか故に別天神五柱のうちにも親玉のことくなる神なるをさとしのために五百津之美須麻流珠とは称せらるゝ也とするへしされは諸欲をてらしてその神を直ふへき五神の第一たる神御産巣日神をいつく事をはむねとせよとて八尺勾璁之五百津之美須麻流珠を第一とし給ひ

しもの也美須麻流といふにて餘の四神もこれにこもれるこゝろなりさて第二に鏡とあるは月讀命の御かた也しろくてまろけれはたとへたまへる也天石屋戸之件には八咫鏡とあり此八の字もまた八所の欲にあてゝ鏡の大きさになして称したまひしものにて咫にはふかき心なき事尺に同し御頸珠の件に月讀命に夜之食國をしらせとみえ石屋戸の件に益汝命而貴神坐とあるをあはせて思ふに此鏡は夜之食國をおもへとの御さとし物なりかの石屋戸件にくはしくいへるかことく地祇(祇)の前をは　日神のことくする事ひとへに夜之食國をしるにあるか故に益汝命云々　とは説たまへるにてこゝも即その心をもてこゝにならへたまへる也これもはらおもはす　日神の御たまなる八尺勾璁の心に歪からんことをしへたまひしもの也されはひたふるに諸欲のうしろの方にはわか領とすへき所必ある事をあらかしめしるへし初段高天原の下に四國をくはしくときたるかことく地球は眞中にありて天はこなたとかなた□(と)□(にカ)(虫食)め□(ゝ)(虫食)れりさて日こなたにあれは月必かなたにある□(こカ)の□(類カ)□(を)(虫食)(虫食)もて此高天原夜之食國の御をしへはたちたるもの也まへにもいひしかと此下なる詔をあしく心えて伊勢の御鏡をは　日神の御魂と心うる事は大なるあやまりにて神道うしなはれてその傳もほろひたるよりのひか心えなるへし白きもの(衍)ゝ圓きものをいかてか日の御かたとはいはむ本身之件なる赤玉白玉とは即このふたくさをいふにて日月の御かたな

(異筆、貼紙)

球ノ字安球地球ナト天學ノ上ニテ云ヘハ實ノ天地ニテハ地ト斗カ地壤ナトニテハ如何

る事をしるへし以上二種は石屋戸之件なる物なれは遠岐斯とは說たまひしにて次なる草那藝釼は日神をきてのうへの八俣遠呂智之件にみえたる物なるか故に及草那藝釼とはある也草那藝の事くはしく遠呂智之件にいへりしをあはせてみるへしそこにいへるかことく八俣遠呂智のことき欲もつひにその尾にいたりかれよりきれ來る事を草那藝釼とはたとへたまひし也されはこれをあらかしめさとる時は中段ためらひなくふるまはるへきか故に畢竟中段のおのつからふるまはるへきため也此故に此三種かく次序したまへるは御頸珠之件の三貴子の次序に照應したる物にて此三くさは御かた也三貴子は此三くさの神なる也されは八尺勾璁は天照大御神八咫鏡は月讀命草那藝釼は速須佐之男命にあたる也と心うへしこの御寳をは　御代〳〵に傳へさせた□(ま)(虫食)ひしはから國にて傳國璽なといふたくひの御しるしにはあらすかくのことく七神三段の心法をやとしたまひてつねにこれをわすれ給はさるへきかためなる也神代紀一書云〈是時天照大神手持寳鏡授天忍穗耳尊而祝之曰吾兒視此寳鏡當猶□(視)(虫食)吾可与同床共殿以爲齋鏡云々　とあるは三種□(を)(虫食)いはすして□□(たゝ)(虫食)鏡はかりを說たるなりこれことに鏡の貴き所以は石屋戸之件に〈益汝命而貴神坐とみえ本身之件に〈阿加陀麻波袁佐閇比迦礼杼斯良多麻能岐美何余曾比斯多布斗久阿理祁理とあるかことく　日神をおのつからあらはすは月神による事なるか故也されは鏡はかりを說かれたるは三くさか中のむねと

あるものを擧られたるにて畢竟三くさも同し事也これによりて思ふに此一書のごとく此三くさは同床共殿にいつきたまひし事御代〳〵の御傳にてこれ即七神三段の神をやとし義を寓してつねにわすれたまはしかためなる證也されは同床共殿こそこの三くさのほいたるへきに崇神紀に　へ先是天照大御神倭大國魂二神並祭於天皇大殿之内然畏其神勢共住不安故以天照大神託豊鍬入姫命祭於倭笠縫邑仍立磯堅城神籬云々（鏡を天照大御神の御たまとするはあやまりなる事下文にいふをみるへしこれらも記者の謬れるか又その御世すてに心えあやまれるかしらす）とあるをみれははやその御世この御鏡はかしこきものとおほしはしめて同床共殿の御のりをあらためさせたまひしなりもと神をやとしたまへりし御鏡の事なれは貴き事はいふもさらなれと共住不安といふ事はかの皇子のはからひて書たまひしにやともみゆる詞なからもししかおほしけるならは此大御寶の意にはそむける事な□□（からヵ）（虫食）笠縫にまつられ又今の伊勢にまつらるゝも貴さのあまりなれとも同床共殿なるとはおのつから御心も踈かるへきわさならすやこれさらにさる心にはあらす七神三段の心法はあめかしたをやすくたひらけくしろしめすへき肝要なれはつね□（に）（虫食）御心をはなれさらんための大御寶なるそか□（し）（虫食）されはあらゆるうつしき青人草もこの三くさをたに心に□□（わす）（虫食）れす□（は）（虫食）ほと〳〵につけて必幸はうへき事也神武紀云　へ時長髓彦乃遣行人言於天皇曰嘗有天神之子乗天磐船自天降止号曰櫛玉饒速日命是娶吾妹三炊屋媛（亦名長髓媛亦名□見屋媛（虫食、鳥））遂有兒息名曰可美眞手命故吾以饒速日命爲君而奉

焉夫天神之子豈有兩種乎奈何更稱天神子以奪人地乎吾心推之未必爲信天皇曰天神子亦多耳汝所爲君是實天神之子者必有表物可相示之長髓彥卽取饒速日命之天羽々矢一隻及步靫以奉示天皇覽之曰事不虛也還以所御天羽々矢一隻及步靫賜示於長髓彥見其天表益懷踧踖云々 これは此三くさとはことなる物なれとも へあまつしるし へしるしものなとあるより此三くさもかの傳國璽のことく心うる事なれと此饒速日命の天羽々矢步靫なともみな神道のやとし物にてさらにさる事にはあらさる事也長髓彥君としつかへたるは此命の神道おはしけるによりてなるへし宣長翁すら猶この三くさは傳國璽の如くとかれたるか故にいまた世にこの心を弁する人なき事うらむへき事なりさてこの御鏡をは此下の詞にまとひて 天照大御神の御たまと心うるよ(り)□(虫食)鏡を第一にたつへき事なりと宣長翁もいはれたるは中〳〵にあやまれり璁は天照大御神の御かたにましまし鏡は月讀命の御かたにまし〳〵草那藝劔は速須佐之男命の御かたにましますに事三貴子にあはすれはうたかひなく此次序もまた疑なき事也此三くさを七神三段に配すへきやうは八尺勾璁は五百津之美須麻流珠とあるによりてみれは初中段五神の統まりたる所神產巢日御祖命なれはこれおのつから初段の極を表したる事明らけし八咫鏡は益汝命而貴神坐とあるによりてみれは下段の極をさすなること明らけし草那藝劔は速須佐之男命の得たまひししか〳〵の事をみれは中段の極をさしたること明らけしし

かるに此三くさの次序は初下中と次序したまへること七神三段には次序たかへることいかなる故そといふに七神三段は実事のうへにてのおのつからの次序を說たまへる也此三くさの次序はその七神三段の次序をふるまふへき心法ををしへたまひしものなるか故也その故は七神三段にくはしくとけるか如く神御産巣日神なき時は中段も行ふへきよしなき事なれは此神をはつかむこと第一なるか故に八尺勾璁を第一としたまふ也　天照大御神をは諸の神社の第一と公にも私にもいつきまつるは卽この遺風なる也（もし諸家の說のことくみかとの御祖神なる故とならは四民わたくしにまつるへきいはれなしもしその御うつくしみを思ひてまつるなりと陳すとも猶ことわりにそむける事なるへし　太神宮に詣つることともまたこれに同しこれさることとならさる證也）　されともたゝ此神をいつかむとのみする時は浮脂久羅下の二弊かならす出てかへりて此神を天石屋にかくしはつへし此故にその件に忿汝命而貴神坐とありて鏡をは璁より貴しと說たまへるは夜之食國をはまつ定むる時は前おほえす天照大御神となるによりて也されは鏡は璁をいつかむかための御をしへにて第二にはならへたまへる也けにかれの欲よりかなたにわか領すへき所ありとしる時はまつはおのつからかれにあたへらるへき也しかれともその欲多く長き八俣遠呂智のことときにあふ時はとても夜之食國はえらるへからしとおほゆる事人情のつねなれはそこをくはしく遠呂智の件にときて八門八床のうちに八塩折酒をたにもりてまたはさる遠呂智も草那藝劔かれよりあらはるへしとその欲猶かきりある事ををしへ給へれは草那藝劔とは中下

段の間にあたり中段の極をさすにて卽中段の行の決定をさとし給へる也此故に此三種のうち鏡は初段をおのつからする爲劔は中段をおのつからするむかための御さとし物にてこれか落著璁にあることなりとの心なる也今かくいふ所は七神三段の照應一部のしるしによりていふなる事かくのことし後世くさ／＼の說ともあるはみな私に思ひとりたる說ともなれは成元はさらに信しかたし此大御宝御代／＼うへなきたからとあふき給ふもことわりなるをたとひ一紙半錢の貯はなくともこの三くさたに心のうちにあらは幸は手にとれるかことくなるへきなり

○常世思金神　常世の世もしは夜の字のかり字なりその故は宇氣比之件の終にへ尓高天原皆暗初段の事なり葦原中國悉闇中段の事なり因此而常夜往於是万神之声者狹蝿那須滿万妖悉發云々この常夜なりそのつゝきなる石屋戸の件にはしめて此思金神は出たまへれは常世思金神と稱したるにても此常夜といふ事そこに悉しくいへるかことく晝とは地の前夜とは地のうしろをいふその前をつかさとるは日神にてその地祇(祇)の欲を直はせ給ふ也しかるにその神かくるゝを夜とはさす也夜之食國はかれか欲のうしろにわか欲を養ふ所あるをいふ事卽これに合せりこゝをもて神道に乘してその神を直はすへき事をむねとする事をしらすたゝ正しき事をむねとのみする時は地祇(祇)の欲おのつからまがることのみつねなるこれをは常夜とはいふ也かの夜之食國はその神極にいたりてかへる時の事なれ

はそれには同しからすかれよりおのつから夜をなす也さる時にはいかに思惟せむそといふにすへての事一段さきを見こす智ある時は正しきをのみもてまくる終は禍となり來るへく直すれはその終は福となり來るへき事明らかにしらるそこより七神三段はたつことなれは常夜なる時はまつ一段見こす智肝要なる也その一段見こす智をは思金神とは申す也ここをもて常世思金神とは称し給ふ也と知るへしおほよそ忠孝のたくひも君より臣に忠なれ父より子に孝なれ又臣より君に仁なれ子より父に慈なれとは說くへからさる事也こゝをもてから國にても師といふものを別に設くへしとは聞ゆる也わか御國の御敎にては別に師といふもの設くるにもをよふへからすたゝかれか神を直はせて極にうなかせはやかて忠孝仁慈となることををしへ給へるなりしかもから國の師といふも猶禍津日神なりこれはふたゝひその禍來らさる法なれはさらに〳〵さるたくひにはあらさる也されは常世ならんは必禍の端なる事をさとして此神をしも此五件緒三種にくわへたまひしもの也石屋戸之件の云々　はみな此神の御思兼よりいてたる事也言趣のわたりもたひことに此神出たまへるは此ことわりによりて也此次下に手力男神天石門別神二はしらあれとこれは猶此神の御思金のたすけ神なりされは取持前事爲政の詔もたゝ此神にのみある也上の五件緒三くさとてもみな此神の御思かねによる事なれはしか詔し給ひしとは說給へる也さるによりて此思金神はわか神典の御

敎のおこれる根本にてはおはしますす也すへての敎旨諸敎とは相反したるかことくなるは此思金神の思ひかねよりおこれるか故なり

○手力男神　これ又天石屋戸件に出て日神を石屋戸よりひきいたしたまへる神也おほよそ人欲を直はす天照大御神をは天石屋よりひき出たてまつらんことはその決斷いとつよからてはいと危き事におほゆるもの也その決斷のつよきことは思金のつよきによる事にて七神三段の次序明らかなるちからなる也これを表して手力男神とは名つけたまひしものにてかく思金神にそへ給へるなりたとひいかなる欲もかの袁呂智のことくなるへきをさとる時はおのつから手力男神はあらはるへきをやまへの思金神の上にかゝふらせられし常世の二字はこゝの三神にすへてかゝふらせてみるへしその中にも思金神は主神なれとも此神次の神も皆常夜なる時の御をしへなれはかくはいふ也

○天石門別神　此神は天石屋戸件にもみえぬ神なりされは思ふに手力男神　日神の御手をたまはりて引出まつりたまひし時布斗玉命尻久米繩控度其御後方これよりうちになかへり入ましそと申させたまへるを思ふに此神はその尻久米繩の神にて再日神を石屋に入れまつらぬ神氣をいふにやこれによりて此下注に此神者御門之神也とはあるにて後の世にはたゝ御門守日神の如く心えなれ(虫食)□ものなるへし天石屋の御門を守りてふたゝひ日神をいれしとする神氣の事なるか故に天石門別

神とは名つけたまひしならん人欲を直はする神氣はともすれはあやふまれ又はにくまれてかくるゝ事やすき神なる事をはかりて此石門別神をはそへたまひしものなるへしされはこの三神思金神はあらかしめ天照大御神を招き出[すへき](虫食)智をいひ手力男神は引出す決斷のつよき事をいひ天石門別神は引出て後ふたゝひかくさじの心をいふにてさきと卽今とのちとの神ををしへ給へりかはかりねもころに日神を招きたてまつる事ををしへ給へるは萬の妙事たゝまつ人欲を直はする事一途ならされはうへからぬか故なりかゝる御敎なるか故に言靈をのみしてさとし給へる也としるへし

○此之鏡者云々　この詔此三くさのうちたゝ鏡のみなる事古來はたゝ日神の御たまなるよりとはかりあさはかに心え來れりしかるにそれしかるへからさる事は此鏡はもと天石屋戶件にて天宇受賣命　日神にみせまつりて益汝命而貴神坐と申せりし鏡なりしかるをいかて日神の御かたとはいはむされはその件の詞にこゝの詞をあはせて考ふるに如拜吾前とある如の字をかろくみしより心えたかひたるもの也その故はまへにもいひしかことくもと此鏡は白く圓きものなれは月神の御かた疑なしさる故に益汝命而貴神とは申せりしなりされは日神を招きたてまつらんには月神をはやかて日神の御魂と心え日神の御前にをろかむかことく月神をはいつきまつれとの心なりこれ日神を招きたてまつらんは夜之食國をしれはやかて高天原たつか故の御をしへなる也されは伊勢の大神

宮は早竟月讀命の御かたにてその月神の御かたををろかむはやかて日神の御たまとするにて日神を招きたてまつるわさなれは也石屋戸之件とこゝの詞とをくはしく心えさる誤より　太神宮をさへ(心えカ)□(虫食)あやまれる事いとも〳〵かしこき事ならすやなにことも正面にするは思金神の心にあらされは月神をしも爲我御魂而如拜吾前伊都岐奉とはをしへ給へるもの也日月をくらふれは日を貴しとする事いつくにても同しことなるにひとり我御をしへ日神にまさりて貴しと月神をときたまへる事中々日神のたふとさいふもさらなるか故なるそかし　太神宮に詣てん人この後此心をもて御かたは月神の御かたなれともそれをいつきをろかむ事日神を招きたてまつりて諸欲をなほはする事一途なることをこひねかふ爲也と心えてをろかみなはやかて日月の神の御たまたすけたまひてほと〳〵につけたる妙事はうへきなり今まて誤り來れる耳には異說と心うへけれとよく〳〵石屋戸之件とこゝとをあはせて心うへき也たとはゝ今の世の冠袍なとをかしこきものに心えたる目にふとわか　御國のかみつよの服飾をみせなはかへりて他域のものゝことくおもふへきかことし專爲の字如の字等よく〳〵心をとゝめてみるへし

○次思金神者取持前事爲政この前とさすは天を我として向ふ所の地のかたをいふなりされは此前事といふはわか身をはしめ億兆の人に接する所の大小の事をひろくさしたる也此思金神にしも前

事をとりもちて爲政とをしへ給ひしことは前にもいひしかことく萬の事を一段見こす智はわか神典の大規範なれはたゝ彼としむかふ前の事は思かねの神に思はしめてさて事をなせとの御をしへなる也政とはから文字をかりてあてられたるものにてあれは此字にもたれておもふ時はからめきておもはるゝ事也されはこそ宣長翁もしか思はれけめ前事とあると重なれりとて〻麻袁志多麻閇とよまれたれとも天皇の御政(ミワサ)なと注の中にかゝれたるをみれは猶此字にもたれてからめけるを嫌はれたるなるへしそれ大なる心えたかひにて麻都理基登といふ語はもと我大御國言なるにから文字の政の字を心えてあてたるにてから國にて政といふとはすちすこしことなる事也(かゝる事は和語に漢字をあてたるにはいと多き事也)その故は麻都理基登といふは祭事といふ義にて神道を直ふるわさをいふ也後世の祭礼なとはこの儀はかりののこれるにてもとこの祭事とは神を直ふるわさとりも直さす天下國家の政なる事わか大御國の御てふりなれは爲政とはあてゝかゝれたるもの也宣長翁取持前事とあると重なれりといはれたるは前といふことを麁に心えて神を幾前といふ稱はかりの事なりと思はれしよりの事也もと神を幾前と稱するもすゝろなる稱にはあらす後(ウシロ)に對して前とはいふ也後とは即夜之食國の事なり前とは高天原の事にていつれも地祇(祇)を彼とたてゝの前後なりさてそのうしろの事月讀命のしろしめす所なれはそこはたゝ月讀命にまかせ置てひたふるに前の事はかりを取もてとの御を

しへにて爲政とは重なれるとはいふへからすさりなから政といふも彼か前よりするわさなれはこと筋の事にはあらねと後の事とわけむために取持前事とはあるにて畢竟は爲政とあるは綱也前事とあるは目也と心うへしわか神典たゝ一冊に宇宙をつゝめたまへる物なれは一言一句もいたつらなる事あらんやうなしおのれかおろかなるをかへりみすして此神典をわたくしするはいとも〳〵かたしけなき事ならすや中卷に明宮段へ大雀命執食國之政以白賜とあるは卽夜之食國の政をいふなりまた三代實錄に廿九卷へ内外乃政乎取持天勤仕奉（己）巳止夙夜（アサヨヒ）不懈とあるはすなはち前後の政といふをは内外と詔給ひしものなりこれらをあはせてこゝの詞をとくへしかへす〳〵此神にのみ此詔ありてともにあまくたし給ひし神々にはさることもなきはよろつの事たゝ思兼をむねとして地祇（祇）を直ふるわさはすへしとの御をしへなる事よく〳〵思ふへし

此二柱神者拜祭佐久久斯侶伊須受能宮次登由宇氣神此者坐外宮之度相神者也

まへにもいひしかことく御鏡は御世〳〵同床共殿にましまし〳〵けるを　崇神帝の御世に六年　倭の笠縫邑にまつり給ひ垂仁帝の御世に二十五年三月　大御神の御誨によりて伊勢の五十鈴川上にまつり給へるなり又登由宇氣神を外宮にまつりたまへるは延曆儀式帳に　雄略の御世　帝の御夢に天照大御神へ吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食故尓丹波國比沼乃眞奈井尓坐我御饌都神等由氣大神乎

我許欲止誨覺奉支云々 これによりて 帝驚悟りまして度會の山田の原にいつき給へる也しかれは爰の詞は。雄略帝の御世より後に書たる詞也これによりて思ふにこれらの詞は雄略帝の御世より後の人の書入なとしおけるか本文となりぬるにやしかれともこゝに又論すへき事あるは件々のうちにも 伊邪那岐大神淡海國の多賀に坐なといひ又笠紫(筑)國を日と称し又猨田毘古大神阿邪訶伊勢なりにますなといふをもてみれは 天照大御神はもとり伊勢國と定められし事とみえたれは 垂仁帝の御世に伊勢にまつりたまひしも此神典のむねにしたかひてまつりたまへるにやとおほしき也かの垂仁紀に 〽故隨大神教其祠立於伊勢國因興齋宮于五十鈴川上是謂磯宮則天照大神始自天降之処也とあるをみれは今わかいふ如くもとより神典に伊勢を高天原にあてられたる事をは 垂仁帝の御世大御神を託(ツケ)まつり給ひし倭姫命思ひはかりえたまひて伊勢にいつきたまへるにてそれを〽天照大神誨倭姫命とは書なしたるものなるへしこの二義今おもひ定めかたし猶たしかに思ひうるしるしを多くえて後そ此神典の成りたる時の事は決していふへきいつれにもあれわか 大御國ひとつをは人の一身また萬人の身等にあはせて國々をは身内の所々に配しあてたるものなれは伊勢もとより高天原と定めたまひしことはうたかひなきなりされはこそ始自天降之処也とはみゆるならめたゝ決しかたきはこの神典の出來たる時の事也。垂仁帝崇神帝より以前歟または雄略帝より後

欤おもひ定めかたき也佐久々斯侶伊須受といふはくはしく宣長翁かとけるをみるへし淤能碁呂島之件天沼矛の下にいひしかことく佐久々斯侶伊須受とは　の　頭のかたちをさとしたる物にてもとより伊勢にさる所の名ありしか故にそれをさとしにとらんために伊勢を高天原とあてられしか又は此神典によりて後にそこを五十鈴と名つけしにやすへて國名所名ともに神典をはしめとしたるもあるへし又もとよりあるを幸にあてられしもあるへき也宇氣比之件に委しくいひしかことく　天照大御神は女神にまし／＼なから男のよそひしたまひしといふは卽この鈴をおほくもちたまふか故也御頸珠之件に御倉板擧神といつきたまへる御頸珠とあるも首の処珠のことくまろきさとしにて　の事なること下の美智皮之件の御頸之玙とあるにてしるへしされは五十鈴にまつりたまふもみなこの神典の義をそなへたまへるなり前件にいへる社の説おもふへし

○登由宇氣神は御神生之件に　伊邪那美神の屎尿の神の次に和久産巣日神ありてその御子豊宇氣毗賣神とあるこれ也そこにくはしくいへるかことく屎尿土中に入り土を肥やすか故に再稲をよくこやし實のらするその神をいふにてその屎尿はもと食物の末なれは食たるもののふたゝひ食物をこやすものとなる事をいふにてかの儀式帳に　天照大御神御夢にをしへたまひしといふは例の味言にて　雄略の帝の御心のうちなる　天照大御神のをしへ給ひしことをいふなるへしされは　天照

大御神を招きたてまつる事は夜之食國の御さとしなる御鏡たにあれは足りぬへけれとその招き出たてまつれる　天照大御神事にあたりては再ひ石屋にかくれたまはむ事やすきものなれはその外宮にしも豊宇氣毘賣神をまつり給ひてわか食物の末（食物とはかれよりわか欲をいかし來ることとなさとし給へるなることさきにくはしくいへるかことし）夜之食國に生する稻どもの肥（コエ）となる事をつねに心におかんかためにいつきたまひしなりされは早竟夜之食國をは今一きはくはしく心にもつ爲に此神はまつりたまへるにていとかしこき御事なりかの儀式帳の大御神の詔に〈吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食といふ事夜之食國はかりにては（即鏡の事にて伊勢の御かたこれなり）　天照大御神をいつくに苦しくかつそれにつけては下段もやすく生せさるをいふ味言にてこれによりて祭り給ひし事なりとはこの詞に明なり　雄畧帝此御をしへに驚き悟りたまひしといふは萬機のうへにて御心のうちなる　天照大神の安からすおはしゝにつけてさとりたまひしをいふなり猶御神生之件にあはせて此帝の驚悟のいとたくひなくおはしましゝをもしるへしさて此神名の上に次といふ字あり此下の神々にもあり又天石戸別神の亦名をもあけられたるをみるに前にいひし神典のなれる時代の事なほ雄略より後歟雄略帝にてやあるらん爰の文法後人の書入たるものともおもはれねはなりさて此神名の上に次の字あるはかの儀式帳に〈吾一所耳坐波甚苦とある故をもてなりされともこの上文には此神はなきをこゝにのみ此神をまつり給ひしことをあけ

られしは　雄畧帝の御世の後より書たるものなるか故に是をもてこゝの意をたすけたる也といふへし神典のなれる時代のこと定めかねたるはかゝる事あれはなりこれらの詞をともに本文とみは雄畧より後の御世にいてきたる也とさたむへししかりとて本文にあらしとする時はまへにいふか如く次の字なとも本文のことき筆法なるかうへにかくのことくまつられし所をしるす事一身一國をあはせたる義をさとすに入用のことなれは無用の詞ともいひかたしされは神典出來の時代は雄畧帝　神武帝以來の御世の実事においてその彼我の神氣のやむことをえさる所をはかり定めて著はしたまへる欤またはそれより後の　帝のあらはし給ひしにやいつれに　雄略帝より後にいてきたるものとおほしきなり此宮に此神をいつきたまひし事をは宣長翁論はれたれとも例の表はかりの意なれは用ふるにたらすさりなから外宮をおとしていふ俗説をかの翁かいはれたるかことくいはれなき事ともなる事今わかいふ所のことわりをもてしるへし夜之食國をたて猶そのうへにその國の土をこやすへき豊宇氣毘賣をさへ伊勢にまつらせたまふ事ひとへに　天照大御神の心にいつきかたきか故にていとも〳〵かしこき御事ならすやけに五百津之美須廱流にましませはしはらくも天照大御神かくりたまひては高天原初段葦原中國中段ともにくらくなるへきをや

次天石戸別神亦名謂櫛石窻神亦名謂豊石窻神此神者御門之神也

天石戸別といふ名義はまへにいへり亦名の櫛石窻とは櫛は櫛名田比賣櫛八玉なとに同しく奇(クシ)の心なり石窻はやかて石屋戸の心なり窻といふも戸ある所なれは也これは石屋戸とも石窻ともとなへし一説なるへし古語拾遺に櫛磐間戸神ともかゝれたれは石間の戸の神といふ心にもあるへし櫛としもたゝへたまひしは　天照大御神をふたゝひ石屋に入れまつらじとかたく門を守る神氣はそのいさを靈妙なるかゆゑなり又の一名なる豊の字の心はしか石屋戸を守る神氣は下段の豊宇野神のかならす生すへき端なるか故也豊の字の事七神三段の下段にくはしくいひしかことく夜之食國豊饒なる心なる也御門の神也といふ事はまへにもいひしかことくたゝ普通の門の神といふにはあらす心の内の石屋戸を守る神也といふ心也神名帳に神祇(祇)官西院ニ坐御門(ノミカンノコノ)巫祭　神八座櫛石窻神　四面門各一座　豊石窻神　四面門各一座　とあるかことくたゝの四面の門の神としたるは例の神典の義をわすれしかためにてその義はひとへに天石屋戸を守る神なる心なりこれ私なることにあらす天石屋戸之件につけて出たる神の事なれは必たゝの門の神にはあらさるへきをもて也祈年祭祝詞に云　へ櫛磐間門命豊磐間門命登御名者白氏辭竟奉者四方能御門尓湯津磐村能如塞坐氏朝者御門開奉夕者御門閇奉氏踈夫留物能自下往者下平守自上往者上平守夜能守日能守尓守奉故云々　これはおほかたの御門の事をいひしものなれと開きても閉ても上をも下をもまもりて　天照大御神を疎ひむ心の導きて天照大御

神をふたゝひ石屋にいれまつらんとするを夜の守日の守とまもります心をいふにてみな味言なり此神をは上の登由宇氣神に次たるは天石戸神は石屋門を守ります神にて上にいひしがことく　天照大御神の出させ給ひしあとの門を守る神なれはまつ此神を出したるなるへし此次に手力男神をおかれたるは上の次第と相反したりこゝをもて思ふに上文の次第は　日神を招きたてまつるへき次序なりこゝの次序は招きたてまつりて後の次序なれは手力男神よりさきに此神をおかれたるにこそ

次手力男神者坐佐那縣也

佐那縣は神代記猿田毘古神の段に伊勢之狹長田とある所也と宣長翁いへり多氣郡佐那の仁田村といふに此御社ありとくはしく傳に注せられつその実はそれをみてしるへしこの佐那縣にまつられし(虫食)此神まへにいひしかことく　日神の石屋かくりし給ひし時引出しまつれる神なれはともに伊勢にまつられしにて高天原初段に入用の神なる事を社とはし給ひしものにて佐那といふに義はあるましき也

故其天兒屋命者中臣連等之祖布刀玉命者忌部首等之祖天宇受賣命者猨女君等之祖伊斯許理度賣命者鏡作連等之祖玉祖命者玉祖連等之祖

かくその末裔をしるされたる事まへにもみえたりそこにくはしくいへるかことく元來此五命もみな神氣なるに神氣に末裔ある事も心えす（これによりて古來神と称し命と称せるをもこと〳〵く人也とは心え誤れる也）又其末裔を記せらるゝも教のためには無用の事也（これによりて古來此上卷も猶史なりと心えあやまり來れるなり）このあやしみよりよく思ふにかみつ世にはすへての官々こと〳〵く此神々を祖とせしめたまひてその苐をたてさせたまひ神典の義をやとしその子孫たる人はその神氣をのみつねの心とせさせ　帝もこれを御心とし給ひしもの也とおほしきなり此神典中の神々こと〳〵く彼我の間の神氣にして萬の妙事たゝこれより生する事なれはその神々をやかて官々としてそれらも事とし　帝もわすれ給はしの設とし給ひし事まことにいとも〳〵めてたき事なりから國の官位なとをうつす世になりて以後はからふりの官をもてかへりて法としてみるか故に我　大御國のかみつ世はつかさ〳〵もとゝのはさる事のことくたれも〳〵おほゆる事なりさらにしからすよろつのつかさのこらす神典の義をそなへたまへるにて実事に切なりし事今更おほゆる事□（そこカ）（虫食）かしたゝ一神といへとも萬の事をすへたるものなれはこれをもて官とせむには煩ならすしてしかもその功大なるへしされは予此神典にみゆる所のつかさ〳〵を別にとり出て記しおけりいかて〳〵此神典中のつかさをつかさとして家をも國をもまつりこちてみまほしき事也されは上にいへるあやしみをもとくなり

故尒詔天津日子番能迩々藝命而離天之石位押分天之八重多那雲而伊都能知和岐知和岐氏

御頸珠之件云へ卽其御頸珠之玉緒母由良迩取由良迦志而賜天照大御神而詔之汝命者所知高天原矣事依而賜也故其御頸珠名御倉板擧之神訓板擧云多那とある事そこにもいひしかことく心えかたき書さまなりされはよく思ふにこゝの照應のために倉板擧といふ神名はつけられたりとおほしき也その故に天之石位天之八重多那雲このふたつ卽倉と板擧とふたつの訓にかよひたりこれによりてかの件を此件にあはせて考ふるにかの御頸珠をつかさとり給ふ神なる御倉板擧神はやかて此迩々藝命なるへしもと此命は宇氣比之件にて天照大御神の八尺勾璁を物実として速須佐之男神のうみ給ひし忍穗耳命の御子なれはもとより天照大御神の御倉板擧神としてもちたまへりし神なるかこゝにおいて天降りたまへる也されは此御をしへは心主たる伊邪那岐大神の天照大御神に此御頸珠をたひしといふは地祇(祇)の前をはすこしもさゝへすして其欲を直ふるを表としその内にかねて中段をもちてふるまへとの敎旨なる事みつへししかれとも國稚くして速須佐之男命大國主神ありて地祇(祇)の表にまとはされその見識をたゝよはするほとはこの迩々藝命は天降しかたきものなるか故にこゝにおいて此命の御天降をときたまひしもの也此故に天之石位天之八重多那雲といふふたつは倉板擧

の照應なるへしとはいふ也しかれともこゝの文のこゝろはたゝ今まて此命をは天照大御神の御倉板擧神といつきおかせたまひし事一途にして固き心をさとして石位とはいふ也（石の字同成の同の字はあたるなり）八重多那雲とはかの下段の豊雲野神の照應なりその照應する心はまへの八雲之件にくはしくいひしかことく速須佐之男命八俣袁呂智をきりたまひしによりてそこより雲立騰りけるとあるは卽豊雲野の照應なからやかて豊雲野神にてはあらさる也いかにといふに下段の豊雲野神には豊の字あり此豊の字肝要の字にて下段は生しても豊ならぬは股長にいのなさるへきにあらすされは八雲之件の雲といふは豊ならぬ雲をいふ也されと八俣袁呂智をきれは雲は必たちのほる物なるか故にそこに雲立騰とはある事なれとその雲立騰るよりまた徶おこるをさらに大國主神を說たまひしもの也されは一旦はたちのほりし雲あるかうへの徶なれはこゝにその八雲之件の雲立騰をうけて八重多那雲とは說たまへるものなり八重といひ多那といふはかの御倉板擧にふかくをさめていつきたまひしさまをいはむため也それに八雲之件をうけあはせて天之八重多那雲とはいふなるへしこの雲立騰りても猶徶おこるといふ所以はかの八雲の件なるは畢竟は一時の下段なり一時の下段をおもふ時はなほ大國主神の徶とはなる事也此故に大國主神に八上比賣のおのつから美刀阿多波斯□(な)か(虫食)ら八十神のいかりありしなりされは迩々藝命天之八重多那雲をちわきて天降ましきといふは豊な

る雲を生せむかため也此故に速須佐之男命は袁呂智をきることをいひ穂々手見命は海神の御女豊玉毘賣にみあひたまひしとはときわけたまひしにて豊玉の豊の字やかて豊雲野の豊の字に應したるもの也所詮をいはゝ八俣袁呂智の件は地祇（祇）の前よりいふ也美智皮之件は地祇の中心にかゝりていふ也としるへし前より突かゝる者は袁呂智の件をもて接すへししかる時はその欲されて雲立のほるものなれと此迩々藝命のことく海神の女を娶らされはその雲豊なる雲とはたちのほるへからすとの御をしへなりされは本身の件の末に〽雖恨其伺情不忍戀心とはとかれたる也こゝをもて天之八重多那雲をちわきてとはいふ也（八重の八の字八雲の八の字と應して見るへし）猶本身の件にくはしくこゝの差別はときたれとも速須佐之男命をとき八雲之件に雲立騰るといひたるは下段まてを説たまへるかこときを又さらに大國主神をときて本身の件に及へる事は右にいひしかことく雲にして豊ならさると豊なるとのわかれあるか故也しかるに諸教は八雲之件をもていたりとす我御教はかれか前のみしかりとて股長にいはなさるへからすとして大國主神以下をときたまひし也されは海原をしる事第一の事なれは袁呂智之件は無用の物欤といふにしからすいかにといふにまつはしめにかれか前をなほはせおきてその雲を立のほらせさてその雲を豊なる雲とすへしとの御教なる也これらの理をもてこゝの八重多那雲を押分たまふといふ事心うへし此故に我御をしへ初段の上にまた中段をかけたま

ひしもの也○伊都とは稜威と神代紀にかきたまへる心にてその威力しのくへからさるかたちを云しからはいとたけきかたちのことくなれともわか御教にて伊都といふは人の害する事あたはさるをいふ也その意は力のつよきによりてにはあらすかれか欲に因る故に害する事をえさるこれを伊都とする事大かたわか御國ふり也祓禊の件なるへ伊都能賣すなはちこのこゝろなり今此命の天降りは彼か欲をめかけてなれは伊都とはたゝへたる也○知和岐とは道分也雲の中をは道をもとめてゆく心也大かた道なき所に道をもとめてゆくかたちなれはこの詞にもひとへにかれか陰欲のかたにむかふをいふ心はこもれりかれかくせる欲の方なれは道たえ（たるカ）□（虫食）ことをもとめてゆくことを云也但これ皆神氣にて（虫食、の事也カ）□顯事とみあやまるへからす

於天浮橋宇岐士摩理蘇理多々斯氏

天浮橋は淤能碁呂島の件にくはしくいひしかことく人の中心へかくる橋の事也これ又神氣にてかよひちをなすをはかくは名つけ給ひし也　宇岐士摩理とは宇岐は浮橋なる故にいふ也もと浮橋といふ名も實地にしかとかけたちぬ橋なるか故の名なれは浮といふ字の義はかれか身にさしつけぬ所をさとしたる名也士摩理とは下卷清寧帝の条に鮪臣か哥にへ大君のみこの柴垣夜布士麻理もとほしきれん柴垣やけん柴垣といふ哥ありこの士麻理に同しかるへく又劒の柄をにきりたることをトリシバルと日本紀にみえたるもと

もに同語にてしかと縛りたるかごときを形容する詞なるへしされはうきしまりとは彼か身にさしつけぬ方に心を決したるかたちをいふ也　蘇理とは鷹のそれたるを曽理鷹と哥によみたるかことく俗言にソレルといふ心なり正面にゆくへき道あるにその方へはゆかて浮へるかたの道へそれてその橋の上につねに立をる事を蘇理多々斯とはいふ也されは此うきしまりそりたゝすといふ事は中段に決定したるかたちをくはしくときたまへる詞也としるへし予つねになに事も正面をはづしてゆく事わか　御國ふり也といふはこの詞によりて也言靈の道もこれによりてある事也正面といふはたとへは叱るへき理ありてすこしもわか私にあたらさる事あるかことき時これを叱るをいふしかるにこれを叱らすしてかれか海原をしるへき道にゆくこれをうきしまりそりたゝすとはいふ也多々斯といふ詞つねにこゝを居處とすへきををしへ給へる詞なりたとひ大事たりとも又は小事たりとも言行すへてうきしまりそりたゝさは何事かは全からさらん此詞の妙義こゝにいひつくしかたし

天降坐于竺(筑)紫日向之高千穂之久士布流多氣

竺(筑)紫は御國生の件祓禊の件等にいひしかことく此　大御國を人の一身と配して陰處にたとへたまへる所也されは此天降もまつ此國にとはいふ也。神武帝わか　大御國を一統し給ひし事人の竺紫

の國なる久士布流多氣に天降ますことをはしめとし給ひての事なるか故に　神武の御卷にも笠紫より倭へおはしけるよしかゝれたるを例の言靈ありとはしらすたゝおほよそに見て　帝の御はしめは笠紫よりおこり給へりと心えそれにつけては我　御國にうまれしおのか身をもわすれてひたふるにから國をのみあかむる人々は呉の泰伯か末なるへしなとさま〳〵におもひはかりていふ事さへ聞ゆいとも〳〵あさましき事ともなり　神武の御卷ももはら言靈をもてかゝれたるにて早竟天下の草創中段の御神さひよりおこれる事をさとしたるもの也さて此日向といふは祓禊の件にいひしか如く日とは即　天照大御神をいふにてかれわか神御產巢日神にむかひたる所をいふ也これ即欲は直ふるを悅ふ物なるか故に日向とはいふ也此國内に天降ますへき所も多からんを久士布流多氣といふ山をしもとり出られしをおもふにこれは　のさとしなるへき也　のかたち山のかたちのことくなるか故也さて中段にみえたる葦牙のことといふも即　のさとしにてそのかたち亦相似たるをとれるなりされは此山にしも天降または因葦牙のこゝろを示し給ひしもの也中段にもときしかことく　といふものは女の忽よる所なり久士布流は　奇靈(クシビ)をなす心なれ

（異筆、貼紙）

倭へをはしけるよしノおはしト斗ニテハ帝ノヿヲ稱スルニ不足様ニ存シラレ給フ右ノ詞可有様ニテモハレ（以下五六字不明）

はけに　にたとへたまへることわり也女の一身の精神を一所によせんことたゝ此　にあるをやされは　のことき人欲に因る時はそこより諸の妙事は生する物なるか故に久士布流多氣とは名つけたまひしもの也これ卽如葦牙因萌騰之物といふことをくはしく說たまへる也因といふ字の大事なることは中段にくはしくいひしかことくなれはこゝをはしめとして此下の件々因の字のこゝろをときたまへり　高千穗といふは千は津のかよへるにて高津穗の心なるへし穗とは番登といふ番にて卽陰を云也陰欲をもてる所なれは番登とはいふにて登は處也されはその陰欲の外へ少したかくあらはれたる所といふ心を高千穗とはいふなるへしすなはち如葦牙萌騰といふもこの心なるをや萌騰の字を高といひてさとし給へるもの也此山上に今に矛のことものありていとも〳〵くしひなる事ともありといふはこれ又祉とひとしく此神典の義をさとしのためにいつきたまひし物なるへし

（異筆、貼紙）久士布流ハ解甚詳ニテ多氣ノ二字モ御入ヒ成度哉ニ存ジラレ候

故尒天忍日命天津久米命二人取負天之石靫取佩頭椎之大刀取持天之波士弓手挾天之眞鹿兒矢立御前而仕奉

天忍日命は大伴連等の祖天津久米命は久米直等の祖と下にみえてこの連直はともに後世までも武官たる事この神典によりて也しかれともまへにもいひしかことくから國のてふりうつりて後はつかさ〳〵も皆それにしたかはれけれは武官といふも混してその官の義をうしなひぬその故はこの天之石靫頭椎者大刀天之波士弓天之眞鹿兒矢いつれも天之とあるをもてみれはまことの靫大刀弓矢にはあらす例のさとし物なりしかれはこゝに武官のことくかき給へるもこの大刀弓矢等にひかれての事にて此二命もたゝ我神氣にして彼か海原にむかふ時に先にたつへき神氣なるをもてかく立御前而仕奉とはかゝせたまひしもの也しかるを此義を寓してかたちとせんために此二神を大伴久米ふたつの祖とたてさせ給ひやかて靫大刀弓矢をとりおばせて御前にたゝせて武備とはし給ひしものなるへしかへす〳〵わか　大御國のつかさ〳〵神氣を祖としてその一伴にその神をいつかせその神さひをつかさとらせてやかて神道をふるまひたまひし事から國のつかさをたてたる意には大にことなる事みるへし　忍日といふは忍は例の押の義日は例の夫理の義也久米とは石屋戸之件に尻久米縄と云ふ名ある久米に同しく極むるといふ心也されとかれは　日神の御しりへをきはむる縄なる義なりこれはかれか欲を前にて極むる心にて忍日も久米もともにかれか陰欲を達する義なる神名なりその中に忍日はかれ陰欲をおし促す心也久米は極をあたふる心にてすなはち中段

の二神の用を名とし給へるなりとしるへし（忍といふ事渾沌のほとの忍は欲をおさふる義也發天地のうへの忍は欲をうなかすこゝろとなるなり）されは表は武官にして実はたゝかれ陰欲をうなかしきはむる事をつかさとる二神を云也まへにもいひしかことく靫大刀弓矢にひかれて武家とはし給ひしものにてさらにその義は武をつかさとるにあらすしかれとも　神武帝以來おほくの逆賊をまつろへ給ひしもみな此中段の御稜威によりてなれはやかてこれを武官とはする事也けにも〳〵この稜威は武よりもつよき物なるそかし初段に高御産巣日神あるはまことの武備のことなりこれをそこにまかはしくみるへからすわか　大御國人他域にすくれて心一致せる事これにておもひしるへしされは大伴久米を前駈とはなし給ひしもの也石靫とは石はすへて堅きさとしもの也靫とは箭をいれて負ふもの也頭槌の大刀とは鋒の方槌のことくなりたる大刀なるへし波士弓は波士は波之伎と詞にて可愛の心也眞鹿兒は宣長翁の說のことく目炫の心なるへしされは波士も眞鹿兒もたゝ弓矢をほめたる名也さて此四のさとし物はまつ靫といふは腎臓にあたり頭槌の大刀とは男根のかたちなり弓とは男根女陰の内にて進退するかたちを表し（矢をはなたんとするに前へひくこのかたちをとりたるものなりくはしく前にいへり神樂のとりものにへよも山の人のたからとする弓ともよみ神宝なとに弓あるもみなこの義をたふとひて也この四くさのものみな除くへからねともこの進退のはたらきによりて孕むにいたるか故に弓をことにむかしよりたふとふなり）矢は男の精胎に入るを的にあたるかたちに表す（此矢を多くたくはへたる所なれは今靫をは腎臓にあたるとはいふ也）この表事はすへて人欲を達する事を男女交接のことわりをもてさとし給ひしものなれはかくはいふ

にて人事にしていはゝ矢とは人の欲にあたふる物をいひ弓とはそのあたふるわさをいひ大刀とはそのあたふる道をいひ靫とはそのあたふる物を貯へたるをいふ也と心うへし

故其天忍日命此者大伴連等之祖天津久米命此久米直等之祖也

この事まへにいひしかことく後に神典の義を寓さむためにつかさとし給ひしをいふにて此ふたつの件はこの義をつかさとるためなりとのさとしにかくはしるされたる也やことなきうへにてはかゝるつかさ〳〵たてたまはむもやすかるへけれといやしき人はさるわさもかなひかたきをいかにと思ふ人もあるへししかれともこれもと　みかとなりし故にかくふたつの件をもたてゝ此義をやとし給ひしなり成元等かたくひはたゝおのか神氣をわかちて此二命に此わさを命しわか迩々藝命の御さきにたてんになにの不足かあらんもとかくつかさをたてられたるも此神氣をつねにうしなはしかためなれはあるもなきもその用はたかふ事あるへからすこと更今かく書籍となりつるうへはたゝ一匹夫たりともおのか神氣に此つかさ〳〵はたりぬへき事なりかし

於是脊肉韓國眞來通笠沙之御前而詔之此地者朝日之直刺國夕日之日照國也故此地甚吉地詔而於底津石根宮柱布斗斯理於高天原氷椽多迦斯理而坐也

こゝの錯簡誤字宣長翁かくはしく論はれしによりてかくあらためたり　脊肉とは脊の肉を云　曾と勢と

かよへる也　韓は假名にて空虚の義也神代紀には　へ膂肉之空國自頓丘覓國行去云々　又一書には　へ膂肉胸副國ともみえたり空國卽から國なる也さて此膂肉韓國といふは脊には肉なきかことき所なるをもて人の欲の淺く薄き所とたとへたまへる也淺欲には人の心厚くかゝらすこゝをもてから國とはいふなりこの膂肉のから國より笠沙のみさきにまきとほり給ふといふ心は人欲の中にも深き所をもとめむとて淺欲の所には心をとゝめ給はぬをいふ也笠沙のみさきといふは海にのそめる所のさとしなり（まへに御□（虫食）之御前多藝志之小濱なといふに同しく所名には故なしたゝ海辺をいふこと専用なるなり）その海とはまへにも返々いひしかことく人のかくしたる欲をいふ也おほよそ人欲至深なるものはふかくかくしてあらはす事なきもの也されはかれの欲のうちをまきとほりて海とする所の欲にのそめる所を覓得よとの御をしへなりされは予つねに人の欲のうちをよく心をとめてその至深なるをえよとはをしふる也韓國を眞來通といふ詞よく〳〵心をとゝめてみるへしから國なる所はかほと達しても雲の豊なるは立のほるましけれは也　此地者朝日之直刺國夕日之日照國也といふは日とは卽天照大御神なり　天照大御神の地祇（祇）の欲をなほはせ給ふその御心つねに海をてらし給ふか故に朝日夕日をもていふ也これをは古來たゝ実事と心え來れゝと朝日夕日のさすによりて吉地と定めたまへる事いかに心えたるにかあらん朝日夕日のさゝぬ國とては夜國をおきてはあるましきをやつねに心のこゝにある事を朝夕とは說たまひし也

直の字は固の字にあたりて（淤能碁呂島之件なる脩理固成の固の字の事也）こゝに一途なるをいふ也　吉地と詔給ふ心はたゝ此海に臨みたる笠沙之御前を居と定むれはもろ〳〵の妙事こゝより生すへき所なるか故也　於底津石根云々は上の力競之件にくはしくとけるかことく下段をさとりて初段をたつることをいふにてこれ卽中段を居としたるかたちをいふ也

古事記燈　之巻　終

七神三段

古事記　首

○古今六帖　小鷹へ庭草をうつらすむまてはらはせし小鷹手にするこむ人のため
引たるにはへわかやとはうつらふすまてとあり沖か本にはしかありけん
○萬葉第四へことゝはぬ木すらあちさゐ諸茅等（モロチ）が練之村戸（ネリノムラト）にあざむかれけり
あさむかるへきにあらぬにとの心にてよめる也されは物いふは神のたすけぬ所なる事しるへし古人はやまとたましひいとつ
よく有ける也

「招　日本紀ニアリコノ人ニヤ（此哥モ人）□□□モ万葉ニハみえず
お地の皇女　代匠記中に契沖此哥を
此哥第三段の意をさとすにたれゝはこゝに出す
此哥物いはぬは神に通徹する道なれは欺くとも

○桃實三ハ御悟ニテ理ナリ

（即三段）
三貴子ハ桃実三ノ実事ニナリテ生タルナリ
「三貴子にて三段ともに死なぬものになる也日神は高天原をいかす也
月神は國をいかす也すさのをの命は中段をいかすなり

○桃実三ト三種神寳トハ相對シソノ中ガ三貴子也
サレハ桃実三ハ心ノ方ノ三種神寳也三種神寳ハ身の
方の桃実三なり

○豊雲野神は地ノ得心シタル心ヲ云
高木神は天ノ得心スル心ヲ云テ反也
コノ二神妙ナルヿハ豊雲野神ヲハ天よ
り生すれハ自然と高木神は生する也地
より高木神を生するやうにすれは自ラ
豊雲野神は生する也

○漂蕩トハ是ナレハ凌カタクテソレニモ随ヒ
マタハ身ノ勝手ワルサニ非トモナルヲ云ナ
リ幸苻コレナリムカフニ高ミムスヒノ神ア
レハムカフヘユカレヌナリ

○一段ト二段ハ天ヨリト地ヨリ
トノ傍ナリ中段ガ正面にて舞
臺ナリ此故ニ高木神ハ天ノ傍
ナリ豊雲野神は地ノ傍ナリあ
しかひの二ツは天ト地トノ正
面ナリ

○天之御中主神は決斷ノヿ也人ノホムルトソシ
ルト二ツ持ツガ決斷ナリ世ノ決斷ト心ウルハ
一方ヘユクヿノヤウニ思フ也ミル所一方ナル
故ナレトカゲニソノ一方ハアル也コレガ決定
ナリ　ハシメコレヲタテ子ハナラス故第一ニ
アルナリサスレハ終ニソノ神力アラハル、ナ
リ　中段ニテ押合フハコノ神ヲ殺ス也

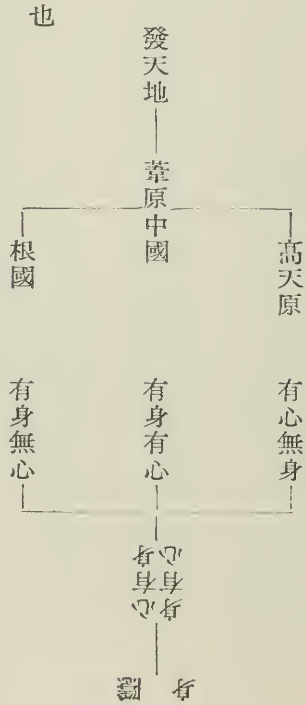
○一段　高天原
　二段　葦原中國
　三段　根國

コノ極アレトムリニユカントスレハユカレヌコトナリコレヲ無理ニスレハムカフヲマクルニナルナリヒトリ幽事ニテ出來レハモドリニハマコトニ安心シテモドラル、ナリ

天ノ常立トハ身（マヽ）ノ欲ノ極ノコトナリサレハコチラヘ立ヘシコレニテ別天神ナリト云ヘルハコレガ心ノ法ナレハナリ

國之常立トハ身ノ方ノ欲ノ極ナリサレハムカフニ立ヘシ

第三段メハ二段メノ如ク天モサノ如クナレハ國モマタソノ如ク中段ニテオシ合ハスニ國ノ底ヲ心ニオケハ雲ノ如クソコヘ立ノホラル、ソトナリ雲ノ消ル心カラワカ欲ヲ達シテ得心シテモドルナリ下段ハ身ノ方ノ敎ナリトカクニ中段ニテタカヒニ押アフガ人ノ學ナレハソノ底ヲ心ニカケヨト云ヲシヘナリ





コレハ天ト國ノ底ニ互ニイタル圖也



此圖中段也

天地渾沌トハ降氣ト昇氣トノ互ニ行合押合テ勝負ツカヌコトナリシカル寸ハイツレゾ片方ツヒニ根氣ツ、カスシテ片方ガ倒ル、トソレニテ片方モマタタ、ヌコトナルナリコレヲ示シタルハ下ノ

あめつちはしめてひらけしときたかまのはらになりませるかみみなはあめのみなかぬしの神つきにたかみむすひの神つきにかみむすひの神このみばしらの神はならびにひとりかんなりましてみゝをかくしたまひき

「第一段

「地ヲマヅトリノケテ相手ナシノ処ニテイヘルモノ也下段ノ豊雲野國之常立二神モ天ヲノケテノ処ニテ云ナリ

「第二段

つぎにくにわかくうけるあぶらのごとくにしてくらげなすたゞよへるときにあしかびなすもえあがるものによりてなりませる神みなはうましあしかびひこぢの神つぎにあめのとこたちの神このふたばしらの神もまたひとりかんなりましてみゝをかくしたまひき

「コレハ根國アルヿヲシリテ其昇氣ノ來ルヘキ極ヲアテガフヿヲ云ナリ

かみのくだりのいつばしらの神はことあまつ神なり

「第三段

つぎになりませる神みなはくにのとこだちの神つぎにとよくもぬのかみこのふたばしらのかみもまたひとりかんなりましてみゝをかくし給ひき

「コレハ天之石屋アルヿヲシリテソノ降氣ノ來リ極ルヘキ極ヲアテガフヲ云

右

伊邪那岐命御教七神三段

之心術也千歳餘湮沒矣有時今再現世不知

其所以也

中臣庶裔成元識

七神三段說

古來神學者流說々あれとも概するに神といひなから人として解たるか故にその說みな非にして此書の言靈をしる事あたはす成元はしめ哥道に志ふかくして年をつみたるに幸ありて言靈のみちをさとれるよりはしめて此御をしへに心をよへり古來說々の可否をいふは無益なれはたゝわか言靈のむねをのふ理をたのまむ人めのまへをむねとせん人は此さかひにをよひいたらん事すみやかなるましけれと人事に心身をくるしめたらん人は卽時にも此　いさなきの命の御うつくしみはしるへし神道のたつ所の主意人欲を達するにありその故は黃泉の段によもつしこめ八雷神よもつ軍におはれ給ひて蒲子筍なとさま〳〵に防給ひしかともしはしかほとは來らねとも猶おふによりてつひに桃實三つをもてまちうち給ひしかはこと〳〵く逃かへりたりとある此桃實三箇とは此七神三段のさとしなり此卷の末三種の神寶にいたるまて三の字をもてこれをさとし給へり天照大御神に高天原をことよさし給ひて御頸珠をたまひしは卽此第一段をさとし給ふなりそれよりすさのをの命の勝さひの段は此第二段をとく也大蛇の段か第三段をとくなり卽うけひの段にて天照大御神すさのをの命と玉と釼をとりかへさせ給ひし時すさのをの命の十拳釼を三段にをりてとある處はすてにあらはに三段と

みえたりそれより後大穴牟遅命すさのをの神の御所にいたり給ひし時御むすめのすせり姫蛇蜂呉公のひれをさつけて三擧打撥とをしへましゝもこれ也それよりかの迩々藝命の天降のとき　日神三くさの神寶をたまひしは卽此三段の御法をはいさなきの命のさづけまつり給ひしをいふなり

此一部目をつくへき事あり陵といふもの一部中にいさなみの命と彦ほゝてみの命と二神はかりにありて外になき事疑ふへく又彦ほゝてみの命はかりに年數をしるされことに御一代にはあまり長すきたる五百八十年なりその次なる御孫の神武天皇はたゝ百三十歳におはしませりこれらをもてはかるに元來はしめに神代七世といふとあるより後はさやうの事もしるされすこれ又不審也されは國之常立神をはしめにたてゝ七世といふはこれ又いさなきの命の三段の法をさとり給ふまての御神氣のかはりゆきしを一世／＼とかぞへたるもの也さてまた日神をはしめ奉りいさなきの命を御父とたてたるはこれ又いさなきの命の御神氣をいふなり大穴牟遅神は此國にもとよりいましゝ神にやあらんすさのをの命も出雲にますとあれはいさなきの命よりすさのをの命を二代とたつへきにやそれより大穴牟遅命を三代とたつへし迩々藝命はすなはち大穴牟遅神の御神氣なるへし彦ほゝてみの命を三代とたつへしさてふきあへすの命はまた彦ほゝてみの命の御神氣なれは神武帝まていさなきの命より三代にましますなるへしこれにて五百八十年とはいふなるへしさていかてか彦ほゝてみの命の御一

代の年數とするそといふに此命の時はしめて天下一統したりしにてもとよりいさなきの命天子たるへき御志ありし時より此命の高千穂の宮にますへき事は定まりてありし幽事をさとさん爲に御一代の年數とする也されは畢竟は此命の時七神三段成就し天下一統したりしかは此命御一代のやうなるもの也との心なり終を以て前へ引かふせたる書やうにて皆神氣のうへの論なれは也されはなに事にもあれはしめ思ひたつ時よりその成就の時はそこに出來てあるものそとをしへの爲にわさと三代の年數を一代にかけるなるへし陵はたゝ二神にのみあるはすさのをの命も大國主神もその御代には天下みたれ多くていさなきの神の御代のことくいきほひなかりし故にや又はすさのをの命も大國主神もみないさなきの神の御神氣とみて直にいさなきの命より彥穂々手見命二代とみるへきにやされと夫にては年數すこし多すくる心ちすれははしめの四代の神々妹何神ともあるからは人なりとみゆれは宇比智迩神を此御志のはしめとたてゝ彥ほゝてみの命まて六代の間五百八十年にやはしめの四代陵なきはいまた天子の勢おはさゝりし故なるへしすさのをの命大穴牟遲神ともに出雲にましますといふはいさなみの命を出雲のひはの山に葬りまつるとあれは神避給ふとはさとしにて卽いさなみの神の事卽いさなきの神の御身の事なるへしされはすさのをの命の御行跡も大穴牟遲神の御行跡ももにいさなきの神の御行跡たるへし此二說猶くはしくかんかへて定むへし

五百箇御統玉といふ事五百にかきりていふは卽此五百八十年の八十年は端なれはのけて大數五百年としてその五百年ほとの間むさ〳〵としたるもたゝ此高天原の一段につゝまる事をさとさん爲に五百箇とはかきれるなるへしいかほとの事もたゝ此御統につゝまるといふ事をさとしのためにこの実事の五百年をとりていふなるへし五百箇眞坂樹なともこれなるへくおほしきなり

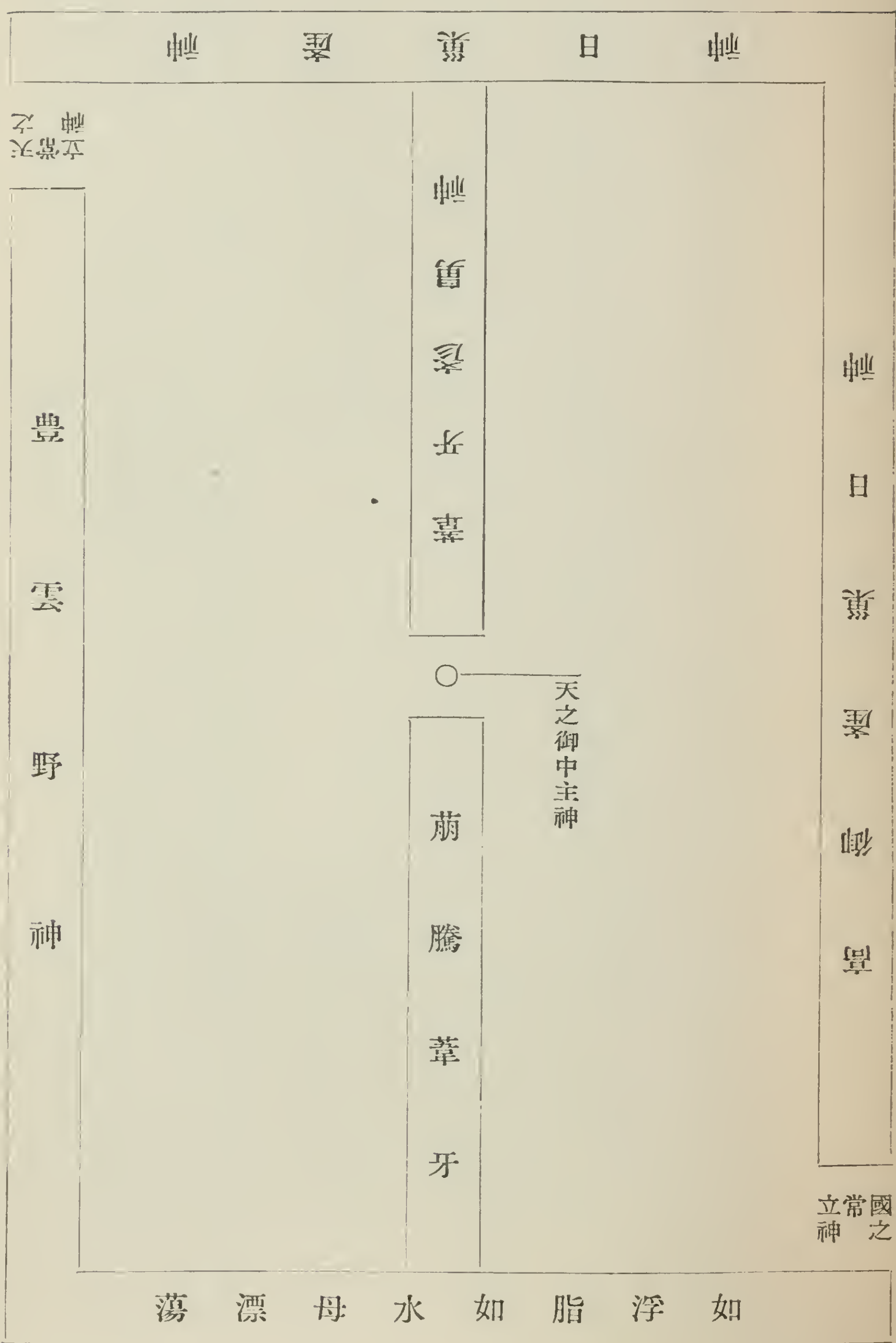
葦牙と七神三段にいひて次の七世のうちに角杙活杙といふ神あるは卽葦ならてはつのくむといふ事はいはぬ事なれは葦牙にあはせてみよとのさとし也葦原中國その後に葦原醜男なともみなくさびなりすへて八の字一の字その外劔室弓矢なとなにゝよらすのこらす上下の文のくさひに書たるもの也

天浮橋卽大蛇の段の箸と應するたくひ也

予此七神三段にはしめて目とゝまりしは隱身也といふ事此後はたえてみえすまた獨神といふ事もこの間にかきりたるにてさとれり三段たるは此三柱此二柱此二柱ときりてくどく隱身也とかけるにてしりぬされはたゝ此一部は此七神三段につゝまれる事にてあとはのこらす実事をもつて此法に引合せたるにていはゝこゝの注解なりされは七神三段を第一とし宇比智迩神よりいさなきの命の多賀におはすといふまてを第二とし日神すさのをの命の事八雲の段までを第三とし大穴牟遅神の段を第四とし迩々藝命天降よりをはりまてを第五とす第五は七神三段成就のうへの事をとき卽七神三段の惣

論なり第二第三第四は即七神三段の第一第二第三をこまかにときたるものなり此みやう予かはからすおもひえられたる事也

七神三段圖



天地初發之時

天地といふ事まことの天地なりと古來見來れるは言靈の道をしらさる故也もとより天地ひらくるといふ事そのむかし渾沌したりしかひらけて天となり地となりしと神代卷なとにはあらはに書給へれはそれをたのみてたれも〳〵信しをる事也これのみならすへて天子は天神の御孫にして天より降りましゝなとすへて奇怪の事ともなるを古來の神學者はそれに侘(佗)てさま〳〵の理をつけてしひてあらぬ事に說なしたるを宣長みあさみてそれをから心也としておのれかいふ事はたゝかゝる事也とのみおもへといへれとそれも猶老子の見に落入られたりことに世にいとも〳〵質朴温柔なる人はかれか說を信すれとも成元かことき狐疑ふかきものは信する事あたはすかく信せさるものはから心とてすて物にせらるれとしからはから國の事のみ行はるゝ禁中をも捨物にせんやその信せさるものも信してこそまことの道とはいふへけれ今わかみえたる所は世にすたる人なきなりこれこそ神の御心にはあらめとおもほゆる也日神ののり直し給ふを思へはいかてか宣長かこときひか心は神にはましまさんこれ皆その源を思へは言靈の道を弁へられさりしよりのせんかたなしの說にきはまれりたゝこれを帝紀とのみみられけるよりの事なれとさならぬ事は神武帝以後を人

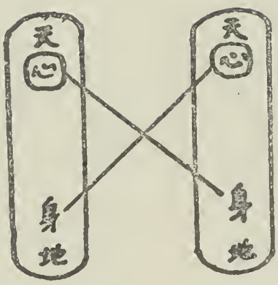
皇と申すも此一冊は帝紀ならぬ證なるうへに宣長かいふことく此神書は帝のうへの御事なれは庶人のかゝはりにあらすといはるれともさならぬ證明らかなるはかの桃実三箇の所にへあしはらのなかつ國にあらゆるうつくしきあを人くさのくるしきせに落てうらふれんときにたすくへしとのり給へるは帝のみならすわれらまてもまなひ奉れとの御うつくしみなりわれをたすけしかことゝさへあれは御みつからのくるしさをもて天下の人の苦をあはれませ給ひし事そかし宣長かことくはいさなきの命の御心をももとき奉るにあたるへしかしこむへし〳〵

こゝに天地といふはまことのあめつちにあらすかたはらをいふなりいかにとなれは初發といふはもと渾沌をたてゝいふにて此二字に渾沌明らかなれは神代紀には渾沌をいへとも此記にはいはれさりしなり渾沌といふ事いかてかまことの天地ならん天の氣くたり地の氣のほりて中間にしてひとつにうちあひて一物となるこれを天地の渾沌と云也その物何そや萬物也萬物のうちにも人はその長たれはむねとは人をいふ也人一人の身生るゝ時にはその渾沌のさま明らかならねと死する時に明らかなるはその魂は去りて空に歸し身は地に入て土となる此ふたつかよりあひて一人の人とはなれる也これたれかはのかるへからん天子より乞兒にいたるまてたゝ此渾沌たるをやされとも死する時はしかり活てあるうちにもそのしるしあるかと或人とひしに問て曰起たる時はしりかた

し寢たる時はその證ありいかにとなれは身は寢たる故に人の物いふも聞えさるからは死したるも同前也死したるも同前ならはまことにしぬへきに猶活たるは呼吸のかよふ故也その寢たる何物そやその活きたる何物そやこれ天氣降り地氣のほりふたつの氣のよりあひたる證にして又そのふたつひとつにはなりなから実は別物はなれ物なる證なるをやその呼吸なに物そや卽第一段のふたつのむすひの神也その間にて命といふものあるこれ天之御中主神なり此高天原の神の身中にかよひ給ふ故に死物たるへき身のいきてはある事そかしされはこれかくのことく別物なれともよりあひたるものなれはおのつから渾沌してとにかくに一物のことくなりやすきなりたとへは佛の道聖賢の道なとなにゝよらすよき事をするは天の種姓の心の方のするなりしかるにそれに身も引はられてあるひは佛とも羅漢とも賢者とも君子とも稱するいつれも徳各也と口にはいひなからしらす〱おのか身をおのれとその心の位の所におくもの也また嗜二酒色一博奕をなしなとすへてあしきことにふけるものは低き方なれは地の種姓にして身の方のする也さる者は心をもそれに引はられて高天原の神々をもつひには奴のことくしなすもの也かくのことく高き(衍)の方に渾沌し低き方に渾沌するは心と身とのたかひに引はらるゝ也此故に儒には五倫といふものをたつるは天地渾沌したる人一人をは君とたて臣とたつる也人一人を君又は臣とたつる事卽又渾沌也いかにといふに天は

尊く地は卑しきもの〻ふたつあるに君とも臣とも定むるはいとも〳〵理なき事也その君のうちに臣たる地ありその臣のうちに君たる天あり此故に儒道たゝあらそひのはしとなる事多き也天地をひらくといふはたとひ天子たりとも御身は地なりとしたとひ乞兒たりとも心は天なりとするを云也此故にわか神道五倫をたてさることわり哉人一人に天地あれは也されは此ことく天地をひらけは君の心は君にて身は臣也臣の身は臣にて心は君なり表にてはおのかさち〳〵にて君とも臣とも天よりことよさゝれたる事なからいつれを君いつれを臣とかせんこゝにおいて萬代不易にして天地日月とひとしく久しき五倫しらす〳〵たちゆく事なり今圖をもつてこれをしらす

神道初門
天地開闢
之圖



君父夫兄長

臣子婦弟幼

後文にも此たゝよへる圖(國)をつくり固めなせとあるかことくわか神道のむねとする所かたきにある也固しといふ事儒のいふかことく義を守り節をうしなはぬなといふかこときことにあらすわすれんとすれともわすられぬこれを堅しとはいふなり此發天地といふ事神道の初門にしてしかもいつ

くまてもこれか則となる事にて此七神三段發天地をはしめにかけるは惣序の心也隱身は發天地より出來る事なく發天地は隱身を先途とす此故に隱身を終に置てむすへる也發天地隱身の道のそのいさをし言を以てのふへからす各身に行ひて思ひしるへし佛は十界をは人々具したりといへとも國城妻子を捨る事猶心に身を渾沌すといふへし身はもとより國城をも妻子をもちてあるへきはづ(ず)のものなれはいかてかそれにて天神のわかれなからんすへて捨る時は安し持なからかゝはらぬは難き事なれはわか道いとおもひかたく行ひかたきやうなれとももとより高き方をも低き方をもまげかゞめぬなれはかへりて儒佛のおもふ所よりは行ひやすき所なりいつれにも儒佛老莊ともに己に身を脩めみかくのわさに過されはもとより渾沌のまゝなる事しるし此下文に國稚といはれたる稚の一字中の人なり老子は榮は辱也辱は榮也なとすへての論いとよく似たる所あれとも功成名遂身退くは天の道也といひしそばけをあらはされて猶おのか身をおのか物と思はれし事しるし佛のもおのか物と思ふより捨るそかしわか道はわか身は人のやつことたつるなれはいかてかわか心にそひたりとて妨ならん此故に脩身なとの事たえてなき也

於高天原成神名天之御中主神次高御產巣日神次神產巣日神

高天原といふ名いにしへよりたゝ天のことゝいへともたゝ天とはかりにては事たらぬ也いかにといふに此二はしらの產巣日神此地上の天にのみおはしますとはいはれぬは此高天原とさしたるは地上の天地下の天すへて地をはなれて地のめくりをはすへていふ名なりさてこれは上文に天地ひらけし時とあれはこの一段はその天の方はかりをいふなりされともその天の方をいふはむかふに地を相手にし置ていふなりと心うへしこれは下の地をいふも又同しく天を相手にたておきていふ事同しこれを一人の人の身を除きたる心の方はかりなりとみるへしいかにといふに渾沌とたつる事元來一人の人をいふなれはこゝも一人の人の心なりとはいふなりことにこの天をは我にとらすしてむかふにたてゝみる時は此次云々次云々とある三柱の神の次序も心えかたくなる也下文日神石屋にこもらしゝ時高天原皆闇あしはらの中つ國こと〱くらしともいひいく所も此ふたつをくらへていへりされはあしはらの中つ國とは人身の內をさしていふ名にてそのむかふはのこらす高天原なりされは高天原はわか身にははなれたるものにてしかもつきたる所なりよく〱実事に試みて信すへし成といふはふと生し給ひしやうなれとさにあらすもとよりおはします也しかれとも

渾沌したる時は心にもありとはしらねはありてもなきにひとしき也天地をひらけは初て此三神のおはします事しらるゝをは成とは書なしたるもの也これひらけはおはしまし渾すれはかくれ給ふによりてひらかん事をすゝめまたひらく妙用をさとさん爲にかくはいふ也元來此法いさなきの神の黄泉の段までは世にしる人なかりしかは此三神もおはしまさぬも同前なりしにいさなきの神天地をひらかせ給ひしによりてはしめてあらはれさせ給ひしか故に成神とはいふ也いさなきの神の御時の事なから今も渾沌したる人は此三神あらはれ給はされは今世にてもひらかん人ひらかさる人此三神のなりましなりまさゝる別は眼前なるをや　天之御中主神と申す神あらゆる神たちの第一番にたて給ふ事かならすことわりなくて叶はぬ事なりしからは末々にも此神の妙用はさま／＼かゝるへきにひと所もなくむすひの二神は妙用をかけるこれ又うたかふへき事とも也此一卷のをはりに豊玉姫の命うらみなから戀しき心しのひかたくて御妹玉依姫につけて哥たてまつり給へりといふ事卽此神に應する事とおほしき事也

古事記燈神典

天地初發

第一

古事記燈第一

神典一

審神舍藤原御杖　述

天地初發之時

天地初發とは渾沌のひらけはしむるをいふなりされはこの初發の言靈をあきらめむにはまつ渾沌の所以をわきまふへししかるに神代卷には古天地未割陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含牙云々と渾沌のさまをまついひ出てさて開闢のかたちをはとかれたるに此記はかくうちつけに天地初發をいひ出られたるは事たらはぬかことくなれともと初發はこの御敎の內なり渾沌は此御をしへの外なれは（此御をしへの內外といふはもと渾沌は質にて初發は文なれはなり人おほよそ渾沌ならさるはなけれは誰も〳〵此御をしへを學ひて天地をひらくへきかゆゑにその心をえて內外とはいふなりとしるへし）この七神三段神世七代もはら此御をしへの要をしめさむとてかく渾沌をはいひ出られさりけるなるへしさるは此記には渾沌をはたえていはすやといふにしからす淤能碁呂島よりするゐの件々學者の心を初發に落

着せしめむかために渾沌のひらくへき所以をときたまへる事いとつばらなりなほ下の諸件にいふを見ておもひしるへし（大かた神典の御をしへの要は七神三段神世七代にときつゞめたまへり以下の諸件は悉く七神三段神世七代の旨趣を釋したまへるものなりしかれともよに古書を注釈するたくひにはあらすわか　神倭伊波礼毘古命（神武）そも〳〵笠紫（筑）におこりたまひしより饒速日命をまつろへたまひはしめて天下をとりすべさせたまひしまでまのあたり御身のうへにあやまちたまひあらためたまひし始終をは次序しおかせたまひしものにてこの次序人々のやむことを得さるおもむきなる事を學者おの〳〵おのか目前の事に思ひあたりて天地初發に落着せよとの御心にてこの諸件はときおかれつるなるへけれはその御心をえてかく注釋なりとはいふなりけりかしこきかもかの　帝御みつからあやまちたまひし事ともをおほひたまはて學者のためとときしめしたまへりし事ふかくその御うつくしみをおもふへき也）しかのみならす初發の二字におのつから渾沌を質としたる心は明らかなるをや（本居宣長のあけつらはれたるかことく此記の神代巻にまされる事これひとつにてもおもふへしされと神代巻もひたふるに捨へきものにはあらす舎人皇子諸家の傳を大成したまへるなれはこれをかれにてらしかれをこれにてらして教旨の心えらるゝ所いと多かり神代巻には國之常立神を第一位におきたまへるもまた理ふかき事なることはなほこの三段の下段にのふるを見ておもふへし）もとこの渾沌開闢の事いにしへよりまことの天地のうへにありし事なりと心えて諸家みな一同の說なれともこの年比つら〳〵おもふにこれさらに天地のうへにありしむかしかたりにはあらすとそおほゆるけにこの神ふみ　神倭伊波禮毘古命までにつゝけてもろ〳〵の神たちをは御祖としてしるされたれは實錄とみけむもことわりなる事なからこの天も地もいかに見いかにおもへとまろかれてありしがひらけたる物とは更におもほえぬは大かた天は無形地は有形なるに有形の物どちこそあれ（たとへは白きと黒きとか混するかこときをこそ渾沌とはいはめよく〳〵おもふへし）いかやうにまろかれてはありけんいとおほつかなき事なり古來神學者流のなかに近比本居宣長といふ人はことに神ふみをは實錄とかたくうけられたる人なれとも此渾發のことはいと心

もとなくやおもはれけん萬葉集中の哥に〵あめつちのはしめのときゆとよめるを據としてこの〵天地初發之時の六字をは 〵あめつちのはしめのときと訓せられきこれけにさる事とはみゆれともと歌はもじの數も定まれる物なれは 〵天地はしめてひらけしときゆとはよむましけれはしかよめるなりされはそれによりてこれを訓せは末を本にしふといふへく哥と文との別なかるへししかのみならす神代卷には 〵開闢といふもじをさへか〻れたれは發の字はかならす 〵ひらくとよむへき事明らかなり此故にたとひあやしくとも 〵初發といふ本文に私せすしてこそとくへけれとてあまた年おもひわたりつるにおほよそわか大御國言は神武紀に 〵倒語之用始起乎茲とあるをおやとしてすへておのかいはむとおもふすちをは靈としづめおもはぬすちを言とす おもふすちをたておきてさておもはぬすちをいふかゆゑに倒語とはいふなりけりこのおもはぬすちとは虛僞をいふたくひとはことなり大かた我よりはしむる言はいかはかり理はありてもきく人の心には入るましきわさなれはおほくは言無益となる物なり いはゆる山にゆけといへは河にゆかむといひ河にゆけといへは山にゆかむといふかことしこれ人心のねちけたるにはあらすもと昇降の二氣西より降れは東より昇り東よりのほれは西よりくだるにあやかりて人我の間の情おのつからか〻るさがとはなるなり されはたま〱承諾するもなほもとよりしひわさなるかゆゑに實に承諾せるにはあらすこ〻をもて概するにわれよりいふ言はすへて人の中心には徹せざるものとおもひ定むへきなりしかる時はなに事にもあれわか所思をは人の中心に徹せしめむことは道斷たることかといふにしからす人その心をおこ

してわか所思にかなへ來らんを道とはすへければ　神倭伊波禮毗古命はしめて倒語の妙用をさとりたまひその御時よりおしなへてわか大御國人の風俗とはなりぬるなりけりこの倒語早竟はもろこし人の諷喩なといふことのことくなれと諷喩は直言にこそまさりたれしひていひ促せるやうなる所はかへりて直言よりもきゝ心よからぬものなれは人にきかれむの心をひたふるにおもひはなれてかつておもはぬすちを言とはすへきなりそれをきかむ人その倒語にみちひかれてかなたよりおもひおこしてわか罟獲のうちにおちくるこれをはへ言靈のさきはふともへ言靈のたすくるとも萬葉集中によまれたりたすくるとよまれたるは柹本人麿なりさきはふとよまれたるは山上憶良なりこれらの事くはしくは大旨言靈辨のうちにのへおけりそこをあはせてこゝろうへし　直言はいふも更なり諷喩とてもなほおのか力もて人を許諾せしむるなれはもとより靈とも名つくへからぬかうへにさきはふともたすくともいかてかいふへきたゝかのいはまほしきすちはふつにおもひはなれたるか倒語のうちにしづもれるこれをは靈とは名つけしか人力をはなれたるがおのつから人の中心に徹するこれをそさきはふともたすくともいはれたる　哥道もすなはちこれなりかの神武紀にへ以諷歌倒語掃蕩妖氣といへるをおもふへしたとへは萬葉集にへ狛山になくほとゝきすいつみ川わたりをとほみこゝにかよはすとよめるは郭公はわかまつ人をいふなり又同集にへひむかしの野にかきろひのたつみえてかへりみすれは月かたふきぬとよめるは終夜ねられさりしをいふなりかくその所思はふつにおもひはなれてあらぬものゝうへをよむにてかへりてきく人のこゝろよみ人の心に合するなりこの妙用くはしくはのべつくしかたし　かの萬葉集の哥たゝへ言靈のさきはふたすくるとのみはよまでへ言靈のさきはふ國へことたまのたすくる國と國風のよしをよまれたるにてもおもふにか

みつ世の人はふみをかくにも哥をよむにもすへてわか所思を直言することはなかりし事あきらかなれは此神典ももとより倒語なりとはしられたりされはおほかた世人のために垂れたまふ御教なれは直言もてしめしたまへりとも論なき事のことくなれと學者の中心に徹せむをは要とし給ふかゆゑに御教を靈とし　帝紀を言とはし給へるなり此故にこれをは　帝紀とのみみるはたゝ言をしりて靈をしらすといふへし（哥なとも花をよめれは花の哥と心え月をよめれは月の哥と心うる後世人の常なれはこの天之御中主神よりはしめ奉りて　帝の御おや神なりとおもはぬ人なしかく御おや神としてかゝれたる心はこの神典中の諸神は即天地神祇（祇）におはしますがその神たちの御靈をうけおこなひましてはしめて帝業をひらかせたまひしかはやかて御おやとはしたまへるものなりされとまのあたりあらはなる所をおきてかくれたる所を探るをから心とていやしむ人もあめれとこれから心にあらさる事はすなはちこの神ふみにへ天照大御神へ月讀命をしも三貴子にかそへたまひしは日神は晝をつかさとり給ひ月神は夜をつかさとり給ふそのかくれたるとあらはなるふたつを尊ひたまへるにてそのあらはなるも貴けれとかくれたるはましてたふときよし天石屋戸之件にへ益汝命而貴神坐ともまた本身之件にへあかたまはをさへひかれと白玉の君かよそひしたふとくありけりともあるにてしりぬ神代卷にはやかて幽顯の字あるをやくはしくは末にいふをみるべし）されはこの神典の書法いとも〳〵あやしきことゝもをのみのへられたるは倒語なる事をしらせむかためなりいはゆる菟和迩鼠雉なとのものいひ天に川あり井あるたくひかうやうの事かそへもあへぬこれ也これらをみむ人おのつからあやしみをおこすよりさは　帝紀にはあらさめりとおもひいたるへしとの御心のまへそかしおほかた人をしてまなはしむるにはこれいと迂遠（マハリドホ）なるわさのことくなれとたゝ帝紀とのみ見すくしてあやしみなからさてあらん人はしひてをしへてもしるしなからむ人と同日の論なるかゆゑに教なることをふつにおもひすてられて帝紀を言とはしたまひしもの

なりこれによりてこの天地渾發のことを考ふるにまことの天地のうへをのへられたるにあらさる事しるし此天地もと渾沌したりしこともなけれはましてひらけたりしこともなくたゝ今目の前にみるに同しく天は上に位し地は下に位していつをはしめいつを末といふ事もなき物なるをしからはいかてかかく渾發をしもときたまひけんとたつぬるに人ありてあるひは渾沌したる天地となし或はひらけたる天地となすかゆゑなりさるはまろかれたりとする人ある時はやかて天地のまろかれたるなり又ひらく人ある時はやかて天地のひらけたるにて此まことの天地めにみる所にこそ渾發はなけれ人の意をもてする時は渾しもひらきもするなれはまことの天地に渾發ありしか如く昔なされたるもことわりなる事なり　かく渾發はめにみるうへにはなくて意のうへにはありとみる時はこれにかきらすすへて神典中のあやしき事ともひとつもあやしき事なくなりぬへきをやいかに倒語なれはとてうつたへになからむことをいふへきにもあらねは顯にあやしき事は必幽にあやしからぬものなり神典のみるへきやうおほかたこの法に過すよく／＼おもふへし　かくいふ故をいかにといふに人おほよそうまるゝ時は母胎のうちにして心身そなはるか故にそのよりて來る所を見しる事あたはねとも死する時は魂は天に歸り魄は地に歸る事まのあたりなれは無形なる心はもと天より來り有形なる身はもと地より來れる事あきらかなりしかれは人の心身は天地の化成なる事疑なき事ならすやしかるにその心身の祖たる天地は上下に位しその間いとはるかにうちひらけて天の性地に混する事なく地の性天に混する事なきものなるに人の心身となり來りては身内に心あるは即天を内

とし地を外とせるにてその天地のあはひひらけす天地ふたつなからわが有となるこれにあやかりて人といふ人悉くその思惟天地の二性を混したるこれやかてまことの天地をは渾沌せるものとするなり萬葉集中に柿本人麻呂へあめつちのよりあひのきはみとよまれたるは卽世にありとある人のかきりとよまれたる心なるをもても今述ふる所を徵ししるへし此哥をは天地の上下にあらんきはみといふ心とのみおもふはひかこと也もししからはいかてよりあひとはよまるへきこの詞にかきらす人麻呂の哥にはいとも〳〵くしひなる詞の多かるはみなかく倒語にかしこかりけれはなるへし大かた人麿赤人をしも哥のひしりとたゝふるはたゝ後世哥合にて勝たる哥または髓腦ともに秀逸なといへる哥の多かりしゆゑにはあらしとおほゆるはその世の人々この二人の哥にもおとるましきも少からぬなりこの二人今のよまてもたゝあがめにあかむるももとわか大御國ふりに達せられし人なりけれはなるへしこれはこゝに用なき事なれとむかしは今のよのことくわざにたくみなるをはたふとしとはせすたゝ此御教にかしこきをしもたふとひけんよしをしめしてもはらこの御をしへをまなはむ人のまとひをとくなりしかれとも人々おのか心もて天地をまろかするにはあらすまろかれたるものにうまれ得たるにひかれてわれしらす渾沌するなれは人においてやむことをえぬことなるをいかてかかく初發をしもをしへ給ふそといふに心身の本然にあらさるかゆゑなりまへにいへるかことく心身の祖たる天地もと渾沌するものにあらねは人皆その渾沌の域を出て本然に歸せよとの御教なるそかしされとこの渾沌必ひらかではあるましき所謂をつまひらかにせされは心身を本然に歸(カヘ)す事いと〳〵難きわさなれはくはしきかうへにもくはしくすへきは此渾發のけちめなりそのことわり廣大にして今さとしつくすへくもあらねとまつその大要をいはゝするゐの諸件にとく所ひとへにたゝ此理をいふなれは猶末を合せて心うへしおほかた人の心身心は無形身は有形にしてこのふたつに屬せる二念おのつから理欲の二念となれり有形無形はすなはち天地の化成なるしるしなりおほよそ人欲は有形に屬し道理は無形に屬

するものなり人みな身あるかゆゑに欲はあるそかし老狐いへる事あり狐千年を經れは身滅す身滅せされは不測の妙用をなす事はあたはすとなんさらても狐は變化自在にて人のねかひをもかなふる妙用をもちたれとも身滅せさるほとはとにかくにおのか所欲に歸するなるへしこの一話をもても理欲二念の屬する所をしるへし　たとへは人の道理を說くを聞く時けにしかりとはおもへともまさにおこなはむとする時はその道理にしたかひかたきか如きこれなりこれ心はしたかへとも身はしたかはぬにて此二念すなはち心身に屬せるしるしなりされは世人おのつからよきとあしきとの二種あるも理念のかたに片よると欲念のかたに片よるとのけちめにてよき人に欲念なきにもあらすあしき人に理念なきにもあらす天地化して心身となり心身より理欲の二念生し理欲の二念善惡の二事となりいつるなれは誰かはこのふたつを具せさる人あらむ　理欲善惡の字を用ふるは身內と身外とのけちめをさとさむか爲なりみむ人まとはしかるへけれと內外の別を輕しむへからさる事なるかゆゑにかく名をわかてる也されは理欲には二念といひ善惡には二事といふこれ念の字事の字におのつから身內身外をしめさむとて也此下にいたりて欲念を身內の主とせよといふなともしあやまりて內外を混せはいといたく人事をあやまつへきかことくかへす〳〵かろしむましきは內外のけちめなれは此理欲善惡の字を用ひたる所々はよく心をつけて教旨をしるへし　おほかた天ありて地なくてありぬへからす地ありて天なくてありぬへからさるにあやかりて男女貴賤水火剛柔の類片方をかきてはありぬへからさるかことく人の理欲の二念またやむことをえさる所なる也しかれとも欲念は卑しく理念は尊き事おのつから天地の尊卑を傳へたる物にてこれまたやむことをえぬ事なるか故に善事なる人をは賢者とたふとみ惡事の人をは不肖者といやしむしかれともたゝかく心えたるにてやみぬへからぬはその善惡のふたついと精しからぬ所あるなり　世みな精しからぬを精しくし給ひしはわか神倭伊波禮毘古命におはしますなり　その精しか

らすといふ所以は大かたよきがよくあしきがあしき事は國といふ國のくま〳〵までもたかはぬのりなれともと人は理念の主たる心を內實とし欲念の主たる身を外体としたれはにやなしとなしふるまひとふるまふ事毎にあしきわさなりとおもひてなしふるまひいつる事はたえてなきものにて悉く身內にして理をふみて後なしもふるまひもしいつるなりしかすへて理を踏てなしふるまふならはよきあしきの二種はなくてひとしへに善事のみなるへきことわりなれとその事からによりて物を貪ると名をむさほるとのふたすちありその物をむさほるを惡事名をむさほるを善事とするかゆゑにおのつから善惡の二事とはわくめれともとかの理念の主たる心も欲念の主たる身を器としたるか故に水の方圓にしたかふかことくおもはす欲念にひかれたる理念となるをその理念をふみてなしもふるまひもするか故に事々おのつからわか私に落着するなりたとへは鳥の身內なる心はおのつから鳥の心となり獸の身內なる心はおのつから獸心となるか如しもと理は虛なる物なれはよすれはいかさまにも寄りまぐれはいかさまにもまげらるゝ物也これによりてその理は理なからよせもまげもしたらむにたれも〳〵心のつかさるか故にしか善惡にくはしからぬにはある也けりかくおのれ〳〵はたゝ理ある行なりと思ふが悉く私におつる事たとへは人の子の父慈ならさるかゆゑにわれ父にしたかはぬなりと心えて事をなせばおのつから不孝となり又子は父には孝を盡すへき事なりと心えて事をなせばもし兄にもあれ弟にもあれはらからのあらむにそれらの不孝となるをもおもはぬよりおのつからよきわさにしておのか私となるかことしされは善惡のけちめをいは

す概するに人事のかきりたゝおのか私に落着するものなるか故に善惡二事の人ともにその終妖をまぬかれすこれをは神典に〽萬妖悉發とはときしめしたまへりされとさすかに善事なると惡事なるとはその妖のいたるに遲速は必ありその遲速あるのみそ善惡のけちめなるをいかてか五十歩百歩を尊卑といふへきされはおのれは理ある行なりと心えたるも欲に落着するをもて推す時は大かた欲かといへは理あり理あるかといへは欲にして理欲たかひに混したるこれを渾沌とは名つけ給へるなり（まへにいひしか如く理欲の二念その本源は天地なれは理欲のまろかれたるはすなはち天地の渾沌なるをや）さていたく心を盡し力をふるひてなす事の所詮は妖にあたるへきわさなる事を明らめさる時は勞して功なきのみにあらすはて〱妖にあたるへき端を開くなりこれ渾沌の必ひらくへき所謂なるそかし此故にこの始末をよくあきらめてよに善といひ惡ととなふる二事いつれをもなすへきわさにあらすとひたふるにおもひなりねとて〽善惡(ヨシアシノ)二祓(フタツノハラヒ)（延暦太政官符にみゆ）また〽惡解除(アシハラヒ)善解除(ヨシハラヒ)（履仲紀(中)にみゆ）ともをしへおかせたまへり（此善惡二祓の事凡見にてはいとこゝろえかたきことなるを今まてこと更にう(虫食、がカ)た□ひおかれたる人もなきはいかに心えられて見すぐされけんいとおほつかなき事なり大かた惡解除こそあれ善解除といふ事のいとあやしきこれ此御教の旨をしるへき門なりかし）此善惡のふたつをはらふといふ事いかにすへきわさそとたつぬるにこの神典千座置戸之件に〽手足爪令拔(テアシノツメヌカシメ)といふ事あり神代卷には〽以手爪(テノツメ)爲吉(ヨシ)爪棄物(キラヒモノトシ)以足爪(アシノツメ)爲凶(アシ)爪棄物(キラヒモノトス)とみゆ神典中すへて手足をいふは即善事惡事のさとしにて（手は上にありて動き足は下にありて動くこれ善惡のわさおのつから尊卑あれはなり遠呂智之件に足名椎(アシナヅチ)手名椎(テナヅチ)とある手足も即この心なり）手の物をもちなやみ足の地

をふみありく事もはら爪をたのみとするなれはかの心中にふみて憑む所の理をは爪とたとへその憑む所の理より外行おのつから善とも悪ともなりいつるか故に手足爪とはたとへ給へるなりもし手の爪を抜かばたえて物をもちなやむ事あたはさるへく足の爪をぬかばたえて地をふみありく事あたはさるへきかことくすへて心中にたのみとなりぬへき理のかきりを片かとも身内におかざるこれをは手足の爪を抜くとはいふにてふみてたのむへき理のかきりかたかどもわか身内になくはなにをたのみてか外行はなしいてん（かりにも心に理ありと思ふ事は言をも行をもしのふ事いとかたき物をや）善悪二事をはらふはたゝ此たのまるへき理を身内に存すへからすとの御いさめなる事この神典神代紀の語によりてしられき（この善悪二祓といふは末なり手足の爪を抜くといふは本なりと心うへし）石屋戸之件にいたりて　天照大御神の石屋を出ましゝ御しりへに尻久米縄を控度（ヒキワタ）したまへる事をとかれたるもと理は身内に置くましきものなる事をさとし給へるにて速須佐之男命をは へ汝者不可住此国とて神やらひやらひ給ふとあるは即この善悪二祓のよしなり（くはしくはその件々にてみるへし）しかるに又しか理のかきりを身内に置かじとせむはいかにすべき事そと神典の始末に心をとゝめしに石屋戸之件に へ益汝命而貴神坐とみえ又大御賓之件に へ此之鏡者専為我魂而如拝吾前伊都伎奉とあるにておもひあたれりその故は天照大御神は晝をつかさとり給ひ月讀命は夜をつかさとり給ふ（神代巻一書に幽顯といふ字あるはすなはちこの事なり）そのあらはなると幽なるとを理欲に配してみれは理は顯にすへく

欲は顯にすへからぬものなりその主神にましますは天照大御神月讀命なれは天照大御神こそ尊くますをかへりて月讀命をは天照大御神にまさりて貴き神とみえ本身之件にへ阿加陀麻波袁佐閇比迦礼杼斯良多麻能岐美何余曾比斯多布斗久阿理祁理とあるも日神より月神のたふときよしなる也さてその鏡をは專爲我魂と天照大御神ののり給ひしは理を身外におき欲を身内におけとの御をしへなるを思へは御鏡はいにしへより日神の像ミカタとし來れゝとも白く圓き物なれは月神の像なるへき事あきらかなりかの本身之件の歌をも思ふへし伊勢の内宮御鏡をこめ奉りて天照大御神の御社とせられたるはすなはち大御賓之件なる詔のまゝをいつきまつられたるなり此事くはしくは兩宮辨にのへおきたれはこゝにはたゝその要をとりていふ也かのたのみとなるへき理のかきり身内地を拂はむには身内に欲念をかたく執るへしとの御さとしなる也すへておのか志す事をせむとすれは必成らさるものなれはその志す事のおのつから成らむことを要とする事大かたわか御教の大綱なりこれによりてかく善惡のふたつをはらふ□（虫食、は）手足の爪をぬくにあり手足の爪をぬくは身内に月讀命をいつき奉るにありとはいふ也としるへし誰かおもはむ身外善惡のふたつをはらはむとには身内に欲念を置くにしかすとはされとつら〳〵おもふに大かた天地の事内と外とは必相反する物なりたとへは地上晝なれは地下夜なり地上夜なれは地下晝なるかことくまた地上暑き時は地中の水ひやゝかに地上寒き時は地中の水あたゝかなるか如く又肥人は内虚也痩人は内實せるたくひなれは大かた身外になす所の事ことにいさきよからむとにはそれに反せる不潔の念を身内にいつくにいかてかそのいさをなからんしかれとも諸欲はおほよそ勉めて制してたになほやむ時なくてともすれは外行けがれやすく又たとひいとよく外行をつゝしむとも色にあらはれやすきならひなれはいかにも〳〵つとめて制せむこそめてたかるへけれ制することの强から

ぬたにあるをまして身内をこれか有とせは人いかなる邪路に入りなむと年比あまたゝひ猶豫して決せさりしにからうしてその惑をひらきぬそのゆゑはおほかた諸欲は小大にかゝはらすわれとわか力もてなし得へきものにあらすたゝひたふるに人のちからをかりて成すへしと神ふみの言靈にしられきされは人ありてそのちからもてその心からわか所欲のまゝをあたへ來らむを諸欲の成る道とはさとるへき也 七神三段神世七代に下段をことに重くし給ふはこれなり神代卷に國之常立神をは第一位とせられしもこの心をさとさむか爲なりしかのみならす伊勢の外宮なに事も内宮よりさきとさためおかせたまへるももはら學者にこの故をしれとの御わさ也 たとへは人のもたる物をしひて乞はゝ多欲とおとしめひそかに取らは偸盗とにくむへきにもしその人その心から我に得しめむに我を多欲とも偸盗ともおとしめもにくみもすましきか如くたゝ人こゝろからあたへ來らむを得てなりなむを諸欲の先途とおもひ定めなはわか力して成さむとする心もなくなりぬへけれは外行のけがるゝこともあるましく自力をたのむ念たに絶はてなはたとひいかなる所欲ありとて色にもなにかはあらはれんたゝ身内にのみ深くしづめて手をも出さす言にもあらはさぬにいかてか我をとかむへき人の耳目はたゝ身外を限とするなれはいと心やすき事ならすや 今いふ所は佛者のいはゆる肉眼といふきはにて佛眼といふきはゝ身内にも遠く深く及ふへければ此説いふかひなしと思ふ人もあるへけれと身外に天照大御神をいつき奉らざらばこそあらめ日光眼を射むにいかてか身内に見透す事をえむ倘此下をみて明らむへし されは諸欲の念は小大にかゝはらす身内に安置すへき事なれともその欲に輕重ありてその輕きは自力のとても及ふましきをさとるにつけて身内にておもひ止まらる

へしさるはわか所欲に自力を用ふる人にくらふれはいとも〱めてたき事のことくなれとおのれこそめてたきやうなれ他人に潤澤のを□(よ)(虫食)ふ事はさらになきわさなりたゝ身内に生ぜむ欲念はたとひ輕くともゆめ〱それをおもひとゝまるましき事なりもし欲念の生したらんには此所欲なさずはやまじとかたくつよくおもひそしたらんこそ他人にわたる益いと廣大にはあるへけれかく欲念の不動不壞なるそまことにめてたきはしめにはあるへきを凡庸はこの眞理をわきまへすして身内はたゝいさきよからんか上にも潔きを是と思へり神典に　へ我無邪心また　へ我心清明と速須佐之男命ののり給ひしよしをいひてそこよりおこる外行をは勝佐備(カチサビ)と名つけられたりけに邪心なからん人はおしなへてわれ耻る所なしと思ふ心なからんや（大かた心に理ある人は人とのあはひうるはしからぬものなる事よのあるかたちを見てさとるへし）とにもかくにも欲念をかたくとりその欲念より思慮をうむ時はもとより清く明き心より生せさる思慮なるによりて人のおもはむ所をも耻へけれは大かたの人とのあはひもいとめてたかるへしされは人みな欲念をいやしめとも更に〱いやしむへきものにあらす今その證をいはゝおほよそ世に寶とする物のかきり悉く地より生すその地を天にむかふれは卑しき方なり又家系を繼くへき子孫は女しもこれをうむその女を男にむかふれは卑しき方なりまた家産を増すへき子錢は貧人しもこれを出すその貧人を富者にむかふれは卑しきかたなるか如くすへて尊卑とむかへるものゝ卑しき方そ

妙事をうむ母には有けるこれによりてさとらは理念にむかへてはいやしき方なる欲念を母とはすへき事ならすや大かた欲念は理念にすがれる事ゆかむとするものゝうしろよりその帶をとらへたるかことし理念にすがりたれはこそすへての欲念もまきれてはみゆれ諸欲もし單念ならはよにひとりも人めきたる人はあるましきをおもふへし　されは欲念をしてその手を放たしめされは理念を全うする事あたはさるへけれは此御敎かく欲念の方を先としてもはらこれか所置をのみ急務とせしめ給ふはひとへに人をして純善ならしめむがためにてかの手をはなたしめむのかまへなるそかし　神道の敎は欲を主とするものなりとたゝおほらかにきく人あらは天魔のいさなふにこそとおほゆへしこれひとへに人をして純善ならしめむかためなる事上文にのふる所をよくわいだめてさとるへし純善とこゝにとなふるは大かたの善事はなほ惡に混する事まへにとけるかことくなれは善事にしてなほ妖をまぬかれかたしその混せる惡なきこれをは純善とは称するなり純善なる時はながく妖にあたる事なきかゆゑにまつ人をしてその欲念の縛をまぬかれしめむとて欲念の所置をのみ神典にはをしへおかせたまへり大かた敎ふみにして人に善事をはをしへすして欲念の所置をのみをしへむはいとあさましきわさのことくなれと善事をしふれは難くしてしかも成る期なかるへけれはその難きをやすくししかもおのつから成らしめむには欲念の所置をむねとせしむるにしく事あるへからすすへて世人の善事のふるまひかたきはもと欲念の適せさるによりてなりかの蝸牛のありくらんかことく欲念にすかられなから善事を行はむ事いかてかそのいさをあらん學者此けちめを明らめてわか　神倭伊波禮毘古命のふかき御うつくしみをあふきかしこみ奉るへし　されは欲念を身内に安置しかりにも理念をして身内ををかさしめざるこれをは善惡二祓とは心うへき也さてかく善惡をはらひはてゝの後をいかにといふにその身内なる欲念なさすはやまじと思ふものからわか力のなすへき道にあらさるか故にこゝにおいて人の力をかりてわか所欲を達せむより外なき事決定せられてもはら人力をからむの心せちなるへししかるにわか所欲のために人の力をからむ事はいともいとも易からぬわさにてたとひせちに乞ひ

たりとも力をはたはやすくかさむやは（たとひ乞ふにまかせて人その力をかす事たま〳〵はありともそれをたのむまじき事なるはさやうならむ時はかならすその人われをうとみてその一時かぎりに疎びゆくへし此たくひまたすち〳〵ありて神典これを論らはれたる事切なり猶末にてしるへし）たゝ乞はずいざなはずしておのつから人わか所欲のために其力をかし來□□（らむ）（虫食）はいかにすへきそといふに大かた人のわかために力をかさゞるは人また我と等しき欲念ありてみつから成さむとすれは妖來りなさじとすれはおもひやみかたき事あるか故にそれを患ふるにいとまなさにその力をも得かさぬ也けりこれによりて人のちからをわか所欲のためにからむとにはまづその人のうれふる筋にわが力をかすへししかる時は人そのうれひにいとまいで來るよりおのつからわか所欲のためにその力をかし來らむ事必然のいきほひなるなりしかれとも世にいはゆる陰德などの類にはあらすたま〳〵陽報の來ることもあれともと陰德とこそいへは名聞をまぬかれさるわさなれはいかてかその報必然の道なりといはむもと人の所欲にも輕重ありてその輕きはさまてもうれひず中に就て最重きそまことに思慮も力も盡はてゝいかにともすへきかたなくおもひまとふへし（此重き所欲をは遠呂智之件にヘ櫛名田比賣と名つけられたりそこに老夫と老女をとめを中にすゑてなくとあるは今いふところのさとしなるなりその遠呂智之件に八雲之件を次て八雲之件にヘ自其地雲立騰とみえたるは卽この下文にとく所の心なり）さはかりならん人のうれひにわれまつ代りてこそ人やかてわかうれひにもかはり來らめ此故にしか思慮も力も盡たらん人のうれひをたにしらはまつ我より力をかしゆくへくしかれはやかて人またわれに力をかし來らむと心法たしかにたちたるこれをは天地初發とは

いふ也としるへしかく人の所欲の爲にわか力をかせば人またわか所欲の爲にその力をかし來るをはいかてか天地初發の謂なりとはいふそといふにおほよそまことの天地は上位下位にひらけたるを本然としたる物なれは化してなれる人の心身も亦これにひとしかるへき理なれと心は身の內に入りて渾然として一人をなせる物なるか故に天地の本然にたかへりされとも心身をひらかむとするにすべなき物なれはとても祖（オヤ）なる天地の本然にかなへむ事はうへからさる事のことくなれともとわか天は（我心をいふ即理念をもこめていふ也）わか地のための（我身をいふ欲念をもこめていふ也）天にあらすわか地はわか天のための地にはあらすしてわか天は人の地のための（人の身をいふ即欲念をもこめていふ也）天なり人の天は（人の心をいふ即理念をもこめていふなり）わか地のための天にて人おほかたうまれいつる時よりわか天地は人の天地と組あひてたつへきものなり（淤能碁呂嶋之作にへ見立天之御柱見立八尋殿とあるは即人の心身はすへて人我と組あひて天地の本然を全うすへきものにうまれえたる物也との御さとし也）この組みあふへき先後はまつわか天をもて人の地に配すれは次て人の天來りてわか地に配すへしとて此神典にはへ底津石根尓宮柱布斗斯理高天原尓氷椽高迦（多）斯理とさとし給ひ（此詞は祝詞なとにもつねにみゆる詞なるはかく甚深の義をふくめたまへる詞なれはなり）神代卷にはへ天先成而地後定としめしたまへりかしこきかもこれらの詞わか心はひとの身のためにあり人の心はわか身のためにある事をさとしたまへるよ心身しか人我にひらけてこそ心身やかて天地の本然にかなふへけれかゝる妙理を弁へぬ人はわか身のためにわか心を勞しわか心のためにわか身を勞す（これをは渾沌とはいふなり）

かの心の主となれ心を主とせされなといふもなは渾沌の域をまぬかれぬ事なるを思ふへし それたとひめてたき事ありとも終に妖をまぬかれさるはことわりなることなりされは我身はひとへに人の心にまかせ置てわか心はもはら人の身をおもひて他事なからむをそ天地ひらけたるなりとはさとるへし 天地ひらけたる間に昇降の二氣あるによりて萬物生々してやますしかも天長地久なりされは心身を人我にひらきわれよりゆきかれより來るは即昇降なれは此發天地をえたらむ人は繁昌長久もとめすしておのつからえらるへきなり此御教の大本はもはら發天地にある事なるか故に七神三段神世七代のはしめにしも天地初發をさとし給へりもし天地のひらけさらん人はさはかり不測なる七神三段神世七代もいたつら事となりぬへけれは神代卷にへ天先成而地後定然後神聖生於其中焉とはしめしおかせたまへるなりこゝにもへ初發之時於高天原成神とある即この心なりよく〳〵おもひとくへきなり ○之時といふは學者の渾沌なるが此御教によりてはしめてその渾を發ける時をさすなりはしめにも論らへるかことく此二字なとさらにむかし語にあらすむかし語を言として學者の見のかはれる時をしめすを要としたまへるものなり 神典中へ之時とかゝれたる所あまたありいつこも〳〵皆今までの見解のかはりゆく時をさしたるなり もと此御教は 神倭伊波禮毘古命のさとり得たまひてつぎ〳〵に傳へさせたまひ 開化の帝まで九御代のほとはたゝすめらみことの御うへにのみひめおかせ給ひしを 崇神の帝はしめて世にひろく教をほとこし給ひしより今の我等まで渾沌をまぬかれぬ 此事は兩宮辨にくはしく證を引てのへおきたれは今こゝにはくはしくいはす これより後も學はむ人この御うつくしみとももをはふかくおもふへきなりもとわか御教に脩身の事をたえてをしへおかせたまはぬ事學者のあやしむへき事なりその故いかに(と脱カ)いふにおほかた我心の動きわか身の進退するは悉く我にむかへるものにさそはるゝなり さそはるゝはいふかひなき人こそあらめいかてかそれ一般ならんと思ふ人もあるへけれとしひてかなたより揩つけむになとかはその色にうつらぬも

のあらんたとひうつらぬ人ありともそれたゝ外をつゝしめるにて心はなほうつるへきをやこの故にたとひいかはかり身は脩したりとも山林のうちに獨居せる人こそあらめなほかなたにはさそはれぬへけれはすへてわれを成さむにはまつかれを成すへしかれたに我をさそはすはわれ脩したらすともわか身いかてかあやまちあらんこゝをもて脩身のすちはたえてをしへ給はすたゝひたふるに人を成すへきことをのみをしへたまふなりけりもし學者こゝをあやしみてこの　へ之時の二字にいたりえさらんもあらんかとて今これを弁しおくなり

文化八年辛未臈月廿九日稿成

富士谷御杖先生自筆

古事記燈

壹卷

古事記燈巻之一

富士谷御杖著

上巻神典

○七神三段神世七代　其一

天地初發之時

神代巻云古天地未剖陰陽不分渾沌如雞子溟涬而含牙及其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合搏易重濁之凝竭難故天先成而地後定然後神聖生其中焉かくのことくまつ渾沌をいひて、さて開闢をとかれたるに、此記には、まつ初發より書出られたるは、初發は、もとより渾沌を質としての文なれは、これ渾沌を思はせたる書法なり、

第一件なる淤能碁呂島之件は人はしめてうまるゝかたちをしめされたる卽渾沌の所謂をときたるなりくはしくは其件にいふへけれとその大要はおほかた渾沌は自然の事なるよしをしめされたりされはこゝに渾沌をいはすして初發をはしめとせられたるは渾

沌は自然にして初發は人の學ひてなすへきわさなるかゆゑなり大旨にくはしくいへるかことく七神三段神世七代はわか御をしへの大綱にて淤能碁呂島之件以下は注釋したるかことしこのゆゑにこゝには渾沌よりかきはしめられさりし事いとめてたき書さま也されは初發は敎のはしめ渾沌は敎のよりておこる本源なりとこゝろうへし されは此二書の書法をくらふれは神代卷は詞のつけさま理を喩すに過たるかゆゑにかへりて質と文のけちめ辨しかたしこれにかきらすこの二書の書法この記はいとみやひたり末に所々そのけちめを論らふをみるへし しかれとも神代卷は此記にとりならへて敎の旨をしるにたよりある事多けれは、ひたふるにおもふへからす、伊勢人、本居宣長、古事記傳をあらはして、此記の神代卷にまされることをあけつらへり、その說、弁し得たりといふへし、しかれとも、此ぬしにかきらす、文も哥も、たゝ詞のうはへをのみたのみて、その詞の、よりておこる所を察する事なけれは、予の此記をめてたしといふには、むねとする所はたかへり、わか御國言は、倒語を要とする事萬葉集燈大旨に、つはらにあけつらへるをみるへし、されと神代卷は、もと古傳の書を大成したまへるものなれは、すへて舍人皇子の御所爲にはあらねと、所々、倒語の法にそむける詞つくりとものましれるは、そこのみ、かの皇子のくはへさせ給へるなるへし、此記は、すへての詞つくり、いとみやひたるは、安麻呂ぬしかはしかきにみえたるか如く、御世〳〵、御口つから傳へさせたまへるを、さなからしるされたるしるしなりかし この渾沌初發の事、神代卷にみえたるか如く、天地はもと渾沌したりしか、今みる天地とわかれたる、そのはしめを記せられたる也と、古來神學者流、これを見すくせり、うへなる哉、詞の表、しかみむより外はあるましき書さまなるか故に、此語の本意におもひいたる事なきよ、しかれとも、たゝこれ天地のはしめのさまなりとみてやみかたきは、この今みる天地の、もと渾沌したりしか、かく上下にわかれたる物とは、更に〳〵おほえぬこれなり、もと此天地、天は無形にして、地は有形なる、その無形の物と、有形のものゝ、渾沌しつらんは、いかさまにまろかれたりしにかあらむ、たとはゝ、白き物と黒きものゝまろかれ、堅きものとやわき物のまろかれたるか

ことく、いつれも有形のものこそ渾沌はせめ、いとおほつかなき事なり、渾沌の事、かくのことくうけかたき事なれと、かりに渾沌したるものとして、さて初發のうへをおもふに、いにしへ、今のさまにわかれたらむには、又ふたゝひまろかれむ時かならすあるへくおほしき也、おほよそ、天地間にあらゆる物、はしめありて終なき物はあらす、はしまれは必をはり、をはれは必またはしまる事、萬物の常なるを、其本たる天地の、ひとり始ありて終なからんやは、これ渾沌のうたかはしきのみならす、初發もまた、おほつかなき所以なりしかるに、古來學者、このうたかひをも生せさりしは、いかなるこゝちにかありけむ、たとひ億兆の人、皆うたかはすとも、予はひとりこれをうたかはさる事能はす、これたゝこのくたりはかりにあらて、神典中、すへて詞の表に、そのことわり盡さる事あまたなれはなり、予十七八歲の比にか有けむ、神典をみそめしに、この渾發のうたかひ、いかに思へとも思ひえさりしかは、古來神學者流の注書ともをみるに、此疑を生せし人もなきに、弥うたかひ重なりたりし、そのゝち、本居宣長かあらはせる古事記傳をみて、さはかりの博覽なれは、これにてこそ疑網はとかめとおもひつるに、猶おなしさまなるのみならす、今ひときは、詞の表に縛せらるゝ事つよくて、おほかた神典中、心えかたき事ともは、神の御うへは、人智をもてははかるへからすといふをいたりとせり、されは今はせむすへなさに、し

はらくさしおきて、歌にのみ心を入れたりしに、これまた、後世のよみさまにはいたくたかへる事のみ多くて、さらに疑とけかたかりしかと、さすかに年を經たりしかはにや、神武紀に、能以二諷歌倒語一掃二蕩妖氣一倒語之用始起二乎茲一とみえ、此記の、垂仁の御卷に、物言如レ思尒而先云事とあるによりて、倒語は、わか大御國言の要訣なる事をおもひしりぬ、此事は、萬葉集燈大旨にくはしくあけつらひおきたれは、それをみて心うへし その大要をいはゝ、おほかた、わかいはむと思ふ事あるを、思ふかことくつはらにいふは、わか情却て人に通せさるか故に、垂仁の御卷に、しかさとし給ふにて、しからはいかにいはむを、眞言とはいふそとたつねしに すなはち、垂仁の御卷に眞言登波受とある、事は言の假名にて、かの物言如レ思云々の語に應したる語なり、この眞言とは、わか御國ふりのことくいふ言をいふ也、これまた、萬葉集燈大旨につはら也 この神武紀にいはゆる倒語これなり、倒とは、わかいはむと思ふすちをいはすして、思はぬすちに詞をつくるをいふなるへしとおほゆるより、倒語をは、わか御國言の道そとしりてのちは、かみつ世の哥も文も、その詞の表のうたかひ一時にとけにき、この道、天平前後までは、世人もみなしりたりしを、萬葉集、卷五、山上憶良ぬしか長歌によりていふ也、これも燈大旨にのせたり 此京になりて、はやくよにはかくれぬ、續日本後紀、卷十九、興福寺の僧かたてまつりし長歌のことをかゝれたる語によりていふなり、これ又かの大旨にひけり 今は千とせはかりに成ぬれは、さる御國ふりなりきとも人しらすなりはてぬるを、近ころ、その弊に椋の葉をかけて、いよ〳〵、詞の表に、めをも心をもかきる事とはなりにたり 眞淵、はしめて、わか御國言は、たゝありのまゝにいへる物なりといへるを、その門人なる宣長、その說をつたへ、猶そのうへを潤色

して、理をふかくするはから心なりと、ひたふるにいひそしたり、この二人は、東麻呂契沖なとの後には、ならふ人もなけれは、その說々、たゝひろこりにひろこりて、からいみこそあれ、わか御國言のほい□(虫食、はカ)、いよ〱かくれぬる事、心えかたき事ともなり、さるは、ふるきふみともに、わか大御國は、ありのまゝにものいふをてふりとすとは、かつて見をよはねは、所詮は、このぬしたちか、たゝにおもひはかりての說なる事しるし、しかのみならす、思ふかことくものいふをいさめられたる事は、上に引たる二書にかきらす、いとおほかるを、さる博覽にして、いかに見すくされけむとおほつかなし、されと、さはかりの事いひそして、世人みなそれをうくる事、大家のいさをにて、諸道のうへにも、かうやうの事はおほかるそかし、されは、予か倒語の說を聞ては、かのぬしたちの說とはうらうへなるか故に、きゝおとろきて、狂人のことく予をいふ人もあめり、師說をあつく信するは、その門に遊ふ人のうへにおきては、いとめてたき心さまなから、おほかた、人の見解はさま〱なるを、予か、かのぬしたちの說にしたかはすとてあはめられんは、いと心くるしき事なり、さるは、予か詞の根をいふをは、から心なりとおもひてにやあらん、されと、思ふかことくものいふは、古書ともにすてにいさめられたるをや、しかのみならす、倒語は、漢人の理をとくとは、いたくすちことなる事也、此下にもそのよしをとけるをみて、混しおもふへからす、それも、詞のうはへにて、いさゝかもうたかひなくはこそあらめ、詞のうへの、つねにたかふ事ある時は、神の御うへははかるへからすとしてやみなんや、これ、詞は表のみにめをかきるましきしるしならすや、猶もとより、人のはかるへからさる神の御うへならむには、しるしおきて何の詮そや、さるは、みかとの御おやは、さはかり、人のはかるへからさる神におはしましけるよしを思はせて、みかとをかしこみたてまつらせむかためそとや心うらん、さはかりの事にてかしこみ奉るらん人は、いとたのもしくもおほえぬ事なり、猶古事記傳に、吉は凶をきさし、凶は吉をきさすなとの說は、人智をもてはかるへからすといへるには鉾楯せり、これのみならす、鉾楯せる事、こゝかしこみゆるは、ひとへに、詞に根なしとおもひさためられたる弊なり、よく〱此けちめ思ひわくへし

されは、今予かとく所をうべなはむ人はありかたかるへけれは、たゝ默してやみなむとおもひしかと、もし、よにわかことく疑ふ人もあらは、わか若かりし時、この疑とけかたかりしわひしさにひとしからむをとて、ことし、筆はとり□なり、そも〱、此天地初發の事、まへにいへるか□の人は、おもはぬすちにのみ詞をつくるならひなる□天地の渾發を記したるにはあらて、天地をかりて詞とせるにてまことの天地はいつよりとはしらねとたゝ今みるかたちのことく天は頭上に地は脚下に

位して渾沌したりし世もなけれはわかれたる時も亦なきなりけりしからはまことの天地のうへにもなき渾發をはいかてかかくさたかにはかゝれたるそといふにもとこの天地とあるは人の心身の本源たることをしめされたる也人うまるゝ時は母胎のうちにして心身具足するか故にそのよりて來る所をみる事能はされとも死する時は心は天に歸し身は地に歸するはまのあたり誰もしる所なりこれをもて推せはそのよりて來る所すなはち天地なる事あきらか也（心は無形身は有形なるこれ天地の化成たるしるしなるなり）されは天地化して人の心身となりその心身天地尊卑の二性を稟たるよりなり出る言行おのつからよしあしの二種とはわかるゝなり（大かた善惡といふ名はすてに言行に出てのうへの名にていまた身内なるほとはたゝ天地尊卑の二性をうけたるのみにて善惡の名はかゝらぬ事なり此下にのふる所この心をえて身内身外の別を混しおもふへからす五百引石之件に入内者富良富良外者須夫須夫とあるこれいま内外の別をいふ據なりされは身内にしては淑慝といふ身外にしては善惡といふ此下に善惡とかけるは皆身外をいふ也淑慝といふは身内にていふ也此もしをもて内外の別をわきまふへし）此ゆゑに心より生する言行はよきすちに屬し身より生する言行はあしきすちに屬すこれをは善惡と稱して毀譽すれとも其本は天地の二性にてやむことなき事なりおほよそ人の言行さま〳〵なりといへとも概するにたゝよしあしのふたつにとゝまるか故に人をして此よしあしの所謂を弁せしめむかために善惡二事を心身にかへしその心身をは又天地にかへして天地のうへに詞をつけられたるものなりされはこの語の本意は人をして善惡のふたつをあきらめしめむかためなるをそこに詞をつけすして天地のうへの實事のことく詞をつけられたるこれいはゆる倒語なる也し

かれともよしなしふみこそあらめあるか中にもたふとき御をしへふみなれは人々うちみによく心えられんやうにつはらなるかうへにもつはらかにこそかゝるへけれなにかは迂遠に詞はつけらるへきと信する人もよにあるましきはおほかた古書ともをみるに麁にしてわか御國言に精しからさるかゆゑ也

宣長はてふりあしき国々こそあれかくめてたきわか大御國人にをしへふみはようなき事なりとてこの神典はみかとの御おや神たちの御うへを錄したるものとひたふるにいへりけにひとわたりはわか御國の御てふりのすくれたるにはさもこそとおほゆる説なれは誰も〳〵それを信したれとおほかたの御てふりこそひとの國にもことなれいかてかまとひなき人のみはうまれいてむ天地間にあらゆる物よきあれはかならすあしきある事いふもさらなるかうへにわか御をしへはあしき人のまとひをいさむるはよの常にてよき人のまとひをしもことにあけつらはれたる事下にくはしく釈するかことしされは教といふか中にもいとねもころなる御をしへさまなるをたゝあはつけきものにみすくされけんはひとの國のをしへふみともに似すおしなへたるをしへの一きはかなたなれはなるへしさるはなか〳〵なる古來の注書ともにくらふれはその説めやすしともいふへけれとこの神典ををしへふみならすとみられしはひとへ心といふへし黄泉之件にへ尓伊邪那岐命告桃子汝助吾於葦原中國所有宇都志伎青人草之落苦瀬而患惚時可助告賜名号意富加牟豆美命とみえたるはこれ御をしへふみなるしるしなるをやまた神代巻一書にへ嘗大巳貴命謂少彦名命曰吾等所造之國豈謂善成之乎少彦名命對曰或有所成或有不成是談也蓋有幽深之致焉ともみえたるをいかて（己）か御をしへふみならすといはんわか大御國をしへに及はぬ御てふりなれは教ふみなしといはゝいとたふとくはきこゆれと宣長のことくすなほなる人はよにありかたけれは國にをしへなきは國人のためうつくしみなしとやいふへき孝德紀にはへ尊佛法輕神道爲人柔仁好儒不擇貴賤頻降恩勅云々とみゆるにもおもふへく又景行紀に日本武尊東征し給ひし所にへ戊午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姫命曰今被天皇之命而東征將誅諸叛者故辭之於是倭姫命取草薙劍授日本武尊曰愼之莫怠也是歳日本武尊初至駿河其処賊陽從之欺曰是野也糜鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺王之情放火燒其野王知被欺則以燧出火之向燒而得免一云王所佩劍藂雲自抽之薙攘王之傍草因是得免故号其劍曰草薙也藂雲此云武羅玖毛とあるこの草薙劍をは倭姫命の授たまひしはいはゆる護身なとの類とや思はれけん釋氏陰陽家なとにこそさるわさはすれこれをしかおもはゝ三種なから護身の物とやせんくはしくは三種之件にいふをあはせて思ふへしかへす〳〵わか大御國に御をしへなしとするはたふとくせむとてかへりてそこなはれるものをかきたるこゝちすされと古來の説々のいふかひなさをみあさみての事なるへけれはことわりなる事也

これさらに迂遠に詞をつくるにあらすすへて言語はきく人の思慮してその心をうへく詞をつくる事わか御國言のならひなりもしうちみにやかて心え

られんやうにいはまほしき理をつくして詞とせはそのきかむ人思慮をもちふるに及はさるへし人の思慮を勞せしめさるはいとめてたき事のやうなれとその人の心には悦はしくは思はさるもの也これ人の思慮をいたつらにするわさにておのれひとりさかしがる詞つくりなれはなりしかる時はうはへにはその理こそ人に通すれわか情のためにちからを入るゝ事あるましき也この故に古人はこの彼我の情を察してわさと思はぬすちに詞をつくるはひとへに人の思慮を活かしてわか情のために力をいれしめむか爲なりしかれとも詞のうはへのそのいはまほしきすちにはたかへるか故に倒語の道をうしなへる世となりて此御をしへはよにかくれたる也けり今釋する所にては渾發は天地のうへにはかつてなき事の如くなれと渾發なしといふにはあらす天地をめにみるうへにはなき事なるをいふなりその故は人淑慝を混する時はその本源たる天地なれは天地もまた渾沌する事たとはゝ人屋を造れは雨露も洩る事あたはす人耕さゝれは不毛の地となるかことし天地大なりといへとも人にしたかふ事これらにてしるへしされは天地の渾發は人をむねとしての論なりとは釈せるなりおほかた天地の中間は諸神のましまず所なる事かの神代卷のへ神聖生其中といふ語にもしるへくまた此記神典の第一位たるへ天之御中主神にもさとるへし天地渾沌すれは中間なく中間なけれは神もまたなかるへし神力と人力のけちめ此下に神といふ字を釈せる所にくはしくいふをみて人としては天地の二性を混すへからさる事をさとりて我御教のかしこさをしるへき也　そも〳〵よしあしを辨する事人としては急務なれはなにの教とてもこれをむねとすれは今さらことさらひてもいふ哉と人はいふらめと淑慝（ヨゴヽロキタナ心）のふたつよきをよしあしきをあしと弁してあしきを撰みよきをえらへとの教にあらす他教はすへて人の慝をは天地の外のものとするをわか御教には天地を淑慝のおやとするこれ我御國ふりのことなる所以也いはゆる易經に坤德とて地をは慝□とはみぬこれなり（虫食）　おほかたよにあらゆる物尊卑な

きはあらす淑慝またやかて尊卑なりその尊卑は天地をあやかれる物なるを慝をは天地間のものと思はぬはいかなるゆゑにかあらん良藥生すれは毒艸生し麟鳳生すれは虎狼生す毒草虎狼はさはかり人のいみおそるゝを天地いかてかこれを生すらむ人またかくのことくよによき人のみはうまれ出ぬをいかに心えてか慝をは天地のあえ物とはおもはれさりけんいとあやしむへき事ならすやされは人も天地より稟たる心身の二性やことなくしてよきに片よる人もあしきに片よる人もおのつからうまるゝそかしさてそのよきに片よる人はあしき性はたえてなきかことくあしきに片よる人はよき性はたえてなきかことくおのれもおほえ人もおもふ物なれとしからすもと心身に天地尊卑の二性をうけたるものなれはよきに片よる人もあしき性なき事あたはすあしきに片よる人もよき性なき事あたはさるものなりそのよきにあしきをかねあしきによきをかぬる二種はあれとおしこめてこれをは渾沌とはさとし給へるなりされは渾沌とはすへての世人そのなす所よきをよしともあしきをあしともいふへからぬをいふ也としるへしこれもと善にも惡にも精しからぬかゆゑなりしかるに中段に「如浮脂」といひ素菟之件にへ菟をいへるはおほかたわか御國人のさ［虫食］しめされたるにて脂は水中に入れてもしつます火をつくれはすなはち立のほる性なり菟は前の足短くて山を降るはかたくのほるはやすき物也この二物卑を嫌ひ尊をねかふかことくいかてよしといはれあ

しとはいはれしと思ふ事わか國風なれは　これ畢竟はまけをしき心のつよきなりこの國風やことなき事は小兒にてこゝろみしるへし　神典中慝のまとひをしめされたるもねもころなれと　先言之件以下神避之件にいたれるこれなりされとそのしめしさま凡庸の惡を思ふにいたくこと也くはしくは下にあけつらふをみるへし　淑のまとひをあけつらはれたる事尤深切なり　これ速須佐之男命大穴牟遲神の御はしめをとかれたる件々の取意なりこの二神のあけつらひことに切なる事その張数にて思ふへし　これ即わか御國人の風俗につきて教をたてられたる所謂なりもと淑にくらきは慝にくらきかゆゑなれはまつ慝のまとひをひらきて後こそ淑のまとひをもひらくへけれ　これ件々の次序につきていふなり　このまとひひらけすして淑慝ともにくらき時はからくして善事をなすも皆いたつらなるへけれは人たゝ一生をむなしくするわさならすやこれ所詮天地の二性を心身に稟なからその二性を渾沌するとかそかし　わか御をしへまつ慝のいたりをとき

しめしたまへるはかの脂莵のさかによれる事にて慝のいたりをさとし給ふは即是淑のいたりをしらしめむかためなるなり人みな
他域のをしへ□(虫食、をカ)ならひしよりその本然なる渾沌をはいよ〱とりかためてかへりてこの御をしへの深切なるをうたかふ人多し善
惡の別しらさ□□(虫食、る人)はなけれとそのくはしきとくはしからぬは雲泥なりかしこのけちめよく〱わきまへておもひまとふまし也
さきつ年ある人予にいへらくからふみ佛ふみをとりすてゝ近比ひたふるに神典のみをみるは此御をしへの儒佛にまされる事ある
ゆゑなるへしそのまされる所をのへよといふに予答へていはく予か儒佛の書をみすなりぬる事さらに勝劣をもての事にあらすお
ほかた國といふ國おの〱土俗ありてその風俗をこと□(虫食、にカ)すされは儒はから國人の風俗
に切なるすちよりをしへられたるなるへしわか御教もまたそのことくわか御國人の土俗にしたかひてたてられたるをしへなる事
まへにいへるかことし此故に儒教はから國にてこそかしこからめ佛教は天竺にてこそたふとからめ風俗に切ならむをしへと切な
らさるをしへとはまねはむにそのいさをの遲速かならすあるへしとて神ふみにひとしへになりぬる也さらに儒佛二教をおとれり
と思ふにあらすといひしかは勝劣にての事とおもへりしはおのかいやしき心のまへなりけりとてそのあすの夜予か神ふみとくを
聞てかのよしあしのけちめをはかたみにあけつらひしいと〱おかしかりしかはそのあけつらひこゝにしるさまほしけれとこ
ゝい文義に無益の事なれはもらしつこの人はからまねひによに鳴る人なりされはそのよのあけつらひいとおかしかりしなり　お

ほよそ善をよみし惡をにくむ事やことなきことわりなるかゆゑに人みなあしき事せしよき事のみせむと思へとも心にもあらす善事のしかたきはひとへに其慝に妨らるゝかゆゑなりとおもひてひたすら慝を制止するこれおほかたの世のならひ也しかるにその中には勉彊つよき人は制し得て其慝の根をもたちたるか如きもいてくれは制せむとすれと制しえぬかきりはよにいふかひなきものにあはめにくまるその制し得ると制しえぬとの數をかそふるに制しえぬは多く制しうるはいと〳〵まれ也されは制し得たるをは世こそりてたゝへあかむることわりなる哉よく其慝を制しえて善事の肘をひかれさらむ事はいとも〳〵難きわさなりしかるにしか制□(し)(虫食)うる人はまれに制しえぬ人はおほきはもと難きわさを成さむとするか故にて所詮はよき人をすくなくしあしき人を多くする世のならひいとも〳〵心くるしき事也しかはあれととまれかくまれ人として善事はなさて叶はさる事なれはその善事を妨くへき慝を制せんより外なくおほゆる事なりされは誰も〳〵よのならひにしたかひてわか慝を制すれともまへにいへるかことくその(衍)其慝もと人の身に屬して身より生する所なれは其制する事なま〳〵にして極にいたらさるほとこそ堪れいさゝかの遺漏もなきまて制し盡す時は精神かきりありて身これに堪すかろきは病となり重きは死亡にいたるこれをは神避之件に へ伊邪那美神者因生火神遂神避坐也とはしめし給へるなり　伊邪那岐神は心の方をつかさとり給ひ伊邪那美神は身の方をつかさとり給ふ事決

能碁呂島之件にこの二神ともに一島に天降たまへるよしかゝれたるにあきらか也火神とは精神元陽の氣をいふこの神を生ませりとは上にいへるかことく身を勉むる事極にいたるときは精神たへさるをいふなり於能碁呂島之件は人のうまるゝはしめをいひ先言之件は慾のまゝには任すへからぬ所以をとき改言之件以下はもはら慾を制するうへをいひてその極をしめして神避之件はときたまへるなり神避之件のをはりにへ凡伊邪那岐伊邪那美二神共所生島壹拾肆島神參拾伍神云々と段落をしめされたるなりくはしくはそこにみるへし　この神避をおもふによに善人とみゆる人その身の精神堪て壽をたもてるはいまたその慾の制神避之件にはいたらさる事しるしかる時はその善も猶眞善とはいふへからすこれ即善に暗き所以なりかしおほかた古今をみわたすにしかなま〳〵の善事はせじとひとへに身を責る人は短命なるか多しいはゆるから國の顔淵なとこれなりされは善を眞善ならむとすれは身これ（に）□（虫食）堪す又身の堪むはかり制すれは眞善ならさるかゆゑにいかにすへしともおもひさためかたさに人皆生涯をなま〳〵にをふるこれをは中段にへ國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用弊琉之時といひまた淤能碁呂島之件にへ天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神脩理固成是多陀用弊流之國賜天沼矛而言依賜也とはとかれたる也天神もろ〳〵伊邪那岐命伊邪那美命二はしらになにのくしひなる事をも命し給はてたゝこのたゝよひをつくり固めなせと命せさせたまひしはいとも〳〵かしこき事にて前にいへるかことく眞善ならむとすれは身堪す身堪れは眞善ならさるこの所置凡智のしるへからさる所なれは也このたゝよひをつくりかためなすへき天神の命をいかにといふに即かの神避之件にへ因生此子（これ火神なり）美蕃登見灸而病臥在多具理迩生神名金山毘古神次金山毘賣神次於屎成神名波

迩夜須毘古神次波迩夜須毗賣神次於尿成神名彌都波能賣神次和久産巣日神此神之子謂豊宇氣毗賣神とあるこれなりくはしくはその件に釋すへけれと今その大要をいはゝ地をもて天にくらふれは卑しけれとその卑しきかうへに多具理（これは唾洟なとの類を云神代巻一書に〈爲吐をたくりすとよめり又同し一書に素戔嗚尊に祓具を責たる所に〈以唾爲白和幣以洟爲青和幣とあるもこの照應也くはしくはかの件にいふへし）屎尿のことはきたなきものをほとこせは土粘り（ネバ）肥て其卑しき物一段卑しくなるよりおのつから和久産巣日神と申す生産の氣そこに生しつひに五穀を豊熟せしめ給ふ豊宇氣毘賣神はあらはれさせ給ふその地の性をさなから稟得たる人身なれはもときたなき念を生する身なれともそのきたなきかうへに猶そのきたなさの肥るはかりきたなきものを施さは終に豊宇氣毘賣神はうまれ出させ給ふへしとの御さとしなりけに世に寶とする有用の物の天より降れる事なく猶男にくらふれは女は卑しけれと家系を傳ふへき子孫は女しもうみ又富者にくらふれは貧者は卑しけれとも家産を増すへき子錢は貧者しもうむかことくよにあらゆるものゝその卑しき方なるものはみな母なるをせむへからさる眞理あるこれなり外宮延暦儀式帳云 〈大長谷天皇御夢尓誨覺賜久吾高天原坐氐見志眞岐賜志處尓志都眞利坐奴吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食坐故尓丹波國比沼乃眞名井尓坐我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支尓時天皇驚悟賜氐卽從丹波國令幸氐度會乃山田原乃下石根尓宮柱太知立高天原尓比疑高知氐宮定齋仕奉始支是以御饌殿造奉氐天照坐皇大神

乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉とみえまた倭姫命世記にもこの事ありて大同小異なり世記云へ泊瀬朝倉宮大泊瀬稚武天皇卽位廿一年丁巳冬十月倭姫命夢教覺給久皇大神各一所耳坐波御饌毛安不聞食丹波國与佐之小見(チミ)比沼之奥井原坐道主子八乎止女乃齋奉御饌都神止由居大神乎我國欲止誨覺給支尒時大若子命乎差使朝廷仁令參上天御夢狀令申給支卽天皇勅汝大若子使罷往天布理奉宜支故率手置帆負彥狹知二神之裔以齋斧齋鉏等採山材從丹波國余佐郡眞名井原志天奉迎止由氣皇大神度會山田原乃下津磐根尒大宮柱廣敷立氐高天原尒千木高知氐鎭定坐止称辞定奉利奉饗利神賀吉詞白賜倍利又撿納神寶卜兵器爲神幣更定神地神戸氐二所皇大神宮乃朝大御饌夕大御饌乎日別齋敬供進之ともみゆこの天照大御神の　へ吾一所耳坐波甚苦と仰られし故は上に述たるかことく心は尊しといへとも身を舍とし身の用をからてはその性を達する事能はさるものなるか故に一所坐波甚苦とはおほせられしなり（世記にはたゝ大御饌の事はかりなるはこれをもそれにふくめたる書さまなるへし）へ加以大御饌毛安不聞食と仰られし故は食物は壽命をたもつ物なるか故にすへて永く保つことのさとしには食物の事を用ひられたる神典中かそふるにいとまあらすその中に神代卷一書に　へ是時保食神實已死矣唯有其神之頂化爲牛馬顱(ヒタヒノ)上生粟眉上生蠶眼中生稗腹中生稻陰生麥及大豆小豆天熊人悉取持去而奉進之于時天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可食而活之也乃以粟稗麥豆爲陸田種子(ハタツモノ)以稻爲水田種子(タナツモノ)又因定天邑君卽以其稻種始殖于天狹田(サナタ)

及長田其秋垂穎（ノタリホ）八握莫々然（ヤツカニシナヒテ）甚快（ココロヨシ）也とみゆるかことし壽命の事をいへるは木花之件に尓大山津見神因返石長比賣而大耻白送言我之女二並立奉由者使石長比賣者天神御子之命雖雨零風吹恒如石而常堅不動坐亦使木花之佐久夜毘賣者如木花之榮榮坐宇氣比氐貢進此令返石長比賣而獨留木花之佐久夜毘賣故天神御子之御壽者木花之阿摩比能微坐故是以至于今天皇命等之御命不長也とみえまた垂仁紀に（二十五年の紀に小字してかけり）一云天皇以倭姫命為御杖貢奉於天照大神中畧然先皇御間城天皇雖祭祀神（祇）祇微細未探其源根以粗留枝葉故其天皇短命也是以今汝御孫尊悔先皇之不及而愼祭則汝尊壽命延長復天下太平矣ともみえたる皆そのさとしにて心の性を達せむとするに身をよく養ひおかされは食物をもて壽を保つかことく心の性をなかくたもたむ事能はすとの御さとしに大御饌毛安不聞食とはおほせられしなり（大かたのよこともたゝ一時にてはかひなき事いふもさらなり此故にかくはさとし給へるなりとしるへし）しかるにかの大神を拜まむはもはら身の性卑しきかうへにかの多具理屎尿のたくひをもて粘し肥すへきわさのおもひかけぬすちなるか故に凡見にては其養ふ事をおきて制してたに身の卑性はもてあつかはるゝをましてやしなはゝいかならむとそおほゆへきすなはち食物乞之件に（神代卷には月夜見尊保食神をころしたまふとありこゝと同し件也）へ又食物乞大氣津比賣神尓大氣都比賣自鼻口及尻種々味物取出而種々作具而進時速須佐之男命立伺其態為穢汚而奉進乃殺其大宜津比賣神故所殺神於身生物者於頭生蠶於二目生稻種於二耳生粟於鼻生小豆於陰生麥於尻

生大豆故是神産巣日御祖命令取茲成種とあるはその心えをさとされたるにておほかたくひて活（イク）くへき物はきたなき所よりいつるよしをしめしかつ此大氣都比賣を殺し給ふとはそのきたなき所よりいつるをにくむ凡情をさとされたる也されと神産巣日御祖命これを種としたまふはさるきたなき所よりいつるをにくむへき事ならすこれ善事をなすへき種そとしれとの御さとしなる也以上引く所の文義を神典一部の始末にてらしておもふにもと身の性は勉めてせむるたに制しかたきをいかてかこれを粘し肥すへきことををしへられしそといふにおほかた人の悪念きたなしとはいへともおのれ思ふにはさはかりきたなしともおほえぬよりおのつから私なる理の附會せられてその理を憑みて言行にもいつる事常なり千位置戸之件に〜手足爪とあるは善悪二事ともにおのかふむ所の理あるよりなし出らるゝよしをさとされたるなりくはしくは此下に善解除悪解除をいふところにいふをみるへし　これをはよに悪事とはにくみあはむるなりされは悪念の悪事となりいつるはもとその悪念の分量理の附會せらるゝはかりなるか故にともすれは言行にいてゝ身外をけかす事とはなるにそありけることゝをもてそのきたなき念のうへに今ひときはきた□□（なき）（虫食）事をあたへてきたなさを肥す時はきたなきかきりの物となりてみつから身内にてふかく耻ることゝはなりはてぬへししかる時はたとひいひ出よなし出よとすゝむとも更に言行にいつへきことゝちはなくなりなむかし黄泉之件に〜刺左之御美豆良湯津津間櫛之男柱一箇取闕而燭一火入見之時宇士多加禮斗呂呂岐氐云々とあるは

すなはち人前にもち出へからぬものとなりたるさまをさとされたるにて大かた人身は貴賤となく美醜となく宇士といふ虫にたかられとろけはてむを極とする物なるをその極まてにいたさすなま〱にしおくか故に悪念をはみつから耻る心うすくしてわすれては言行にいてゝ身外をけかす事とはなる也との御さとし也されは悪念はなま〱なる故にこそ悪事とはなりいつれ更にさらに制して止るへきものにはあらさるなり凡庸悪をおもふに精しからすして制して善事をなさむとすれとたとはゝ家を造るに必まつ厠をたつるは家の内を不浄ならしめじかためなるか如しわか悪念みつから耻るはかりきたなきかうへにもきたなくなす時は言行にいつへきこゝち露はかりもなくな（るかカ）□□（虫食）故に身外清浄ならん事うたかひなかるへしこれ善事に悪念の混すへからさる所以なる也かく悪念は身内に處し善事は身外に處して渾沌する事なきをは天地初發とはさとし給へるなりまへにいふか如く善悪の本然は天地の二性なるを人みな善事をなさむの心はもはらなれと悪念の所置たかふか故に善事とおもへるもみな悪に混する也しかれともかの淤能碁呂島之件にみゆるかことく人もと天地を混成して心身を一塊としたる物なるか故にかく内外にわかたむ事いと〱難かるへしされは千引石之件に へ最後其妹伊邪那美命身自追來焉尒千引石引塞其黄泉比良坂其石置中各對立而度事戸之時云々また神代巻一書にはへ故便以千人所引磐石塞其坂路与伊弉冊尊相向而立遂建絕

妻之誓とみゆまた一書にへ及其與妹相闘於泉平坂也伊弉諾尊曰始爲族悲(カナシミ)及思哀者(シヌヒケルコトハ)是吾之怯(ツタナキナリ)矣時泉守道者(コモツチモリヒト)白云有言矣曰吾与汝已生國矣奈何更求生乎吾則當留此國不可共去是時菊理媛神(ククリヒメノ)亦有白事伊弉諾尊聞而善之乃散去矣この菊理媛神亦有白事とありていかなる事をまをしたまひしかその語なきに伊弉諾尊聞而善之とあるはいと荒涼なる書さまにあらすやよの直言家はその語を畧したるものとこそいふらめしからは聞而善之とはかゝるましき条理なりこれはこゝの事あらはにいふましき事なるか故にかくわさとおほつかなくかきてみむ人をしておもはし□(虫食、めカ)られたる書さまなりかうやうの詞つくりはかみつよの人にあらてはえせぬ事なりこの義こゝにとかまほしけれとくはしくは千引石之件にいふへし　されはこの千引石は身内身外の間をいふにて黄泉比良坂ととなふるも即こゝなりとしるへし千引石は神代巻一書にかけるもしのことく千人の力ならては引くへからぬはかりの大石をいふこれたやすく混すへからさるよしを思はせんかためなり身競之件にへ千引石擎手末とあるも即これにて有力の人はなほ混しやすかるへきことをさとし給へる也くはしくは其件にいふへし　その件にて伊邪那美命は黄泉津大神となりて黄泉にまし伊邪那岐命はへ坐淡海之多賀也とみゆるこれ心身の二性所置さたまりたるさまをしめしたまへるなりこれは多賀之件にみゆ神代巻にはへ是後伊弉諾尊神功(カンコト)既畢靈運當遷(アツシレタマフ)是以搆幽宮(カクレノミヤ)於淡路之洲寂然長隱矣亦曰伊弉諾尊功既至矣徳亦大矣於是登天報命仍留於日之少宮矣ともみゆ詞の表はさまくなれとも義はたゝひとつなるなり千引石はおかるへけれとこれは渾沌の人のためにしめしおかれたるなりすへてわか御をしへは自然にしたかふ事をむねとし勉强を用ひさる事かくのことしなほ件々に弁するをみてしるへし

されと身内といへとも卑念をやしなはゝおのつから色にもあらはるへきを恐りて身内を淸くせんことを欲するまとひよりともすれは此千引石も擎らるへきよし力競之件にもとき五百引石之件にへ内者富良富良外者須夫々々ともみえたるそかし今内外をいふ事この語によれる也　されはかへすく身の本性もとより卑しきを今一きはそれを肥して豊宇氣毘賣神をゝろかみ奉らむの心ふかくは身内に卑念にふかく

かくれてさらに〳〵言行にいつへきこゝちなくなりぬへしこれをは天地初發とはをしへたまへるなりとしるへしまへに論らへるかことく人かく心身の二性をよくわかちてその間千引石を置たることくなりぬ（る）□（虫食）時はその心身の祖たる天地も渾沌する事なくその中間にまします神たちわか心身の間をたすけさきはひたまふへきそかし渾發の義廣莫にして精しくときつくしかたけれは今はその大要を述ふ猶くはしくは此下の件々を釋せるをこゝにあはせて思ふへし渾發の事まつ卷首に述られたるは大かたわか御教の大始たれはなり大始たる所謂は渾沌すれは神ひとはしらもおはしますへき所あるましけれは也　○初發とは學者その渾沌のまとひをしりてはしめて心身の處を異にせるをいふ也詞の表にてはたゝ此今みる天地のうへの渾沌したりしかかく上下にわかれて位したるはしめを記したるかことくみゆれとまへに論らへるかことくもと天地に渾發あるへくもあらぬかうへに上古の人詞をつくるにまさにいはむと思ふすちをはいはさる常なれは誰にもあれはしめて渾沌のまとひをさとりたるをさとされたる詞なる事明らかなり發は古訓ひらくとよめれと心ゆかすこれは神代卷にへ開闢之初云々とかゝれたるによりてなるへけれとそのはしめにはへ古天地未剖陰陽不分云々とかゝれ同書一書にへ天地初判と多くみえたれは和可流とよむへき事也ひらくは閇（トツル）にあつかる詞なれはかなふへしともおほえすかし此記に發の字を用ひられたるはまた剖分判な

との字にもよらさる字なれはもし字書に〈發ハ方伐切音髮起也興也舒也擧也明也揚也又遣也又啓行也又明發從明而至夜則地闇至旦而明則地開發又曆法春夏曰發秋冬曰歛又漢書ニ十二矢爲一發韋昭曰射禮三而止毎射四矢故以十二矢爲一發猶今言箭一放兩放也孟子ニ發ニ乘矢ニ而後反ルとみえたる開發の心もてかゝれたるかともおほしけれと發の字の義はいつれもひらく義にはあらねは（國語に〈懸門不發楚言出とあるこの懸門とは戸を上に引あけおく門をいふにて其戸の上の方より出くるを發といふとわか伯父皆川原國語をとけるをきゝしか耳にのこれり）下文に〈萬妖悉發とかゝれたる發の字と同しくこゝも於古流といふ心に初發とはかゝれたるなるへしこれ今予か釋せることく渾沌したるほとは天地あるもなきにひとしく天地をわかてははしめて天地のいてきたるさまなるを思へとて此發の字は用ひられたるなるへししかれとも於古流とはよむへくもおほえすたゝはしめて天地のいてきたる心はへを思はせんかために此字は用ひられたるにてよまむには波士米氏和可礼志止伎とそよむへき宣長もこの發の字心ゆかすや思はれけむ萬葉集の哥の詞によりて波士米乃止伎とよめるいとみやひたれはしかよむへくこそ（哥はもしの數もさたまり文はもし數にかゝはらぬものなれはみやひたりとて義にあつからぬ訓は哥を例としては用ふへき事にあらねとこれは發の字今いふかことく渾沌したるをわかては天地はしめてなり出るかことききことをさとさむかためのもしなれはしかよまむもしかるへくおほゆるなり）けにも〳〵渾沌したる時は天地なきかことしこれをわかては天地はしめてなり出るかことし

○之時とは學者はしめて渾沌をわかてる時をさしたる也これまた太古に天地初發せし時をさした

るかことく書なされたれとしからすむかしにまれ今にまれ行さきにまれ學者の渾沌をわかてる時をいふ也としるへし

於高天原成神名天之御中主神訓高下天云阿麻下傚此

この高天原といふは詞の表にてはかの渾沌したりし天地の今みることく上下に位せるその天の方をさしたるにてたゝ天の名なりとのみおほやうに心うる人もあるへけれともとより天は高處に位したるをこと更に高天といはんやは上古の人はさる稚語はつかふ事なしされはこの高天原といふ名は低天原とさすへき所必ありてそれにむかへての名なる事うたかひなしすへて古言はきく人にまつ疑をおこさせてさてその人思慮してのちおもひいたるへく詞をつくる事つねなりされは古言をみむにまつ疑生せすは古人の情は思ひえかたしと知るへし釋氏の說にものまねふ次第をいふに疑を第一とすとある僧のかたりつるさる事なりかしその低天原とはいつくをさすやらむとかうかへしに凡見に善と思へるはまことは純善にはあらて惡に混したる善なりしかれともそれなほ善ならさるにはあらねはその渾沌の人の善をさして低天原といひそれにむかへて高天原とはいふ也とはおほゆるなりけにまへにいへるかことく惡をはふつに遠さかれる善なれは高天といはむはさる事そかしされともししかならむには神典中低天原といふ事必あるへきを一所もみえぬはおしはかりならむと思ふ人もあるへけれと高といふ字に低を思はするは古言の常にて猶凡見の善と思へる所を低といはむはいとをしけれははゝかりてあらはにさる名はか

ゝれさりしこれ古人詞を用ふるにいたり深き所謂なる也されはこの高天原といふ名のみえたる處々はこゝにかきらす皆その低天原を思へとのさとしなりと知るへし石屋戸之件にたゝひと所へ以爲天原自闇亦葦原中國皆闇矣とあるは天照大御神は高天原をしろしめす大御神にまして御みつからおほせらるゝ御詞なるかゆゑに高の字をはふかれたるにこそこれに照らしても低天原といふ名をはゝかられたる心をおもふへし多加は多氣とかよひて同義の詞なり高きは武きにひとしく凌かむとすれともよりつき難き心也神名にへ高御産巢日神をはしめへ阿遲志貴高日子根神へ高比賣なとあまたみえまたへ建御雷之男神へ建速須佐之男命なとも申すいつもよりつきかたきさまをいふなり高き山を多氣ととなふるにもおもふへし即三種之件にへ高千穗之久士布流多氣とみえたりこれらをもて同義の詞なるを思ふへしされと加と氣は經緯の五十韻の事なり亡父かくいはせたる也阿緯江緯の別ありて多加はよりつきかたくてかなたにたてるさまをいひ多氣はよりつきかたくうちふるまひゆくかたちをいふ別ありされは此高天原とは地のかたよりみれはよりつきかたくてたてるさまをしめしたる名なりこの高の字の義をふくめる事かくのことし上古の人の詞をつくるはいかさまに案し得たるものかとこれにかきらすへてあやしきまておほゆる也○原は字書にへ遇玄切音元本也說文高平曰原人所登也李巡曰土地寛博而平正名之曰原即今所謂曠野也とみえたりこれたゝ天の渺茫たるより國原海原河原なとの類にいふなりされとすへて必そのひろきにつけて思ふ所ある時にいふにて無益にいふにはあらすたとはゝ神遊哥に採物篠へさゝわけは袖

こそやれめとね河の石はふむともいさかはらよりとよめるはその篠わくる道はちかく河原ゆくは道遠きがわひしき心を思はせて河原とはよめる也又土左日記に へあをうなはらふりさけみれはかすかなる三笠の山にいてし月かもといふは故郷にはたかひて山もみえすいとおほつかなきなけきより蒼海原とはよめる也されはこの高天原も天津神たちのしろしめす所なれははかりしられぬさまを思はせて原とはいふなるへし○於ニはからふみかきにならひて上におかれたる也もしにかゝはりて思ふへからす迹もしはすへてその處をさし定めてさとす脚結也（脚結とはよにいふてにをはなり詞の上につく詞を挿頭中につくを装下につくを脚結と亡父つねにいひならへり）されときく人のこゝならむと思ふ所にあらぬ所をさす詞にてもとよりそこに所すへき處をさす詞にあらすこれ大かた詞のならひ也されはこゝもかの低天原をさしわけて人はみなたふとき神たちは低天原にこそと思ふらめとしか惡に混したる善には神のしつまり給ふへきにあらぬよしを思はせて於ニ(と)(はノ一字カ)□□(虫食)おかれたる也としるへしされはこの於もしもはら渾沌せる善はまことの善にあらすといふ事をさとされたる脚結也かし○成とは先言之件に水蛭子淡島は生といひ改言之件に八島六島をも生といひ河海之件山野之件神避之件の諸神みな生とあるを比波之山之件なる御涙になりませる泣澤女神は所成とありそれより尾羽張之件の諸神また成といひ祓禊之件の諸神もまた成とあるを三貴子之件に へ吾者生々子而於生終得三貴子とあるこの三貴子は祓禊之件のを

はりにありてみな成とありし神たちなるにまへにあけたる泣沢女神また尾羽張之件なる諸神も成とあるを三貴子之件に皆おしこめて〈生々子而云々とかゝれたるを思ふに成も生もたゝひとしくみゆしかれとも成とある神たちを思ふに猶生との別はありて生とは父母の神の御あはひのことわりをむねと思はせむかためなり成とはうまれ出給ひてのうへにていふかたかへりされは生はおや神の御うへ主となり成は御子のうへ主となる也としるへしこゝはおや神とてもなくはしめてなりませる神にませはその義明らか也 此神にのみ成とありて次下の二はしらはたゝ次とのみあるははふける也はふくは此初段の三神は一すちの御たまにませは也この故に中段下段双十神もみなそのはしめの神はかりに成とはある也と知るへし 神代卷に〈天先成而地後定然後神聖生其中焉とみえたるかことく大かた神は天地の間になりますものなれとも天の方に屬し給ふも地の方に屬し給ふもありてこれを天津神國津神とは申すなりこれたゝ天また地に屬し給ふまてにて猶天地間なりうたかふへからす〇神とはまへにひける神代卷の語のことく天地の中間にまし〳〵てくすしくあやしき妙用をほとこし給ふものをいふ名なり渾沌する時は天地に中なきか故に神おはしますへき所なしこれ神代卷の語に〈然後とある所謂なりされは神は天地を渾沌(せる)□□(虫食)人のうへには神おはしまさぬにはあらねとあつかり給はさる事明らかならすやわか御敎もはら神をもて主とし給ふゆゑはおほかた人力も切瑳琢磨の功をつむ時はしたゝかにもなる物なれと猶かきりありて神力の靈妙なるには及はさる事はるかなり力

競之件を□□□（とかヵ）（れ）（しはヵ）□（虫食）この所謂也されは人はたゝ神力にすかり奉りて貴賤となく長幼となくひたふるに思ひさためて一己（本「巳」トアリ本節中スベテ之ヲ改ム）の力をたのむ事なかれとの御うつくしみそかし神武紀にへ敬祭天神地祇（祇）へ祭天社國社之神へ祭天神地祇（祇）へ以祭諸神へ躬自齋戒祭諸神遂得安定區宇へ我皇祖之靈也自天降鑒光助朕躬今諸虜已平海内無事可以郊祀天神用申大孝者也乃立靈畤於鳥見山中其地号日上小野榛原下小野榛原用祭皇祖天神焉なとみ□（えヵ）（虫食）たるうへこそ皇統はあめつちとかきりなくおはせこれをかゝみとして神をもて御教の主とし給ふ意味をさとるへし此天之御中主神より諸神を次序し件々を次第したるはこれ神祗（祇）のやむことなきついてにてこれをは神道とはいふなり。（神道といふ名の事孝徳紀にはしめてみえたれはやゝ後の名なりといやしむ人あれとなか／＼誤なる事大旨にくはしくいへるかことし）孝徳紀にへ惟神といふ事を自注し給ひてへ惟神者謂随神道亦自有神道也とあるは即今いふ所の神の次序件々の次第にしたかふ時はやかてみつ□（からもナルベシ）（虫食）神の次序のまゝなるよしをいふなりその本意もはら一己の力はかきりある事をさとりて神力をたのみたてまつれとの心なるをも思ひあはすへし一己のちからをたのむ人おのれしたゝかなりとおもふらめと精神かきりありて或は病みあるひは勞れおもはすに事を遂さ□□（るた）（虫食）めし□（ま）（虫食）のあたりなるを此御教よにかくれてのちはたゝ一己の力をみかく事を是として神力のたのむへき事をしる人なくなりにきその一己の力をみかくいとまをもて神道に随はむはいかはかりかは易からんよく／＼思ふへしなほその

けちめをくはしくいはゝ人力は耳目のうへにあり神力は耳目にあつからす耳目にあつからさるか故にそのいさを廣大なる也なに事も耳目にあつからされはたのもしからすおもふは凡庸の常情なれは此けちめ猶□(心)(虫食)えわきかたかるへけれと勞して功小さきと勞せすして功大なるとをよくわいためなは大かた神の敬ひ祭るへきゆゑはおしてしらるへしこの妙理こゝにいひつくしかたし○天之御中主神この御中は眞中なり眞御ともにふたつを具足する義なる事萬葉集に　へ左右手(マテ)　へ左右(マテ)とかゝれたるは左右の手を具したる心にて麻傳とはよむなりこれをもて眞御の義をしるへしされはすへて眞御をはたゝ一言とするはいつれもふたつを具するをほむるにてその本は神典なる天地をわかつこれ(なり)□□(虫食)眞人眞木眞鳥眞旅な□(とカ)(虫食)もいひ美山美路美籠美井なといつれも同し　麻經にてかよひて美とも眞ともいふ也紀伊國のわかの浦まわかの浦と萬葉集によみ同集みよし野みくま野なと所をもほめていへり　此故にこゝに御中といふは天にも地にも片よらさる中位をいふなりこれ卽かの神代卷に　へ生其中といへる中にて中庸の中にもあらす空假中の中にもあらす淑と慝との中をいふなりそのゆゑいかにといふに天地初發の下に述たるかことく淑慝の間に千引石をおかは相混する事あるましき理なれと有力の人はこれを手末に擎けてとにかくに混しやすき事力競之件にみえたるか如しこの故に千引石之件に次て禊祓之件はおかれたるにて禊祓はいにしへよりいと重くせらるゝはこの故なる也されとも後世はたゝその儀のみのこりて本意をうしなひもろ

〳〵のけかれをはらひ除くわさとのみ心えな□□（れり）（虫食）その件に御杖御帯御裳御衣御褌御冠左御手之手纒右御手之手纒すへて八種のものを投棄給ひしことをいふは今まておもはす淑に慝の混したりしをはらひ棄る事をいふにはあれと（後世はこの詞のうへにめをうはゝれて本意をうしなひたる也これもはら倒語の道のよにかくれたるよりのわさなりかし）もと淑慝の混するは慝の所置のあしきか故なる事天地初發の下に釋せるかことしこの故に淑に慝の混すましくなさむにはもはら慝に多具理屎尿のことくきたなきものを施してみつから言行にいてむことをはつるはかりになすにある事なれは詞の表こそ投棄□□（とはカ）（虫食）みゆれ本意は慝の所置をたによくすれはおのつから淑はまことの淑となりぬへきよしを思はせられたる詞なる也ゆめ〳〵詞のうへにめを奪はるましき也さてその次下に於是詔云上瀨者瀨速下瀨者瀨弱而初於中瀨墮迦豆伎而滌時所成坐神名八十禍津日神（訓禍云摩賀下傚此）次大禍津日神此二神者所到其穢繁國之時因汚垢而所成神之者也次爲直其禍而所成神名神直毘神次大直毘神次伊豆能賣神とあるこの中瀨といふ中は即この天之御中主神の中なり上瀨下瀨とは淑慝の二心をいふにて淑慝ふたつなから言行にいつへきにあらすたゝ淑慝の中を言行とせよとの御さとしなりしかるに慝の言行にいつましき事はいふもさらなり淑をも言行にい□（虫食）むをしかるへからすとするは凡庸の心えかたき事なりこれ凡庸の淑を思ふ事麁なるか故にこの御教の心えかたき也けりけに慝たによくわかれて身外をけかす事なくなりなはかの八くさの

物を投棄たるかことく裸なる淑となりて言行にいてむにます事あるましくおほゆる事也されともししかにてやみなむには千引石より以下數十件の議論にはをよふましき事なるにその議論いとねもころなるはこれ思兼神の御たはかりにて凡庸の善を思ふはまことの淑ならさるかゆゑなりおほかた凡庸の善事とおもへる事そのすちさま〲にてあけてかそふへからすといへとも概してその大要をいはゝ己を潔くすると人のためをなすとのふたすちにとゝまれりすなはち此二すちとはわか神典に速須佐之男命大穴牟遲神の二はしらをとかれしこれ也かくいふ故は宇氣比之件に〽僕者無邪心ニまた勝佐備之件に〽我心清明とみえ多賀之件に〽八拳須至于心前啼伊佐知伎也とみゆるこれ速須佐之男命の御事なり大穴牟遲神は素莵之件に御兄弟八十神とゝもに稻羽之八上比賣をよはひ給ひし時氣多之前にて裸莵をあはれみたまひし事あり

此二神の御事をかくかゝれたるはその御はしめにて速須佐之男命は千座置戸をおほせられ給ひしより出雲國におはしまして〽吾來此地我御心須賀〻〻斯と仰られしか此神の御いたりをいふなり大穴牟遲神もま□（虫食、たカ）それは御はしめにて力競之件に〽僕者於百不足八十坰手隱而侍とみゆるか御いたりなりくはしくは其件々にいふをあはせて心うへし大かた神の御うへには未達已達の次序はあるましき事なれとこれにかきらす神典中かうやうの事多かるは未達の非をしらされは已達にいたる事能はさるはやことなき神道なれは也此故に大旨にくはしくいへるかことく孝德紀に〽惟神者謂隨神道亦自有神道也とあるこれ要語なり神典に諸神を次序しかつ件々を次第せられたるは即神道にてその神道に隨ふを人のいたりとをしへられたるものなれは伊邪那岐命は多賀之件伊邪那美命は黃泉之件を御いたりとするかことく諸神みなしかるはその神の御たまは その御いたりをむねとする事なれとやことなき道をさとし給はむかために御はしめの未達のときよりしるされたるなりこれ即神の御うつくしみ也疑ふへからす

けに我を潔くすると人の爲をなすとの二すちたによくせは人として何をか思はむとおほゆる事なりしかるに速須佐之男命は〽萬物之妖悉發

多賀之件 ヘ萬妖悉發 勝佐備之件 とみえつひに千座置戸を負せられたまひし事みえ 千座置戸之件 大穴牟遲神は ヘ八十神怒 赤猪氷目矢木俣の三件にみえたり また ヘ蛇室 ヘ呉公與蜂室 ヘ鳴鏑射入大野之中令採其矢 ヘ八田間大室なとくさ〳〵のわさはひをのへられたり 五百引石之件 我を潔くし人をあはれむは大かたのよことの要を得たるわさなるをいかてかかく萬妖悉發八十神怒にはあふそといふに大かた我を潔くする時はたれにかはち何をかはゝからむとおもふ心つきてその心おのつから言行にあらはるゝこれを勝佐備といふ勝佐備となる時はわれを潔くする事のみ主となりて人のうへにはいさゝかも貪着なきこれをは勝佐備之件に ヘ於是天照大御神見畏開天石屋戸而刺許母理坐也尒高天原皆暗葦原中國悉闇因此而常夜往於是萬神之聲者狹蠅那須皆滿萬妖悉發とはとかれたるなり 天照大御神月讀命建速須佐之男命をは三貴子之件に三貴子といひて三神具足すへき神なるに速須佐之男命の勝佐備より三貴子のうちの第一なる天照大御神の闕ることをは石屋戸にこもりませりとはかゝれたるものなりくはしくは石屋戸之件にいふへし たとひおのか身はいかはかり潔くとも人の思はくをはからさらんは必わさはひおこるへき事ならすやされはもと悪にあらさるを勝佐備之件に ヘ惡態不止而轉といひ神代卷には ヘ甚無道ともみえたるをやこゝをもて推せは所詮おのれは潔くすとも人のためを思はすしては萬妖かならす發るへけれはもはら人の爲をせむこそめてたからめとひとへに思ひ(さ)□(虫食)ためたるこれをは大穴牟遲神とは申すなり かく速須佐之男命より次序していふは稻田御子生之件に速須佐之男命の御子八島士奴美神より五世天之冬衣神のうみませる神なれはなりそこにいはく ヘ此神娶刺國大上神之女名刺國若比賣生子大國主神亦名謂大穴牟遲神亦名謂葦原志許男神亦名謂八千矛神亦名謂宇都志國玉神并有五名とありすへて神名をいくつもたゝへられし

は御名ひとつにてはその神の御たまの義の盡さるか故也此五の御名おの〳〵義ありてたゝへ奉れるものなる事素菟之件のはしめに大國主神とあるをやかてそこにひきつゝきたる下文には大穴牟遲神とみえその下件々によりて御名かはれるにおもふへしくはしくはそこにいふへしされとこの五名の義を概するに人のためとしいへはあはれみたすけ給ふによりておのつから衆人服してその御名たかく衆人に長たるへき神なるよし也　この神の要文は素菟之件に　故其菟白大穴牟遲神此八十神者必不得八上比賣雖負帒汝命獲之於是八上比賣答八十神言吾者不聞汝等之言將嫁大穴牟遲神とみえたるこれなり同し件のはしめに　故大國主神之兄弟八十神坐然皆國者避於大國主神所以避者其八十神各有欲婚稻羽之八上比賣之心共行稻羽時於大穴牟遲神負帒爲從者率往とあるはよに誰とても人に服せられん事をこのまさるものなきをひとりすくれて人をあはれみたすくる時は其おとれる人必これをねたく思ふへき事必せりたとはゝ君に忠ならむは臣の道なりといへとも同僚にすくれて忠なる時は同僚こと〳〵く不忠のものゝことくみえ又父母に孝ならむは子の道なりといへとも兄弟にすくれて孝孝（衍）なる時ははらから悉く不孝のものとみゆるかことくなれはかならす怒にふるへきわさならすや此故に赤猪之件のはしめに　八十神怒欲殺大穴牟遲神云々とありてその件以下氷目矢木俣之件等にそのわさはひをのへられたるなりこれ人をたすけあはれむはめてたきわさなりといへともかたはらの人の爲には畢竟そのたすけあはれめる人を責ておのれひとりの榮とするわさなるか故そかしまへにいへるかことく善事といふ善事をつゝむれはこの二神にとゝまるに猶これかゝるわさはひあるはいかなる故そとたつぬるに古今和漢の事迹をみるにこの二神の

ことくにしてわさはひにかゝれる人かそへもあへす多けれと人みなうちも驚かぬはそのわさはひいかりをおこすもののいふかひなき也と心えたるにやこのふたつの弊をくはしくせる人なしかこの二神にわさはひするものをいふかひなしと心えなは善事をなす人はわさはひにあたるに必せりとせんかさるひかみをのそきてわか神典の眞理をさとるへし神典この二神の御うへをあけつらはれたる事いとねもころなるは凡庸の善事と思へるはまことの善事にあらさる事をさとらしめむか爲そかし おほよそ人の心身まへにくはしくいへるかことく天地化成して心身となり心身一塊となりて一人となるその心身のかたち心は身の内に舍れるこれをは神代巻に へ如雞子とはたとへられたるなり外かたちありて内かたちなけれは也されは心は天の尊き性をうけたれはあらゆる善事は心の生する所なりとはいへとも地の卑しき性をうけたる身を舍としたるのみならす言行の用みな身の用を借らされは善事もなす事能はさるなりいはゆる水は方圓の器にしたかふかことく身は心の器なるか故に天の尊き性をうけ得たる心なれともその器たる身にしたかひて卑しき方に引つけられて卑をまぬかるゝ事あたはさるか故に人みなおのれ尊しと思ひそのなす事もけに善事なれとも萬妖悉發八十神怒をまぬかれさる眞理やむことなき事なりしかれともわか神典ならてこの議論なき事なれは世人善事はおこなへともその畢竟私におちてまことの善事をなす人すくなしこれをは渾沌とはさとし給へるにてかくあらゆる善事もまことの善事にあらさるこれ渾沌のわかつへき所謂なる也よに善事と思へるはまことの善事にあらすとする事わか神典の眼目なり

さはかり古より聖智の人もありけれとこの眞理をわきまへさりしは所詮凡智にひとしといふへし此故に多賀之件に へ八拳須至于心前啼伊佐知伎也とはあるなりこの八拳須至于心前とは成長の人のかたち啼伊佐知伎とは小兒のかたちをいふにてよに善事をふるまふ人その善事をふるまふ所は成長の人の如くなれとその善事もとまことの善事にあらて畢竟私におつる事を弁せさるは小兒のことしとの心なりこれをもて今予か釋する意をしるへしかくよの善事をまことの善事にあらすとさとる智を思金神と申す神代

巻には思兼神とかゝれたるその字の義にて九智のかきり盡たるかうへを知る智をいふなりかくいふ故は石屋戸之件に　へ是以八百萬神於天安之河原神集集而高御産巣日神之子思金神令思而云々とみえまた媚附之件に　へ尒高御産巣日神天照大御神之命以於天安河之河原神集八百萬神集而思金神令思而云々とあるは速須佐之男命と大穴牟遲神との善事のまことの善事にあらさる事をことわり給ふはこの思金神の智なる事をさとし給へるなりこの二神の所にしも思金神をとかれたる事これ今釋せる意なる事あきらかなり猶その件々をあはせて心うへし　されは人として善事はなさて叶はぬ事なれとその終かならすわさはひにあふはまことの善にあらさる所謂ならすやこゝをもてわか御教にてまことの善とするはその淑を言行にいてぬこれまことの善なるそかしかく慝は一きはきたなくして言行にいつへき道を断ち淑も言行にいつれはまことの善事にはあらぬ事をさとれは淑慝ともに言行の道たえてふたつなから身内に存するこれをは禊祓之件に　へ於是詔云上瀬者瀬速下瀬者瀬弱而初於中瀬隨迦豆伎而滌時所成坐神名八十禍津日神訓禍云摩賀下效此次大禍津日神此二柱神者所到其穢繁國之時因汚垢而所成神之者也次爲直其禍而所成神名神直毘神次大直毘神次伊豆能賣神とみえたりこの上瀬とは淑をいふなり下瀬とは慝をいふなり上瀬下瀬をかく釋するは淑慝は即尊卑の二性よりおこる心なれは淑慝おのつからこれ上下なれはなり手足とたとへられたるもこの心なりその事は此下にいふをみて知るへし　中瀬とは即この御中主神の中にて淑にもかたよらす慝にも片よらさる中間をいふなりかく上瀬下瀬をえらひすてゝ中瀬をとり給へるは今述るか如く慝はいふもさら也淑も言行にいつれは必禍あるか故にその淑慝の中をは言行の道とせよとの御さとしなる也もと淑慝はまへにいへるかことく天地より稟來りてやむことなき二性なれは言行にいつへからすとてふたつなからすつへきにあらさるか故にその中を執

て言行とはする也としるへしこの禍津日直毘の二神の御名につきて心の曲直なりと心えて正直の説よに紛々たりしかれともよにいふ所の曲直をもて神典始終の教義にてらすにもししからは速須佐之男命大穴牟遅神の議論はあるましき理ならすや善事もなほ言行にやかていつるは私におつるか故にこそ人としてせて叶はぬ善事なるをねもころにいさめられけれされはこの曲直は心の曲直をいふにはあらて神道に随はさるをは摩賀といひ神道にしたかふをは直毘とはいふにて心をまけす正直にもつなといふ淺ましき事にはあらさるなり 神道にしたかはさるはやかて心の曲れは也神道に随ふはやかて心の直き也と今予か釈するすちを混しおもふ人もあるへけれとしからすわか心を正直にせむとするは神道に随はさるにてさらに〳〵よにいふ正直の義にはあらすまへにいへるかことく天地の神の次序し給ふ道ありてやむことなき事この神典に次序したまへる神々件々にしるくてその次序凡智のおもふ□(虫食、すカ)ちとはことなる所なれとまことにやむことなき眞理なる事をさとりてその次序にしたかふをこそ直しとはいはめよく〳〵思ひわくへし近比宣長こゝの語に着して直毘靈といふものをかきて古事記傳にそへられたりその論予かいふ所に似たるやうなれはこれまた混する人もあるへしされと宣長かいふ所はたゝ無爲をむねとして神道のやむことをえぬ理をもとかすこれそのひとしからぬ所謂也もと随ふへきやうをもしらてしたかはんはいとおほつかなきわさならすやよく〳〵思ふへし おほかた凡庸の淑慝の所置わか神典にいふ所にはいたくことなる事前にくはしく述たるかことしされは凡見にひかめる人は慝を一きはきたなくせん理も淑を言行にいつましき理もうけかたくて凡見をたつるこれをは麻賀といふ也これ神道にまかる所謂也慝の所置淑の心得やむことなき眞理を弁して凡見をすてゝその神道に随ふこれをは直とはいふ也これ神道にまからさる所謂なりかく神道にたに随へはもろ〳〵禍(マカコト)はまぬかるへけれは麻賀をはやかて禍とはかゝれたるこれ今いふ所の義をさとれ

とてなり千位置戸之件に　へ於是八百萬神共議而於速須佐之男命負千位置戸亦切鬚及手足爪令拔而神夜良比夜良比岐とみえ神代卷には　へ然後諸神歸罪過於素戔嗚尊而科之以千座置戸遂促徵(セメハタル)矣至使拔髮以贖其罪亦曰拔其手足之爪贖之已而竟逐降焉また同し一書に　へ已而科罪於素戔嗚尊而責其祓(ハラヒ)具(ツモノ)是以有手端吉棄物(タナスエノヨシキラヒモノ)足端凶棄物(アナスエノアシキラヒモノ)亦以唾(ツハキ)爲白和幣以洟(ヨタリ)爲青和幣用此解除竟遂以神逐之理逐之とも又　へ故諸神大喜卽科素戔嗚尊千座置戸之解除以手爪爲吉爪棄物以足爪爲凶爪棄物ともみえたりくはしくはかの件にいへれとその要をいはゝ手足は人の身の上と下とにつきて用をなすものなるか故に善惡二事にたとへたるにて（遠呂智之件に足名椎手名椎といふも同しさとし也）爪とは大かた手足の用は爪あるをたのみて遠きにもありき重きをももつものなれは善惡二事の身外にいつるにかならす心にたのむ所ありてみつからゆるすか故なるをもてその心にたのむ所の理を爪とはたとへられたる也善事はいふも更なり惡事とてもその心のうちには必ふむ所の理あるもの也吉爪棄物凶爪棄物の名は履中紀に（車持君の罪ありけることをいへる所に）　へ善解除惡解除とみえ延曆太政官符には　へ善惡二祓ともあるに同しこの惡解除こそあれ善解除といふ事やはあるへきと凡庸の見にはいと心えかたかるへき事なりこれ卽速須佐之男命におほせられたる祓にてまへにくはしく述たるかことく淑(る)といへとも言行にいつる時は妖かならすまぬかれかたきか故に言行にいつなとのをしへを善解除とは名つけられし也されは惡解除も

これに同しく言行にいてさるをいふにて淑慝ともに言行の道を（た）□（虫食）ちて身外をけかさゝるこれをは手足の爪をぬくとも善悪二祓ともいふなりけり善解除は善をすてよといふにはあらす言行にいつなとの心也くはしくおもひてさとるへしさきに引たる禊祓之件は伊邪那岐命（の）□（虫食）慝の所置をさためたまひし時なり千位置戸の件は速須佐之男命の淑の所置をさためたまひし時なりされは禊（ミソキ）祓と千位置戸は慝淑の別によりての名なる也されと禊祓之件にもへ上瀬者瀬速下瀬者瀬弱といへるこれ猶善悪二祓にて千位置戸之件なるへ抜手足爪と同しきはもと慝の所置たかへは淑の所置もしたかひてたかひ淑の所置たかへは慝の所置もしたかひてたかふか故にて禊（ミソキ）も祓（ハラヒ）もたゝその要は淑慝ふたつなから言行にいつなとのをしへなる事みつへしかはかりの一大事なるか故に六月十二月大祓も行はれその餘もことしある時は祓は行はれし事なるを後世此義をうしなひてましなひなとの類のことくなりぬるはいとかしこくくちをしき事ならすや大祓の詞はさすかにこゝろにくゝやあるらん先達釈せるもの多きか中に眞淵か祝詞考の中にこれを釈し宣長そのもれたるを補ひあやまりをたゝして後釋となつくこれらことの心をかうかへたる事はのこりなけにみゆれと例の詞の表にめをかされるものなれはをしへを言外に思はせられしことは思ひもかけさりしさま也予これを釈せるをみてこゝにあはせて思ふへしされは禊も祓も畢竟はたゝ善悪二祓を要とすといへともその善悪二祓はこの中をは言行とすへきさとしなる也中を言行とする時はやかて淑慝ふたつなから存すこの故に善悪二祓はかへりてこのふたつを存せんかためなるを思ふへしこれ猶かの倒語の所以也かく中をしも言行の道なりとさとし給ひしは神典中所々かそへもあへす猶延喜式祝詞齋のみこを入たてまつる時の詞にへ御杖代止進給布御命乎大中臣茂桙中取持氐云々また

舒明紀に〽大臣所遣群卿者如嚴矛取中事奏請人等也云々　また台記にのせられたる大嘗會中臣壽詞に〽本末不傾茂桙乃中執持氐奉仕留中臣云々　また中臣本系帳に〽

（本集八八頁參看）

なとみゆるいつれも中臣の事也中臣はもと職の名なりしを後には氏となれりそのはしめはこれらの語のことくよく此中を執て言行とする人をえらひて此職を任したまへりしなるへし本末不傾とは卽中を執るを云中をたに執れは淑慝ふたつなからそなはるへきをさとされたる也此記淸寧天皇の御卷に〽五十隱山三尾之竹本訶岐苅末押磨魚簀如調八絃琴云々　又顯宗紀に〽石上振之神榲伐本截末云々　また大祓祝詞に〽天津金木乎本打切末打斷氐また〽天津菅曾乎本苅斷末苅切氐なとみゆるいつれもこのさとしなるをおもふへし中臣はいとかみつ世より職掌か中にもむねとしたまひしは三種之作に〽尓天兒屋命布刀玉命天宇受賣命伊斯許理度賣命玉祖命幷五伴緒矣支加而天降也云々　かく五伴緒の第一とし給へるに思ふへしその下文に〽天兒屋命者中臣連等之祖とみえたり眞淵はこの中臣を神祇官にて神と君との御中を奏請ふかゆゑなりといへるを宣長はその說のことく後までも職をいふと姓をいふとのわかちありしかれとも中臣氏の人は卽皆中臣の職にてとりわきてそれとておかるゝ事はなしかれ職員令の神祇官の下にも神部三十人卜部二十人なとはあれとも中臣といふものは擧られす式にも卜部をおくことはみえたれとも中臣をおくといふ事はみえす中臣女といふ職も中臣氏の女なり又中臣官といへる事ありそは中臣氏の中に神祇の副祐史なとの官にてある人をいふなりと後釋にみゆ中臣の名義は中取臣をつゝめたる也といへり名義も宣長か說しかるへし中臣を神祇官といへるは神祇にあつかる事多きか故の臆說なり宣長か考索はいとくはしくはあれと中を執るといふわさはなほ眞淵か說にしたかへりとおほし此中臣の神祇にあつかるはもとこれ神道よりおこりてこの淑慝の中をとるはやかて神の御心なればなりさらに神わさのうへにのみかゝれるつかさにはあらすとしるへしおほかた詞のうへをのみたのみてはわか御國のふるきふみはとき得へからす　猶神典中に三ところ〽於底津石根宮柱布

刀斯理於高天原氷椽多迦斯理而云々とみえ祝詞ともにも此詞あるはこれまた底津石根は慝なり高天原は淑をいふにてその中に住むへきさとしに殿つくるうへに詞をつけられたる也これらをあはせてわか御をしへは天地の二性に私せすしてその中を言行とするこれをまことの善事とする理をさとるへし 此語なにゝ出たるにも皆底津石根をさきとし高天原を後とするはかの神代巻の〽天先成而地後定といふ先後にたかへるやうなれとこの先成後定は清陽重濁の易難によりていはれたるにてこの底津石根をさきとし高天原を後とするはその難きか故にかくをしへられたる也この語にかきらす神典中にはあらはにとくへからぬ事とも少からすさる所々はこの御教まねふ人の中にもことに志ふかゝらん人をえらひて口つからその義は傳ふるなりこれ予かこの教旨をしみてにあらす志深からさらむ人はかへりてみあさむへけれはなりさて此語のかたちを今に傳へられたるは伊勢の正殿のつくりさま也そのつくりさまをは太古の質素のさまをしめさむかためなりと人みないふはうけかたしその故はしか天下の人をして太古の質素をわすれさらしめむとならはまつ天下の衆民よりもかしこき御わたりの宮々をはしかこそつくり給はめこれその説のうけかたき所謂なりさらにくさるうはへなるはかなき事にはあらすこの語のかたちをつくりて兩宮ををろかまむ人に天地をわかちて中を言行とせよとの御うつくしみそかしすへてわか御國ふりをうしなひてのちの説ともは信すへからす されは此天之御中主神は天地の中間をつかさとり給ふ御たまにますか故にかくは御名つけたてまつれるにて 天地の中ならんには天之とは申す□□き理なれと慝はもとより言行にいつへきすちならねは淑の方をは一段さかりて中にして言行とすへきかゆゑに天之とは冠らせられたるなりこれも私にかく釈するにあらす葦原中國□天神の御孫迩々藝命天降ましてしろしめすへきよし媚附之件以下に述られたるこれこの意なれは也 (虫食、まし) (虫食、は) かの神代巻の〽神聖生其中焉とある語のことく神はすへて天地の中におはしますものなれは畢竟此神は諸神の總裁におはします神なり此故に諸神の御たまはさま〴〵にてそのつかさとり給ふ所もわかれたれと概するにたゝ此天地の中をふみたまはさるはなきなりされは人よくその淑慝を混せすしてその中を言行とするは即この天之御中主神のすへさせ給ふ天地の中なるか故にやかて此神の御たまにかなひ諸神と

境をおなしくするわさならすや前に述たるかことく人まつ神と境をおなしくせされは神御ちからをかし給ふへからねはた〻〱淑慝の中を言行とすへき事肝要たるへし以上釋せる所を概していは〻凢庸の慝と思ふを今一段さけ凢庸の淑と思ふ所を今一段あけてさてのちその中を執るへしとの御敎なる也いまこのかたちを圖す

高天原
凢庸ノ天ト思ヘル所イハユル低天原ナリ
中
凢庸ノ地ト思ヘル所ナリ
底津石根

○予つら〱多年神典をみしに七神三段神世七代はおほかたわか御敎の大綱にして淤能碁呂島以下の件々は畢竟注解せるものなりといへとも猶くはしくいは〻へ天地初發之時於高天原成神名天之御中主神といふ十九字にとゝまる事にて下根の人はこの一部をまねふにもをよはす

たゞこの十九字の義をくはしく味はひて日夜の言行たゞ淑慝の中にたにつかは事は小大にかゝはらすたゞそれにてやむへき敎なる事あきらかなりかくいふゆゑをいかにといふに一部のうちはしめよりをはりにいたるまて件々その詞の表はさま〳〵にわかれたれとも概するにたゞこの或は慝或は淑にかたよりて中をうしなふ事をのみ返々いさめ給へれはなり一部のうちその證のこらすこゝに引くにいとまなしといへとも黄泉之件に（はしめは蒲子次に笋その次にこの文あり）へ到黄泉比良坂之坂本時取在其坂本桃子三箇待撃者。悉逃返也。尒伊邪那岐命告桃子汝如助吾於葦原中國所有宇都志伎青人草之落苦瀬而患惚時可助告賜名號意富加牟豆美命云 とみえまた千引石之件に へ尒引塞千引石引塞其黄泉比良坂其石置中各對立而度事戸之時云々また禊祓之件に へ上瀬者瀬速下瀬者瀬弱而初於中瀬墮迦豆伎而滌時云々とも又同件に へ洗左御目時所成神名月讀命次洗御鼻時所成神名建速須佐之男命また石屋戸之件に へ天香山之五百津眞賢木矣根許士而於上枝取着八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉於中枝取繫八尺鏡於下枝取垂白丹寸手青丹寸手而云々また遠呂智之件に へ老夫与老女二人在而童女置中而泣云々また五百引石之件に へ其妻須勢理毘賣命以蛇比礼授其夫云其蛇將咋以此比禮三擧打撥故如教者蛇自靜云々（同し件に へ於底津石根云々の語あり上にひけり又力競之件にもこの語みえたり又笠沙之件にもみゆ）また力競之件に へ其建御名方神千引石擎手末而來言誰來我國而忍々如此物言

云々これは上に引たる千引石之件の反なれは擧たり　また尾翼鱸之件に　へ是我所燧火者於高天原者神產巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝烟之八拳垂摩氐燒擧地下者於底津石根燒凝而云々　また八衢之件に　へ僕者將降裝束之間子生出名天迩岐志國迩岐志天津日高日子番能迩々藝命此子應降也云々　また同件に　へ居天之八衢而上光高天原下光葦原中國之神於是有云々また三種之件に　へ副賜其遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝劒云々また比良夫貝之件に　へ其沈居底之時名謂底度久御魂其海水之都夫多都時名謂都夫多都御魂其阿和佐久時名謂阿和佐久御魂云々　また木花之件に　へ尒其姉者因甚凶醜見畏而返送唯留其弟木花之佐久夜毘賣以一宿爲婚云々　また旡間勝間之件に　へ泣患之尒塩椎神云我爲汝命作善議卽造旡間勝間之小船載其船以敎日我押流其船者差暫往將有味御路云々　なとみえたるいつれも中をうしなふへからさる事をさとされたるをもてかくはいふ也言行こと〳〵く中を得ん事やすからさる事なりといへとも神典一部の議論こそ廣大なれたゝ淑慝の中を執るにとゝまれる簡古をおもひて誰も〳〵此御をしへの御うつくしみをかしこむへきなり上文に言行といふ事を所々にかけるは大かたにいふにてわか大御國は言行のふたつかうち言をはことに重くする御てふりなりそのゆゑはこの青柴垣之件に事代主神の御うへをまついひて次に建御名方神の力競之件をかゝれたるに思ふへし事代主神は言知主の義にてすへて言語をつかさとり給ふ神にます事くはしくは青柴垣之件にいふへし建御名方神はすへて行をつかさとり給ふ神とおほしく力競をいへりこの二神はともに大國主神の御子にて即青柴垣之件にへ僕者不得白我子八重言代主神是可白とみえ力競之件にへ今汝子事代主神如此白訖亦有可白子乎於是亦白之亦我子有建御名方神除此者無也とありてその下文にへ汝子等事代主神建御名方神二神者隨天神御子之命勿違白訖故汝心奈何尒答白之僕子等二神隨白僕亦不違此葦原中國者隨命既獻也とみえたるこの二神をはかくいへるは言行のふたつの神なる事うたかひなきしるしなりから國にては言顧行行顧言なといふか中にことに行を重くせりけに行は人として重

くすへき事いふもさらなれとかくから國にて顧といへるは食言巧言をいさめたるにてそれにも行よりは言のさきにたつ事はしるからすやされはわか御國ふりまつ言をさきとしたまへりこれ行は言にしたかふへけれはなりけに言はかりかしこきものはなし大かた事のやふれやふれぬたゝ言にある事なりされは言をつゝしむ事をはから國にてもかろからすいひ老子は多言不如少言少言不如不言ともいへれと人として不言にしてやみぬへき事にあらすそれもと渾沌のうへのさとしともなりさるはかの國のてふりなれはそれはたゝそれにてありぬへしわか御國人はさる詞ともにかゝはらすたゝ淑慝をよくわかちおきてひとへにその中を言とすへしこれ即いはゆる倒語にて行はおのつからその倒語にしたかふへきなりされは此御をしへたゝ淑慝をわかちて中をとる事をはねもころにをしへさとしたまへる也その簡約にして大要を得たる事思ふへし

古事記燈卷之一

上卷神典一

御杖大人自筆

古事記燈一

淤能碁呂島

先言

改言

古事記燈 神典

文化十四年丁丑十一月廿八日始援筆

于五條坊門審神舍

神道大意

神道といふ名孝徳紀にはしめてみえてそれよりよにその名をとなふといへともいかなる事ともさたかにとく人なくてたゝ此御教の名とのみ心えたり予年頃つら〳〵おもふに孝徳紀に惟神といふことを舍人皇子自注し給ひて惟神者謂隨神道亦自有神道也とあそはしゝ此隨神道とある事をよく〳〵考ふるに儒道佛道なといふかことくその道をふみて行ふ義にあらす神道といふは天地神祇(祇)のあひつき給ふ道にてその道に隨ふとはその道をふむにはあらすよろつ事の成功人力を用ひすして神力にまかするをいふ也しかれとも老子かいはゆる無爲にはたかひてその神力のたすけたまはむやうに言行をなすこれを隨ふとはいふなり祓禊之件に禍津日神直毘神をいふこの曲直をは心の曲直と心えて正直のとなへよにさかりなれと天若日子かみうせ給ふを麻賀留とあるを思ふに麻賀は心の曲りて正直ならさるをいふとせはこれにかなはす又禍をまがといふもいかなる故とも心えかたしされは思ふに此曲直は神道の曲直にて神道まかる時は禍となるか故に禍をはやかてまがとはいふ也神道のまかるといふ事をいかにといふに神道とは卽この神典に神名を次第したるその次序のみたるへからぬこれをは神の道とはいふにて前にもいへるかことくその神道に妨せすしてよろつ神力をたのむ時は

神道直く行はれておのつから福を賜ふにもし人おのか智をもて事を執る時はその神道を塞き神道塞かる時はそこにとゝまらすしてその道曲るこれ即人に禍をなし給ふなりされは隨神道とは神道の直ひのみゆくへきことをむねとはする也と心うへしその心えをは此一部にときしめし給ふくはしくは一部をまなひてさとるへき也この神道といふ名孝徳紀にはしめてみえたれは宣長ぬしは後世の名也としてうけられ(ママ)されぬよしいはるれともと此神典神武御卷の上にあるか故にしかおもはれけんかしつら〳〵此神典をみるに歌のすかたなとも却て神武御卷より末々の哥とも古くみゆる也されは思ふに此神典毛々那賀之件の哥ともの終に　へことのかたりこともこをはといふ詞そひたる雄畧の御卷の哥に又此詞そひたるを思へは此神典はその頃にやいてきけんとおほしなほ豊受大神を伊勢の山田にまつられしも雄畧帝の御代にてそのよし此神書にみゆるをもて後より上に冠らせたるものなる事しるへしたとひその五十鈴宮の事は後より書加へたるものともいふへけれとまへにいへるか如く哥のすかたかへりて後々の哥よりは古からぬをもてさとるへき也されは神道といふ名もいやしむへくもおほえぬことなりかし

儒佛の道各世のため人の爲にたてられたる教なれはいつれもあしとにはあらねとわか御國内にてたに國々鄕々にて風俗はかはるものなれはまして漢土天竺その風俗わか御國にたかふ事その國々の書

ともに明らかなりされはその風俗にしたかひて教もたてられたるなるへけれはわか御國人にはわか御國にてたてられたる御教こそ切なるへけれとて予は此道をのみもはら心にわすれぬ也たゝ風俗に切ならぬのみにて儒佛の道もあしとにはあらす學者心を用ふへき事なりされとわか御國人にしてわか御國の御をしへはかつてしらすしてたゝ他域の儒佛道をのみしれる人よに多かるはいとも〳〵あさましき事なり

神とは大かた人のめにかゝらぬ所に妙用おはします物也その神を以てをしへの本とし給ふはみゆる所は皆みえぬ所を本とする事草木の根より生するか如し此故に幽顯をたてゝ幽をのみとき外行のうへをはいさゝかもとき給はさる也されは治國平天下をはしめ士農工商の外事孝悌忠信のたくひひとつもとき給はぬは外行をは顧みぬ教のことくなれとしからす本をたにすうれは末はおのつから生し本深けれは末もまた長き理なるか故也此故に五倫のもちあひをはしめすへて人の外事外業にかゝはるへからすよにあらゆる外事外にてみる時はさま〳〵なれとたゝ此神道より生したる物なるをさとるへし學者此隨神道をしり用ふる所は各その自業のうへさま〳〵なるへし外行をもてをしへたるは勉强してしかなす勉强してなす時は畢竟心よりおのつから生したるにあらすこれわか國のいやしむ所也なにの業何の事にもあれしかせんかくせむともおほえすしてなし出らるゝこそまことのわさと

はすへけれわか隨神道の御をしへもはら外事を自然ならしめむかためなる上に勉强は永からす自然に生するは精神つかれされは也よく此けちめを味はひて此御敎のわか御國人に切なるを思ふへし

古事記燈

神典　　　　　　　　　　　　中臣御杖著

○淤能碁呂島之件　第一

於是天神諸命以乃至言依賜也

○於是と一件のはしめにかゝれたる所々はすへて上件の處をあらためすしてこの件ある事をさとされたるなり一件の中にあるも同し此故に於是とある所々は上件を場としてみるへき也之時とかける所々とはうらうへと心うへしされは此件もと天地間に人いまたなき時にはしめて人のうまれ出るさまをときたまへるにてその人のうまれいつる事ひとへに七神三段神世七代を場としてそこにうまるゝなりとのさとし也これ大かた人のうまるゝは神の命もちてたゝよへる國をつくりかためよとてうまるゝなりとの心也としるへし○天神諸これは上の七神三段の初中段別天神五はしらをさしたるなるへしそこにこと更に別天神と注せさせたまへれは也かついさなきいさなみの二神は卽神世七代のうちにおはしますをもておもふへし諸の字はすへて何諸と下につくる詞なる事宜

長ぬしか古事記傳にくはし○命以とは天神のこの二神に命し給ふよし也命といふ字は心をえてかゝれたるにて美許登は御言の心也もと神に御言あるべきやうもなきをかくかゝれたるにて倒語たる事をしるへしかく御言をいふをはしめいつこも〳〵たゝ人のうへとひとしく言語情態をもかゝれたるより神は卽人なるを神と唱へたる物也と心え來れるもことわりならさるにはあらねと倒語といふものわか御國の言の道なりともいまたたつねすしておしはかりに神人を混したる事私なる事ならすやかく人のうへとひとしくかゝれしは神もと無形にまし〳〵てその妙用をさとす事能はさるか故にかりに人に比してかくはかゝれたる物也されはこれ卽倒語なる事をさとるへき也○詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神この二神は卽神世七代の終にます神也神名の義はそこにくはしくいへるかことく伊邪はいさなふ義也那は乃のかよへる也岐美はおほかた父母のさとし名なり祝詞の神魯岐神魯美同し此末にも〻沫那藝沫那美頰那藝頰那美なとみなこれに同し畢竟この二神は人うまれはしめし時の父母にてましますも前にいへるか如くこの件ははしめて天地間に人ひとりうまれ出たるさまをとかれたるなれはもとより父母あるへくもあらす卽この二神を父母として人のうまれはしめたるをとき給へる也されとこれ又倒語にて人のうまれん事父母なくてうまれんやうはなけれと父母ある時ははしめて天地間に人のうまれ出たるさまにはみゆましけれはかく神のうま

せ給ふになしてかゝれたる也しかれとも此二神やかて父母にはあらす天神より修理固成の命をうけて父母の交接をなしそのうむ子の心身をもちわけてやとり給ふ二神也されは所詮は心身のおやなりと心うへし〇脩理固成云々この多陀用幣流之國とは卽中段なる〽久羅下那洲多陀用弊琉云々をこゝにいふにてそこをてらしてみるへきなり詞の表は國のいまたなりかたまらすして泥のことくあるさまをいふにてそれをつくりかためて人のそこに住まるへくなすをいふ也その實はおほかた人の見解さま〴〵の教にもより又みつから思ひとりたる所に依て心を決し安んしたるやうにおもふ物なれと時にのそみ事にあたりては惑も生し疑もおこる事人々まけし心にてさらぬかほをこそつくれ悉くしかりかく疑惑の時に臨み事に當りて生するは決したりと思へともいまた決せさるしるし也この決せさるこれを多陀用幣流といふさてしか心の所置決せさる時はおほかたわか身は心の所置する所におくものなれはさる人は身を安くおかるゝものにあらぬ事なるをはかく多陀用弊琉之國とはいふなりと心うへしこれ又天地間に人いまた一人もなきにいかてかかゝる事あらんやと人うたかふへけれと天地間人ひとりもいまたなきになして始をとかれたるは此御教をしらさる人は人にあらされは百萬億兆ありてもなきにひとしけれはなりとしるへし中段にはしめて〽多陀用弊琉之時といひこゝに二神に天神の命し給ひし他の事はなくてたゝ脩理固成を任し給ひしをみ

れは此神典一部の大要もはら多陀用弊流之國をつくりかたむるにありよく〳〵此義をあきらめて一部を尺せるに照しみるへし脩理といふ事五百引石之件にいたりて　始國作也とあるによりてつくると訓したるもの也されとつくるといふ事此作の字のことくはしめてつくりおこすにはあらてもとよりあるものゝそこなはれたるをつくりなほす心なるか故に脩理の字をあてられたりとおほしき也その故はこゝに始て人のうまれたることをとかれたれとも此道を弁へさる人はありてもなしとしてとき給へる物なれはまことは世に人はみちたるなりその人々みな多陀用弊琉之國なりされとももとさる人々とてもたゝよへるはおのか私意にて固かるへきが本然なるにその本然にそむきたるをもとにかへす御教なるか故に脩理とはかゝれたる也此故に詞の表は始てつくりなすがほにてまことはそこなはれたるをなほす事也とのさとしなりと知るへし固成とは表はかの泥土のこときを堅庭になして人もすまるへくなすをいふにて心の決定かたくなりて此のちゆるぎくつるゝ事なくおのつから安かるへきをいふなり毛々那賀之件の哥にへもゝなかにいはなさむを云々又へもゝなかにいをしなせ云々　とあるこのもゝなかは股長にて里言に足をふみのべて寐るといふに同しから人の枕を高くすなといふ心なり寐たるほとまて安くなるを固成とはいふ也されとこれしひてかたく守るなといふに混すへからすわか御教はこれにかきらすすへて勉強を用ひすおのつから固

きを固しとはするなりされは神道に隨ふ事をは神典一部にとき給ひし事いと深切なりといへとも
わか身を置くへき決心のたゝよひてはなに事もいたつらわさとなるへけれは此道の基本たゝ此脩
理固成是多陀用弊流之國といふ語にありとしるへしこの故になにをもさし置てまつこの事をは天
神の命し給ひしなり○賜天沼矛云々この沼とは鈴の事なるへし此末宇氣比之件に（奴底ゆらくもゆ
らに云々とある奴これ也顯宗紀に置目かために鐸を懸させたまひし時の大御哥に（奴底ゆらくも
よおきめくらしもとよませたまひしこの奴底をは鐸の字をあてられたりこの鐸はいはゆる木鐸金
鐸なといひて今の鈴のかたちとはかはりたるへけれと鐸の字は舍人皇子のあてさせたまひし字な
れは此字になつむへからすたゝその本なる奴底といふ名によるへしそこに鐸の字を奴里底と傍訓
したれはもとは奴里底なるをはふきて奴底ともいひ又はふきて奴ともいふなるへし今この奴をは
鈴なるへしといふ所以はこの神典中鈴といふ事一處もみえすたゝ大御寶之件に（五十鈴の宮とい
ふ事みゆれとこれは後人の書かへたるにやとおほゆるよしもありその餘にはかく奴とのみあれは
也今の世までも鈴は神前にはなれぬ物なるに神典になしといふ事あるましき事なれは奴は鈴の古
名なる事おもふへし矛とはすへて突く器にてきる用にあらすされは表は鈴をかさりにつけたる矛
の事にて誠は男根のかたちを表せられたる也その故は鈴の形男根の　頭に似たり幹は矛に似て女

根のうちにさしこむものなれはかくは表せられしなるへし淡海國のいつことかの社傳に鈴は男根を象れるものなりといふとある人のかたりしはいと心にくき事也天何といふ名これにかきらすいと多かるは大かた地にある物はたとひ千里をへたてたりともゆかはみらるへし天なるものは張騫なとか妄說こそあらめゆきてみらるへきものにあらねはたゝおもひやるはかりなるもの也されは天何といふはすへて虛象なりとのさとしの爲也と心うへしされはこゝもまことに奴をもてかさりにつけたる矛にはあらてそのかたちを思ひやれとの心にて天沼矛とはいふ也としるへき也さてこれを天神の二神に賜ふといふはまへにいふかことく父の男根卽これにてたれとはなくてたゝ父となる人の男根は天神のこの二神にたまへるものなりとの心也人の身にある男根なるをいかてか二神に賜ふとはいふそといふに人みな父母交接して子を成すとのみおもへれと子を成す事實に天工にて父母の力のなす所にあらさるこれ天神の沼矛を二神に賜ふ所以なる也大かた子をうむは母の用なれと子をなす始は父の男根にありこゝをもてかくはとかれたる也〇言依賜也くはしく古事記傳に尺せられたるか如し畢竟言をもて依せさせ給ふといふ也されは命し託するをいふ詞也萬葉集中おほくよめる詞なる也以下天神の命し給ふ所をとくこれ世に子をなすの本源をしめしたまへるなりよにあらゆる人々たゝおのつからうまれ出たるものゝ如く心えたれとももと天神の二神にか

く命し給ひてたゝよへる國を脩理固成せとて人はうまるゝものなれはしか心えて脩理固成を基本とすへしとの御をしへを思はせられたる也

故二柱神立天浮橋而乃至引上時

○故とは卽上の天神の命し給ひしことの趣よりおこるよしをいふなりもはらこれ脩理固成の事のゆゑに二神子をなすわさをなし給ふよしをいふ也○二柱神こゝに人うたかひをいたくへき事ありもとこゝの御わさともは父のわさにて母のわさにあらすこの伊邪那岐神は男神也伊邪那美神は女神なれは伊邪那岐神一柱こそこの御わさはし給ふへけれとそおほゆへきしかれとも此女男二神をはやかて父母とおもふか故也まへにもいひしかことく此二神父母にはいませともやかて父母にはあらすその子の心身をもちわけてやとり給ふ二神にましまず也されとも脩理固成の事子をなしてのちその心身にやとり給はてはあたふましけれはまつ父母をして交接なさしめ給ふ也その交接のうへにてみれは父母のわさは卽この二神の御わさなれは父母といはむにたかふ事もあらねと父母とかきりて思ふはかたよれりくはしくこゝを思ひ弁ふへしこの故にこゝに二柱神云々とはかゝれたるもの也○天浮橋とはこれ又かの天何の類にて虛象のもの也末にも此名出たるもこゝに同しく天人の間をはさしていふ名なりもと天と人はその間へたゝりてかよふへき道はなくみゆるこれ河

の兩岸を隔たるかことししかへたちたる河も橋あれはわたらるゝかことく天人の間に通ふ道あるこれを天浮橋とはなつけられたるにて畢竟天と人の通ふ所あるその道の名なりとしるへしこれ二神のやとり給ふへき子のいまたいてき(マヽ)さるほと天人の間におはしまして父母をして交接せしめ給ふさまをいふ也○指下共沼矛云々　これは女根のうちへ男根をさし入れたまふさまを云也○以畫者畫とは假名にてそのさし入れたる沼矛をわか方にぬきいつるさまをかくとはいふ也されはこれ男根の女根のうちにて　するさまをいふ也○塩許袁呂々々迹云々　塩とは潮なり女根を海にたとふる事一部中みな同しされは精をは潮とはいふなり海潮もとねばりありて地のあらゆるねはき物より潮となりてやかて天地を保つに同しく人身中飲食のねばり精となりて心身を保つなり交接の間はしめは施すといへともその精薄し薄きほとは音もせぬもの也そのうすき精かの男根するにしたかひて漸々に濃くなる濃くなる時は女陰中に音をなすこれを許袁呂々々迹畫鳴といへる也かの葛餅蕨餅といふものを練るにてこゝの語意を思ふへし許袁呂とは凝る心也これをかさねたるは凝ることのかさなりゆくかたちにて即精のうすきか濃くなるを許袁呂とはいふ也すへて重詞は皆かく一事ならすかさなるさまをいふ例也　へゆくら〳〵　へあなはら〳〵　へゆく〳〵　へみる見るなとの類おもふへし畫鳴とはかきて鳴るまてになすといふほとの心也しか鳴るまて濃くな

れるは情足りぬる時なる也されはこれを極とはし給ふ也○引上時引上とは男根をは女根よりぬきとるを云これ交接の終也まへに女の精の凝るにいたれることをのみとき給ひて男の方の情足りぬるさまはときたまはされとも引上といふにおのつから男の方もこもれりこの故に此下文に男精の施すさまをかゝれたるなり

自其矛末垂落之塩乃至是淤能碁呂島

○矛末よりしたゝるとは男根の　頭より施す精の事也これをもても沼矛は男根なるへき事おもふへし前にいへるかことくこれ男の情足りたるしるしなり○累積とは女の精の上へ男の精のかさなりつむを云男女の二精ひとつになりて子をなすさまをかゝれたるなり○成島この島といふは母胎のうちにやとれる子の事なりいかてかこれを島とはいふそといふに島の訓しまといふはもと狭（セマ）のうつりたるにて海中なる地のせまき所をは島とはいふなりされは人一人とりのきたるは即狭き地のことくなれはかくは比喩せられたる也此末大八島なとも島の義はこれに同し猶そこをあはせて思ふへし○是淤能碁呂嶋とはこのはしめて子となりたるそれをは名つけられたる名也淤能は自（オノツカラ）也碁呂は（上につゝく時は必濁るは濁音のつね也されはこれは凝るといふ也）上の許袁呂に同しく凝る也自ら凝る嶋といふ義也この自とはもと子となる事天工にて人工の能はさる所なれは也凝るとは男女の二精の凝りて一物となるを云

しかれとも表はさる心にてまことは天地の渾沌をいふにてその渾沌自然の事なるよしをさとして自凝とは名つけられたる也としるへし七神三段のはしめへ天地初發の下にくはしくいへるかごとく神代卷にはまつ渾沌をいひて開闢をのへたまへるに此記は初發よりいひはしめて渾沌をまへにいはさるは渾沌は人のおのつからなる質にて初發はわか御教のうへなるか故也されは此件にはもはら渾沌のやうをときその渾沌人の心からなすにはあらて自然に天地（これ心身なる事はしめにいふか如し）ひとつになりて人一人となるものなれはそれにあやかりて人みな天地の二性をわかつ事あたはすしてひとつになすこれ自凝の所謂なるそかしはしめにいへりしか如く七神三段神世七代はわか御教の肝要をとき給ふにて此件より以下はその義をくはしくとかせたまへるなれはこゝにまつ自凝島をいひて人は渾沌を質とするものなる事をさとしたまへる也されは此次下の件々みな渾沌の弊をとき祓禊之件にいたりてはしめて初發の義をとき給へりもとこの二神脩理固成を任とし給へはその事をのみとかるへきにかく渾沌のはしめをときその任にたかひて渾沌のうへにてさま〳〵事をなし給ふよしをかゝれしは人の渾沌もとやむことをえさるものなるよしを思はせんかため也

於其島乃至見立八尋殿

○於其島天降坐とはこゝをはしめ天降のことをいふは天神の人身に含り給ふことをいふにて早覚

天神の人事にかゝるをいふ名也としるへしこれ前にいへるかことく此二神の人身にやとり給ふことをいふにて男神は心をつかさとり女神は身をつかさとり給ふ事次下の件々を經ておもひあきらむへし○見立はともに見は假名にてその立させ給ふをあかめていふ也ミの義ははしめの天之御中主神の下にいへるをみるへしくはしくは古事記傳にみえたり天之御柱とは柱は上古は今いふ堀こみ柱にて土を堀てたてたるもの也伊勢神宮の柱のことし此故に神典中柱といふは悉くその心をえてみるへしその比喩の天の空氣の人身中に入りたるをいふ也人身はもと地の化成なる事天地初發の下にとけるか如くその地の中にさしいりたれはかくは表せられし也龍田風神をは天之御柱國之御柱と御名を申す風は人の呼吸にあはせたる事此下の風神の所にいふかことしされは人身中空氣あれは卽そこにて呼吸するものなるか故にやかてしかも御名つけたてまつれるなるへし八尋殿とは八は頭胸腹陰左右の手足をはいふ也下の迦具土神の八の山つみ又伊邪那美神の八雷神にてしるへし猶大宜都比賣の八所は竅をのみかそへられたるにてこれとはことなれともなほ八所なりされは神典中八の字あるはみな人の一身を八處にかそへていふなりと心うへしから國にて八卦をはしめ八の數を貴ふか故にそれをいみたるにや八は弥(イヤ)の畧なりといふ說よにひろこれるみやひかなるやうにていとなか〳〵也まのあたり八ツにかそへられたるをはいかてかよそにはみるへきされは

八とは一身の八處をかぞへたる也と知るへし一部のうちこの八尋殿をはしめ八島國八俣遠呂智八門八佐受岐なとの類いと多きはみなこの義なる也此八尋殿の事くはしくこゝにとかまほしけれと神道の本意こゝにある事にてあまりに近き理なれは學者かへりて此神道をあなとり生涯厚くとり行ふへき心もうせかつ志なからん人はかへりてそしりもすへきか故に人々の志をみて此義を口授すこの故にこゝにもその尺をはふけり末にもかゝる所々あるは皆この心えをもてしるへし母胎のうちにして子となるはしめはたゝ一塊の物なるかその一塊物のうちに空虚いて來て活物となるこれを天之御柱をみたつと云さてその一塊物に八處具足すこれを八尋殿とはいふなりと心うへし〇此一件の大意まへに尺せるかことく大かた世に人ひとりのうまるゝさまを形容したまへるなれと凡庸のみる所はたゝ父母交接して子をなし人となる事とのみおもへれとも交接こそ父母のわさなれ子を成す事は人力の及はさる事にしてしかもはしめはたゝ一塊のものゝ活物となりて四肢五體の用をなす事もはら神功による事なるよしをさとしかつよに人一人のうまるゝ事ひとへに多陀用比をつくり固むるを詮とすへき天神の命なる事を思はせて學者の志を決せしめ給へる也されとも天地初發の下にとけるか如くもと人の心身は天地の化成なるをその天地ともによりて人一人となるか故におのつから其情天地の二性をわかつ事をえすしておほかたの物事ふたつをそなふる事

を好ます一つによりて心を安くするこれを渾沌と云この渾沌の見もとふたつにもつへき物をひとつとするか故によろつの決斷時にのそみ事にあたりては必たゝよふものなりこれをあはれみて天神此たゝよひをつくり固めよとて人はうまれ出しめ給へともかの渾沌の性やむことをえすして脩理固成のかたき事をはおのつから此淤能碁呂嶋といふ名におもはせられたる也されと人ひとりのうまるゝはたゝたゝよひをつくりかためよと天神の命し給はむかためにて一塊の物を活物とし給ひ四肢五體をそなへさせ給ふ也としれとの心なる也

○第二　先言之件

於是問其妹伊邪（那脫）美命曰乃至成餘処一處在

○此二神の問答は人ひとりの體內にての事なりまへにいへるか如く伊邪那岐命は心をつかさとり給ひ伊邪那美命は身をつかさとり給ふ神におはします也上件にもとけるをあはせてしるへしなにゝよりてかく定めたるそといふにこの成々而成不合処といふは女根のかたち成々而成餘処といふは男根のかたち神代卷には卽雄元雌元とかゝれたりこのふたつをくらふれは成餘は尊く成不合は卑しこれおのつから尊卑は天地なれは心身をつかさとり給ふ二神そとはさたむるなり上件に天沼

矛とかゝせたまへるは男根をつゝみたるなりこゝの成餘処といふはそれにたかひて男根を表として心の性をつゝみていふなり大かた古言をみむやう表にしたかひて内をはかるへき事かくのことしよく〳〵思ひ弁ふへししかれともたゝ天地の尊卑をあやかれる心身の性をさとさむためはかりならはことさらに男陰女陰の餘不合をいふに及はは(衍)さる事也かれ思ふに成餘とは名欲をさとし成不合とは利欲をさとしたる也とおほし餘と不合の字義を味はひてしるへし神代巻一書に大巳(己)貴命少彦名命とゝもに天下を經營し給ひし時大巳(己)貴命少彦名命にとひたまはく吾所成之國豈謂成乎少彦名命對曰或有所成或有不成是談也有幽深之致也とあるこの成不成は卽こゝの成餘成不合に同しくて一身いかはかり脩したりとも成れりといふへきものにあらす心は天の性を禀たれは成り身は地の性をうけたれは不成なるならひなれはこの心身の二性人のまぬかるましき事なるか故に或有所成或有不成と心うへき事人の一大事にてかく心うる時は外行おのつから宜しきに叶ひ洪福を自得すへし此故に有幽深之致とはおとろかしおかれたる也これにあはせてこゝをみれはこの餘不合は卽一身の上にて名利二欲を具したる心身の二性たる事明らかなれは此二神は心身をつかさとり給ふ神也とはいふ也猶この事けに幽深之致にてこゝに尺しつくしかたき事あれはもらしつ學者心をもちふへき事なりしかるをかく二人の問答のやうにかゝれたるは心身のもちあひ詞をもてと

きかたけれは也古來神學者流これを心身のあはひとみる事なくひたすら詞の上に縛せられてまことに男女二神の御うへと心え此雄元雌元をまことの男女根とみる事倒語の道をうしなひたる世のならひなれはことわりなる事也上件に人ひとりのうまれいつる事脩理固成せよとの神命による事なるよしをときさて此先言の件にはしめてかく名利二欲をとき給へるは渾沌の性やむことなくて此二神脩理固成を任とし給ひなから猶凢庸をまぬかれさるよしをしめし給へる也されはこの件よりは凢庸の人のはしめをときしめしたまへるにて神の御うへにはあらさるをいかなれは人とははて猶この二神の御わさとはとかれたるそといふに大旨にいへるか如くかく凢庸のうへより次第に脩理固成にいたる事これ卽神道にてこの先言之件より終にいたるまての次序いさゝかもみたるへからさる事也此故に凢庸のうへのことくなれとも猶神道なる事をさとるへし汝身吾身なとあるはかりに心身を二人としてときたまへれはなり

此名利の二欲のまつはしめにかくとかれたる宜なるかな身內にてこそあらめ外行に出ては善惡二事となることのもとなれは也されはこゝよりの論もはら善惡二事の源をときしめし給ふ也と心うへしもと善惡の名は外行となりてのうへにありていまた身內なるほとは善惡の名はおほせかたし身內にしてはたゝ名利二欲也わか御教大かた神の道をとき給ふ事すへて人の外行の本源をさとし

給へるものなるか故にめにみえさる所を主とし給へりされは學者その心をえてすへて身内のうへにてみるへき也

故以此吾身成餘處乃至然善

○故とは成不合処成餘處たかひにある事心身の本然天地の二性たる所謂にて人としてやむことを得さる故にとの心也○以此吾身成餘處云々とは詞の表は交接のさま也これ交接を詞として心は心身のうちあふ所をときしめされたるなり前件交接を情としたる詞つくりに混しおもふましき也この心身のうちあひといふは心の方はおのつから天の尊きをうけておのか名となるへき事を欲す身の方は地の卑しきを稟ておのか利となるへき事を欲すその利を欲する情を達せしむるは名を欲する情のこのむ所卽利を欲する情も亦このむ所なる事男女交接してたかひに情適するか如くなれはその交接のたかひの情をもて心身の性のうちあひをつくし給へる也〈爲生成國土奈何といふは國土とはまへにいへるか如くすへて國は人々の住む所なれは身を置く所の決定にたとへたる事一部皆同しされはこゝも國土といふはわか決定の事にてまつ心身のうちあひをかやうにし置て決定をたてむとおもふはいかにとの心也詞の表にてはいまた此時國あれともたゝよひて人すまるへき土にあらされはかく交接してたゝよはぬ國土をうみなさむはいかにとの心也國を生むといふ事詞の

表にまとひて古來學者さま〳〵に思ひを費されたりこれさせる故ある事にあらすこゝは男女交接をもて詞とし給へるよりそれに隨ひて生とはいふにてうむにはあらすまことはかの天神の命し給ひしたゝよへる國を脩理固成す事にてそのかため成すをこゝにては生成とかゝれたるなり成の字は固成生成一律なるをもておもふへし所々によりてかくさまに書かへられたる事一部の書法にてもと上古倒語を用ふる常也山といへは兎猪なといひ海といへは和迩赤鯽魚なといふかことしなほ哥をよむにたとはゝ松にすかる時は枝葉又年久しきことなとよみ鳥による時は翅あさり又木に棲み朝たつなとよめともその情はたゝひとつなるをもてこゝの書法をもうたかふへからすされは生といふ字は畢竟交接の縁より出たるにて猶固成の義とみるへしおほかた儒教も正心誠意脩身齊家平天下と次序し佛教も人間天上声聞緣覺菩薩佛と次第したれはとにかくに人はまつおのれをさきとして人に及ほすへき理なる事いふも更なり此故にわか御教もかくまつ人をさしおきて一人のうへを定めしめ給ふなりこゝの表彼我のこと書なされたれはしかにはあらすやとおもふ人もあるへけれと前にもいへるか如くもと天地間に人ひとりもいまたなくて今はしめて一人うまれ出たる時になしてかゝれたるにてかく彼我のことくかきたりとも彼我とは人おもふましきことゝてかくはかゝれたる也されは一人のうへにて彼我のことくふたつある物は心身より外なきをもて今かくは

これを尺せる也○然善とはかの利欲の方の情にもかなふよしをさとされたる也けにわか名欲を以てわか利欲を達しゆかはこれにまさる事あるましき事也たとはゝねふたき時はいかなるさはりありてもみつからゆるして寐またゆかまほしき事ある時なにのさはりありてもみつからゆるしてゆかはよにおもふ事はあるましき事也されとかくのみしては世のゆるさぬ所なるか故に人皆これを愼みてしかせまほしとはおもひなからしかもせぬ也されはこれいふにも及はすときしめさるゝにも及はさる事なるをこゝにかくときしめされたる事もとわか御國言のつねにもたかへるやうにてうたかふへき事也こゝにおきてふかく思ふにこれわか道の一大事にてあらはにこゝに尺しかたき深理あれは今こゝに尺をもらして篤志の人には口授すへしされはかくいふに及はさることの如きをはかくはかゝれたる也古言にいふに及はさるかことくおほゆる事をわさといはれたるもあるはみな所謂ある事也詞の表にてもよく思へは猶これ倒語なるは人々かくわか名欲もてわか利欲を達せはうへなき事とはしりなからふかく愼みてこそあれまことは人の情のいたりこれを極とすしかれとも人皆つゝしみたるうへにてみれはかゝる情はなきものゝことくみえ人毎にかゝる情ありやとゝはゝ皆まけし心にてなしとそ答へましされは各かゝる情はありてもなきになしてみつから情の第一にたつ所也とはしらてあるものなるか故にそこより此件はかゝせたまへる也かくしらは倒語ならさるか如き疑はとけぬへきなり

尓伊邪那岐命詔然者乃至美斗能麻具波比

○然者とはいさなみの命然善と同意し給ひしをうけたる也そこにもしか同意ならはとの心也○行廻逢是天之御柱とは天之御柱は前件にあるにおなしく人の身内の空虚に天の昇降の氣のかよひて人の活たる所謂のもの也しかれとも天之御柱とはたゝその身内の空虚の名なりこゝに行廻とあるは卽その空虚に昇降の二氣のかよふ事にてこれ卽呼吸なりとわかちしるへし逢とは二神のゆきあひますを云これ呼吸の理にはたかへる事也その故に昇降二氣もと東よりのほれは西より降りて昇降二氣のゆきあふ事なしこの二氣呼吸となりて呼吸もまたしかりしかるを心身をはかくうちあはせて心をわか身と夫婦のことくなすは昇降呼吸の道理にそむけるか故にもと呼吸は人のこれによりて活たる物なれはおのつから壽も久しからぬ理なりこれにしたかひて天下國家一身一業も亦長からすなりゆくへき也しかりとて呼吸やかてとゝまるにはあらねとその意かゝる時は呼吸もおのつからとゝまるにいたるへけれは也しからは此心身はいかに心うへき物そといふに此末にいたりて千引石之件に夫婦離散の事をとかれたるかことく心身はわか物なから夫婦のことくはすましき事をゝしへ給へりくはしくはそこにいふへしゝ美斗能麻具波比とは美は例のたゝへ詞也麻も同し此末にもゝ美刀阿多波斯都とある美刀これに同しこれを思ふに前件に女陰をも海にたとへられた

るより考ふるに斗は水門(ミナト)の門(ト)にて○如此かたちなるをもて比喩せられしなるへしされは表は水門の事にてまことは女陰の事なりと知るへし具波比の具は麻につゝけるか故に濁音としたるにて久波比也くはひはもと咋といふことにはひといふことの添ひたるにてくふとは何ことにもあれ双方のうちあふ事のたくひなきことをいふ也その本は飲食の味はひの口腹にかなふより出たる詞にてうましといふに同し筋にてうましは心に思ふうへにていふ也久波比は形のうへにていふかたかへりへ花くはしへいすくはしへまくはしへくはしめへ名くはしなといふくはしも猶同し詞にてくひの宜しき心也萬葉卷　　にへつぬのふくれにしくひあひにけりとよめるもこれ也古事記傳にくはし今里言にもくひあふしくはすなといふこれに同しはひといふは詞の下につきたる例多しへなりはひへあちはひへよはひなとこれ也此詞はすへてその事に活用をあらせていふ詞なるへしあちといふは物にもてる味を云それをあちはひといふ時はその味の活たる所の用をいふ名となるかことくくふといふは物のくひあふ事なりこれをくはひといふ時はそのくひあふ活用をいふ詞なる事おもふへしくはひはくひあひの義也といふは心ゆかすくふといふにくひあふ義はこもれる也されははひは今いふかことく心うへき也これ男根の女根に入るくひあひたとひいかなる妙工とてもかはかりのくひあひはつくりなすへからぬ事なるをもてかくは名つけられたる也これ久表は交合をも

ていへともまことは心身の二性心は名を欲し身は利を欲するにわか名欲をして利欲を達せしむれは名欲もかなひ名欲叶ふは即利欲のかなふ所利欲のかなふは即名欲のかなふ所にしてその都合よき事男女の交接男の情かなふは即女の情のかなふ也女の情のかなふは即男の情のかなふ所なるかことくなれは比喩したまへる也こゝに天之御柱をめくり下文に男は左旋女は右旋しさてあなにやし云々の言擧することをかゝれたるはもと婚礼の古式なるを用ひかられたるにやとそおほしき與に葬式あるをもてもおもふへしその餘事のよせによりて設出られたる事ともゝ多けれとその世にありける事實なとをやかて比喩に用ひられたるへくおほしき所々多しその處々をあはせて思ふへき也

如此云期乃至我者自左廻逢

○之の字は云の誤ならんと古事記傳にいへるにしたかふへし○云期とは夫婦約定し給ふを云也さて女神は右旋とさため男神は左旋とさため給ひし事は男神は天とし女神は地としてむかへてみれは男神より汝か右と仰られたるは即男神みつから左とのたまへると同し方也これを昇降の二氣にかへしてみれは天よりの左も西方なり地よりの右も西方なりこゝをもて廻逢とはいふ也もと昇氣は天の右よりのほるこれ東方也降氣は天の左よりくたるこれ西方にて東より昇れは西より降り西

より降れは東より昇りて昇降の二氣ゆきあふ事なきなりされはこゝはまへに〈行廻逢是天之御柱とあるを今ひとたひくはしくいはれたるにて暗に昇降の二氣のめくりをおもはせむかため也左右の事こゝにかきらす奥にも所々出たりみなそれ今いふかことく昇降の東西をわかちしらせむかためなる也その處々にいたりて思ひあはすへし

約竟以廻時乃至愛袁登賣袁

○以上は二神の約定し給ふ事を云こゝよりその約の如く行はせ給ふを云此故に竟とはいふ也○伊邪那美命先言云々まへにいひしか如く婚礼の古式にかく言擧せし事あるにより給ふなるへし阿那は里言にあゝあらなといふ詞也迹は經緯五十韻の事也奈經の第二音なり此經すへて物にうちあふ事一物のことくなりたるをいふ也されは袁登古をえたるわれとのうちあひたゝ一人のことくおほゆるをいふ也上に神世七代に〈宇比智地迹須比智迹と申す神名の迹即これ也兄を阿迹といふも同し姉を阿祢といふも祢は即迹と同し經なれはかよはしたる也としるへし神代卷妍哉とかゝれたるは此心をえてあて給へるもしなれと此迹もしの義にはかなへりともおほえすかし夜志はともに脚結なり萬葉集中に〈よしゑやし〈はしきやしなとに同し与之といふ脚結もこのうつれるなり夜は詠のやなり志はすへてそのすちのたしかにたちたるをいふ脚結也されは夜志とはかはかりうちあひよき男なりとはいかなるゆゑ

そとまて思ふ事のすちのいかに思へともうちもゆるかぬよしをさとしたるにて所詮はかはかりの男また他になしとの心をいふ也愛は假名にてよきといふ也みよしぬを美延し野といふか如しよきをとこをといふ也下の袁といふ脚結はまへにくはしくいへるかことしこゝもよき男を得たりといふことをはふける也ともみるへけれと上古にかゝる袁を用ふるは用ひはなてるか多しこれもその例にみるへしその心は得かたかるへき男なるを得たりとふかく悦ふ心也はふきたりとみると此をもしのうちに含めりとみるとはいたく思ひいるゝ所たかへは也男神の言擧も猶その意はこれに同し袁登古袁登賣といふ名は男女配偶する時の名なりつねには袁能古袁美那といふその證とも予の土左日記燈にくはしく弁しおけるか女神まつ此言擧し給ふ事不良なりと下にいへるはかの婚礼の古式男よりまつ言擧する式なるか故なるへしさらすとも女は男にさきたつへきものにあらされはから人も牝雞あしたすといへりこれを詞としたるものにて心はわか利欲をはわか名欲して達しゆく時は名はかへりておくれ利の方先となるものなる事をいふ也前にあけたるたとへのことくねまほしき時はねゆかまほしき時はゆくはもとわか名欲もてゆるしたるよりのわさなれとしかのみする時はたゝ利欲を達する事主となりて名欲のゆるしたる也とはいふへからすなりゆく也この理を思はせむとてかく女男神の御言擧の先後をもてさとし給へる也

各言竟之後乃至女人先言不良

○女人先言不良の義まへにいへるかことし不良はよからすともさがなしともよむへしと古事記傳にいへり神代卷には(不詳)とかきてさがなしと訓したりされは猶さがなしとよむへしさがなしとはさがは物のならひ又ものゝ定式なといふほとの心にてさがなしといふはものゝ常とはならさる事からをいふ詞也江談抄にへ無惡善と落書したるを嵯峨の帝小野道風をめしてよましめ給ひけるにへさがなくはよかりなんといふ事也とまをしたりしに嵯峨なくはよかりなんの心なりしかは道風か書たるならんとて御けしきあしかりし事みゆ此さがなくはといふはさがはあしき事をいふ義とみゆこれにかきらす後世にはこれに同しくさがとはあしき事ぞと心えたる人もおほけれとしからすあしくともよくともよのならひとなり常となりたるは皆さがといふへきか故にさがといひてあしきさがなる事を思はせていふ也その一方に片よりて思ふましき也されはさがといふはあしきさかといふへきを含めていふ也さかなしといふはよきかかのなきといふ心にみるへきなり何事にもあれ世におしなへての常とはしかたきをいふ義也されはこゝも女人先言はよのならひとはしかたき事也との心なる也心はまへにとけるかことく利欲さきとなりて名欲はなきかことくなる事はけに世のならひとはしかたき事なれはその理をさとしてかくのことくときたまへる也

雖然乃至入葦船而流去

○雖然とは女人先言は不良なりといへともわか名欲もてわか利欲を達するより外にはすへき道もあらさるやうにおほしゝかばとの心なり○久美度とは子産處(コウミトコロ)といふをつゝめたる也こうの二音をつゝむれはくなれは也處はどとのみいふ事例多し へたちどへ なといふこれ也されはこれはまさにそこにて子うむへき所にかまへたる處をいふなるへしやかて產屋の事ともいふへし又產屋の內にて子うむへき場をかまへたる所をもいふへしさて興の字はたちてともよめりおこしてともよめり今思ふにおこしてといふは他よりのわさとなるか故に必下にもそのうちあひの詞あるへきにへ御子水蛭子をうみ給ふといひては自他混すへけれは猶たちてとやよむへきされとたちてといはんやうも心えすもしおきてとやよまゝしもししからは子をまさにうまむとする時は今まて臥たりしもおきてうむものなるかゆゑにいふにやたちてといひてはそれにも叶はす聞ゆれはなり此詞末の櫛名田比賣の御子生の所こゝと一部中二所なり御子生はあまた所あるに此詞二所にのみみえたるはかならすゆゑあれはなるへしかれ思ふに自然にうまるゝにあらてすこしうみいそきする心にかくはいふにや又木花之佐久夜毘賣なとの御子うみは御はらの急なるにしのひ給はすしてうまれ給ひしよしみゆれはそれにむかふれはすこしうまれかぬるをうむ心にもやあらん猶可考いつれに

もあれたゝ平産のかたちにはあらさる事二度の外に此詞なきにてしるへしこの二説のうちよく〳〵思へはうまれにくきをうむ心こゝに切に聞ゆその故はもと女人先言して不良なるか故に御子はうまれかね給ふへき理なれはなりされともこれより外のわさなき事のことくおほしけるよりうまれにくきをしひてうみ給へる心にやとそおほしき　へ生子水蛭子とは水蛭としも御名つけられしは此時いまた國稚たゝよへる時にて泥土のことき時也その泥土のことき中より生する子なれは水蛭とはいふなるへし水蛭は泥中に生すれは也されはたゝ泥中より生するより御名とせられたるにて泥中に生するはかりの子なれはなにの用にもたゝさるよしを思はせられたるにや神代卷にはこの御子へ至三歳脚不立とあるをみれは三歳になるまて脚たゝぬ子は生長のゝちとても廢人たるへき事今よりしるき也よに驚風なとの小兒三歳四歳まてもえあるかす目なとものえみわかぬありその驚風ふと治したるも生長のゝちは盲目あるひは蹇なとにもなり或は獃子なとになりて生涯世の廢人なるかことし猶神代卷なる語意をよく〳〵おもふに　へ脚不立といふ事必さとし詞なりかれ考ふるに至三載脚不立とは人のありくへき比もありかぬをいふ心なれは成長のゝちもわか一身をかくる嗣とする事あたはさる思慮を云也うむといふはかの名利二欲を夫婦としたる間より生する意の事也利欲さきとなる時は利にもとつくかゆゑに一身をかくるはかりの思慮は出さる事つねな

るそかしへ入葦舩而流去とはさる一身をかくるに足らさる思慮はいつまておきても無用の長物なれは見かきるを云也葦舩としもいふは水蛭をのせむに宜しき物にてかたちも舩の如くなれは也七神三段の中段にへ葦牙といふも泥土のことき地なるをさとされたるにてこゝの葦も猶その心にて泥土のことくにていまたかたまらさるほとなる事をさとしの爲也その字律の正しき事思ふへし舩とは配流の心にていふなりこれたゝふたゝひ此意をもつましき心なるをはかく詞をつけられたる也としるへしこれさる思慮はたのむへからされは也此次下の淡嶋をはへ是亦不入子之列とある是亦の字をこゝにてらせはこの入葦舩而流去といふも不入子之列といふに同し心なる事明らかなる也けにこれは意(思慮トナスベキカ)のたくひとはすましき事なりかし

次生淡嶋 乃至 不入子之列 列ハ印本例トアレト列ノ誤ナルヘク オホシつらトヨムヘシ

○御子生の事はまへに同しく名利二欲の夫婦となりし間より生する意の事也○淡島とは水上の泡沫のことき嶋といふにて上の水蛭子にはすこしまさりたるか如くなれとそこにすむへきほとの地ならさるを淡の字におもはせたる也この心は泡沫はめのまへにあるかことくなれと今きゆへきもしられぬものなれはたとひたしかなるやうなる見識たちたるもしはしのほとにて跡はかもなくかはるを云也水蛭子は前にいふかことく行末までも一身をよすへからぬ思慮也此淡嶋はすこしより

所もあるやうなれと根のとけさる思慮を云けにこれも思慮のたくひにはそなへかたき事なれはこれも又水蛭子と同しく子の列にいれたまはすといふ也このふたつの御子かのわか名欲もてわか利欲をたすくる事夫婦のことき中より生する思慮をいふにて概するに利欲先となりては生する所の思慮みなかくのことくなりとの御さとしなるなりけに利欲をさきとする人もよにはあるものなるかさる人の思慮をおもふに利にもとつきてその意あるひはたよりかたくあるひはよられてもたしかならぬか多し神道の私すへからさる事これにもまつ思ひしるへし神道の見なき世人はわれもしらす先言也此故に日夜生する思慮悉く水蛭子淡嶋なる也

○以上先言之件なり此一件の大意は人として名利の二欲は心身の性なれはこれを斷する事あたはさる自然の物也されはその性を全うせむとするにまつわか名欲もてわか利欲を達すれは二欲ともに叶ふかことくなれと名欲はかくれたるか如くなりて利欲のみさきとなりしかる時はその生する意水蛭子淡嶋のことくより外あるましきよしをときしめしたまへるなりとしるへしもと名利の二欲かくもてあつかはれたるものなるか故に此二欲をともに斷すへしとの教よに行はれたることわりなる事也しかれともみつからこそおのれ名利を斷したりとおもへかたはらよりみれはさらに斷したりとはおほえぬたくひ多し他をそしるにあたれは此例あらはにいひかたしよく心をつけて世

をみしるへき也これかたへには斷したるかことくなれとおもひよらぬ方に斷せすしてある所必あれは也もと名利二欲は心身の固有その濫觴をたつぬれは天地の二性なりしかるにこれを斷せむとするは天地心身の性を斷せむとするわさなれはしかかたはらに斷せさる所あるはことわりなる事ならすやされはこれを斷せむとするはもとより私のしひわさなるか故に神道こゝにおいてまかり禍身にいたる事まのあたりみる所なるをや此故に斷すへからすとさとりて斷せすして所置するこれ自然にしたかふわさならすやこゝをもて此件にときたまへるはさるしひわさせすしてありのまゝなる所よりときしめし給へるもの也としるへしわか御教すへてありのまゝなる所をもて教へさせ給ひしものなる事これにても思ふへき也されとこの水蛭子淡嶋に困じて名利は斷すへきものとおもひさたむるもまたこれ神道なるか故に此次件改言をときたまへりくはしくは次件をみてこゝをもあきらむへしおほかた此件の心は世人神道に隨ふ事をしらさるかきりはおのれこそ是なりと思へそのおのれ是也と思ふか卽先言なりされは日夜生する所の思慮こと〳〵く水蛭子淡嶋ならさるはなしと世人のうへを概してうちあはめたまへるなりしかれとも此神典もと人の教なれはまことは辟見なる人々をあはれみて隨神道をすゝめ給ふ意也けにつねに水蛭子淡嶋をのみうみて人をいきとほりうらみいかりなとする事その本源をたつぬれは此先言之件なれは此御うつくしみをふ

かく思ふへしみつからわきまへすしてつねに水蛭子淡嶋をのみうむ時ははて〳〵は病を生し身をうしなふにもいたるへきそかし

○第三　改言之件

於是二柱神議云乃至請天神之命

○於是はまへにいへるかことく前件を處としていふ也いはゝ前件にこの件の重なりたる心にみるへし○二柱神議云云々とは女人先言する時はその御子水蛭子淡嶋にて行末やすくわか身を置へきことにあらさるか故にいかゝせはわか身の行末たのもしき子をうむへきそと議し給ふ也子はすへて家國をゆつり繼かしめて親はその子にかゝりて安心すへき物なるか故に水蛭子淡嶋のことき子にてはその安心もなりかたけれは也行末安心なるへき子をうむとは即脩理固成の事なる也○猶宜白天神之御所云々とはおのころ嶋のはしめにみえたるか如くもと此脩理固成の任天神の命し給ふ事なれは今また天神の御もとにまゐりのほり給ひて命をこひて先言の弊を改めんとの心也こゝにおいてふたゝひ上天まし〳〵けるは先言之件は仕損したまひしか故に端をあらため給ふを云也こゝの詞よく〳〵思ふへし一旦天神の命を　け給へれは今また御もとにまゐりて命を請ひたまはす

とも二神の議したまひて事を決し給ひてもありぬへきをかく猶命を請ひたまふは大かた人は貴賤にかきらす脩理固成を天神の命したまひてうまるゝものなれはその任をはつねにわするましき事を厚く學者に思はせんかため也この任たる事をわするゝ時はやかて人力となりて隨神道の大事にそむくか故也よに宰たる人のその君より宰たらしめられしをたのみて何事をも私意を以てふるまひこれを是也と心えたるはいとひか事なる事これにて知るへし君臣のあはひとにかくにうるはしからぬか多きはこのけちめそかし

尓天神之命以 乃至 亦還降改言

○尓とは先言之件もと二神の爲損したまひしなれはそれを咎めなともし給ふへきをさもとかめ給はて改言を命し給ひしよしをさとす也先言之件二神の爲損し給ふかことくなれと前にいひしか如く先言ももと人のうまれ出たるはしめのありていふ情にてこれ又神道なれは也小兒のおのか思へる事はすかしてもたしなめてもやめさるを思ふへしされはこゝにて天神の二神をとかめ給はぬは表は二神の御心廣きか故なるやうに書なされたるは詞の表にて實は先言も神道なるかゆゑに此改言をはまた命し給ひしよしをさとされたる也と知るへし○天神之命以とはおのころ嶋の件にいへるか如く天神もと御かたちおはしまさねは御言あるへからねと神道のさまさとすへきやうなけれ

は人と人との間にたとへてしらしめ給ひし也○布斗麻迩尓云々 布斗は下に へ布刀玉命あり へ布刀御幣 へ布刀詔戸言 へ宮柱布斗斯理なとみえ又萬葉集に へふとき心とよめるなとこれに同しふときは細きの反にて今の俗事の條理なき事を知なから行ひなとする者をふとしといふに似たる事也されと里言はあしき方にのみいひこれはそれにはたかへともそのより所なきやうなる事をたしかにおもひてふるまふ心はひとしき也心細き人は何事にもあれ事を行ふにたしかなるより所なければはえおこなはさるを心ふときはたとひそのしるし眼前にみえされとも危しとせすして行ふもの也されは大かた神道は眼にみえされは心細き人はこれを信する事能はさるへけれと神道のやむことなき事めにこそみえねその直びまがるに禍福たかはさる事疑なけれは未然を今よりしる事のたしかなるを布刀とはいふ也こゝに布斗麻迩といふは麻迩はまに／＼まにまにまゝになといふ詞みなその物事にしたかふをいふ義也この麻迩即これにて卜相而とあるを思ふにこれは卜筮の古名なるへし占はすへてそのさとしのまゝにしたかはんためにうらなふものなれは也外に例もみねとこゝは必占の名なる事しるしされは布斗麻迩とはつねの占は鹿の肩をやきから國にては龜卜また筮をとりなとさま／＼その象をたてゝまのあたりそのしるしを見てのちその占にしたかふならひなるに此天神のあそはせる御占はさる象をもたて給はすしてうらへ給ふか故にその占の具もなきをも

て布斗麻迩とはいふ也されは詞はかく古のうへに假りたまへれともまことは神道の次序のやむことなき眞理をもて改言を命し給ふといふ心なり此故に布斗麻迩といふ名を設られたる也妙文おもふへしへト相而はうらあはせてといふをつゝめたる也うらは裏の心にてみえさる所を今にはかりさたむるを云也これ卽神道のやむことなきをさとし給へる也凡情にてはさはあるましき理也とおもふ事も神道なれはやむことなく隨ふへき事これに思ふへし猶此下にいふをあはせて心うへき也〇因女先言云々女人先言天神の御心にもしかるへからさる事におほすよし也〇亦還降改言とはまた天降りまして先言を改めて男神よりさきに唱へたまへとをしへましゝを云也還降はまたあらたにこゝに端をおこす也改言の事けに女人先言にては不良の故に子之列にもいれかたき二子をうみたまへは改めて男神よりさきにいひ給はむ事は必然の理なりしかるにこの改言此件の末より河海山野の件にうつり神避之件に落ゐたるは所詮此件の終をときたまへるなれはこれ改言の弊なりそれを以てこゝを思へは改言もとしかるへからぬ事ならは天神改言を命し給ふましき事なれはこゝの文意心えかたき事也されは思ふにまへにいふかことく先言改言と次序しそれより神生河海山野神避と次第する事これ卽神道のやむことなさにて神避を超てやかて尾羽張なとをしへ給はむ事なりかたき故あるか故なる事明らかなりかれつら〳〵考ふるにけにしかりたとはゝ世に先言の人あ

り利に着する也改言の人あり名に着する也この先言の人をはやかて尾羽張にも導くへからす改言の人もまたしかりたとひ導き得たりともたゝ理をさとれるにておのか身のまのあたりその事にあたりまのあたりみつから懲りたるにあらされはまことに尾羽張之件にいたれる人にはあらさる也されは世に或は名或は利に着してかたよれる人をはいかてなほさむとさま〳〵心をつくし言をつくしていさめなともすれとたま〳〵は發明する人もあれとそれも猶理解にてたのもしとはいひかたしおほくは發明にいたらさるもの也これをは猶いかてと人皆心をいためはて〳〵ははらたち絶交しなとする人も亦多しこれ皆隨神道のやことなきを弁へさるか故也此故に天神こゝに改言ををしへたまひし也上文の布斗麻迩尓卜相而とあるもはら此意なる事をさとされたる也此事くはしくは述つくしかたし志神道に厚からん人は身をつみ心をくはしくして此天神の命をさとるへし學者篤志あらは志によりて此布斗麻迩を口授すへし

故尓反降更往廻乃至愛袁登古袁

○故とは天神の命し給ふ故をうけていふ也この故といふ事此天神の御言の表をいふにあらす上にあけつらへる改言すへき妙理をうけていふ也○尓とは二神この天神の命の旨趣をくはしくもとひ給はすして反降ましゝを云これその神道のやむことをえさるよしを御心にさとりましゝ事をさと

したる也○反降はかの人身にかへりくたりましゝを云○更往廻云々これはさきの先言之件のことくさらにし給ふを云これ端をあらためさせ給ふ所以也○於是まへにいひしか如く上文にかさなる心にみるへし男神女神こゝに先言をあらためて男神よりまつ御言擧し給ふは先言の反にて心の方を先とし給ふ也しかして身の方を後にし給ふ事は名利の二欲をは名を先とするを云也名の方をさきとすれはよろつわか得手勝手なくていとめてたかるへき事也此故に此下の御國生はある也しかれとも前に諭らへるか如くもとこの改言神道の次序やむことなき事にはあれとも大かたはわか御敎の本意にはあらさる事也いつれにも片よるは天地をわかつ眞理に叶はねは也されと先言と改言とは先言は利を先とし改言は名を先とするか故にそのけちめいたくことなるか故に此御國生もありける事なから先言はかへりて自然也改言は勉彊せては能はさる事也この自然と勉彊とのけちめ神の御心はみな自然をよしとし給ひ凡見にては勉强をよしとすしかれとも自然の方は先言にて水蛭子淡嶋うまれ勉强の方は大八島國うまるゝ事いかにおもへとも條理心えかたき所あり此故に凡情には勉强を主としてそれにまさるわさなしと思へるもことわりなる事なりこゝにしもわか敎旨もある事にて凡庸のはかりしるましき妙理はあるか故也この事猶次下の件々にくはしくいふをみるへし此御言擧の詞の意は前件に同し

如此言竟而御合生子淡道之穂之狹別島乃至亦名謂天御虛空豐秋津根別

○如此言竟而とはこのたひこそ爲損しはあらしとおほしけん心おのつから此詞にこもれり○御合とは上のみとのまぐはひし給ふ事也この御合の事下の千引石之件にむかへてみれはもと御合は御をしへに叶はさる事なる事思ふへし心身はとにかくに昇降二氣のことくかなたにくたれはこなたにのほりかなたにのほれはこなたに降るかことくくひちかひたるか心身の本たる天地長久なるに合し萬物生々すへきわさなる事次下の件々をみて知るへし○淡道之云々子とは前にいふかことくわか家國をゆつりて行末安心すへきものを云ふ事いつこも同しこの淡道は神代卷には爲胞といへり胞とは母胎のうちに十月やしなひたる血なりかくたとへられしはおほかた名の方を先とせむ事は前にいへるかことく勉强せては得かたき事なりされは胸中にてよく〳〵利の先とすましき理を會得せむにその會得速ならさる事子の母胎のうちに十月あるかことし此故に胞衣をもてその意をさとしたる物にやあるへき猶ゆゑありや可考此嶋をはしめ八島こと〳〵く御名ありてその名義は古事記傳にくはしされとそれは名義の表のみをとかれたれはみたまは各あるへけれと槪するにこゝは八島の數にあはせて御名をたゝへられしなれはこと處にはたかひて名義にはさせる用もあるましき事八といふ數にしるし下の山津見の御名なとおもひあはすへしこの八島も上にいへるかこ

とく頭胸腹陰左右の手足に配したる物なる事しるしかれ淡道は頭に配し伊豫之二名嶋は胸に配し隱岐之三子島は腹に配し筑紫嶋は陰に配し伊伎嶋は左手に配し津島は右手に配し佐度嶋は左足に配し大倭豐秋津島は右足に配せるものなりと知るへしされは此大八島わか大御國の國々の名をかられたれともまことは國の事ならすして人の一身に配したる也されともかくわか大御國をすへて一身に配したるは一身の所置はやかて一天下の所置にて別物にあらさる事をしめさむかためなる也一國一家はこのうちにこもるへしされはわか御敎天下ををさめむやうとて別にはあらすたゝ己の心身の所置にしたかひてこと更にをさむなといはてもおのつからをさまるへき神道の妙ををしへ給ひし物なる事思ふへし此八島か中に伊与之二名嶋と笠(筑)紫嶋とは身一而有面四といふは今の四國はよつある事その世に同し笠紫は今九州となれるは後にわかれたるにてその世はよつなりけれはなり身一面四といへるもこゝに義あるにはあるへからす一島四州なるをは皆御子としてかゝれたる物なるかゆゑに身面なとかゝれたるなりこれらは學者のみむにあやしみをおこすへきやうにかゝれたるかきさまにてこれが疑より此八島は實はわか御國のうへにはあらすとおもひいたらせむかため也としるへしこれらの神名のうち豐秋津嶋といふ名はわか御敎食の事を貴はるゝ事豊宇氣毘賣神伊勢の外宮にますをはしめ一部中所々にみえたるは食は人身を養ふものにてこれなくて

は人身保つましければは也これ又あらはにいふへからぬ妙理あるか故に篤志の人をまちて口授すへし此故に〈千秋長五百秋之水穂國ともなつけられたるか如くこの豊秋津國もこの心なるへししかれとも神武紀に〈雖內木綿之眞迮國譬猶蜻蛉之臀呫とありてこの故をもて秋津嶋（洲）となつけられけるよしみゆるによれはその義大にことなりもとこの神武紀の語上下の文かつもしの義なとをもくはしく見すしてかの常嘸間岳にのほりまして國狀をみそなはしてかくのたまはせしよしあるか故に國の形蜻蛉のかたちのことき か故に國名としたまひしなりと古來いひ來りのち〳〵の學者もみなそれにしたかひて異義に及はさるは心えかたき事也もと國狀を見たまひしは此帝をはしめにて所々に見えたる事にて萬葉集卷一に舒明帝の國見したまひし事なともみえてこれたゝ國の形を見に高處に登り給ふにはあらすもしそれに從はゝなにの興ありて國の形をみ給ふにかおほつかなき事也ことに國形ともかゝす國狀とかけるにもさならぬ事は明らかなるをやしかのみならすもし蜻蛉の形に似たるか故とならは〈雖內木綿之眞迮國とはなにのよしそや內は假字にて虛（ウツ）木綿也木綿の實の中より綿を出すにその綿の出たるあとをは虛木綿といふ也眞は例のそへたるにて迮（サキ）はせきと同しくせはき心也されは虛木綿はそのせはきたとへにおかせ給へる也虛木綿のことくいとせはき國なりといへとももといふ心也せはき國なれとも蜻蛉の形に似たりとならは廣き國ならては蜻蛉

には似ましき理なくてはしかいふへからすよにいかてかさる理あらんしかのみならすたゝ如蜻蛉とはいはて猶とはいかてかゝれけんぞごとしとよむ字なりとはいへともなほ何の如しといふ所ならてはいかてか猶とはかくへき猶また臀呫とは呫は字彙に〈呫他協切音帖小貌ナル唐書ニ王叔父ハ呫々タル小人又嘗也又呫囁多言也前漢灌夫傳廼效テ女曹兒ニ呫囁耳語ヲとみえたりこの臀呫をは古訓となめすとよめるはこの嘗也とあるによられたりとみゆれと蜻蛉は頭あり口あり嘗ナムるとならは口にてなむへし臀にてなむらんいかゝ也日本紀の訓の事藤貞幹といひし人の好古小錄といふものに訓はいと後なる事をいへるをわか隨筆にもいへるをみるへしされはこの〈呫々小人〈呫囁耳語なといへる義にて蜻蛉その臀の方にて鳴るその音をいふなるへしされは大和國はいとせはき國なりといへともまへにはよくしたかひまつろへるか如くなれとうしろにてつぶやく國俗なれはおそれ心うへき國なりとの心なるへし中比にいたりて〈しりうこと〈あとうかたりなといふなるはいはゆる里言にいふ陰口にて人前にはうるはしきやうにして陰にて人のまつろはさるをいふなりかくたとへ給ひしは天下を保たせたまはむ心えたゝ前のうるはしきをたのむへからす此國俗うしろにてはわか非をいひなとしてまつろはさるさまなれは小國たりといへともあなとりまつろへりとて心を安くすましき事そとのたまへる也とおほし〈狀の字〈雖內木綿之眞迮國の句〈猶の

字へ臀呫の字なとくはしくも見られさりける故にかの帝の御心をこめさせ給ひて皇孫たちの御心えにもと仰おかれたりし御言もむなしくなりかつこれをは御代〳〵わすれ給はしかためとてそ國号にもつけさせ給ひけむをいとくちをしき事なりされは此義をもて表はたゝ秋の事かほにかくはかゝれたるにも有へし他の國々の神名なほおひてくはしくいふへけれと此御名にはことに靈あれはまつこのひとつを述ふる也

故因此大八島先所生謂大八島國

○故この故の字なとよく思ふへし上文たゝ國うみませるよしをのみいひてなにの故もなきに故とはいかてかいひけんうたかふへき事也されは上文表こそたゝ國うみたまへる事のみをこそかゝれたれ實はその內にこもれる靈ありてその靈をうけて故とはかゝれたる事明らかなりこれはまへにいへりしかことく此八島はもと一身の八處に配したる物にてその八處に各屬せる念あるかその念の置所さたまりたるかことくなれはそこをうけて故とはいふ也と心うへし（こゝに定まるとは尺したれとこれは此件にての事也まことに固成したるにはあらさる也）　大八島といふ大は大凡の義にておほかたに引すべたるかよし也これ一身の八處は諸念の本なるか故也此下に又六島をいふか故にこの八には大の字をおかれたる也くはしくは下の六島の下にみるへし島はまへにいふかことく狹の義なり改言して八處の念をこと〳〵くせはくなせ

るを云せはくすとは諸念をつゝしみておもふにまかせさるを云これ即改言の所謂にて先言の件なるしか〳〵とは相反せりとみるへし此へ先うみませるによりて云々といふはまつ人の諸欲の母(オモ)たる所をはせはめ給ひしよしを云也ひとへに此次下の六島とをわかたむかためにて即次にへ然後とかゝれたる後の字この先の字にむかへるを思ふへしこの八島はおのころ嶋の件にいへるかことく八尋の反なりされと八尋の事そこにいへるかことく篤志の人にのみ傳ふへけれはこゝにもその尺をはふきつかく八處の念をせはめつゝしむ事これにしかさる事なるはいふも更也わか御教とてもこれをつゝしまでよしとにはあらねとかく勉強してつゝしむ時は此次下の件々のことく必弊ありされはわか御教はこれを勉強せすしておのつからつゝしまるへきことををしへ給ふ也としるへし

然後還坐之時乃至亦名謂天兩屋（自吉備兒嶋至天兩屋島并六島）

○然後とはまへのへ先所生の應そこにいふかことし○還坐之時といふはもとの淡道の嶋の所にかへり給ひしをいふ也之時とはすへてこれまてと見解のかはれる時をしめすさとしなる事七神三段のはしめにいふか如しされは大八島をうみはて給ひてこのうへのつゝしみはあらしとおほしてかへりましゝがさらにおほすやうその大凢たる八處の念はせはめたれとも猶小念はのこりてあるへしそれまてもせはめされはまことにつゝしみを盡せりとはいふへからすとおほしてふたゝひ此六

島をうみ給ふ也けに欲をつゝしむとならは大欲は小欲のおやとはいへとも小欲までもかくせはめすしてはまことにせはめたりとはいふへからすこれ制欲のいたりといふへし六といふ數はたゝ八島のかたはらなる小島とものかきりを出させ給へるはかりなるへし六の數にはよらすしてたゝ小欲なりとみてありぬへき也○自吉備兒島云々の細書かくのことき書法下にも多しかゝる所は必そこにて段落あるをしめされたる也大字にくたりをひきくしてかゝれたるとかく細書して神の數なとかそへられたるいつれも同し大小字にはおのつから大段小段のけちめあるへしこゝは此次件とこの以上とはすちことなるをしめし給へる也その故は前にいへるかことく八島たにあるを六島をさへうみませる事つゝしみのいたりをきはめたまへるをさとし給へる也としるへし

○此件の大意は先言不良より改言しつとめて八欲をせはめ猶いたりをきはめて六島をゝみたまひしことをのへてかの先言の不良の反をつくしたる也これ凢見にてはこれより上の事はあるへからすわか御をしへとてもこゝをいたりとはする事いふもさらなれと勉めてつゝしむと勉めすしてつゝしまるゝとのけちめあるか故にこゝに此件をかゝれたるは凢見のいたりをしめされたる也大なる哉わか御をしへはしめよりたゝ第三件にして凢見のいたりをつくされたりこの次下の數十件ことく〳〵く凢見のいまた及はさる所をときしめしたまへる也わか御敎の大要こゝをもてもしるへし

大かたよによしとするわさ勉强してなしては眞にあらすわれもおほえぬはかりおのつからなさるゝこそ眞物なれとてよろつ自然になさるゝを貴ひたまへりけに勉めてなしたるは所詮はかさりたるわさにてしかもその精神久しくたふへからぬは自然ならんにしくはあるへからすかし此故にわか神典たゝかたかとも仁義孝悌忠信のたくひををしへ給はぬはさるたくひ皆仁とも義ともみつからしらすして仁義たらしめむかためなり

昭和十一年二月二十五日印刷
昭和十一年二月二十八日發行

非賣品

東京市品川區上大崎長者丸二八四
國民精神文化研究所
電話高輪(44)
二九〇一
二九〇八
二二六〇

(東京・早稻田 株式會社康文社印刷所印刷)